

---

# 幼なじみは 魔法使い！？

須賀 隆太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幼なじみは 魔法使い！？

### 【Nコード】

N1550C

### 【作者名】

須賀 隆太郎

### 【あらすじ】

ごく普通の公立高校に入学した少年、市原峻佑はそこで幼なじみの双子の姉妹と10年ぶりに再会する。と、そこで初めて明かされる真実——彼女たちが魔法使いだったということ。どこにでもいる普通の少年と、普通じゃない双子の姉妹、そして彼らを取りまくゆかい(?)な仲間たちが繰り広げる、超ビミョーなエロを含むような含まないような学園ドタバタラブコメディ。12/9エピソードをひとつ削除しました(出来が他と比べて悪すぎるため)

「しゅんすけくん、わたしたち、おひっこしでとおくへいくの」

親に手を引かれた2人の少女が、‘しゅんすけ’と呼ばれた少年に話しかけた。

「そうなの？ でも、——ちゃん、きつとまたあえるよね？」

‘しゅんすけ’は2人の少女のうち1人の名を呼んでたずねた。

「うん、きつとまたあおうね。あ、そうだ。しゅんすけくん、これをわたしたちだとおもってもっていて。あと、またあうためのおまじないっ！」

少女たちは‘しゅんすけ’に自分たちがつけていた小さなプレスレットを手渡し、その後——

そこで‘しゅんすけ’は夢から覚めた。

——ここから物語は始まる——

**VOL・01：Prologue of Overture／10年前の記憶**

ご指摘などありましたら、どしどし送りつけてやってください。

## **VOL・02：入学式の朝、幼なじみとの再会（前書き）**

このVOL・02から本当の意味で物語の序章が始まります。  
序章はVOL・05まで続きますのでのんびりとお楽しみください。

## VOL・02：入学式の朝、幼なじみとの再会

「ん、もう朝か……それにしても、なんで今さら10年も昔のことを夢で見ちまったかなあ……」

ベッドの上で起き上がった少年がガリガリと頭をかいた。

少年の名は市原 峻佑<sup>いちばら しゅんすけ</sup>。今日から近所の竹崎高校<sup>たけざき</sup>に入学することになっている、高校1年生だ。

「峻佑ー、アンタ入学式から遅刻する気ー!？」

階下から母親が峻佑を呼ぶ声がした。

「大丈夫、起きてるから。今着替えてるところー! おっと、これがないとなんか落ち着かないんだよな」

峻佑は階下に向けて返事をする、真新しい制服に着替え、小さい頃幼なじみの少女たちにもらった腕輪<sup>ブレスレット</sup>を両手につけて階段を下りていった。

共働きで忙しい両親は一人息子の入学式さえも休みが取れず、この日も峻佑が朝食を食べている間に出発した。

「さつてと、そんじゃまあ行くなつと」

峻佑が朝食の皿を片付け、家を出ようとしたそのとき、ちょうどテレビの占いコーナーが流れた。

『今日の1位は牡羊座のアナタ! 思わぬ出会いが待っているかも!？ ラッキーアイテムは――』

ちなみに峻佑は4月7日生まれ<sup>の</sup>牡羊座である。

「へえ、思わぬ出会いねえ……まあ、いーや。占いなんてどーせ当たるも八卦、当たらぬも八卦なんだしな」

峻佑はテレビを消すと、真新しい学校指定のバッグを肩にかけ、家を出た。

しばらく歩くと、竹崎高校の校門が見えてきた。

（オレも今日から高校生。どんな高校生活になることやら……）

峻佑がそんなことを考えながら校門をくぐった、そのとき。それまで快晴だったのに突如として太陽の光が陰った。

（ん？　なんだ、雲か？）

峻佑が上を見上げると、上空から女の子が降ってきていた。しかも見事に峻佑への直撃コースで。

「おわあっ！？」

「きゃああっ！？　危ない、どいてどいてっ！」

あまりに突然すぎる出来事に硬直してしまい動けない峻佑の上に女の子は着地した。

「……おい、早いとこどいてくれると助かるんだが」

幸い峻佑の意識は残っていたようで、下から自分を押しつぶした女の子に声をかけた。

「あっ、ゴメン！　大丈夫？」

女の子はパパッと立ち上がると、謝りながら峻佑を助け起こした。

「ああ、いきなり人が降ってきたのには驚いたが、どういうわけか押しつぶされてもほとんど物理的な衝撃を感じなかったんだよね。

まあ、なかなかどいてくれない精神的な衝撃<sup>ショック</sup>はあったけどな」

峻佑がさり気なくイヤミを言うのと、

「それじゃ、あたし急ぐからっ！　じゃーね、峻佑くん！」

女の子は華麗にイヤミをかわし、校舎に向けて走り去っていった。

「あれ？　オレ自己紹介なんてしたっけか？　っと、そんなこと考えてる場合じゃないな。クラス見て教室行かないと……ふむ、オレは4組か」

峻佑は自分のクラスを確認すると、急いで教室に向かった。

峻佑は息を切らして教室に飛び込んだ瞬間、さっき自分を押しつぶした女の子を見つけて思わず「あーっ」と声を上げてしまった。どうやら相手——先ほどの女の子も同じのようで、峻佑を指差しながら口をパクパクさせていた。

「キミも新入生だったのか。しかも同じクラスとは……」

峻佑がその女の子のところへ行って声をかけると、

「ねえ、あなた市原峻佑くんでしょ？ あたしのこと、覚えてない

？ 真野<sup>まの</sup> ちひろだけど」

女の子はちひろと名乗り、峻佑にそう切り出した。

「ああ、たしかにそうだけど、真野ちひろ？ はて……」

峻佑は目の前の少女と名前を記憶と照らし合わせてみるが、なかなか合致しない。

「まだ、あのときの腕輪<sup>ブレスレット</sup>、持ってきてくれたんだね。しかも2つも着けてくれてうれしいよ」

悩む峻佑にちひろはさらに付け加えた。

「腕輪<sup>ブレスレット</sup>？ たしかコレは小さい頃に引越した幼なじみの女の子がくれたもの——」

峻佑がそこまで言ったところで、

「そう、あたしがその幼なじみのちひろだよ。双子の妹のみちるもこの高校にいるわ。クラスは違うけどね」

ちひろが笑顔で峻佑に向かって頷いた。

「うっそ！？ 小学校上がる前に引越しちゃったあのちひろちゃんなの！？ すごい久しぶりじゃね！？」

峻佑はようやく目の前の少女が誰なのかわかり、驚きに満ちた表情でたずねた。

「そうだよ、そのちひろだよ。久しぶりだよね、10年ぶりくらい？」

ちひろは笑顔のまま話したが、

「まあ、そうだな、10年ぶりくらいだな。すっかり変わってたかわからなかったよ。でもとりあえず再会を喜ぶのは置いといて、1つだけ聞きたいのは、今朝上から降ってきたアレについてだ。アレはいつたいたんだったんだ？」

峻佑のこの問いかけにちひろの表情は一変した。

「ちよっといまここでは答えられないわね。入学式が終わって帰る

ときに校舎裏に来て。そしたら全部話すわ」

それまで笑顔だったひろの表情はなんだか悲しげなものになっていた。そこに上級生が花をつけに来てくれたので、峻佑はちひろに「またあとで」と伝えて自分の割り振られた席へつくのだった。

### VOL・03：入学式終了後、HRにて

校長の退屈な話だけの入学式も終わり、それぞれの教室に戻る途中。

「おい、峻佑！」

誰かが峻佑を呼んだが、その声に聞き覚えのある峻佑はうんざりした感じで振り返った。

「なんだ、コータロー？」

峻佑が面倒くさそうな表情を隠そうともせずに問い返すと、

「なんだ、はないだろ？ 俺達、親友じゃないか」

コータローと呼ばれた男は峻佑の首に腕を回しながら言った。

彼の名は沢田<sup>さわだ</sup>耕太郎<sup>こうたろう</sup>。峻佑と同じ中学から進学した、（一応）

峻佑の親友である。

「まあ、親友つてところは否定しないでおこう。で、コータロー、何の用だ？ ツーかお前何組だっけ？」

峻佑が首に回された腕を振りほどきながらたずねる。

「おいおい、今朝同じ4組にいたのに気づかなかったのか？ まあ、そんなことを言いに来たんじゃなくて、お前今朝4組の教室入ってくるなり女の子を指差して大声あげた上に、その子と知り合いみたいに話してたけど、あれ誰だよ？」

耕太郎はひとしきりへこんだ後、わずかに殺気立って峻佑に問いかけた。

「ああ、ちひろちゃんのことか。彼女はオレの幼なじみだ。10年以上前に引越しちゃって以来会ってなかったが、今日ここで再会したわけだ」

峻佑はありのままを耕太郎に話した。すると、いつの間にか他の男子連中も峻佑と耕太郎の話に耳を傾けていた。

「あ、峻佑くん。峻佑くん、朝の約束忘れないでねっ！」

ちようどそのとき、耕太郎と話し込んで立ち止まっていた峻佑に

後ろのほうを歩いていたりちひろが追いつき、追い越しざまに峻佑に用件を伝えると教室のほうへ歩いていった。

「あ、ああ……もちろんわかってるぜ」

峻佑は軽く手を挙げて応えた。と、肩を後ろから掴まれた。

「峻佑え、“朝の約束”ってなんだ？ 詳しく説明しないと俺はともかく他のヤツらが納得しなさそうだぜ？」

耕太郎が後ろを指し示すと、耕太郎以上に殺気立った男どもが峻佑をにらんでいた。

「別に大したことじゃねーよ。10年ぶりに再会した幼なじみとのんびり話がしたいだけだ」

峻佑は別に隠す必要もないが、照れくさいのでぶっきらぼうにそう話した。

「ほらほら、ホームルーム始めるぞ。さっさと教室入れー」

ちようどそこに4組の担任がやってきて、廊下で話し込んでいた峻佑たちを追い立てた。

「今日のホームルームでやるべきことは特にない。解散してもいいが、せっかくだし自己紹介でもしてもらおうか」

峻佑たちの担任、脇野<sup>わきの</sup>がそう言って、それぞれの自己紹介が始まった。

「市原峻佑、竹崎西中出身です。よろしく」

峻佑がまず出席番号で最初なので自己紹介を済ませた。

「沢田耕太郎、竹崎西中出身。現在恋人募集中、よろしくっ！」

少し進んで耕太郎の順番になり、こんな自己紹介をしてクラスの失笑を買っていた。

「真野ちひろと言います。<sup>まつみ</sup>松海市の<sup>まつみがくえん</sup>松海学園出身で、高校入学と同時に小さい頃住んでいたこの竹崎市に帰ってきました。あと、隣の5組に双子の妹、みちるがいます。よろしくねっ！」

さらに自己紹介は進み、ちひろの番が来ると、ちひろはそんな自

己紹介をした。

「よし、これでひととおり終わったな。じゃあ一応私もおこ  
うか。私の名は脇野 亮一郎りょういちろう。この学校に来て、というか教員にな  
ってまだ2年目でな、担任としてクラスを受け持つのは初めてなん  
だ。だから何かとみんなには苦勞をかけるかもしれんが、1年間よ  
ろしく頼むな」

脇野は最後に自分の自己紹介を済ませ、「それじゃ今日はここま  
でだ。解散っ」と言い、教室から出ていった。

「それじゃ、峻佑くん。朝の約束、例の場所だね。みちるを呼んで  
から行くから先に行って待ってて」

ちひろは峻佑に耳打ちすると、先に教室を出ていった。

「峻佑ー、どこへ行くんだ？」

そそくさと教室を出ていこうとした峻佑を耕太郎が目ざとく見つ  
け、行き先をたずねた。

「別にどこだつていいだろ。10年ぶりの幼なじみとの再会を邪魔  
しないでくれ」

峻佑は耕太郎を冷たくあしらうと、カバンを持って教室を出てい  
った。

「あんなかわいい女の子を幼なじみってだけで峻佑に持ってかれる  
のは納得いかん。追いかけるぞ」

耕太郎は教室に残っていた数人の男子に声をかけ、

「ああ、真野さん姉妹はこのクラスの、いやこの学年のマドンナだ。  
幼なじみとはいえアイツに独占する権利などない！」

耕太郎を先頭にしたクラスの男子たちはそんな叫びとともに峻佑  
を追って教室を飛び出したのだった。

VOL・03：入学式終了後、HRにて（後書き）

いつの間にか“学年のマドンナ”と呼ばれているちひろとみちる。  
そんな彼女たちと仲のいい峻佑に危機が迫る！？

今週も、読んでいただきありがとうございます。  
また来週、お会いしましょう。

## VOL・04：幼なじみ姉妹の秘密

「峻佑ーっ！ くそ、アイツどこ行きやがったんだ？ おい、そっちはいたか？」

耕太郎率いる男子一同は峻佑を追って校内を走り回っていたが、完全に見失っていた。と、教室を出たときには耕太郎を入れても6人しかいなかった集団が、いつの間にか数十人にまで膨れ上がっていた。

「いや、こつちにはいねえ。これだけ探していないとなると、もうすでに学校を出たとしか考えられないな」

集団の中の1人が一つの可能性を提示し、「仕方ない、手分けして探すぞ。まだそう遠くへは行つてないはずだ」などと言い合いながら学校を飛び出していった。

「ふう、どうやら撒いたようだな」

峻佑は耕太郎たちの足音が聞こえなくなったのを確認すると、階段の陰の隠し部屋——もとい機械室から出てきた。

「ケホッ……さて、ちひろちゃんとみちるちゃんが待ってるはずだし、行くかな」

ホコリっぽい機械室から出てきた峻佑は制服についたホコリを払い落としながら校舎を出て裏に回った。

「遅かったね？ なんかあったの？」

約束の場所、校舎裏に着くと、もうちひろとみちるはそこにある大木に寄りかかって待っていた。

「ああ、ちよつとヤボ用だな。それで、今朝のことを説明してくれるんだろ？」

峻佑は遅くなった理由を話す必要はないと判断し、ヤボ用とごまかして本題に入った。

「うん、ここならあまり人も来ないみたいね。これから話すことはあんまり人に聞かれたくない内容なんだ。だから、峻佑くんもできるだけ他のひとは言わないでいてくれるかな？」

ちひろは辺りを伺い、誰もいないのを確かめると、峻佑に念を押した。

「ああ、大丈夫だ。あまり人から聞いた内緒話を他のヤツに話すよくなことはしないからな。で、そこまで秘密にしたがる話の内容と今朝の落下事件は繋がってるのか？」

峻佑は誰にも言わないと約束し、いろいろと考えを巡らしては首を傾げていた。

「うん、繋がってるよ。あのね、驚かないで聞いて。あたしたち姉妹は普通の人間じゃないの」

ちひろは峻佑にいきなりそう話した。

「へ？ 普通の人間じゃないって、どういうことなんだ？」

峻佑は目の前の幼なじみから、自分たちは普通の人間じゃないと告げられ、プチパニック状態だった。

「落ち着いて、峻佑くん。別にあたしたちは化け物っていうわけじゃないから。あたしたち姉妹は魔法使いの血を引いてるの」

ちひろはパニックに陥ってうろたえる峻佑の肩を押さえてそう話した。

「魔法使いの血……？ すまん、もう少し詳しく説明してくれるかな？」

峻佑は頭の上にクエスチョンマークが見えるのではと思うくらい考えを巡らしていた。

「あのね、私たちの母方の家系は中世の魔女狩りで処刑されそうになつてこの日本に逃げ延びてきた魔法使いの一族なの」

みちるが自分たちの家系のことをゆっくりと話し出した。

「普通は世代を経るごとに力は薄まり弱くなつていくはずなんだけど、あたしたちの母親が何世代かに1人いるかいけないかの強大な力を持っていたの」

ちひろが後を継いで話を進めた。

「その高い能力を私たちも受け継いでいるおかげで色々な魔法が使えるってわけ。まあ、めったに使わないけどね」

さらにみちるがその続きを話し、

「ここでもうやく今朝のコトに繋がるんだけど、つまり今朝の落下事件は恥ずかしながら入学式の朝に寝坊したあたしが学校の裏門まで瞬間移動テレポートしようとしたら寝ぼけていたせいでミスって峻佑くんの上に出ちゃったの。そのまま落ちたら大変だから慌てて少し宙に浮かんで、周りから見えてあまり不自然にならないように峻佑くんの上に着地したの。まあ、上から落ちてくる時点で不自然なことは承知の上よ。重力を無視して着地したから重くはなかったよね？」

ちひろが今朝の事故の真相をまとめた。

「ああ、不思議と押しつぶされた痛みや重さはなかったからな。ところで、立ち上がったときにオレの名を知っていたのはなんでだ？」  
落下事件の真相を知った峻佑が次に気になったのは、10年間会っていなかったのにちひろがすぐに峻佑のことを識別できたことだった。

「それは、そのプレスレットに魔法がかけてあって、再会できたらこっちにだけわかる光を放つようになってたの。まあ、峻佑くんがプレスレットを今もつけていてくれることが前提条件だったわけだけれど……」

ちひろははにかみながら説明した。

「ふーん、なるほどね。でもオレにそれを話しちゃってよかったのか？ まだ完全に話を信じた訳じゃないけど、たいていそういう類の物語だと能力のことは秘密にされてるんじゃないのか？」

峻佑が納得したようないような微妙な表情でたずねると、  
「別に私たちはよく物語にあるような別世界から来たとかそういうんじゃないし、仮にヤバくなったらその人の記憶を消すこともできるから大丈夫よ」

みちるがにつこりと笑いながら大丈夫だと話した、そのとき。

「しっ、誰かがここに近づいてくる気配がするわ」  
ちひろが急に表情を引き締めて峻佑とみちに言った。

## VOL・04：幼なじみ姉妹の秘密（後書き）

入学式の朝の真相が明かされ、ちひろたちの秘密も知った峻佑。果たして、どうなる？

今週も読んでいただきありがとうございました。  
また来週、お会いしましょう。

数分ではあるが時間を戻して、校門付近。

「見つからなかったな……仕方ない。明日ヤツを問いつめるか？」

峻佑を見つけられず、すっかり落胆した耕太郎たちが校内に戻ってきた。

「なあ、ところで校舎の裏って誰か見たか？」

不意に集団の中の1人がそんな声をあげた。

「いや、俺は見えてないぞ」

「おれもだ」

耕太郎を筆頭に誰も校舎の裏は見えていないらしい。

「くそ、盲点だった！ 灯台下暗しとはまさにこのことだぜ！ 校舎裏なら密会にはうってつけじゃねーか！」

耕太郎は悔しそうに叫ぶと、一緒に峻佑を追いかけていた集団を2つに分け、両側から校舎裏へ回るよう指示した。

「おい、校舎裏から人の話し声みたいなのが聞こえないか？ これってビンゴじゃね？」

2つに分けた集団のうち耕太郎のいないほうを任された1人が携帯で耕太郎に話しかけた。

「おそらく場所の特性上峻佑はこちらの接近に気づいていないはず！<sup>ターゲット</sup>今のうちに接近、峻佑を捕らえる！」

耕太郎は両サイドに携帯で指示を飛ばした。

（それにしても、今更だが統率の取れた集団だな。峻佑への嫉妬心がみんなをまとめあげているってところか）

校舎に向かって左から回り込むチームに行く耕太郎は走りながらそんなことを考えていた。

再び峻佑たちのいる校舎裏。

「しっ、ここに何人が近づいてくるわ」

ちひろがみちると峻佑に静かにしてと伝える。

「まさか、コータローたちが戻ってきたのか？」

峻佑は意外そうな表情でたずねると、

「ええ、どうやらそうみたい。しかも校舎の両側から挟み撃ちを仕掛けてくるわ。あたしたちは別に見つかっても問題ないけど、峻佑くんはあたしたちといるところを彼らに見られたらヤバそうね？」

ちひろは冷静に状況を分析している。

「両側から挟み撃ちか……もしオレを見つけたら逃がさずに尋問するための作戦か。非常にオレにとってまずい状況だな。……ちっ、裏のガケは登れないか」

峻佑はここから逃げ出すため辺りを見渡したが、校舎の窓の鍵は全て閉まっていて入れず、また今いる場所の裏側は急なガケになっていて、到底人が登れるようなものではなかった。

「峻佑くん、私たちに任せて」

みちろが落ち着いた声で峻佑に話した。

「任せるつつつても、どうするんだよ？ 今からじゃ隠れることなんてできそうにないぞ」

耕太郎たちの足音が迫ってるのを感じて峻佑は焦っていた。焦るあまり、さっき彼女たちが話した事を失念していた。

「行くよ、みちろ！」

「わかったわ、姉さん！ 峻佑くん、しっかり私たちの腕に掴まって！」

ちひろとみちろは峻佑に話しかけたが、峻佑がとまどっていたので強引に腕を掴ませると、

「えいつ」

2人の声がシンク口したと思った瞬間、峻佑を含む3人の姿は校舎裏から消えていた。

その直後――

「峻佑えっ！ ここかぁーっ！ って、あれ？ 誰もいない……？」

おかしいな、人の声がさっきまで聞こえてきてたんだよね？ 気のせいだったのか？ おい、そっちにも行つてないよな？」

勢いよく校舎裏に滑り込んだ耕太郎は、誰もいないことに拍子抜けしてしまっていた。

「ああ、こつちには誰も来てないぜ。もう探す場所もないし、今日は諦めて明日にでも問い詰めればいいんじゃないか？ 学年のマドンナ姉妹とどこで何をしていたのか、タップリとな……」

さつきから耕太郎並みによくしゃべる男がそう笑いながら言った。

「おつと、ノリと勢いだけで突っ走って自己紹介してなかったな。俺は4組の沢田だ。お前は？」

耕太郎が今日の搜索中一番しゃべっていた男に名前をたずねると、  
「おれは5組の川原、川原 陽一（やういち）だ。この集団——名付けるなら、真野姉妹非公認ファンクラブ、通称“MM”——のリーダーは沢田、あんたが適任だな。これから頼むぜ」

川原と名乗った男は、即席で集まっただけの集団に名前をつけ、そのリーダーに耕太郎を推した。すると、

「俺らは今日はノリでついてきたんだけど、沢田、あんたの指揮力はスゴいな。結果としてターゲットを取り逃がしたけど十分信頼に値する。俺らはあんたについていくぜ！」

集団のあちこちからそんな声が上がった。

「よし、いまこの瞬間から真野姉妹非公認ファンクラブ、通称“MM”（ラックリスト）結成だあつ！ 姉妹への抜け駆けは当然禁止、特に峻佑は要注意人物指定で！ 今日とはとりあえず解散っ！」

耕太郎のアツい叫びが校舎裏に響き渡った。

一方、校舎裏から消えた峻佑、ちひろ、みちるの3人は——  
「こ、ここは……あれ、オレの部屋？」

いつの間にか峻佑は自分の部屋にいた。

「そつだよ。あの状況じゃ峻佑くんが確実に逃げるためには私たちが瞬間移動しかなかったからね。それでここに移動してきたんだよ」

みちるが峻佑のすぐ横にいて、いま起こったことを説明してくれた。

「そつか。ホントに2人とも魔法使いなのか……」

さすがにこの状況でまだ信じないというわけにもいかず、峻佑はそうつぶやいた。

「ようやく信じてくれたんだ。まあ、あたしたちもとりあえず帰るわね。と言つても昔みたいに家は隣なんだけどね」

ちひろは隣の家を指差して笑いながら話し、

「ところで、隣はずっと空き家だったはずだけど、いつ引越して来てたんだ？ オヤジやオフクロからは何も聞いてないぜ？ おつと、メールだ」

峻佑がたずねたちょうどそのとき、彼の携帯にメールが入った。

「あ、あたしたちもメールみたいね」

ちひろとみちるの携帯にも同時にメールが入っていた。

「なにになに……はあ!？」

「偶然が重なって急遽今日から夫婦揃って長期出張になったので数ヶ月は帰れない。その間の生活費はお前の通帳に入れておいたからそれでがんばってくれ。もし足りなくなったら連絡しなさい。」

P・S．昨日言い忘れてたが隣の家にお前の幼なじみの一家が約10年ぶりに帰ってきてたぞ。ついでだ、私たちがいない間に双子の姉妹との10年の空白を埋めとくといだらう 父

……なんてそういう重要なことをもつと早くに連絡しないんだああ！ あのバカ親父——っ！

メールを読んだ峻佑の絶叫が部屋に響いた。

「峻佑くん、大丈夫よ、あたしたちがいるから。家事は魔法なしでも人並みにこなせるから、おじさんたちが戻られるまで協力するわ。それに——」

ちひろが峻佑にそう言って落ち着かせたあと、みちるのほうを見た。

「あのさ、峻佑くん…… たった今メールで連絡来たんだけど、私たちの家も両親が旅行に行つたみたいで誰もいなくなっちゃった。だから——」

みちるが何か言いかけたのを制して、

「そこから先は言わなくてもわかった。確かにいくら魔法使いとはいえちひろちゃんもみちるちゃんも女の子だ。最近は何かと物騒だし、オレの部屋の隣が空き部屋になってるからそこを使うといいよ」  
峻佑はみちるの言わんとすることを察してやり、そう言っただけだ。

「あ、ありがとう、峻佑くん。あ、そうだ。呼ぶときに、ちゃん、はつけなくていいよ。なんか昔と違って変な感じだから」

みちるが礼を言つて、ふと思ひ出したように峻佑に告げた。

「そ、そうか？ それじゃ、ちひろ、みちる、改めてよろしくな」

峻佑が照れながら2人を呼び捨てにした。

そんなこんなで峻佑と幼なじみで魔法使いな双子の少女たちとの同居生活が始まったのだった。

**VOL・05・Epilogue of Overture／ここから始まる**

オープニングも終わり、次回からは本編と呼ぶべき部分へと入っていきます。

## VOL・06：新しい日常の幕開け

峻佑がちひろとみちるとの同居生活することになってから一夜が明けた。

「そろそろ起きる時間か……？」

峻佑は眠い目をこすりながら時間を確認しようと目覚まし時計に手を伸ばした。すると、コッソ、という目覚まし時計の硬い感触ではなく、むにゅっ、という何か柔らかい感触が伝わってきた。

「ん？　なんだ、この柔らかいモノは……？」

峻佑が手を動かしつつも顔をそちらに向けると、なぜかちひろがいて、彼が触れていたのは彼女の胸だった。

「な、なんでちひろがここにいるんだ？　しかも、なんでオレのワイシャツを着てるの！？　おまけにだぶだぶだし！」

峻佑は一気に目が覚め、ベッドの上の布団から飛び出すと、ちひろの格好にツツコミを入れた。

「あ、峻佑くん、起きたんだ。おはよー。この格好は、昨日の夜寝る前にパジャマに紅茶をこぼしちゃって、シミになっちゃいそうだったから脱いですぐに洗濯して、代わりに着るもの探してたらちうどそこにシャツがあったから借りたの。断ろうと思ったたらもう峻佑くん寝てたし……」

ちひろは峻佑に事情を説明した。

「はあ……魔法使いだったらそのくらいなんとかなるんじゃないの？」

峻佑は頭を押さえてため息をつきながらたずねた。すると、

「あ……あまり普段は魔法なんて使わないから使おうとも思わなかったわ。そうよね、使えば簡単だったわよね……」

ちひろは今になって気づいたようで、舌を出して笑った。

「まあ、それはいいとして、なんでここに寝てたの？　たしか、昨日隣の空き部屋使ったように言っただよね？」

まだ頭が混乱している峻佑はうろたえながらちひろに訊いた。

「うん、隣の部屋で寝たよ。それで、今朝は早く目が覚めたから起こそうと思って峻佑くんの部屋に来ただけ、寝顔見てたら起こすに起こせなくて、いつの間にかあたしまで寝ちゃってみたい」  
ちひろは事の真相を峻佑に話した。

「あのー、お姉ちゃん、峻佑くん、お取り込み中のところ悪いんだけど、早くしないと学校遅れるよ？」

後ろからみちるが声をかけてきたので、峻佑が時間を確認するといつの間にか時計は8時を回っていた。

「うっわ、ヤバイ！ とにかく着替えなくちゃ！ って、見てないでちひろもさっさと準備しなくちゃ！ あとついでに、オレのワイシャツ返してー！」

峻佑は慌てて着替えようとしたが、部屋の中でボーっと立って峻佑の着替えを見ようとしている2人に気づくと、ワイシャツを取り返して部屋から放り出した。

「別に見られたって減るものじゃないんだからいいじゃない……」

ちひろのつぶやき声がドアの向こう側から聞こえていて、峻佑は苦笑いを浮かべていた。

「よしっ、まだ急がなくても普通に間に合うな。2人とも、行こうぜ」

準備を終えた峻佑はちひろとみちるに声をかけて家を出た。

3人が学校についたのはちょうど予鈴が鳴り始めたときだった。

「ふう、なんとか間にあったな」

峻佑はほっと一息つくと、

「あ、私5組で隣だから、また後でね」

「ああ、後でな」

1人だけクラスの違うみちるを見送り、峻佑とちひろは4組の教

室に入っていった。

「よう、コータロー。中学のときは遅刻魔だったお前が早く来てるなんて珍しいじゃねーか」

峻佑は耕太郎を見つけると、近づきながら話しかけた。

「うるせえ、オレだって高校になりや変わろうと努力するさ。まあいい、昨日はどこで何をしていた？」

耕太郎は急にマジメな表情になって峻佑にたずねた。

「昨日か？ 教室を出るときにお前に言ったとおり、ちひろやみちると10年ぶりの再会を祝してのんびり話し込んでいたぜ。最初は校舎裏にいたけど、落ち着かないからすぐにオレの家に移動した。なんだ、まさかオレを探してたのか？」

峻佑が耕太郎の質問に答え、答えの分かりきっている質問を逆にぶつけてやると、

「ああ、そのまさかだよ。お前だけに学年のマドンナを独占させるわけにはいかないからな。クラスに残ってた男子の何人かとずっとお前を追っていたよ。校舎裏も見ただけどお前たちがすでに帰った後だったようだな。ちっ、残念だ……って、ちよつと待て。今お前真野さんのこと呼び捨てにしたか？」

耕太郎は苦笑いしながら答え、そこで峻佑の話に気になる点があることに気づいてたずねた。

「ん？ したけど、それがどうかしたか？ 言っておくが、本人たちがそう言ってきたんだからな」

峻佑は平然とそう言っただけで耕太郎の反論を封じた。と、そこで本鈴が鳴り、担任の脇野が入ってきた。

「じゃあ、今朝のHRはここまでだ。あ、真野、ちよつといいか？」

HRが終わるなり、脇野がちひろを呼んだ。

「あ、はい。なんですか？」

ちひろが返事をして脇野のところへ行くと、

「入学手続のときと住所が変わったと保護者のかたから連絡があっ

たんだ。ただ自分たちは事情があつて家を空けてるから本人に聞いてくれと言われてな、そこを確認しておきたいんだ」

脇野はちひろに新しい住所を訊いた。

「ええ、入学手続のときはまだ住所が松海市河原町5-1でしたけど、そこからだと通学には不便だということに気づいたので、小さいころに住んでいた竹崎市内の家に戻ってきたんです。

その住所は竹崎市本町3-2ですけど、両親が家を空けてしまつてあたしとみちるしかいなくなつてしまつて物騒なので、昨日の夜からその家の隣に住んでいる市原くんの家にお世話になってます。

そういうわけなので今の住所は市原くんと同じ竹崎市本町3-1になります」

ちひろはさらつと現在の事情を脇野に伝えた。

「え？」

脇野はちひろの言ったことがすぐに理解できず、考え込んでいた。代わりに、

「な、なんだと！？ それじゃいま真野さんは峻佑コイツと同居しているのか！？」

話が聞こえていたのか、耕太郎が峻佑を指差しながらものすごい反応を見せた。

「ええ、そうですけど、なにか？」

ちひろは笑顔で返した。

（こりゃ何かとまずそうだ……逃げるが勝ちだ）

峻佑は耕太郎たちの視線がちひろに向いている間に教室から脱出しようとした。

「おっと、どこへいく、市原？」

5組でもおそらくみちるが同様の説明をしたのだろう、騒ぎになるなかで、川原を中心とする5組の中のMMM構成員たちが4組の峻佑に事情を聞くこうとしてやってきていた。

「峻佑、とりあえず事情を説明してもらおうか？ 場合によっては

ボコるけどな」

耕太郎率いる4組のMMM構成員たちも峻佑が逃げようとしていることに気づいて彼を取り囲んだ。

「別にたいしたことじゃない。ちひろたちの引越してきた家がオレの家と隣同士で、互いの両親が出張や旅行で出かけていなくなっちゃったから、助け合いのために一緒に過ごすことにした、それだけのことだ。なにか文句でもあるか？ やましいことは何ひとつしてないぞ」

峻佑は耕太郎たちに事情を説明した。

「なるほど、そういうことだったのか。この……うらやましすぎるぞ——っ！」

耕太郎はそう叫ぶと、峻佑に殴りかかってきた。それを合図に川原や他のMMM構成員も手を出し始める。

「お、おいっ！ 何をするんだ！？」

峻佑は必死に抵抗しながら彼らにたずねる。

「うるさいっ！ てめえみたいな果報者はおとなく殴られてる！」

結局、その後しばらく峻佑とMMMの小競り合いは続いたのだった。

「……峻佑くん、大丈夫？」

しばらく峻佑にとっては多勢に無勢の殴りあいをした結果、ボロ雑巾のようになった峻佑にちひろが話しかけた。

「じ、事態をややこしくした張本人が何を言うか……」

峻佑は息も絶え絶えにそう言うのがやっとだった……

## VOL・06：新しい日常の幕開け（後書き）

いよいよ本格的に動き出した物語。

今後の展開はどうなっていくのか？

今週も、読んでいただきありがとうございました。  
また来週、お会いしましょう。

「峻佑くん、明日の土曜日って空いてる？」

金曜の昼休み、購買でパンを買って戻ってきた峻佑にちひろがたずねた。

「明日？ 特に予定はないけど、なんかあるの？」

峻佑は自分の席に戻りながら聞き返すと、

「あのね、引越しの時に前の家から持ち出しきれなかった荷物があ  
るからそれを取りに行きたいんだけど、つき合ってくれないかな？」

ちひろは峻佑に手を合わせて頼んだ。

「別に構わないけど……（ヒソヒソ）魔法で運搬しちゃえばいいん  
じゃないの？」

峻佑は了承したあと、ふと気づいたことを小声で聞いてみた。

「（ヒソヒソ）ちょっとやっかいなモノで、魔法だと上手くいかな  
い可能性が高いの」

ちひろも小声で返す。

「（ヒソヒソ）いったい何を取りに行くの？ もしかしてなんかヤ  
バイモノだったりする？」

峻佑が問いかけた、そのとき。

「峻佑えー、なーに内緒話してるんだよ？ コノヤロ、俺も混ぜろ  
ーっ！」

背後から耕太郎がやってきて、峻佑の背中をひっぱたいた。

「うわっ！ コータロー、いつからそこにいた！？」

峻佑は一度話を中断して耕太郎に問いかけた。

「えーと、“明日の土曜日って空いてる？” って真野さんが聞いた  
ところからだな。そのあとすぐに小声で内緒話モードに入りやがっ  
て……端から見たら結構怪しい雰囲気出てたぞ」

耕太郎はちよっと考えるそぶりを見せた後、そう答えた。

「それって最初からいたってことじゃねーか。まあ、別に大した話

じゃない。明日、松海にあるちひろたちが前に住んでいた家に行くから、つき合ってたってという相談だ、まあつまるところお前には関係ない話ってことだな」

峻佑は冷静にツツコミを入れると、話の内容の一部を伝えた上で耕太郎を冷たく突き放した。

「な、なんだとーっ！？ 3人でお出かけたあ！？ お、俺も混ぜろっ！」

耕太郎は激昂し、峻佑に掴みかかった。

「ちひろ、どうする？ コイツも連れていって大丈夫かな？」

峻佑は胸ぐらを掴まれながらも冷静にちひろにたずねる。

「うーん、ちょっとマズいかもしれないわね。沢田くん、ゴメン」

ちひろは一言謝ると、耕太郎の目をじっと見つめた。

「え？」

耕太郎が突然のことに驚いていると、ちひろの目が一瞬だけ光り、直後に耕太郎の身体からガクツと力が抜けてその場にあつたイスに座り込んでしまっていた。峻佑が彼の身体を揺さぶってみたが、彼はピクリとも動かず眠っていた。

「（ヒソヒソ）今コータローに何をしたんだ？」

峻佑がちひろにたずねると、

「（ヒソヒソ）暗示をかけて眠らせたの。あと、ついでに今の話の記憶も消したから問題ないと思うわ。じゃ、明日つき合ってもらってもいい？」

ちひろは峻佑に話すと、ヒラヒラと手を振って自分の席に戻っていった。

（あ、結局何を探しに行くのか聞きそびれたな……ま、いいか。明日になればわかることだしな）

峻佑はそんなことを考えながら買ってきたパンを食べるのだった。

「あれ？ 俺はなんでこんなところで寝てたんだ？」

昼休みが終わる前になって耕太郎が目を覚ましたが、たしかに話

の内容は覚えていないようだった。

「どうせ授業で疲れきって倒れていたんだろ」

峻佑の非情のツツコミに耕太郎はへこみ、それを少し離れた場所から見ていたちひろはホッと一息つくのだった。

翌日。

「それじゃ、早く行こうよ」

ちひろとみちるが急かすように峻佑の手を引つ張っていた。

「わかったから、そんなに引つ張るなつて！」

峻佑たちは笑いながら駅に向かっていった。

峻佑たちの住む竹崎市にある竹崎駅から目的地の松海市駅までは電車で30分ほどかかる。土曜日である今日は遊びに行く人々で車内は混雑していて身動きがとれそうになかった。

「電車を使つて出かけるのは久しぶりだからこんな混雑も久しぶりだぜ……」

峻佑が手すりに掴まつてため息をひとつ吐いた、そのとき。峻佑の目にとんでもない光景が映し出された。

彼のすぐそばで、下品な面をした男が、混雑を逆手に取つて中学生か高校生くらいの女の子に痴漢行為を働いていたのだ。女の子は声も出せずに周囲に助けを求めているように見えるが、周囲は気づいていないのか、それとも混雑で動けないのか女の子を助ける様子はない。

（こりゃあオレがやらないと誰も助けられないだろうな）

峻佑は一瞬で考えをまとめると、手を伸ばして男の腕を掴んだ。

「おい、オッサン。そこまでだ。女の子が嫌がつているのがわからないのか？」

峻佑は男の腕を捻り上げながら低い声で脅すように告げた。

「な、なんだてめえ……あいたたた！」

男は抵抗しようとしたが、峻佑にさらに腕を捻られ、悲鳴を上げ

た。ちょうどそこで電車は松海市駅の一駅手前に位置する東松海駅ひがしまつみに着いたので、峻佑はちひろたちや被害にあっていた女の子と一緒に痴漢男を引きずりおろし、駅員に引き渡した。

「あ、あの……さっきはどうもありがとう。名前を聞いてもいいかしら？」

男を引き渡し、次の電車を待っていた峻佑たちに、さっき助けた女の子が近づいてきた。

「別に名乗るほどの者じゃない。ただのおせっかいな高校1年生だよ」

峻佑はちよつと照れくさいのでぶつきらばうに答えた。

「おせっかいだなんて、そんな……わたしは助けてくれた方にお礼のひとつもしないほど恩知らずではないですわ。どうしても自分から名乗るのが嫌だというなら、わたしから名乗ればいいですか？」

わたしは仙堂せんどう 雲雀うづはなと言います」

女の子は雲雀と名乗り、さらに峻佑の名を聞こうと食い下がってきた。

「そこまでされて名乗らないのはオレの信義に反する。オレの名前は市原峻佑。県立竹崎高校の1年生だ」

峻佑が熱意に負けて名前を言つと、

「あなたも竹高なの？ わたしも竹高で、2年生なの。もしかしたらまた学校で会えるかもね。それじゃ、またね！ 今日はホントにありがとうっ！」

雲雀は峻佑に改めて礼を言つて、ちょうどこの駅で降りるのか、改札の方へ走り去っていった。

「なんだかよくわからないが、うちの学校の先輩だったみたいだな」峻佑は少し疲れた表情でちひろたちに話しかけた。

「そうみたいね。……あゝあ、どうせならあの女の敵の痴漢男に魔法で制裁を加えてやればよかったかしら？ あっ、次の電車が来たみたい。行こつ、峻佑くん！」

ちひろが何かボソツとつぶやいていたところでホームに次の電車

が到着し、3人は松海市にあるちひろたちの前の家に向かうのだった。

VOL・07：週末探検隊 - Part 1 - （後書き）

電車内で助けた女の子―仙堂 雲雀との出会いはこの先峻佑に何か影響を起こすのだろうか？

次回、旧家へ潜入！

今週も、読んでいただきありがとうございました。

また来週、水曜日にお会いしましょう。

「着いたよ。ここが前のあたしたちの家で、今日の目的地」

松海市駅で電車を降りて15分ほど歩いたところにある住宅街の外れに古ぼけた洋館が建っていて、その前で2人は立ち止まった。

「ここか。かなりでかい家だな……そういや、ここに何を忘れたの？ 昨日はコータローの乱入で聞きそびれたけど」

峻佑が2人に問いかけると、

「先祖代々我が家に受け継がれてきた、魔法書。それが今日の目的なんだけど、引っ越しのゴタゴタで忙しいのに逃げ回ってたせいで持っていけなかったから、それを探して捕まえにきたの」

みちるがサラッと目的物について話した。

「ん？ 逃げ回るってどういうことだ？ いやそれよりもそんな貴重なモノをオレが探しに入っているのか？」

予想を遥かに上回る貴重品に、峻佑は心配になってたずねた。

「大丈夫、何も問題ないわ。ただ、モノは何百年と受け継がれてきたと言われる魔法書。意思を持って好き勝手に動き回ってるから一筋縄では捕まらないと思うわ。はい、これ持っていて」

ちひろがそう言いながら峻佑に渡したのは、どこからどう見ても「虫取り網」だった。

「む、虫取り網？」

峻佑がなぜここでコレが出てくるのかわからず戸惑っていると、

「とにかく逃げようとするから、これで押さえつけて。これも網の部分に魔法をかけてあって、その網で捕らえた対象の魔力を一時的に封じ込められるようになってるの。さあ、行きましょう」

ちひろが網の説明をすると、玄関のドアを開けて3人は中に突入した。

「峻佑くん、そっち行つたよ！」

「了解！ この、そこかつ！ ああ、また逃げられた！」

峻佑たちは洋館に入つてすぐ目的の書物を見つけたが、捕まえようと網を振りかざした瞬間、彼らをあざ笑うかのように書物は館内で空中に浮かび、ものすごいスピードで逃亡し始めたのだった。

もうすでに30分以上だっ広い洋館内で追いかけているが、一向に捕まりそうになかった。

「はあ、はあ……うーん、前よりさらにすばしっこくなってるわね……」

網を片手にちひろが息も荒々しくつぶやく。

「ぜえ、はあ……ど、どうにかアレの行動を制限できればいいんだがな……」

峻佑も疲れ果て、膝に手をつきながら話した。と、そのとき。書物が峻佑たちを挑発するかのように彼らのすぐ脇を通り抜け、廊下の一番奥、倉庫として使っていた部屋に滑り込んだ。

「チャンスね。峻佑くん、1人であの倉庫に潜入して。あたしたちは峻佑くんが入ったら扉を閉めてアレが逃げられないように部屋を結界で覆うから、アレを取り押さえて。いい？」

ちひろが小声で峻佑に提案する。

「わかった。オレは魔法についてはまださっぱりだから、あの書物を取り押さえるほうに専念させてもらう。終わったら中から扉をノックするから、そしたら開けてくれ。それじゃ、そっちは任せたよ」  
峻佑は頷いてそう話すと、網を片手に倉庫に入り、扉をそつと閉めた。

「行くよ、みちる！」

「うん！」

2人が互いに声をかけ合いながら閉まつた扉に手をかざすと、扉が淡い光に包まれた。

「峻佑くん、こっちはOKよ！」

みちるが部屋の中に声をかけると、中から「了解」と返事が返つ

てきた。

「さて、外はきっちりやってくれたし、あとはオレのやることをやるだけだな」

峻佑は網を構えて書物へ近づいていく。と、最後まで抵抗するつもりなのか、書物は峻佑の振り下ろした網をかわし、倉庫から脱出しようとする方向に動いた。しかし、扉をはじめこの倉庫はちひろたちの張った結界で覆われていたせいで思いきり弾かれ、力なく床に転がった。

「自滅したか。……ほい、一丁あがりつと」

峻佑は床に転がり動かなくなつた書物を網で押さえつけ、扉を中からノックした。

「やっと終わったね。あれ、もうこんな時間？」

峻佑たちは取り押さえた書物をちひろのバッグに放り込み、外に出ると、もう空は夕焼けで赤く染まっていた。

「だいぶ長い時間走り回つてたんだな。それじゃ、帰るか？」

峻佑はちひろたちに聞いた。

「あ、ちよつと待って。引越しの時には必要最低限の荷物しか持ち出してないから、もしかしたらまだこの家の中に使えるモノがあるかも。もうちよつと探してみない？」

ちひろが思い出したかのように峻佑に提案した。

「なんか面白そうだな。こういう場所の探検は結構好きだぜ」

峻佑は楽しそうな表情を隠さずにちひろたちと一緒に再び洋館内へと入っていった。

探索の結果、さつき捕まえた魔法書の他に、古めかしい魔法書が

数冊ほど倉庫から出てきた。だが、それらに書いてあることはほとんどさっきの魔法書に書いてあったため、持ち帰らないでそのまま置いていくことにした。

「たぶん古くなったのをほとんど新しく書き写していくということを繰り返したから、複数の魔法書があるみたいね」

ちひろがそれらを見比べながらそう話した。

「あれ、なんか同じような文章が並んでるよ？」

と、見つかった全ての書物の最後のページに共通する文章があることにみちるが気づいた。

【始祖がこの書のオリジナルを持っている。それにはこの書き写し版にはない魔法が記されているらしい。始祖だけがそのありかを知っている】

「これはなんだろうね？」

その文を読んだみちるが誰にともなくたずねる。

「どっちにしろオレにはその文字が読めないからなんとも言えないけど、始祖さんが持っていた魔法書とやらから何らかの理由で書き写さなかった魔法があるってことじゃないのか？」

峻佑は知識がないなりに予想を立てていた。

だが、探そうにも予想以上に洋館が広すぎたせいで全部は探しきれず、洋館の地下室へ続く階段を見つけたところで日没を迎え、暗くなり始めた。

地下室は最近までここに住んでいたちひろやみちるでさえ存在を知らなかったため、期待はあったが、少し地下に降りてみたところ、地下には電灯がなく、懐中電灯なども持ち合わせていない上、ちひろやみちるの魔法で照らせるのは自分たちを中心に半径1メートルと非常に狭いことがわかった。

仕方ないので峻佑たちは懐中電灯などを用意した上で改めて来ることにして引き揚げたのだった。

VOL・08：週末探検隊 - Part 2 - (後書き)

地下室には果たして何が眠っているのか？  
次回、地下への潜入！

今週も、読んでいただきありがとうございました。  
また来週、お会いしましょう。

翌日の日曜、峻佑たちは懷中電灯などを準備した上で再び洋館へ向かっていた。

「あの家には10年近く住んでいたけど、地下室があつたなんて初めて知つたの。何があるんだろ？」

ちひろは松海市駅から歩く途中、峻佑にあの家で暮らしていたときの話をしていた。

「まあ、あんな巧妙に地下への階段が隠されてたら見つからないよな」

峻佑は昨日の探索の最後に階段を見つけたときのことを思い出して苦笑いした。

魔法書との大捕り物を終え、他に使えるモノがないか探しに入つたとき、最初の魔法書を捕まえたところや古い魔法書を見つけたのとは別の3つ目の倉庫があることをちひろに教えてもらい、そこに行つた。

だが、そこはあまりに荷物がゴチャゴチャしていて使える道具を探すどころではなく、諦めて倉庫を出ようとしたときに、峻佑が足元の荷物に足を引っかけ、転びそうになってしまった。そのときにとつさに近くにあつた壁に手をついて転倒を防いだところ、‘カチリ’という音がして、倉庫の外で音がしたので行つてみたら地下への階段が出現していたといういきさつがあつたのだ。

「いったいあそこには何があるんだろ？ お母さんは知ってるのかな……」

みちるがそうつぶやき、旅行に行っている母親にメールでたずねてみることにした。

しばらくして返ってきたメールには、

『あら、ついにあそこを見つけたのね。そこは先祖代々の英霊を祀つた場所で、その最深部にあるものを持ち帰れば私たち一族の間

では一人前って認められる、言わば試練の間みたいなものね。引越しのたびに移設を繰り返しているせいで、内部構造は20年前に攻略した私でさえわからないわ。私たちが旅行から帰ったら2人にもやらせようと思っていたけど、ちょうどいいわ。しっかり攻略してらっしゃい」

と書いてあった。

「つまり、地下室は昔からあって、そこはちひろやみちるの家系のヒトが一人前の魔法使いになるための試練みたいな場所なのか……。そんなところに部外者で一般人のオレは入っていいのか？」

峻佑がボヤキ、怖気づいたのか引き返そうとした。

「別にいいんじゃないかな？ 峻佑くんが単独で入っていくわけでもないんだし」

ちひろは話しながら引き返そうとした峻佑の襟首を捕まえると、そのまま引きずっていった。

「ぐえっ、わかった、逃げないから引つ張らないで……」

「さあ、行きましょうか」

洋館に到着した3人は、地下室への階段の前に立っていた。

「ああ、もうここまで来たらとことんつき合うよ」

峻佑は開き直ったのか背中に背負ったリュックから懐中電灯を取り出すと、先頭に立って階段を下りていった。

階段を下りきって懐中電灯で照らしてみると、奥までは照らし切れないほど長い廊下が続いていた。

「よし、とりあえず先へ進んでみよう」

峻佑が後ろにいる姉妹に声をかけ、歩き出した。と、そのとき。  
《引き返せ……今すぐに引き返すのだ……》

3人の耳に不気味な声が聞こえてきた。

「なんだ？ 今の声は……」

峻佑が振り向いて姉妹に訊ねると、

「何かしら……？ あまり私たちに好意的な存在ではなさそうね」

3人はひとまず声を無視して廊下を進むことにした。

《引き返せ……これ以上先に進んではならぬ……》

再び3人の耳にさっきの不気味な声が聞こえてきた。

「なんなんだ？ 奥へたどり着くことが目的なのに、先へ進むなどはどういふつもりだ？ こんな無視だ、無視」

峻佑は強気にずんずん進んでいった。

《引き返しはせぬか……良いだろう、この試練を突破してくるがい！》

謎の声が挑戦的にそう言った瞬間、通路の奥で何かが光った。と、奥から人影が現れた……のだが。

「なぜに裸……？」

先頭で懐中電灯を持って先を照らしていた峻佑が呆れかえった。

懐中電灯の光に照らし出されたソイツは、背格好は大人の男なのだが、衣類を身につけていない全くの素っ裸だった。ちひろたちは峻佑のかげにいてまだソイツが見えない位置にいる。

「なに？ 何かいる……の……」

峻佑の肩越しにソイツを見たちひろの目が点になり、やがてぶるぶると震えだした。

「きゃあああああああああ！」

ちひろはモロにソイツの全裸を見てしまったらしく、思い切り叫ぶと、ものすごい勢いで全裸男に飛びかかった。

「乙女の前でなんて格好してんのよっ！」

ちひろは叫びながら殴りかかろうとした。いや、もうすでに殴っていた。

「お姉ちゃん、それは殴らない方がいいと思う……わ……」  
みちるが止めたが、時すでに遅し。

「いつ……たあーい！ コイツ、むちゃくちゃ硬いわ！」  
ちひろが殴りつけた拳を押さえ、うつすらと涙を浮かべてつぶやいた。

「お姉ちゃん、たぶんそれロボットよ。人工皮膚とかで人間そっく

りにつくつてあるけど、駆動音はごまかしきれないわ」

みちるがそう推測してちひろに伝えた。

「なるほど、どうりで恥ずかしがらないわけだわ。でも、リアルすぎてム力つくわね。邪魔だし、破壊するわ。2人は下がってた方がいいわよ。でないと巻き込まれちゃうかも」

ちひろは見てる方がゾツとするくらいの満面の笑みでそう話した。  
「あ、ああ……わかった」

峻佑はちひろの闘志に気圧されるように後ずさりしていった。

「くすつ……あたしを怒らせた報い、受けてもらうわよ！」

ちひろがそう叫んだ瞬間、彼女の手のひらが輝いた。そのまま目の前にいるロボットの胸の部分に手のひらを当て、

エレキショック  
「電撃！」

と叫んだ。すると、バチバチと電流がスパークする音が響き、ロボットの体がプスプスと煙を上げはじめた。

「お、お姉ちゃん、このままじゃ火事になっちゃうわよ」

ちひろの後ろからみちるが声をかけた。と、いつの間にか、みちるの手のひらも光に包まれていた。

「わわっ！ ヤバい、やりすぎたかも」

ちひろが慌てて手を離れたが、かなり長い時間電流を流されていたロボットは中枢がいかれて爆発しそうだった。

「大丈夫、私がやるわ」

みちるがそう言いながら光っていた手を爆発寸前のロボットにかざすと、

ブリザード  
「吹雪」

みちるが静かな声で言うと、雪国顔負けの吹雪がみちるの手から吹き出し、ロボットを冷やしていく。しばらくしてみちるが手を離すと、ロボットから出ていた煙は収まったが、逆に冷やしすぎたのか凍りついていた。

「うわ……魔法ってすげえな……」

峻佑がロボットをつついた瞬間、電流による熱と吹雪という激し

い温度差にさらされていたロボットは上半身が脆くも崩れ去った。  
だが、偶然かはたまた嫌がらせか、崩れ去ったのは上半身だけで、  
下半身は崩れることなくその醜態をちひろたちに見せつけていた。  
「い……いやああああ！」

静かな洋館の地下に2人の女の子の悲鳴が響き渡ったのは言うまでもない。

「2人とも、落ち着いた？」

あれからさらに2人が狂ったように暴れまわり、残っていたロボットの下半身さえも粉碎し終えるころ、静かに峻佑は2人にたずねた。

「う、うん。ゴメンね、変なところ見せちゃって」

ちひろが頬をポリポリと掻きながら謝った。

「いや、大丈夫。あの状況でパニックにならないほうがおかしいから。まあ、魔法の暴走は驚いたけどね」

峻佑は状況の凄惨さにただただ苦笑いしていた。

ロボットの残骸が下半身部分だけになったあと、ちひろとみちるが揃って悲鳴をあげ、その残骸に向けてメチャクチャに電撃やら吹雪やらをぶつ放していった。しばらく続けて跡形もないほど粉々になると、トドメとばかりにちひろが何かつぶやいて空間に穴を開け、粉々になった残骸はそこに吸いこまれるように消えた。

「ところで、最後にあの残骸が吸い込まれるように穴に消えていったけど、あれはどこに行ったの？」

峻佑はふと気づいたことを2人にたずねた。

「ああ、家の外よ。たぶん庭にでも転がっているんじゃないかしら？ あの魔法はモノやヒトを離れた場所へも移動させられる、瞬間移動の原理を応用したものだから」

ちひろは簡単に説明すると、「先へ進みましょう」と言って歩き出した。

その後はよく探検系のゲームにありそうなトラップが待っていた。  
「ま、マジかよーっ!？」

まず、先ほどの謎の声が再び聞こえたかと思うと、目の前から巨

大な岩が3人を押しつぶそうと転がってきた。来た道を引き返して逃げる途中、峻佑が足をもつれさせてバランスを崩した。

「峻佑くん、あぶないっ！」

だが、その瞬間ちひろが峻佑の腕を引っ張り、

「もう、逃げてばかりじゃ埒があかないわね。……凍らせちゃえばいいか」

みちるが立ち止まり、振り向くと目の前に冷気の壁を作り出した。転がってきていた岩は冷気の壁に触れた瞬間に凍りつき、通路の壁ごと凍結させることでようやく止まった。

「助かった……また魔法に救われちゃったな。まあ、魔法使いの試験の場に来ているから当然か……」

峻佑はゆっくり立ち上がると、つぶやいた。

「ゴメンね、やっぱり入らない方がよかった？」

ちひろがおそろおそろ峻佑に訊ねてきた。

「まあ、ちょっと怖いけど、それ以上にワクワクしてるよ。半ば強制的にここに来たけど、最終的に進むことを決めたのはオレ自身だから、気にしないでいいよ。さ、その岩をぶっ壊して先に進もうぜ」

峻佑はそう言いながら凍りついた岩に近づいていく。

「あ、峻佑くん。ちょっと待つ……」

みちるが峻佑を止めようとしたときにはもう峻佑は岩をぶん殴っていた。と、まださっきみちるが使った冷気の壁の効果が続いていたらしく、岩に触れた瞬間に峻佑は凍り付いてしまった。

「遅かったか……」

みちるがボヤきながらも急いで魔法を消し、凍結は解除されたが、峻佑は心臓が仮死状態に陥ってしまったらしく、目を覚まさないでいた。

「峻佑くん、しっかりして！」

ちひろがそう叫びながら、峻佑に電気ショックを与えた。バチッと言う音とともに峻佑の身体が跳ね上がり、それを数回繰り返して

ようやく峻佑は意識を取り戻した。

「峻佑くん、ホントーにゴメン！」

峻佑が起きあがるや否や、2人とももの凄い勢いで謝り、

「こうして無事だったんだし、もういいよ。それに、オレ自身の不注意もある。何が起るかわからない場所であつた行動は取るものじゃないな」

峻佑は土下座しそうな2人を制してそう話すと、立ち上がった。

「それじゃ、岩はまた外に放り出しましょうか」

ちひろは先ほどの空間の穴を再び作り出し、岩を消し去ると、3人は歩き出した。

「だいぶ進んで来たけど……どこまで続いてるんだ？ あれ、さつきもその通路見た気が……っていつかその道ってオレたちが通ってきた道じゃないか？」

峻佑が途中見つけた分かれ道を指差してボヤいた。

「たしかに妙ね……それじゃ、目印にこれをおいて行きましょう」

ちひろは足元に落ちていた棒きれを並べると、先へ進んでいった。

「ちっ……やっぱ無限回廊<sup>ループ</sup>ってヤツか」

しばらくして一行が見たのは分かれ道に先ほど置いていった棒きれだった。

「じゃあ、先へ進む道はどこにあるのかしら？」

みちるが首を傾げる。

「こういう場合、大抵はどこかにスイッチか何かがあると思うんだ。もう一周、辺りを調べながら回ってみよう」

峻佑の提案のもと、3人で壁を調べていくことにした。

「げ……スイッチがたくさん!? どれが本物だ？」

回廊の反対側に回ったところで一行が見たのは、壁一面に並ぶス

イッチだった。

「あ、ここの壁になんか書いてあるよ」

みちるが壁に何か書いてあるのに気づいて2人に伝えた。

「ホントだ。でもオレには読めないな。なんて書いてあるのかわかる？」

峻佑は文字らしきものがあるのはわかったが、解読まではできないようだった。

「これは魔法書に使われてる文字と同じね。えーっと、ここに並ぶスイッチは全部で10個。本物は当然ひとつで、あとの9個のうち3つは押した瞬間に外へ放り出される落とし穴、6つは壁から何かが出てくる、って書いてあるわ」

ちひろが文字を読んで峻佑に伝えた。

「正解はただひとつ、か。それが正解だ？ 何かヒントとかないの？」

峻佑は闇雲に押ししてみようかと思ったが、外へ放り出されたりするのはともかく、何かが出てくるというのに引っかけたままないのでちひろに聞いてみることにした。

「うーんと、最後の部分にこう書いてあるわ。『先へ進みたければ、観察せよ。さすれば道は自<sup>おの</sup>ずと見えてくるだろう』だって。どういう意味だろう？」

ちひろは文字を読んでヒントを見つけたものの、意味がわからず首を傾げた。

「観察せよ……ってことはとにかくスイッチを調べてみればいいんじゃないか？」

一行は10個のスイッチを丹念に調べてみた。

「うーん、どれも同じに見えるな……って、あれ？ スwitchが消えた！？」

峻佑たちがスイッチを調べていると、突然10個のスイッチのほ

とんどが消えた。よく周りを見てみると、真ん中のひとつだけが残っていた。

「これが本物かな？」

みちるが峻佑とちひろに聞いてみた。

「どうだろう？ でも、ヒントを実行した結果出てきたものだから試してみる価値はあるな」

峻佑はそう言つと、躊躇<sup>ためら</sup>うことなくスイッチを押した。と、後ろに扉が出現した。

「大正解だったな。さあ、行こう」

一行はたつた今現れた扉に入つていった。

「最深部到着みたいだな」

扉の先の通路を抜けると、小さな部屋がそこにはあり、その真ん中に小さな石像が1つ置いてあつた。

《幾多の畏をかくぐり、ここまでたどり着いた我が子孫よ……》  
どうやら途中にも聞こえてきた声はこの石像から発せられていたらしい。

《私はお前たちの先祖でマノール家の始祖、ジェン＝マノール。私が生きていたころは困った人々を助けるためだけに魔法を使っていた。だが、それでも私の能力を恐れた人によつて魔女として告発され、処刑されそうになった、というか一度実際に火刑にされたもつとも、この身を護っていた魔力のおかげでなんともなかったがな。》

さて、昔話はこのくらいにして、我が子孫よ。昔のように魔法を困った人々のために活用してほしいのだが、やってくれるか？》

先祖のジェンと名乗った声は、少し昔話をしたあと、ちひろたちにたずねた。

「今の時代、魔法使いは空想の中のみ存在になっていて、その能力が必要になることはあまりないし、あたしたち自身も正体をほとんどの人に隠して生活してる。だけど、もし必要になるときが来たら必ずや困った人々の役に立ってあげたいと思うわ」

ちひろは力強く宣言した。

《いい答えだ。では、これを持って行くがいい》

ジェンがそう言った次の瞬間、石像の中から魔法書が出てきた。

「これはオリジナルの魔法書？」

ちひろが魔法書を手に取りながらつぶやいた。

《そうだ。私の子孫たちがほとんど書き写していったようだが、能力の弱体化によって使えない術が出てきたのかオリジナルに比べると最近のものは数が減っているようだ。だが、お前たちなら使いこなせるだろう》

ジェンの声はそれを最後に、聞こえなくなった。

「これでここにきた目的は達成したな。帰ろうぜ」

最深部に到着してからは何もしゃべってなかった峻佑がつぶやき、オリジナルの魔法書を手に入れた2人とともに洋館の地下迷宮から脱出し、帰路に着いたのだった。

## VOL・10：週末探検隊 - Part 4 - (後書き)

今回はいつも通り水曜の更新を予定しております。

もしも変更がある場合は自分のブログ(<http://blog.ri.jp/captainw6294a/>)にてお知らせいたします。

今週はこちらの勝手に更新を前倒ししてしまつてすみませんでした。今後ともよろしく願いいたします。

VOL・11：生徒会、動く（前編）

探検に費やした週末が終わり、また一週間が始まる。

「あれ、まだちひろもみちるも起きてないのか……そろそろ起こさないで遅刻するな」

朝7時15分、珍しく早起きした峻佑は朝食のパンをトースターに突っ込んでから2階に上がり、自室の隣にある姉妹の部屋の扉を開けた。と、その瞬間時が止まったように感じた。

「あ……」

まだ寝てると勝手に思い込み、ノックもなしに扉を開けた峻佑の視界に飛び込んできたのは、着替えの最中で、下着一枚の2人の姿だった。

「ご、ゴメンっ！」

峻佑は慌てて扉を閉めて立ち去ろうとしたが、それより早く、

「きゃあああ！ 峻佑くんのエッチ——！」

2人の絶叫とともに閉めた扉が外れて吹き飛び、階段を逃げるように駆け降りようとしていた峻佑に直撃し、峻佑はドガシャン、と派手な音を立てながら扉と一緒に階段を転げ落ちていった。

「いてて……」

登校の道すがら、峻佑は階段から落ちたのと扉の直撃を受けたダブルの痛みにうめいた。

ちなみに、壊れた扉はすぐさまみちるが魔法で修理していた。

「ちよつとやりすぎちゃったのは謝るけど、でも今回は峻佑くんだって悪いよ。女の子の部屋はちゃんとノックしなくちゃ」

ちひろはちよつと怒った仕草で峻佑に話した。

「ああ、今日は珍しくオレのほうが早く起きたから起こしに行こう

と思ったんだが、すっかりノックを忘れて開けちゃったんだ。ホントすまなかった」

峻佑は素直に2人に謝ることにした。でないと次はどうなるかわからない。

「今回はもういいよ。でも次やったらたぶんこんなもんじゃ済まないよっ」

2人に笑顔でそう言われ、峻佑は立ち止まって震え上がっていた。「あれ、峻佑くん、どうしたの？ 早く行こうよ」

峻佑が後ろのほうで立ち止まっていることに気づいた2人が駆け寄ってきた。

「ああ、そうだな。すまんすまん」

峻佑ははっと我に返ると、2人とともに歩いていった。

昼休み、峻佑がちひろやみちると教室で昼食を取っていると、「1年4組の市原峻佑くん、特別教室棟4階の生徒会室まで来てください。繰り返します——」

突如として峻佑は放送で呼び出された。

「峻佑、お前何か呼び出しくらうようなこと、あるいは生徒会に目をつけられるようなことをやったのか？」

近くにいた耕太郎がたずねてきた。

「なんだろうな？ 特に身に覚えはないが……まあ、行ってくる」

峻佑は首を傾げながらも食べかけのパンを置いて教室を出た。

「特別教室棟4階……ここだな」

峻佑は「生徒会室」というプレートが下がった部屋の前に着くと、ノックをした。

『どうぞー』

中からそんな声が聞こえてきたので、峻佑は「失礼します」と言

いながら扉を開け、「あつ」と小さく声を上げた。

「ようこそ市原君。そしてこないだはありがとね」

部屋の中には、つい数日前に峻佑が痴漢から助けた女の子、仙堂雲雀と知らない男子生徒が1人いるだけだった。

「えーと、仙堂先輩でしたっけ？ 先日東松海の駅でお会いしましたよね」

峻佑がそう挨拶すると、

「あ、名前覚えててくれたのね。改めて自己紹介をしましょうか。

わたしは竹崎高校生徒会副会長、2年1組仙堂雲雀。あなたを呼び出した理由はその会長から聞いて」

雲雀は生徒会副会長の職にあることを付け加えた自己紹介をした。  
「そして、僕が生徒会長、3年3組の一条流星だ。さっそくだが本題に入ろう。市原君、君を次期生徒会役員としてスカウトしたい君のような正義感の強い人材が生徒会には必要なんだ」

生徒会長の一条と名乗った青年は、静かに峻佑に告げた。

「は？ なんでいきなりそんな話に……？」

峻佑はあまりにも突然すぎる話に困惑を隠せないでいた。

「先日の痴漢退治の武勇伝は仙堂副会長から聞いた。実に勇敢ではないか。それでだな……」

一条は生徒会のシステムを説明した。それをまとめると、こうなる。

この学校の生徒会は変わったシステムをしていて、他の学校のように一般生徒の選挙によつて役員を決めるわけではなく、当代の役員が一般生徒の中から見込みのある生徒を自らスカウトして決めるやり方であり、一条たちも先代の役員たちからスカウトされて生徒会入りしている、必然的に、選ばれた生徒は他の一般生徒に対し多少なりとも強い権限を持てるということらしい。

「なるほど、確かに変わったシステムですね。でも、すみませんが辞退させていただきます。権限とか権力とかに興味はないし、あの日仙堂先輩を助けたのはただの偶然だったわけですから。では、失

礼します」

峻佑はそう言って一礼すると、生徒会室を後にした。

「……仙堂副会長、彼を諦められるか？」

一条が雲雀に問う。

「彼はきつと次世代の生徒会役員として活躍してくれる。そう簡単に諦められないわ」

雲雀が静かにそう話した。

「ええ、どうにかして彼を生徒会に入れたいわね。ああいうかわい  
い1年生は放っておけないわ」

と、そこに突然第3の声が聞こえてきた。

「なつき、いたのか。なにかいい方法はないか？」

一条は第3の声をなつきと呼び、たずねた。

「とりあえず、彼についてはこの生徒会書記長兼、さいおんじ西園寺  
なつきが調べてみるわ」

なつきはそう言いながら生徒会室を出ていった。

「さて、我々も授業に向かうとしよう。彼についてはなつきの調査  
結果を待ってもう一度スカウトする。調査結果によっては脅迫も辞  
さない。それでいいか、仙堂君？」

一条もイスから立ち上がって生徒会室の扉を開けながら雲雀にた  
ずねた。

「ええ、わかったわ。でも、できれば脅迫なんてしないで彼が自主  
的に入ってくればいいんだけど……」

雲雀は頷きつつ、2人は生徒会室を後にしたのだった。

VOL・11：生徒会、動く（前編）（後書き）

今週も読んでいただきありがとうございました。

また来週、お会いしましょう。

感想などお待ちしております。

VOL・12：生徒会、動く（後編）

その日の放課後。

「なるほど、市原くんは現在同級生の双子の姉妹と同居してるのね。住所は……と」

ノートパソコンをカタカタと叩きながら、生徒会書記長、西園寺なつきは頷いていた。

「さて、それじゃ必要な情報は職員室のパソコンにハッキングして集めたし、身辺調査を始めましょうかしら。あつ、ちゃんと証拠は消しておかないとね」

なつきはまたカタカタとパソコンを操作すると、電源を切り、すでに日が暮れて誰もいなくなっていた教室を後にした。

「え？ 冷蔵庫の中身が空っぽ？」

峻佑はちひろに聞き返した。

「うん、この通り。昨日の夜に使い切って、今日すっかり買い物行くの忘れちゃったから全くないの。買い物行く？」

ちひろは冷蔵庫を開けて峻佑に見せると、そう峻佑に訊ねた。

「今からじゃもう遠出しないと店が開いてないな。……よし、今日はどっか外にでも食べに行こうか」

峻佑はチラッと時計を見て少し考えてから2人に持ちかけた。

「そうだね。もう夜の8時を過ぎちゃって近くのスーパ―も閉まっちゃったし、外で済ませちゃおうか」

ちひろは頷くと3人で家を出た。

「うわあ、今夜はずいぶん蒸し暑いな……」

家を出た途端、峻佑はげんなりして着ていた上着を脱ぎ、家の中に放り投げると、改めて出発した。

（お、どこかに出かけるようね。チャンスだわ、今のうちにコイツを仕掛けておきましょう）

物陰から市原家の様子をうかがっていたなつきは、カバンから小型カメラを取り出し、数人の部下らしき連中と素早く市原家の庭に侵入し、数ヶ所にカメラを仕掛けていった。

「ふう、こんなもんかしら。これでしばらく観察して、会長に報告ね。さあ、撤収しましょう」

なつきはカメラを仕掛け終わると、軽く汗をぬぐって部下たちに撤収宣言を出した。

「そういえばなつきさん、あの噂は知ってますか？」

撤収準備を進める中、部下の1人——部下Aがなつきにそうたずねた。

「噂って、入学式の朝に女子生徒が1人上空から降ってきたとかいう、アレのこと？」

なつきは自分の知っている範囲で当てはまるものを答えると、

「ええ、それなんですけど、どうやら噂じゃないらしいんですよ。なあ？」

部下Aは別の部下——部下Bに話を振った。

「ええ。自分は全部見ていました。校舎の3階くらいの高さに突然女の子が現れて、ゆっくり降りてきたと思ったら、男子生徒を1人下敷きにして着地していました」

部下Bは見たまんまのことを話し、

「それをあとで調べてみたら、女の子は真野姉妹の姉、ちひろで、男子生徒は市原峻佑だったというわけです」

部下Aがそう補足した。

「それで？ 真野姉妹が何か怪しいとでも？」

なつきは部下たちにたずねてみた。

「どうにも気になるんですね。上空から降そらってくるなんてただごとじゃないですよ。しかもヘリとかから降下してきたわけでもなく、

まるで小説やマンガの世界の魔法使いのように突然その場に現れるんですから」

部下Aは首をかしげてそう話した。

「それじゃあ、驚かせて動揺させてみましょうか。コレが暗闇の中突っ立ってたら結構怖いと思うのよね。もし彼女が本当に物語の中の存在みたいなものだったらきつと動揺した瞬間にボ口を出すんじゃないかしら？」

なつきはニヤリと笑いながらカバンの中から等身大の<sup>マネキン</sup>人形を取り出し、組み立てると、玄関先に立てかけた。

「さあ、撤収するわよ。カメラの映像チェックは私が責任持つてやるから、あなたたちはしばらく待機してていいわ」

なつきは指示を飛ばすと、今度こそ部下たちとともに市原家を立ち去った。

一方、そのころ峻佑たちは、駅前の牛井屋で夕飯を食べていた。

「そっぴゃさ、再会したときからずっと聞こうと思ってたことがあったんだけど、いい？」

峻佑が食べ終わったところで突然話を切り出した。

「ん？ なーに？」

2人ともまだ食べていたが、一度食事を中断して峻佑に話の続きを促した。

「まあ、別に大したことじゃないって言っちゃえばそれまでなんだけど、2人と再会する前の日の夜、ガキの頃に2人と別れた日の夢を見たんだ。それまでほとんど忘れてたんだけどな。それで、その夢の最後に、このブレスレットをもらって、さらにその後何かあった気がするんだけど、思い出せないんだ。ちひろやみちるはそれとこのこと覚えてる？」

峻佑は両手につけたブレスレットを見せながらたずねた。

「うーん……ごめん、覚えてないかな。きつとホントに大したこと

じゃないんだよ」

ちひろは謝ったものの、顔は笑っていた。

「そっか。まあ、10年も前の話だしな。悪いな、変なこと聞いてでも、なんで笑ってるの？ オレ何か変なこと言った？」

峻佑は一言謝って引き下がろうとしたが、2人が笑ってるのが気になってさらにたずねた。

「うっん、なんでもない。笑ってるのもこっちの事情だから気にしないで」

ちひろたちは首を振って何もないことをアピールすると、冷めはじめていた牛丼の残りを食べたのだった。

（ホントは覚えてるけど、まさかあのときに2人で峻佑くんにキスしたなんて恥ずかしくて言えないよ……）

みちるは峻佑の顔をうかがいながら心の中でつぶやいていた。と、そのとき。

「ん、みちる？ どうかした？」

峻佑が不意にみちるの顔をのぞき込んでいた。

「えっ！？ うっん、大丈夫だよっ！」

みちるは突然のことに焦りながらも、首を振って応えた。

「そっか、それならいいんだけどな。さて、腹も落ち着いたし、そろそろ帰ろっか」

峻佑はそう言って立ち上がると、3人分の会計を済ませ、牛丼屋を後にした。

その帰り道、

「明日は休みだけどっか行く？」

峻佑は横に並んで歩くちひろとみちるにたずねた。

「そっか。明日は祝日か…… そんじゃさ、お掃除しようよ。特に峻佑くんの部屋。男の子の部屋だからって言っちゃえばそれまでだけど、いくらなんでもあれは汚すぎだよ」

ちひろは少し考えてからそう提案した。

「あつ、さんせーい。こないだの朝見たときからやりたかったんだよね」

みちるも賛同し、2人で峻佑のほうを見るものの、

「えゝ!? 別にあれくらい散らかってた方が落ち着くんだけど…

…」

当の峻佑が全く乗り気じゃなかった。

「ダメ。あーんな散らかってる中で生活してたらホコリとかで病気になるちゃうよ? はいもう決定。明日は朝から峻佑くんの部屋を中心に大掃除するよ。あ、ちなみに逃げたり抵抗しようとしたら……どうなるか想像つくよね?」

ちひろとみちるは2人で一気にまくしたてた上、笑顔で脅しをかけて峻佑の反論を封じ込めたのだった。

「しまった。玄関の電気をつけておくべきだったな……」

峻佑は暗い玄関に後悔しながらも、手探りで玄関の力ギを開けようとした。

「小さい明かりなら出せるけど、どうする?」

ちひろが峻佑の前に手のひらを差し出しながら提案する。

「いや、こんなところで魔法なんて使って、誰かに見られたら面倒だろ? だから何とかするよ」

峻佑はやりわりとちひろの手を押し返し、ドアの力ギ穴を手探りで探していた。と、何かに肩がぶつかり、それが後ろにいた姉妹のほうへ倒れていくのがわずかに確認できた。

「あれ、何か倒れたぞ? ところで、そんなもん玄関先にあっただけか?」

峻佑がいったん振り向いてちひろに話しかけた。

「うわっと! もう、何よこ……れ……」

倒れてきたものを受け止めたちひろの顔が見る見る青ざめていき、「きゃああああ!」

絶叫の末、マネキンがちひろの魔法で粉碎されていた。

「誰のイタズラか知らんが、夜中にマネキンとはなかなか不気味だな。でも、あれはやりすぎじゃね？　しかもオレが意地を張ったせいで結局魔法が暴走してるし……」

峻佑が粉々になったマネキンを見て後悔と呆れが合わさったようなため息をつくのだった。

——この瞬間がなつきたちの仕掛けたカメラに撮られていたことをまだ3人は知らない——

## VOL・12：生徒会、動く（後編）（後書き）

生徒会が調査のために送り込んだなつきの仕掛けたカメラによって  
ちひろが魔法を使った瞬間が撮られてしまった！？

果たして、峻佑やちひろたち姉妹、そして盗撮カメラを仕掛けたな  
つきたちはこの後どう動くのか？

次回、『VOL・13：Let's大掃除！（仮）』お楽しみに！

今週も読んでいただきありがとうございました。  
それでは、今週はこの辺で。

翌日、太陽が南の空高く昇ってその日差しを惜しげもなく地面に向けて照らしているころ――

「よし、これで峻佑くんの部屋以外はきれいになったね。それにしても、峻佑くん起きないなあ。みちる、峻佑くんいい加減起こしてきて。もうあそこだから手段は問わないわ」

ちひろは掃除機を止めて軽く汗をぬぐうと、みちるに峻佑を起こしてくるよう頼む。その顔はニヤリと笑っていた。

「わかった」

みちるはあえてちひろの笑みには触れずに軽く頷くと、階段を上がつていった。

「峻佑くん、あと掃除するのここだけだからいい加減起きて」

みちるは峻佑の部屋のドアをノックしながら呼びかける。

「……………」

しかし、部屋の中から応答はない。

「ん、もう！ 開けるよ！」

みちるはドアを押して開けようとした……のだが。

「あれ、開かない！？ こらー！ 峻佑くん、開けなさい！」

みちるがドアを激しくノックしていると、

「いくら頼んでも開けないよ。オレは少し散らかってるのが一番落ち着くんだ。一応片付けはしてるから心配いらないよ」

部屋の中で峻佑がそう言うのが聞こえた。と、そこに、

「みちるー？ まだ峻佑くん起きないのー？」

掃除機を持ってちひろが階段を上がってきた。

「お姉ちゃん、峻佑くん、起きてはいるみたいだけど部屋に閉じこもって出てこない。ドアも開かないし……………」

みちるはちひろに現状を伝えた。

「なるほど、ドアの裏に本棚を移動してバリケードにしたのね。いわ、あたしがやる。峻佑くん？ あたし昨日言ったよねー？ 抵抗しようとすればどうなるか……って。それでもまだ出てこないつもり？」

ちひろがドアをノックして中の峻佑に呼びかけ始める。

「ま、またドアをぶっ壊すつもりか？」

峻佑はちひろの登場に多少動揺したのか声が上ずっている。

「うっん、さすがに直すのに手間がかかるから、そんなことはしないよ。でもね、こうしちゃえばどう？」

ちひろが指をパチンと鳴らした直後、ドアの向こうでガタガタと何かが動き出す音が聞こえた。

「げっ！ バリケードが！？」

峻佑が部屋の中であわただしく動き回るような音がしているが、その隙に2人はドアを開けた。

「さ、もう逃げられないよ。おとなしく掃除しましょっ！」

ちひろが掃除機を片手に峻佑にそう宣告した。

「うう……わかったよ。でも、10分だけ待ってくれ。捨てられちゃ困る本だけしまっから。大丈夫、もう逃げない」

峻佑は諦めたのがつくりとうなだれて頷くと、いったん2人を部屋の外に追い出して、これまでひそかに集めていた秘蔵の本をクローゼットの奥にある自作の隠し扉の中にしまっていた。

と、そのとき。

「峻佑くん、やっぱりそろそろお昼になるからいったん休憩に……」

ちひろが突然ドアを開けて入ってきた。

「うわあっ！ いきなり開けるなって！ こないだ『ノックは大事だよ』って言ったのはなんだったのさ！？」

峻佑はあわてて持っていた雑誌を後ろ手に隠したが、隠しきれず床にバサバサと落ちてしまった。

「あはは、ゴメンゴメン。あれっ？ 峻佑くん、何か落ちた……よ

……」

ちひろが床に落ちた雑誌を拾おうとして、ぴたりと動きが止まった。

「うわあっ！ 見るな！ お願いだから見ないで——！」

峻佑が叫びながらちひろから雑誌を取り返したがもう遅い。

「峻佑くん……捨てられちゃ困る本って、そういうののことだったの……？」

ちひろが身体を震わせながら峻佑に問いかける。

「え、えーっと……ち、違うんだ！ これは……そう！ 友達のを預かってるんだ！ だから捨てられると困るんだ！」

峻佑はウソで固めた言い訳を試みるが、姉妹の視線は冷ややかだった。

「こんな……こんなえつちな本を持ってちゃダメ——！ 全部没収っ！」

ちひろは叫ぶと、隠し途中だったものも含め、峻佑の秘蔵の工口本を没収し、ゴミ袋に放り込んだ。峻佑も抵抗しようとしたが、みちるの魔法で床に押さえつけられ、万事休す。

「さ、お昼にしよう！ あ、そのゴミはさっさとどこかにやらないとあとで取り返されたら意味ないね」

ちひろは峻佑の本をゴミ呼ばわりして空間に開けた穴に放り込んで捨てた。それらを捨て終わるのを確認すると、みちるはようやく笑顔を取り戻して峻佑を押さえつけていた魔法を解いた。

「あ、ああ……」

峻佑は秘蔵のコレクションが捨てられたショックで苦笑いするのがやっとだった。

時間は戻って、その日の朝、西園寺家。

「さてと、何か面白いものは映ってるかしら？」

なつきは目を覚ますなり、市原家に仕掛けたカメラの映像に見入

っていた。無線でリアルタイムに映像をチェックできる優れたもののカメラ（暗視モード付き）を仕掛けてきたので、夜でも昼でも今現在の市原家の様子が手に取るようにわかるのだ。

「な、何よこれ……」

昨夜録画された映像から見始めたなつきは、いきなり驚かされていた。というのも、昨夜市原家の玄関先においてきた等身大の<sup>マネキン</sup>人形が、いつの間にか粉々になっていたのだ。決定的瞬間こそ映っていないものの、わずか2〜3秒の間に粉々にするなど、普通はできない。

「どうなってるのかしら……」

なつきは人形が粉々になる瞬間を丁寧にスロー再生してみるとにした。すると、

「こ、これは!？」

一瞬の映像だったが、暗闇の中で何かが光り、それが収まると人形が粉々になっていたのだ。

「うーん、まだ証拠としては不十分ね。もっと調べてみないと」

なつきは唸ると、リアルタイムの映像に切り替えた。

「……彼女たちはホント何者なのかしら……?」

なつきが観察を続けていると、峻佑と姉妹の口論らしきものの直後、峻佑の部屋の本棚が勝手に動き出して姉妹が突入してきたり、さらに、床に倒れている峻佑の横で黒い空間が出現してゴミ袋を飲み込んでいたりと常識ではありえないことが連発していた。

「仕方ない、この映像を証拠に直接訊いてみるのかなさそうね。このままじゃいくら考えても答えは出なさそうだし」

なつきはため息を一つ吐くと、残りを録画に切り替えるのだった。

VOL・13:Let's大掃除! - 峻佑の部屋に隠されしモノ - (後書き)

市原家に仕掛けた盗撮カメラの映像を見たなつきは何をたくらんでいるのか?

次回、『VOL・14:生徒会、再び(仮)』お楽しみに〜

VOL・14：生徒会、再び

翌朝、昨日の休みをまる一日大掃除につぎ込んだ3人は疲れきった表情で登校していた。

「まったく、峻佑くんがあんなものを隠し持っていたなんて……」  
歩きながらちひろがボヤク。

「あんなものって言うけどさ、あれくらいならそんな大げさに騒ぐことでもないと思うぜ。むしろああいう本をまったく持っていない方がおかしいって。2人はちよつと神経質すぎるんだよ」

峻佑は本を捨てられたショックからなんとか立ち直ったものの、ぶつくさ文句を言っていた。

「そうかもしれないけど、現物は見なくなかったわよ……」

みちるはため息とともにそうつぶやきつつ、3人は学校まで歩いていった。

「そうか。そいつは災難だったな……同情するぜ」

休み時間、峻佑は昨日のことをうまく魔法のことは隠して耕太郎に話したところ、同情されてしまった。

「はあ……同情するくらいならお前のヤツを1冊か2冊くらい譲ってくれよ」

峻佑は耕太郎に頼んでみたが、

「他でもないお前の頼みだからな、俺としては構わないが、後ろのお方は認めてくれなさそうだぜ？」

耕太郎は苦笑して峻佑の後ろを指差した。

「ん、後ろ？」

峻佑が振り向くと、

「峻佑くん……まったく懲りてないでしょ？」

いつから峻佑たちの話を聞いていたのか、ちひろが峻佑の後ろに

仁王立ちしていた。

「うげ、ちひろ……男同士の話を盗み聞きするとはあまりいい趣味とは言えないな」

峻佑がちひろに抗議したところで、休み時間の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

「その話の続きは放課後にでもしようか。まあ、あたしの主張は変わらないけどね」

ちひろは峻佑に小声でそう言うと、自分の席に戻っていった。

「年代の女の子と同居するって、うらやましいことだと思っただが、今じゃ同情するぜ。ご愁傷様」

様子をうかがっていたクラスメートの1人が席に戻る途中で峻佑の肩を叩いて去っていった。

「だから、あのくらいならいいだろ？ お願いだから返してくれよ」

「何度頼まれても、えっちな本はダメ！」

放課後、峻佑たちが3人で激論を交わしていると、放送が入った。

「1年4組の市原峻佑くん、真野ちひろさん、1年5組の真野みちるさん、特別教室棟3階の小会議室へ来てください。繰り返しします」

――

「なんだ、また生徒会か？ でもなんで小会議室なんだ……？」

今度は峻佑だけでなくちひろやみちるまで呼び出されていること、そして呼び出し先がなぜか小会議室ということに峻佑は首を傾げつつも、2人とともに小会議室へ向かった。

「よく来てくれた。早速本題だが、市原君、考え直してくれる気はないか？」

会議室で待っていたのはやはり一条たちだった。今日は前回のときは見なかった女性もいて、3人になっていた。

「何度言われても考え直す気はありませんので、他を当たってください。話がそれだけなら失礼します」

峻佑は一条の要求を突っぱね、会議室を出ようとした。と、

「まあ、待ちたまえ。それだけならあとの2人は呼ばなくともいいだろう？ なつき、続きはキミから頼む」

一条は第3の人物をなつきと呼び、彼女にボタンタッチした。

「一応初めまして。私は生徒会書記長兼、隠密調査部長、3年7組の西園寺なつき。とある筋からの依頼であなたたちのことを調べさせてもらったわ。そしたらこんな映像が出てきたんだけど、説明してもらえるかしら？」

なつきはそう言つと、会議室のカーテンを閉め、ビデオを再生した。

「これは……？ つい昨日の我が家じゃないですか。隠し撮りとは生徒会メンバーは趣味が悪いですね」

峻佑が皮肉を言つてやると、

「そんなことより、そこで本棚がガタガタ動いたり、奇妙な黒いものが発生しているんだけど、あれは何なのかしら？」

なつきは峻佑の皮肉を華麗に無視<sup>スル</sup>すると、そうたずねた。

（マズいわね……完璧に撮られてる。どうする、みちる？）

ちひろは映像を見ながら隣にいるみちるにテレパシーで話しかけた。

（うーん……あまりやりたくはないけど、暗示をかけて記憶を消し去るしかないんじゃないかな？）

みちるはそう返すと、

「西園寺先輩でしたっけ？ いったいどういうおつもりですか？ 盗撮は犯罪ですよ？」

なつきにそう抗議をした。

「そうね、その点については謝らなくてはならないわね。でも、この映像を説明してもらわないと、私って好奇心の塊で生徒会にいるような人だから、今後も生徒会権限をフル活用してあなたたちに付きまとうかもしれないわよ？」

なつきは一度謝ると、苦笑しながらちひろたちに迫った。

「ちょっと、先輩がた！？ まさかとは思いますが、オレを脅迫して生徒会入りさせるために西園寺先輩にウチを盗撮させたわけじゃないですよー！？」

峻佑はなつきに詰め寄られるちひろたちを横目に、一条と仙堂に詰め寄っていた。

「……………」

2人は無言のまま何も答えなかったが、その無言は肯定を示していた。

「そうですか……お2人があんまりにも熱心にスカウトしてくれるんで、ちょっとだけ前向きに考え始めていたのに、先輩たちには失望しました。今後一切勧誘には応じませんので。2人とも、行こうぜ。もう用はない」

峻佑が一条たちに啖呵<sup>タンカ</sup>を切ると、2人を呼んで出ていこうとしたと、

「うん、ちょっと待ってて峻佑くん。先輩、ちょっと失礼。この映像<sup>デオ</sup>を消去してこの件をまるごと忘れちゃってください」

ちひろがなつきの目をジッと見据え、記憶を消す暗示をかけた。

さらに一条たちにもみちるが同じ暗示をかけ、峻佑たちは小会議室を後にした。

「まったく、あそこまでしてオレを生徒会入りさせたかったのかね？」

帰る途中、峻佑が怒りながら吐き捨てた。

「やり方は最低だけど、あの会長さんたちは本気だったよ。一応、忘れさせたのはあのビデオに関することだけで、峻佑くんを生徒会にスカウトしようとしてることは変わらないから、今後の対応次第では考えてもいいんじゃない？ なんだったら先輩に頼んで私たちも一緒にやろうか？」

みちるは峻佑を落ち着かせながら話した。

「そうだなあ……ま、どうなるかはわからないけど、とりあえず帰ったらカメラを探し出して回収しなくちゃな」

「そうだね。せっかく忘れさせたのに、カメラをほっといたら意味ないものね」

峻佑の怒りも収まり、彼らは苦笑いしながら帰路についたのだった。

**V O L ・ 1 4 : 生徒会、再び（後書き）**

なつきの陰謀をどうにか切り抜けた峻佑たち。  
そんな彼らに高校生活最初のイベントが迫る。

次回、V O L ・ 1 5 : まもなく体育祭（仮）お楽しみに！

## VOL・15：もうすぐ体育祭

5月。ゴールデンウィークも明け、峻佑たち1年生も高校生活にようやく慣れてきた。

生徒会の件は一条たちが誠意を見せるために1年4組の教室に直接出向いて3回目のスカウトに来た際、

「オレ1人のためにそこまでしてくれて非常にありがたいんですけど、まだ入学して時間が経ってなくて実感が湧かないので、しばらく保留つてことにしていいですか？」

峻佑も精一杯の誠意を見せた返答をし、

「まあ、まだ5月だからそれほどあせらなくてもいい。私やなつきなどの3年生が生徒会を引退するのは12月だから、それまでに結論を出してくれば。前向きな結論を期待しているよ」

一条たち生徒会メンバーは笑顔で峻佑に話して去っていった。

「期限は7ヶ月か。まあ、まだじっくり考えられるな。でも、正直あれだけのことでスカウトされるなんてなあ」

峻佑はため息をつきながら1人ボヤいた。

「えー、そういうわけで、2週間後の土曜日に竹高体育祭が行われることになっている。そこで今日のLHRでは各種目の出場選手を決めたいと思うのだが、クラス委員と体育祭実行委員で協力して決めてくれ」

その日のLHRで担任の脇野が唐突にそんなことを言い出した。

「体育祭ね……そんな時期か。つてか、このクラス、クラス委員とかいたのか？」

峻佑がボソツとつぶやくと、

「ひどいな、市原くん。ちゃんと決めたじゃない。まあ、私目立たないから仕方ないけど……小学生のときからずっと本当の名前を覚

えてもらえずいつも「委員長」って呼ばれてた。きつとここでもそうなるんでしょうね……」

峻佑の独り言が聞こえていたのか、峻佑の後ろの席から女子が1人立ち上がり、教壇に向かいながらつぶやいた。

「こう言っちゃ失礼だけど、本当にまんま委員長なタイプだな……」

峻佑が小声で言ったとおり、彼女の風貌は丸いレンズのメガネ、ツインのおさげ髪など、一般的にイメージされる「委員長」の要件を満たしていたのだ。

「そんでもって、体育祭実行委員は……この俺だ！」

同じように立ち上がって教壇に向かったのは、耕太郎だった。

「なんだ、お前だったのか、コータロー。しっかり仕事しろよ」

峻佑がハッパをかけると、耕太郎は「うるせえ、わかってら！」と怒鳴り返し、クラス内は笑いに包まれた。

「それでは、まず決めるのは男女100m走、障害物競走、借り物競争。その他にも、女子全員の綱引き、男子全員の騎馬戦。あれっ、最後のマル秘種目って？ それに種目数自体も少なすぎる気が……」

委員長は種目を確認し、黒板に書き出していったが、妙に種目の数が少ないことに気づいた。

「あれだろ、作者もいいトシだから高校の体育祭の知識が抜け落ちてるんだろ」

峻佑が机で頬杖をつきながらボヤク。

「こら、峻佑！ さらっと作者サイドの裏事情を暴露するな！ マル秘種目の内容については当日の昼休みまで発表されない。場合によっては行われなときもあるらしい。ああ、それと各選手の個人種目へのエントリーは基本的に1人1種目だが、2種目以上エントリーすることも可能だ。ただし、そのうち1種目は障害物競走を入れることが条件だそうだ」

耕太郎が素早く峻佑にツツコミをいれ、マル秘種目と全体的な補足説明を行った。

その後、話しあいや各自の立候補などによって、各種目の出場者が決まり、峻佑は借り物競争、耕太郎は100m走、委員長は障害物競走、そしてちひろは女子の100m走と障害物競走に出ることになった。

「そっぴやさ、この体育祭って各クラス対抗なのか、それともなんか組み合わせて戦うのか、どっちだ？」

峻佑が委員長と耕太郎にたずねた。

「えーと、一応今年は各学年の1～4組が紅組、5～8組が白組で3学年分合体して争うみたいね」

委員長は手元の資料を見ながら答えた。

「ということはみちるとは敵同士になるんか……。わかった、ありがとう」

峻佑は何を考えているのか、ブツブツと何か小声でつぶやいていた。

一方、そのころの5組。

「えゝ！？ 4組と敵同士ってことは峻佑くんや姉さんと争うの……？」

みちるもチーム分けのことを知って驚いていた。

「よし、これはいい機会だ。4組の市原を公の舞台でぶっ潰せる。お前ら、何が何でも市原をぶっ潰すぞ！ 同志たる6～8組の連中にもこのことは徹底させなくちゃな」

川原が5組の男連中に念を押し、「おおー！」と気合の雄たけびが上がっていた。

「ずいぶん男子たち気合入ってるわね……。頼もしいけど、動機が微妙ね」

「あ、あはは……」

5組の女子たちは男子たちの動きを冷やかな目で見つめ、当事者のみちるは乾いた笑いを浮かべることしかできないのだった。

「もうすぐ体育祭か。頑張ろうな、ちひろ。みちるとは敵同士なのが残念だな。でも、姉妹対決が実現したらいろんな意味で大変なことになりそうだな」

その日の放課後、峻佑はちひろやみちると帰り道を歩きながらそんなことを話していた。

「そうだね。でも、私、お姉ちゃんたちには負けないよ」

みちるは峻佑の発言の半分ほどをスルーし、早くも宣戦布告していた。

そんな3人を見つめる黒いカゲ――

「――見つけた。あれが次の獲物の持ち主、真野姉妹だな……」

**V O L ・ 1 5 ・ もつすぐ体育祭（後書き）**

ちひろたちを見つめる黒いカゲの正体は何者なのか？  
次回、V O L ・ 1 6 ・ 襲撃者（仮） お楽しみに！

体育祭まであと数日と迫ったある日のこと。

「峻佑、聞いたか？ 今日どこかのクラスに転校生が来るみたいだぜ」

朝、ちひろやみちると一緒に登校し、みちると別れて教室に入った峻佑に耕太郎がいきなり切り出した。

「転校生？ こんな時期にか？」

峻佑は聞き間違いかと思つて聞き返した。

「俺もそこら辺は不思議なんだけど、ほぼ確実だな。さっき職員室に呼び出されて行ったら、見たことないヤツが学年主任と話してたんだよ。真新しい制服の腕章も1年生のものだったしな。ただ一つ残念なのは、転校生が男<sup>ヤロ</sup>だつてことだ」

耕太郎は首を振つていかにも残念そうにつぶやいた。

「もう、沢田くんつてそういうことばかり言ってるんでしょ？」

ちひろが笑いながら耕太郎の背中をバシバシ叩いた。

「な、なぜそれを！ さては峻佑、お前中学時代のことを喋つたな！？」

耕太郎は峻佑の仕業と断定し、つかみかかった。

「おい、早まるなよ。オレは話した覚えはないぞ。なあ、ちひろ？」  
峻佑は耕太郎の手を払いのけながらちひろに同意を求めた。

「うん、あたしは峻佑くんからは何も聞いてないよ。あたしには沢田くんがそういう風に見えたの」

ちひろは峻佑の言葉に頷き、弁解した。

「俺はちひろさんからそんな風に見られていたのか……」  
シヨックを受けてがっくりと落ち込む耕太郎を放置して峻佑たちは席に向かった。

HRと1時間目が終わり、2時間目が始まる前の休み時間、突如

として4組の教室内に煙が立ちこめた。

「な、なんだ！？ 何も見えない！」

峻佑を含めたクラスメートたちがパニックに陥る中、ただ1人ちひろは落ち着いていた。

（なんだかわからないけど、この状態なら魔法を使っても見られることはなさそうね……）

ちひろはそう考えると、魔法で窓を開くと同時にわずかに風を起こして煙を逃がしていった。と、そこに、

「真野ちひろ、覚悟！ 猿義忍法、焰玉！」  
えんぎ ほむだま

煙が晴れつつある中を何者かがちひろに猛スピードで近づき、火のついた火薬玉を投げつけ、破裂させた。

「きゃあつ！ ちょっと、いきなり何すんのよ！ そんなもの投げたら危ないじゃない！」

「ちひろ、大丈夫か！？」

ようやく煙が晴れて視界が良くなったので、峻佑はちひろの悲鳴が聞こえた方へ向かった。すると、

「バカな、拙者の焰玉を受けて無傷だど！？」  
ノーダメージ くつ、奇襲失敗か！  
やむを得ん、この場は一旦退こう」

謎の襲撃者は驚きに満ちた声を出すと、足元に煙玉を投げつけ姿を消した。

「ちひろ、大丈夫か？ ってか、あれはいつたいなんだったんだ？」  
峻佑がイマイチ状況を把握できずに首を傾げていると、

「うん、あたしは大丈夫。なんか攻撃されたけど、普段の防御で間に合う範囲だったから。なんか攻撃のときに『エンギ忍法』とか言ってたからただの忍者かぶれか何かだと思うけど、あたしを狙ってくる理由がわからないわね……」

ちひろは大丈夫と頷いたが、襲われた理由まではわからず首を傾げていた。と、

「いま教室内に煙幕張ってちひろさんに襲いかかったのって、今日転校してきたヤツじゃね？ 朝俺が職員室で見たヤツそっくりだ

つたし。たしか名前は猿義さるよし 半助はんすけとかいったな。でもってクラスは6組。6組の同志がさつき転校生が来たって言ってたからな」

耕太郎はどうやら襲撃者を見ていたらしく、正体を推測した。と、その瞬間教室内を矢が横切り、ちひろの席の近くの壁に刺さった。

「や、矢文……？」

ちひろが驚きつつも矢から手紙を外して開いてみた。

“拙者の正体をよくぞ見破った。その通り、拙者の名は猿義半助さるよし。猿義流忍法正統後継者である。我が猿義流忍法の極意は他の流派の秘伝の技を盗み、猿義流にアレンジして使うこと。今度の獲物ターゲットは真野家に先祖代々伝わるとされる秘伝の書。その後継者の真野ちひろよ、秘伝の書を賭けて拙者と勝負いたせ。昼休み、屋上にて待つ

猿義半助”

と書いてあった。

「おいおい……なに考えてるんだこの猿義ってヤツは……」

横から手紙をのぞき込んだ峻佑が呆れたようにつぶやく。

「ふ〜ん……真野家の秘伝の書って、要はご先祖様が遺したあの書物のことでしょ？ そんな重要なモノを賭けてあたしと勝負ですって？ ふふつ、上等じゃない。魔法使いの怖さってモノを教えてあげるわ……」

ちひろは小さな声で笑いながら、静かに闘志を燃やしていた。

そして昼休み。ちひろはみちるにも事情を話し、峻佑を連れて3人で屋上に向かった。

3人が屋上に出るドアを開けると、すでに相手は来ていた。

「待っていたぞ、真野ちひろ。現代に生きる魔女よ」

黒い忍者装束に身を包んだ半助はちひろに指を突きつけ話しかけた。

「戦うかどうかは別にして、聞かせて。あなたは何者？ どうしてあたしたちの正体を知っているの？」

ちひろは静かな声で半助に問いかけた。

「拙者の正体は朝の矢文で言つたとおりだ。我が猿義流忍法では他の流派の秘伝を奪い、それを使って敵を倒すことで強く生き残ってきた。そして、新しい技のためなら調査は惜しまない。この竹崎に住む真野家、そこにまだ手に入れてない秘伝の書があると知り、それを奪うために転校してきたのだ。もちろん、その調査の過程で前が魔法使いだと言ふこともわかつてる。さあ、覚悟はいいか！」

半助は装束の中から小刀を2本取り出し、構えた。

「ふゝん。はつきり言つて、あたしはあなたに魔法書を渡すつもりはないし、仮にあたしから魔法書を奪うことができたとしてもあなたには扱えないと思うわよ？ それでもこの不毛な決闘をやる言ふなら、憂さ晴らしに相手になつてあげるわ。さあ、やるの？ それともやらないの？」

ちひろも半助に指を突きつけて言い放った。

「扱えないかどうかはやつてみないとわからぬ！ いざ、尋常に勝負！」

半助は小刀を武器にちひろに飛びかかった。

「やると言ふなら、容赦はしないわよ。魔法使いに接近戦を仕掛けるのは相手の魔法を封じると言ふ意味では定石かもしれないけど、甘いわね」

ちひろはニヤリと笑つと、半助の小刀を指先で挟んで受けとめた。

「くつ、動かぬ！？ こ、この怪力女め！」

半助は焦つて小刀を引き抜こうとしながらそう言つた瞬間、ぴくつとちひろの顔つきが変わつた。

「誰が……誰が怪力女ですつてえ！？」

ちひろは怒りをあらわにして叫び、指先で挟んでいた小刀を振り回して小刀ごと半助を放り投げた。投げられた半助は思わず小刀でコンクリートの床に着地してしまい、小刀は真つ二つに折れてしまった。

「くつ、拙者を放り投げるとは、なんてパワーだ……ならば、猿義忍法、たつまきだま竜巻玉！」

半助は起き上がると同時に柄だけになった小刀を投げ捨てると、懐からテニスボールくらいの大きさの玉を取り出し、ちひろに向けて投げつけた。玉は空中で破裂すると、猛烈な風を巻き起こし、ちひろに迫っていった。

「しょせんこの程度か。もう、十分ね。終わりにしましょう」

ちひろは小さな声でそうつぶやき、続けざまに何事かつぶやくと、突然竜巻が進行方向を変え、半助のほうに戻りはじめた。しかも威力と速度も心なしか上がっていた。

「そんなバカな……ぎゃあああ！」

半助はなすすべなく竜巻に飲み込まれ、空中に放り出されたあと、屋上の床面に叩きつけられた。

「今のは相手の攻撃を1.5倍にして跳ね返す魔法よ。これに懲りたら魔法使いに挑もうなんて思わないことね」

ちひろが横たわる半助に冷たく言い放つと、

「こ、こんなはずでは……」

半助はやられ役の決め台詞的な一言を言って気絶した。

「やーれやれ、保健室に運んどいてやるか……こうなるだろうことは予想できてたしな。つーかこの状況の原因を保健の先生にどう説明すりゃいいんだ？ まさか忍者対魔法使いの決闘が行われた、なんて言える訳ないしなあ……」

屋上に誰もこないか見張っていた峻佑は一言ボヤくと、気絶した半助を引きずって保健室へ向かうのだった。

放課後、峻佑たちが帰ろうと下駄箱に向かうと、またも矢文が飛んできた。

「猿義とかいうヤツ、懲りてないだろ……で、今度はなんだって？」

手紙を開いたちひろに峻佑がたずねると、

「えーと、“今日は拙者の完敗だ。だがまだ秘伝の書を諦めたわけではない。せいぜい背後に気をつけるのだな”だって。もっとボコボコにしておけばよかったかな……？」

ちひろもさすがに呆れたように物騒な発言をさらっと言い、

「まあまあ、姉さん落ち着いて。あれ以上やってたらあの人死んだよ？ だから、もし次に何か仕掛けてきたらそのときは完膚なきまでにやっちゃえばいいんじゃない？」

みちるはちひろをなだめながら話し、3人は帰路に着くのだった。

**V O L ・ 1 6 : 襲撃者（後書き）**

耕太郎の過去は本編にそれほど重要ではないので読者の方々の想像にお任せします。

次回、いよいよ体育祭編開幕！

V O L ・ 1 7 : 体育祭 P a r t 1（仮）      お楽しみにっ！

いよいよ体育祭編開幕！

ここから5回に渡って体育祭編は続いています。

変な転校生、猿義との屋上での戦い、そして矢文による宣戦布告から数日が過ぎ、体育祭の日を迎えていた。

「宣誓！ 我々選手一同は、スポーツマンシップに乗っ取り、正々堂々と戦い抜くことを誓う！」

おなじみの選手宣誓を生徒会長の一条が済ませ、準備運動ののち、開会式は終わった。各クラスが陣地に戻る中、峻佑たちのところにみちるがやってきて、

「お姉ちゃん、ちょっと話があるんだけど、いい？」

まじめな顔をしてちひろに話しかけた。

「どうしたの？ 今日は敵同士だからね、相手が実の妹でも容赦はしないわよ」

ちひろは早々とみちるに宣戦布告をしていた。

「まあ、そうなんだけど、あのね、今日はお互い魔法は使わないで正々堂々と戦おうねってことを言いにきたの。それだけだから、またね。私だってお姉ちゃんには負けないんだから！」

みちるはちひろに耳打ちすると、自分のクラスの陣地に走っていった。

「ふふっ、あたしだって最初からこんな場面で魔法を使ってまで勝とうなんて思ってないわよ。……本当に必要にならない限りはね」

ちひろは誰にも聞こえない程度の声でつぶやいた。

『午前中の競技を始めるぜえ！ 男女100メートル走に出場する連中は、グラウンド隅の入場門へ集まれやオラアーっ！』

体育祭の放送と言えば放送委員の数少ない見せ場。なぜか気合いの入った放送で選手の呼び出しをしていた。

「なんだ、今のムダな雄叫びは……？ まあ、とりあえず100メートル走は耕太郎とちひろだな。頼んだぜ」

峻佑は放送に静かにツツコミを入れ、代表の2人を送り出した。

「おう、任せとけ！」

「ま、なんとかなるでしょ！」

2人はそれぞれのリアクションとともに入場門へと向かった。

全てのレースは3年生から順に行われていくことになっていた。

『レースの模様はめんどいからカットし、結果を伝えるぜえ！ 用意はいいか貴様らあ！ 3年生第1レース、紅組の勝利。第2レース、紅組。第3レース、紅組。第4レース、白組。紅組の3勝1敗だぜ！ ああ、言い忘れてたが第1と第2レースは男子、第3と第4レースは女子のレースだぜえ！』

続いて2年生の結果を伝えるぞ！ 第1レース、白組。第2レース、紅組。第3レース、白組。第4レース、白組。白組の3勝1敗だぜ！

続いて、1年生のレースを楽しんどけオラア！ はっ、何をする！ 離せコラア！」

やはりムダにテンションの高い放送委員がレースの結果を叫ぶように伝えていた。が、ついに他の委員によって取り押さえられたらしい。

『えー、お聞き苦しい放送をしてしまい、大変申し訳ありませんでした。それでは、気を取り直して1年生の100メートル走に参りましょう』

別の放送委員に交代したらしく落ち着いた声で謝罪放送が入ると、レースが再開された。

「さつとと、ようやく出番か。紅組の勝利に貢献してくるかな」  
耕太郎は手足を軽く動かしながらつぶやく。

「ふっふっふ……沢田、どうやらお前の相手はこのおれのような」  
耕太郎のレースの相手に白組からは5組の川原が出てきていた。

「MMのリーダーと副リーダーとの激突か、面白い、勝負だ川原！」

耕太郎は川原に指を突きつけて宣戦布告をした。

「1年生第1レース、位置について、ヨーイ……スタート！」

景気のいい空砲の音とともに耕太郎たちは走り出した。

『ゴール！ 紅組、白組1人ずつがほぼ同時にゴールテープを切りましたが……あつ、いまビデオ判定により、勝者は紅！ 紅組が第1レースを制しました！』

いきなりの好レースに興奮気味の放送委員が結果を伝え、紅組の陣地では大盛り上がりだった。

『第2レース……は都合によりカットされました。白組の勝利です。続いて第3レースも都合によりカット、紅組の勝利です。続く第4レースは、なんと双子の姉妹の対決が実現しました！ 紅組からは4組所属、姉のちひろ。対する白組は5組所属、妹のみちる。いまここに1年生のアイドル的な2人の直接対決が始まります！』

放送委員も興奮を隠さずにハイテンションで実況を入れている。

「まさか、みちるも100メートル走に出て、しかも同じレースでの対決なんてね。ま、正々堂々とやりましょう」

ちひろは隣に並ぶみちるに笑顔で話しかけた。

「それは私だつて同じだよ。こんなところでお姉ちゃんと対決だなんて……でも、負けないよっ！」

みちるも顔は笑っているが、目が本気<sup>マジ</sup>だった。

「1年生第4レース、位置について、ヨーイ……スタート！」

例によってスタートの合図となる空砲が鳴り響き、姉妹対決が始まった。

『おっと、真野姉妹が速い！ ぐんぐん他の選手を引き離し、いまゴール！ しかし、これはまたも同着なのか？ 判定は……紅！

微妙な判定ながら、またも紅の勝利です。これで1年生の100メートル走の全てのレースが終わり、紅組の3勝1敗となります』

放送委員はまだ興奮覚めやらぬ口調で実況を入れると、

『続いての競技は、借り物競争です。出場する生徒は入場門へ集合してください』

続く競技の呼び出しをかけた。

「借り物競争はオレの出番だな。まあ、この種目だけは運任せだからなあ……ともかく、頑張ってくるな」

峻佑はボヤくと、入場門へと駆けていった。

「2・3年生のレースはやはり省略とし、結果は紅白両軍1勝ずつでした。続いて1年生のレースに参ります」

実況担当の放送委員が話し、峻佑たちの番になった。

「市原峻佑、お前だけには勝たせんぞ！」

峻佑は第2レースを走る。第1レースの開始直前、峻佑は隣にいた白組の男に話しかけられた。

「何をそんなに熱くなってるのか知らんが、落ち着けて。つかお前誰だよ？」

峻佑は冷静に返した。

「お前は誰だ？」だと！？ 俺は1年6組、MMM所属、種村たねむら健介けんすけだ！ 我らのマドンナ、真野姉妹を貴様なんぞに取られるわけにはいかなからな、せいぜいこの体育祭で無様な姿を見せて真野姉妹をがっかりさせるがいい！」

種村と名乗った男は、峻佑に指を突きつけ宣戦布告した。

「なんだ、またMMMバカどもか。勝手に対抗心燃やしてるよ。オレはお前らに関わる気は毛頭ない。っと、どうやらそろそろ第2レースのスタンバイらしいな」

峻佑は種村のほうを見ることなくそう話した。

「てめえは絶対ぶっ潰す……！ 覚悟しとけ」

種村は静かにそうつぶやき、自身も第2レースのスタンバイのため列に並び直した。

「第2レース、位置について、ヨーイ、スタート！」

パァンといういつもの空砲を合図に、峻佑たちは一斉に走り出した。

（くらえっ！ そして転べ！）

種村は峻佑を躓かせようと、走るコースに足を出した。

「……お前、やっぱバカだろ？ そんなんに引つかかるほどオレはアホじゃないんでな」

峻佑は種村に冷ややかな視線を向けると、種村の足をヒラリとかわし、走っていった。峻佑にかわされた種村は「うおっ！」と奇声をあげ、バランスを崩してハデにこけたのだった。

「おっと、スタート直後に白組の選手が1人転びました。これはここから見た限りですと、紅組の選手を転ばそうとして自滅したといったところでしょうか。白組、この自滅は痛い。大幅に出遅れましたね」

実況がそう言っている間に、峻佑たち他の選手は借り物が書かれた札のところまでたどり着いていた。

（上級生のレースで出てきた札はどれもろくなもんじゃなかった。何が出るんだ……？）

峻佑は札に手を伸ばしながら一瞬考えてしまった。

これまでに上級生のレースで出てきた札には、放送で行われた解説によると、「校長」や「教頭」などの先生シリーズとか、「放送委員の予備マイク」だとか、とにかく変な借り物ばかり入っていたのだ。中でも引いた選手が最もとまどったのは、「江頭」と書かれた札だった。もちろんあの芸人がこんなところにいるわけがない。さんざん悩んだ末、その選手はアナログの腕時計を借り、「2：50」に合わせてゴールに持っていた。すると、なんと彼は1位の旗を渡されていた。実はこのレースの借り物は全レース中唯一の“とんちを利かせて借り物を見つける”というとんでもないものだったらしく、まだ誰もゴールしていなかったのだ。

そんなことを考えながら峻佑が引いた札を開けると……

「『女子生徒』！？ よっしゃ！」

くじ運がよかったのか、峻佑は小さくガッツポーズをすると、自分のクラスのほうへ走った。

『このレースの借り物は、机、女子生徒、イス、体育着、

となっています。さあ、各選手はどの札を引いたのか？」

実況が楽しそうに言っているのを背に、峻佑は4組の陣地へたどり着くと、

「ちひろ、一緒に来てくれ！」

大声でちひろを呼んだ。

「あ、あたし！？ うん、わかった！」

ちひろは突然のことにとまどいながらもグラウンドと選手席を区切るロープをくぐって出てきた。

「よし、これで勝ちはもらったな」

峻佑はちひろの腕をつかむと、ゴール目指して走り出した。

ゴールまであと少しと迫った、そのとき。

「市原あああ！ てめえには勝たせねえええ！」

後ろから猛然と迫ってきたのは、スタートで出遅れていたはずの種村で、彼の手には体育着が握られていた。

「ちっ！ 自滅野郎が追いついてきたか！ だけど、オレの勝ちだ！」

峻佑は一瞬焦ったものの、すでにゴールは目前だったこともあり、無事にトップでゴールした。

「ちっ、あと一歩及ばなかったか」

種村は運良く、‘体育着’を引いたらしく、スタートで出遅れた分をあとという間に取り戻して、2位に入ることができた。

「1年生のレースの残りは省略とし、結果は両軍同点。続いては障害物競争ですので出場選手は集まってください」

**VOL・17：体育祭Part1 - 100m走&amp;借り物競争 - (後書**

今回は作者が書いていて最も楽しかった「障害物競走」！

VOL・18：体育祭Part2お楽しみに！

感想や評価、ご指摘、ご要望など随時受け付けております。何か気づいた点などありましたら気軽に書き込んでください。

「障害物競争はあたしと委員長の出番ね。行きましょっ！」  
いいんちよ

ちひろはたった今借り物競争で峻佑と一緒に疾走したにも関わらず、元気に立ち上がると委員長に声をかけた。

「はい、行きましょっか」

委員長はまだ種目に出ていない分、スタミナ体力は十分なようで、ちひろとともに紅組陣地を飛び出した。

「ちひろ、委員長、2人とも頑張れよ。さっきの借り物のときにいろいろと変な借り物が交じっていたことから考えて、障害物にもきつと妙な仕掛けが……ってなんじゃありゃ!？」

2人を励まして送りだそうとした峻佑が何気なく競技場のほうを見ると、そこには――

『今年の障害物競争の目玉はコースの最後に控える最強最悪の障害、その名も“ワインド・クラッシャー壊滅暴風”! コース脇に設置された2台の巨大扇風機によって左右から吹き荒れる風はもはや竜巻にも匹敵する威力! 選手はこれに耐えきってゴールしなくてはなりません!』

コース上に用意されたバカでかい機械に騒然となる生徒たちに向かって放送委員が解説を入れているが、それを聞いてさらにざわめきは大きくなった。

『なお、その他の障害は一般的なネットくぐり、平均台、ああ、これは一般的とはいいがたいですが、トリモチ地獄が仕掛けられ、それを抜けると壊滅暴風が待ち受ける、そんなコースになっています』

コース解説が終わると、あちこちからブーイングが巻き起こっていた。

「ちひろ! 委員長!」

峻佑はまだ近くにいた2人を呼び止め、  
「峻佑くん、どうしたの?」

ちひろは振り向いて聞き返した。

「あんな危険な障害物のあるコースだ。2人とも、無理に勝とうとしなくていいから、無事に帰ってきてくれ」

峻佑はちひろたちに真面目な顔で話した。

「……うん、わかった。やるだけはやるけど、無理はしないよ」

ちひろはちよつと考える素振りを見せた後、峻佑に笑い返した。

「さ、もうすぐスタートだ。呼び止めたりしてごめんな」

峻佑は一言謝って2人を改めて送り出した。

「真野さんって市原くんと仲いいんだね。幼なじみなんだっけ？

うらやましいな、私にはああいう風に言ってくれる男子なんていないよ。さっきの市原くんは私にも言ってくれたけど、それはきつと真野さんのついでだっただろうし……」

入場門へ向かう途中で、委員長がちひろに話しかけた。

「うん、峻佑くんとは10年前まで家が隣同士で、この高校で10年ぶりに再会したの。そんなに心配しなくても、さっきの峻佑くんの言葉は委員長に対してもあたしと同じくらいの重さを投げかけてくれてたはずだよ。峻佑くんは優しいし、ああいう場面で差をつけない人だからね」

ちひろは思ったままを委員長に話す。

「そっか。うん、これで心配事はなくなった。私、頑張れる！」

委員長はグツと拳を握りしめてつぶやいた。

「コースはかなりきつそうだけど、頑張ろうねっ！」

ちひろは委員長と励ましあいながら、入場門までやってきた。

『この種目は学年ごとにエントリーした全員が一斉にスタートすることになります。複数エントリーを認めたのはそのため、自らを捨て駒にしてチームに貢献するか、はたまた捨て駒となった仲間の屍を越えてゴール目指して駆け抜けるか、作戦が重要になってきます。なお、レース中、相手選手を妨害する目的でのドツキ行為は認

められます。まずは3年生のレースですのでスタンバイしてください。エントリー数は8クラスで計30人。紅組16人、白組14人となっています』

実況の声とともにスタートラインには30人の選手が3列に配置された。そして――

おなじみの乾いた音とともに、3年生のレースがスタートした。まず序盤のネットくぐりや平均台までは全員が一気に駆け抜けたものの、その先に待ち受ける5メートルのトリモチ地獄エリアを前にしてとまどいを隠し切れていなかった。

1、2分ほど経ったそのとき、紅、白両軍ともに数名の選手が自ら仲間に「自分の上を踏んでいけ」と頼んでトリモチに突撃してその身を散らし、残った選手はすまないと謝りながら1人ずつトリモチにへばりついた仲間の背中を駆け抜けていった。だが、途中で足を滑らせてトリモチに散った選手も出てしまい、その数を減らしていった。

『中盤の難所、トリモチ地獄を数名の選手の自己犠牲により抜けた選手たちですが、果たして最後の難所にどう立ち向かうのか！？救助班、トリモチ地獄にて散っていった選手の救出を頼みます。現在、生き残りは紅12人、白9人です』

トリモチ地獄を抜けた選手たちの背に実況の声が響く。彼らの目の前には、巨大扇風機が待ちかまえている。

と、紅組の選手のひとりが風速に強弱があることに気づき、うまくタイミングを取ると、風が弱まった瞬間を狙って突撃をかけた。しかし、わずかにタイミングがずれてしまい、彼が通り抜ける瞬間に風が再び強くなったことで発生した竜巻に巻き込まれ、コースの外にまで吹き飛ばされてしまった。と、そこからヒントを得た選手が次々と突撃をかけたが、ことごとくタイミングを外して吹き飛ばされてしまい、気がつくやうに両軍の生き残りはそれぞれ2人しかいなかった。

『さあ、最強最悪の障害の前に選手たちも壊滅寸前か？ 生き残りは両軍ともに2人！ なお、誰もゴールできずに全滅となった場合は引き分けとなります』

実況の声を背に、タイミングを取っていた生き残りの選手4人が吹き荒れる風へと突撃をかけた。

『おーっと、4人全員が暴風を抜けた！ あつと、紅組の選手がひとり白組の選手に突き飛ばされて風の中へ押し戻されてしまった！ そこへ容赦なく風が巻き起こり、もはや万事休す！』  
実況が興奮気味にマイクをつかんで叫び、紅組陣地では大ブーイングが起こっていた。

結局、3年生30人のうちゴールできたのはわずか3人とどまり、白が1位と3位、紅が2位を獲得したのだった。

その後の2年生のレースでは両軍合わせて25人がエントリーしていたものの、トリモチと壊滅暴風の前に全滅した。

『さあ、1年生のレースへ……』といたいたところですが、トリモチに散っていった2年生の救助作業がまだ終わらないので、少々お待ちください』

放送委員の実況に選手席や観客席のあちこちで笑いが起こるのだった。

**VOL・18：体育祭Part2 - 障害物競争・前編 - (後書き)**

3年生のほとんど2年生全てを葬り去った最強最悪の障害物に対し、ちひろや委員長はどう立ち向かうのか？

次回、VOL・19：体育祭Part3 障害物競走・後編！ お楽しみに！

……委員長の本当の名前が明かされる？

感想・評価及び要望やどんな細かい指摘でもかまいませんので、何かありましたら気軽に書き込んでください。  
では、また来週。

「さあ、2年生の救助作業が終わったので、1年生のレースに参りましょう。エントリー人数は……35人ですね。紅組が18人、白組17人となります」

実況が落ち着きを取り戻した声でしゃべり、1年生のエントリー選手35人がずらりとスタートラインについた。

「あのトリモチと壊滅暴風をどうするかが勝敗の分かれ目になることは確実ですよね。やはり、3年生みたいに誰かが犠牲にならないと攻略するのは無理でしょうか？」

委員長はちひろにたずねてみた。

「そうだね。普通に真正面から突っ込んでトリモチに引っかかってゴールできないのがオチだろうし……」

ちひろは考える限りの一般論を委員長にぶつけつつ、

（あたしはチカラを使えばあの程度の障害なんてどうってことないけど、バレたら面倒だし、チカラを使わず、かつ無駄な犠牲を出さずに切り抜ける方法なんてあるのかしら？）

もの思いにふけていたせいで、委員長が呼んでるのに気づけなかった。

「——さん、真野さん、大丈夫？ 聞してる？」

「えっ？ ごめん、考え事してて聞いてなかった。それで、何か言った？」

ちひろは素直に謝り、もう一度聞き返した。

「だからね、私、目立たないけど中学のとき陸上選手だったんだ。種目は走り幅跳びとちょうどあのトリモチを飛び越えるには絶好のタイプなんだけど、問題はその距離なの。私の自己ベストは5メートルジャストで、あのトリモチもジャスト5メートル。イチかバチかの賭けに出るか、それとも3年生みたいに誰か犠牲を出してでも安全策をとるか、って話だったんだけど、真野さんならどうする？」

委員長はちひろに作戦を話し、どうしようかとたずねた。

「一応、あたしも陸上部ではなかったけど、走り幅跳びは得意だった。あたしの自己ベストは4メートル99とあのトリモチを飛び越えるには少し足りない。けど、賭けてみる価値はあるわ。あたしたちの自己ベストを出せば、引っかけなくても自力で脱出できる」

ちひろは委員長にウソを並べ立てた。一応走り幅跳びをやっていたが、その記録は魔法で身体能力を強化した状態で出した記録なのだ。

「それじゃあ、その方向で行きましょう。目標は私たちのワンツーフイニッシュね」

委員長はちひろとがっしり握手を交わし、互いの健闘を誓った。

『さあ、スターターピストルの故障で遅れていましたが、今度こそ1年生のスタートです』

並んだまま待機させられていた1年生は多少列がバラけていたが、すぐに並びなおし——いよいよレースが始まった。

やはりネットと平均台はあっという間に突破し、中盤の関門・トリモチ地獄に35人全員が到達していた。やはり上級生のレースで何人もの選手を沈めてきた関門だけに、両軍ともに動きがとれず膠着状態に陥った。と、そこに——

「行くよ、委員長！」

ちひろがまず先に助走をつけて走りこみ、トリモチを飛び越えるため大きく跳躍した。あらかじめわずかに足に魔法をかけて普段より強化しておいたため、5メートルのトリモチをギリギリで飛び越えることに成功した。

「真野さん、やった！　いま私も行きますね！」

委員長はちひろの成功を喜ぶと、大跳躍を見せ付けられて呆然としているほかの選手たちの横を助走ゾーンにして、自らも跳躍した。しかし、わずかに跳躍のタイミングがずれ、足は飛び越えたものの、

バランスを崩してお尻がトリモチにくっついてしまった。

「委員長！<sup>いいんちよ</sup>」

ちひろが戻ってきて委員長に手を差し伸べ、トリモチから救出したものの、勢いあまって2人ともすっ飛んだ。

「ありがとう、真野さ——え？ いやあああああ！」

委員長はちひろに礼を言いかけ、ふと下を見て悲鳴を上げた。さつきまで穿いていたはずのハーフパンツがない。あわてて後ろを見ると、彼女の穿いていたハーフパンツがトリモチにへばりついていて。そう、トリモチから救出された際にハーフパンツだけが脱げてしまったのだ。

「あ——」

ちひろは気まずそうにトリモチまで戻ると、ハーフパンツをどうにか引っぺがして、

「ごめん、委員長。勢いよく引つ張りすぎちゃったみたい」

ちひろがハーフパンツを渡しながら謝った。

「ううん、大丈夫。まだほかの選手はトリモチでとまどってるみたい。今のうちに行きましょう！」

委員長はすばやくハーフパンツを穿くと、再び走り出した。

『なんと、トリモチを恐れず走り幅跳びの要領で突破する荒業ができました！ さて、ほかの選手は未だトリモチを突破できずにいる！

だが、そろそろ突破しないと後が厳しくなるか！？』

実況が委員長のハプニングに再びテンションを上げて叫んでいた。その声に反応したのか、トリモチを前に怖気づいていた残りの33人の選手たちが一斉に走り幅跳びの要領で飛び越えようとし始めた。だが、33人もいては狭いフィールドでぶつかってしまうことは必然である。その結果、ともに跳躍できたのは3分の1にも満たない、両軍合わせてわずか8人だった。先行するちひろや委員長と合わせてもわずか10人と、かなり厳しい状況に陥っていた。

「さ、最後の難関ね……どうする、委員長？」

先行していたちひろたちもさすがに壊滅暴風はすんなり突破とい

うわけにはいかず、立ち止まって作戦を練っていた。

「ここはやっぱり3年生がやってたように風が弱まる瞬間を狙うしか方法はないんじゃないでしょうか？」

委員長は目の前で吹き荒れる風を見つめながらちひろに話した。

「そうよね、それしかないわよね……あつ、いま弱まった！ うーん、大体弱まつてる時間は5秒くらいね。弱まったらすぐに駆け抜けないと吹き飛ばされるわ」

ちひろは風が弱まつている時間を推測し、次のタイミングを待った。と、誰かが後ろからちひろを突き飛ばした。

「きやあつ！」

ちひろは不意打ちに対し踏ん張りきれず、まだ暴風が吹き荒れる中に飛び込んでしまい、上空高く吹き飛ばされた。

「ああつ、先行していた紅組の真野選手、何者かの妨害工作で突き飛ばされ、竜巻に巻き込まれた！ このままコースアウトしてしまうの——あれは！？」

実況がちひろの危機を伝え、紅組の全員がその行方を見守っていた。すると、風の向きが良かったのか、吹き飛ばされたちひろはコース上、トリモチを抜けたところに着地し、戻ってきた。

「あゝ、びつくりしたあゝ。あつ、今よ！ 委員長！」

ちひろは安堵のため息をついたところで、風が弱まるのを確認し、委員長と2人で飛び込んでいった。

『紅組の真野選手と、委員長こと酒井選手、ワンツーフィニッシュで今ゴール！ わずかに遅れて暴風エリアに飛び込んだ白組選手は次々と吹き飛ばされていき、無念の全滅！ これで1年生のレースは終わり、紅組の勝利となりました』

実況の声に、紅組陣地は歓喜の声に沸き、逆に白組では敗北したことで士気は下がっていた。

一方、ゴールしたちひろと委員長は——

「やったね、真野さん！ あの跳躍すごかったよ。あと、風に飛

ばされたときに無事だったのは奇跡なのかな？」

委員長はちひろとハイタッチで喜びを分かち合いつつも、ちひろに疑問を投げかけていた。

「う、うん。きつと奇跡だったんだよ。ところで、委員長の本名って、酒井」って言うんだね。下の名前はなんていうの？」

ちひろは話題をすり替えて委員長にたずねた。さすがに、吹き飛ばされたときに実は魔法で空を飛んで安全を確保してた、なんて言えるはずがない。

「やっと私の本当の名前を覚えてもらえるんだ。私の名前は酒井晴香<sup>はるか</sup>って言うの。わたしもちひろって呼ぶから、私のことも晴香って呼んでくれるとうれしいな」

委員長改め晴香はちひろにそう頼んだ。

「わかったわ、晴香。ついでだから、峻佑くんにも言うとかね。もう委員長なんて呼び名はやめてあげて、って」

ちひろは頷き、今ここに新たな友情が生まれたのだった。

『これで午前中の種目は全て終了です。各自昼食をとって午後の競技に備えてください。午後の競技は午後1時から、男子騎馬戦で開幕します』

紅白両軍で明暗がはっきり分かれる中、実況の声がグラウンドに響き渡った。

なんだかんだで障害物競走を攻略したちひろと晴香。

昼食を挟んで、午後の競技は何が待ち受けているのか？

そんなわけで、次回、VOL・20：体育祭Part4 - 午後の

競技・開幕 - (仮)

お楽しみに！

評価・感想及び細かい指摘や要望など、いつでもお待ちしております。  
す。

評価や感想は小躍りして喜びますし、指摘はすぐにチェックして修正の必要があればさせていただきます。さらに要望があれば、話のつながり等を考慮した上で実現可能であれば応えさせていただきます。

どのような細かいものでも構いません。書き込みをお待ちしております。

『体育祭実行委員より今年のマル秘種目についてお知らせします。今年は、紅白両軍各5名ずつの代表選手によるガチバトル、種目名“決戦”を開催することにします。なお、代表選手は実行委員側の引いたくじにより決定されました。辞退等はできませんのであしからず』

体育祭実行委員は今年のマル秘種目を告げたのち、それを闘う代表選手を読み上げていった。まず紅組代表として1年4組市原峻佑と同じく1年4組沢田耕太郎、同じく1年4組真野ちひろ、2年1組仙堂雲雀、3年3組一条流星の5名が選出され、一方の白組代表はというと、1年5組真野みちる、同じく1年5組川原陽一、1年6組種村健介、同じく1年6組猿義半助、3年7組西園寺なつきの5名が選出されていた。

『以上が体育祭実行委員からのマル秘種目に関するお知らせでした。各選手の午後の競技の健闘を祈ります』

実行委員はそれだけ言うと、放送を終わらせた。

「なんかずいぶん1年生に偏った代表編成だな……しかも偶然にしては全員知り合いつてできすぎだろ」

峻佑は昼飯を食べながら、一緒に机を囲むちひろや耕太郎、そして晴香に話しかけた。

「そうだね……しかも白組の代表選手には西園寺先輩やこないだあたしを襲ってきた猿義つてのもいるみたいだし、かなり派手な戦いになるかもしれないわね」

ちひろは白組の代表として読み上げられたメンバーをメモし、渋い顔をしていた。

「そうだな、まず種村は借り物競争でオレに負けたりベンジをしに来るだろうからオレとガチで当たるだろうし、川原はMMM対決で耕太郎と当たるだろう。みちると猿義はそれぞれ理由こそ異なるが

ちひろを攻めて来る可能性が高いな。西園寺先輩は誰に行くかわからないが、こっちにも先輩が2名選出されてるからそちらに任せることにしよう。その上で1対2で闘うことになる可能性が高いちひろを誰が助けに行くか……」

峻佑が両軍のメンバーを対比させながら予想をつけていると、

「あたしなら大丈夫よ。みちるの対策はすぐ練れるし、猿義に関してもあたしが負ける要素はないわ」

ちひろは自信たっぷりに言い放った後、

（おそらく最後の特別種目だし、あの子、朝から結構自信満々な節があったから、きつと何らかの魔法を使って立ち向かってくると思うわ。でも、あたしだって負けやしない。対みちる用の最終兵器って言うところと大げさだけど、対象の魔法を封じる魔法——前に魔法書を探まえに行ったときに使った魔法をみちるにかければ、みちるは無力化できると思うの）

ちひろは峻佑に早口で耳打ちした。

「なんだよ、また2人だけの内緒話か？　一応俺だつてともに闘う仲間なんだからよ、教えてくれよ」

耕太郎が呆れたような声をあげる。

「ゴメン、沢田くん。これは種目とは関係なくて、あたしと峻佑くん、そしてみちるに関する重大なことだから……」

ちひろは耕太郎にそう話して謝った。

「そっか、わかった。さて、とにかく対策を立てないとな」

耕太郎は意外とあっさり引き下がり、再び話しあいに入って昼休みは過ぎていった。

『さあ、午後の競技の開幕です。まずは男子騎馬戦から。男たちの熱き戦い、始まります！』  
ガチバトル

再びグラウンドに出た峻佑たちは、すぐに騎馬戦なので集合場所へ向かった。

「峻佑、俺はMMMのリーダーとしてちひろさんと仲のいいお前が許せん。だが、今日だけは休戦だ。白組をぶっ潰すため、俺はお前とともに闘うぜ」

集合し、騎馬を作るグループに分かれたところで、耕太郎が峻佑に話しかけた。

「ああ、どうせならこのままMMMを解散しまうつてのはどうだ？　一応オレの親友だし、クラスも同じだからちひろと話す機会も他の連中より多いはず。それなのにわざわざ嫌われるようなことをする必要もないだろう？」

峻佑は頷きつつ、やつかいなMMMを壊滅させるべく耕太郎に揺さぶりをかけてみた。

「ああ、実際に俺自身そう思い始めていた。だけど、まだ俺はリーダーだ。あいつらを裏切るようなことはできない。まあ、近いうちにリーダーの座を川原にでも明け渡して俺は脱退するつもりだ」

耕太郎は静かに峻佑に告げ、他の騎馬役の仲間とともに峻佑を担ぎ上げた。

「行くぞ、峻佑！」

「おう、耕太郎！」

乾いたピストルの音とともに両軍の騎馬が激突した。

結果として、峻佑たちは川原が騎手を務める騎馬や猿義の騎馬と激突し、これらを撃破していった。しかし、猿義を倒したあと敵勢力の中央で孤立してしまい、やられてしまったのだった。

『騎馬戦終了、白組の勝利でした』

撃墜された峻佑たちは見えていることしかできなかったが、最終的にはどうやら白組が勝利したらしい。

『続いて、綱引きを行います。全女子生徒はグラウンド中央へ集合

してください』

「お姉ちゃん」

グラウンドに出ようとしたちひろをみちるが呼び止めた。

「なに、みちる？ また宣戦布告？」

ちひろがあえて振り向かずになぜねる。

「お姉ちゃん、午前中の障害物のときに魔法使ったでしょ？ わか  
ってるんだから。それで、私が言いたいのは、そっちがそのつもり  
ならこっちにも考えがあるわ」

みちるは小声でちひろをとがめた。

「あくまであれば必要最小限よ。だからバレない程度にやりなさい。  
あたしは止めないわよ」

ちひろも小声で返すと、手をひらひら振りながらグラウンドに出  
ていき、みちるもその後を追いかけて行くのだった。

『綱引きは3戦中2本先取で勝利となります。レディ、ゴー！』

実況の声とともにピストルが鳴り響き、綱引きが始まったかと思  
ったが、一瞬にして終わった。

『な、なんということでしょう……綱が切れてしまいました。その  
アクシデントのため、綱引きは中止となります』

実況も驚きを隠せない声色で状況を告げる。

（みちる、やっぱりあんた魔法で腕を強化してたわね。予測してあ  
たしにもかけていてよかったわ）

ちひろがテレパシーでみちるに話しかけると、

（やっぱりお姉ちゃんには読まれてたか。でも、二人でやったら綱が  
切れちゃったね。どうしようか？）

みちるは半笑いのような声で返してきた。

（あたしたちがやったっていう証拠はないんだから、きっと綱の老  
朽化とかで片付けるでしょうよ。放っておけばいいわ）

ちひろは平然と言ったのけた。

（そっか。そうだね。まあ、とりあえず決着は最後の“決戦”でつけようか）

みちるは姉妹の決着にこだわり続け、最後にそう告げてテレパシ―での通信を切った。

『では、最終種目となる両軍代表5名による“決戦”に参りましょう。代表選手はグラウンド中央へ出てきてください』

**VOL・20：体育祭Part 4 - お昼休み&騎馬戦&綱引き? - (後書き)**

次回、体育祭編ファイナル!

**VOL・21：体育祭Part 5 - 最後の闘い - (仮) お楽しみに!**

感想や評価、ご指摘やご要望など、何かありましたら気軽に書き込んでください。要望の類はできる限り取り入れるようにいたします。

いよいよ体育祭編も大詰めです。

と、ここでCM。

ほぼ同時に更新されていると思われる、黒桐 梓さん作の『ラビリンス』A chain of the emptiness』第十夜にて、この作品のヒロイン姉妹&名脇役の耕太郎と他1名が出演しております。（なぜか主人公たる峻佑は出てないとのこと……）

よかつたらそちらも合わせてご覧ください。

<http://ncode.syosetu.com/n9397b/>  
↑コチラ

峻佑たち両軍の代表選手がグラウンドに集結すると、実行委員が最終種目‘決戦’の説明を始めた。

それによると、勝負は5対5のバトルロイヤル形式で、各選手にはチーム色のハチマキ、カラーバット、籠手こてが渡されていた。選手は頭のハチマキを奪われた時点で失格、先に敵を全滅させたほうがこの競技の勝者であり、体育祭の総合優勝チームにもなることだった。

「要はバットで攻撃し、籠手で守りながら敵のハチマキを奪い取ればいいんだな？　ってか、これだけで優勝が決まるんだったら、今までの競技はなんだったんだよ……」

峻佑が籠手を装着しながら一条や他の味方に確認し、そのついでに競技のやり方にグチをこぼす。

「そつだ。我々の作戦は1人1殺で行く。敵方には1年生諸君の知り合いもいるだろうが、今だけは情を捨てて、闘おう。それと、最終競技で優勝を決めるのはこの学校の伝統ってヤツだ。諦めてくれ」  
一条も籠手を装着し、臨戦態勢に入りながら味方4人に告げた。

一方そのころ、白組代表陣地では――

「私たちは負けるわけには行かない。紅組を倒して総合優勝の栄冠を勝ち取るのよ！」

なつきが腕を突き上げながら吠えていた。

「先輩どの。確実に勝つためのいい作戦があるのだが、拙者の案を聞いてはくれまいか？」

突如として猿義がそんなことを言い出した。

「確実に勝てるって、ホントに？」

なつきが訝いぶかしげな視線を猿義に向ける。

「ええ、敵方に聞かれてはマズい。耳をお貸し願いたい」

猿義はその言葉に応じて小さくまとまった味方4人の首筋に手刀を入れて昏倒させると、何かをつぶやいた。すると、倒れていた4人がむくりと起き上がり、臨戦態勢を整えたのだった。

『最終種目‘決戦’、はじめっ！』

グラウンド中央に立った実行委員の号令を合図に、最後の闘いの幕は切って落とされた。と、両軍同時に動き出したが、その動きは対照的だった。1人1殺を掲げた紅組は5人の選手が散開して白組に向かっていったが、対する白組は5人がまとまって紅組陣地へ攻め上がっていった。

「猿義流忍法奥義、操り人形の術！ 行け、1人ずつ確実に取り囲んで討て！」

白組の中央に陣取って攻め上がる猿義が叫ぶ。その視線の先には一条がいた。

「し、しまっ——」

しまった、と言い切る前に一条は白組の5人に囲まれ、バットで殴られた上、ハチマキを奪われ失格となってしまった。

「先輩！ くそっ、峻佑、ちひろさん！ 集まるぞ！」

「会長！ みんな、固まって敵を迎え撃つのよ！」

それに気づいた耕太郎と雲雀が慌てて仲間のところへ向かい、合流しようとしたが、その進路には――

「残念だが、これ以上は進ませないぜ。耕太郎、終わりだ！」

「仙堂副会長、そこまでね。討たせてもらっわ！」

耕太郎にはみちる・川原・種村の3人が、雲雀には猿義となつきがそれぞれ立ちふさがり、囲まれた2人はあえなくやられてしまった。

「これで残るはあと2人、市原峻佑と真野ちひろだな」

猿義がニヤリと笑いながら2人の位置を確認すると、2人はいつの間にかスタート地点まで戻って合流していた。猿義はチツと舌打

ちしつつ、操り人形と化している4人を自陣のスタート地点まで戻らせることにした。

『戦闘開始から5分、紅組に3人の失格者が出てしまいました。対する白組は未だ無傷。果たして紅組はどうする？』

実況が冷静に放送を入れる中、2人きりになってしまった峻佑たちは――

「くそつ、オレたち以外みんなやられちゃった。あんのクソ猿、仲間を操り人形にするとはな」

峻佑が悪態をつく一方で、

「みちるまで操られてるってことは不意をつかれたのね。そうでなければあの子がそう簡単に操られることはないし」

ちひろはみちるの心配をしていた。

「で、ここからどうやってあいつらを倒すかな……間違ひなく連中はさつきまでと同じように1人を集中攻撃して倒しに来るだろう。こっちはもう2人しかいないから上手く立ち向かわないと2人まとめてやられることもあり得るな……」

峻佑があだこうだと悩んでいると、

「残ったのが峻佑くんで良かったわ。あたしに任せて。強すぎるからあまりやりたくはなかったけど、紅組の勝利のためならやるっきゃないか」

ちひろはため息をつきながら峻佑に耳打ちした。

「何かいい手段でもあるの？」

峻佑が聞き返すと、

「もうこの状況で使えそうなのは身体能力を数倍に跳ね上げる魔法、それだけ。ご先祖さまの魔法書に載ってて、何かの役に立つかもって覚えておいたの。ただ、副作用として、かけられた人は後でかなりの筋肉痛に襲われるの。それでも……いい？」

ちひろは使えそうな魔法の説明をすると、峻佑にどうするかたずねた。

「そんなこと、聞くまでもないな。あのクソ猿に負けるのはイヤだ

からな。やってくれ。ところで、一応訊いておくけど、そのことでちひろたちの秘密がバレたりはしないかな？」

峻佑は力強く頷いたあと、急に不安になったのかちひろにたずねた。

「そのことなら心配はいらないわ。じゃあ、行くよ」

ちひろは笑顔で頷くと、峻佑の背中に手をかざした。すると、淡い光が峻佑を包み込んでいき、全身を覆って消えた。

「これでOKよ。さあ、行きましょう」

ちひろは軽く息を吐きだすと、バットを構えた。

「おう、なんか力が漲<sup>みなぎ</sup>ってきたぜ！」

峻佑もバットを構えると、ちひろと一緒に陣地を飛び出した。

『さあ、ずいぶん長い作戦会議を終え、2人になってしまった紅組の逆襲が始まるのか？ それとも白組がこのまま勝利を収めるのか？ 白組はやはり先ほどと同じ陣形で飛び出していきます』

ようやく再開された戦闘に、すっかり退屈しきっていたフィールドが熱を取り戻したかのように再び盛り上がり始めた。猿義の操り人形にされている白組の4人の選手は身体能力を限界近くまで引き出されているのか、ものすごいスピードで紅組の峻佑たちに迫る。対する峻佑も魔法の力で身体能力は格段に上がっていて、スピードを落とさずに白組の選手たちに向かっていく。常人を超えたそのスピードは、まるで閃光のような輝きを放っていた。

やがてグラウンド中央で紅と白の閃光が激突し、土煙があたりに立ち込めた。

土煙が収まると、そこには4つの白いハチマキを手にした峻佑の姿と、気絶しているのか地に伏せる4人があった。

「バ、バ力な……！！？」 拙者の操り人形4人を同時に討ち取るだといふ？」

残った猿義はわなわなと峻佑を指差しながらそう言うのがやっとだった。

『果たして、あの土煙の中でいったい何があったのでしょうか……1対4という端から見たら絶体絶命な状況で紅組の生き残りのうちの1人、市原選手がたった1人で4人を討ち倒すという奇跡が起こりました！』

実況も興奮の渦に巻き込まれるように叫んでいる。そんな中、峻佑はちひろとともに猿義に近づいていくと、

「終わりだな、猿義。ちひろ、やっちゃいな」

峻佑は猿義へのトドメを刺させるべく、ちひろに告げた。と、

「スキありいっ！」

峻佑が一瞬猿義から目を離れたスキを狙って猿義のバットが峻佑に襲いかかった。しかし、

「甘いな」

峻佑は籠手でがっちり受け止めると、ちひろに目で「今だ」と合図した。

それを受けてちひろが背後から猿義のハチマキを奪い取り、高々と掲げた。

ゲームセット

『戦闘終了！ 2対5からの奇跡の大逆転により、紅組が『決戦』を制し、また今年の総合優勝をも勝ち取りました。それではこれで今年の竹高体育祭を終わります。みなさん、お疲れ様でした。片付けに入ってください』

実況は最終結果を伝え、体育祭の閉幕を告げたのだった。

「いたっ、痛いって！」

翌日、峻佑は激しい筋肉痛にまったく身体が動かせず、ちひろの湿布を貼ろうとする手にも悲鳴を上げていた。

「こういう副作用があるって言ったでしょ？ まあ、勝つためとはいえ、この魔法は使うべきじゃなかったかな……」  
湿布を貼りながらちひろがつぶやき、峻佑は数日間激しい筋肉痛に襲われるのだった。

一方そのころ、峻佑の隣にある姉妹の部屋――  
「それにしても、いつの間に体育祭終わってたんだろう？ 気がついていたら保健室で寝てたし。妙に身体が痛いけど……でもたぶんただの疲労と筋肉痛よね」

ベッドに横になったまま、みちるがボヤいた。  
みちるもまた猿義の術の副作用か、はたまた峻佑に倒されたのが原因かわからないが、身体の痛みでまる1日寝込んでしまったのだった。

VOL・21：体育祭Part5 - 最終種目「決戦」 - （後書き）

体育祭編、いかがだったでしょうか？  
感想など、お待ちしております。

次回、ついに……！？

VOL・22：溢れるココロ（仮） お楽しみに！

VOL・22・溢れ出すココロ（前書き）

1ヶ月続いた体育祭編も終わり、いよいよ新章突入です

## VOL・22：溢れ出すココロ

体育祭が終わって1週間ほどが過ぎた――

そんなある日の朝、峻佑たちが教室に入ると、静まり返った中にただ一人、耕太郎の姿が見えた。

「おっす、コータロー」

「おはようっ、沢田くん」 今朝は早いのね」

峻佑とちひろの声に気づいたのか、耕太郎が振り向いた。だが――  
「どうした、コータロー!? 顔がムチャクチャ腫れてるじゃないか!」

「ちよつと、保健室行った方がいいんじゃない!?」

振り向いた耕太郎の顔面は誰かに殴られたのか、顔が変形するほどに腫れていて、パツと見では誰だかわからないほどになっていた。で、すぐさま峻佑たちが保健室へ連れて行った。

耕太郎は「何でもない、大丈夫だ」と繰り返していたが、全く説得力がないので半ば引きずるようにして保健室へ連行した。と、やはりダメージが大きかったのか途中で耕太郎が気絶してしまい、峻佑が彼を背負って保健室へ到着した。

保健室に耕太郎を置いてきて、教室へ戻る途中。

「それにしても、いったい誰が耕太郎をボコったんだ?」

言いながら峻佑が首を傾げた。

「峻佑くん、ちよつと」

いきなりちひろが峻佑を階段下のスペースに連れ込んだ。

「どうかした、ちひろ?」

峻佑がびっくりしてたずねると、

「沢田くんをあそこまで殴ったのはMMMの連中みたい。腫れ上がった顔に触ったときに記憶を読んだの。そしたらMMMの連中に囲まれて殴られてるのが見えたわ。あとは一応キズを癒す魔法もかけ

ただ……」

ちひろは早口で峻佑に話した。

「そうか……耕太郎<sup>アイツ</sup>、MMMを脱退するとか言ってたからな。もしかしたらそのことで連中と揉めたのかもしれないな」

峻佑がそこまで言ったところで、

「朝からこんな人目につかないようなところで我ら1年のアイドルと何の相談だ？　なあ、市原峻佑？」

峻佑たちが話をしていた階段下のスペースに人影がふたつ、現れた。逆光のため、まだ顔は見えない。

「別に？　クラスメートかつ幼なじみとどこで何を話そうと自由だろう。なあ、川原に種村？　そんなことより、お前ら、なぜ耕太郎をあそこまで殴った？」

峻佑は声や姿から人影の正体を見破り、静かに問いかけた。

「なぜ殴ったか、だと？　どうやらすでにおれたちがやったことを確信してる言い方だな。まあ、事実だけだよ。ヤツはリーダーの座にありながら我らMMMを裏切った。裏切り者にはそれなりの制裁を加えなくてはならないんでな。特にヤツの精神<sup>ココロ</sup>に惚れてMMMに入った連中が黙ってるわけがない。おれたちはそれを取りまとめただけに過ぎないのさ」

川原は事実を認めた上で理由を淡々と話した。

「元々アイツが結成した団体だ。解散するのも自由だろう？　アイツはこんな団体を勢いだけで作ったことに後悔していたんだ。仮にアイツを裏切り者扱いしたとしても、あれはやりすぎだ。オレはこれから職員室へ行ってお前らの暴力行為<sup>リンチ</sup>をチクってくる。停学くらいは覚悟するんだな」

峻佑は川原たちに静かに話すと、彼らの横を通り抜けようとした。と、肩をどつかれて押し戻された。

「ちっ、仕方ない。種村、市原もボコるぞ。どうせ停学食らうんだつたら1人殴るも2人殴るも同じことだ。もちろん、我らがアイドル、ちひろさんには手を出さな」

川原は峻佑をボコるため身構えつつ、種村に命じた。

「おう、市原には体育祭の時の借りも返したかったところだしな、ちようどいい」

言いながら種村も身構えた。

「峻佑くん、大丈夫？」

ちひろが心配そうに峻佑の肩を叩く。

「オレは大丈夫だ。幸いヤツらはちひろには手を出さないって明言してるし、巻き込まれないようにこの場を離れてくれ」

峻佑はちひろにそう話すと、

「おい、お前ら。ちひろは関係ないからこの場から逃がしてもかまわないな？」

道をふさいでいる川原たちに確認する。

「ああ、かまわないぜ。おれたちとしてもアイドルの顔とかに傷をつけたくはないからな」

両者の意見が一致し、ちひろのために道を空けてくれたが、  
「あたしはここに残る。だって、峻佑くんのことが好きだから。好きな人が理不尽な理由で殴られそうなのに自分だけどっか行くなんてできない！」

ちひろは自らの想い<sup>「ココロ」</sup>をぶちまけるように叫んだ。

「ちひろ……」

峻佑はとまどいを隠しきれない表情でただ名前をつぶやくことしかできなかった。と、そのとき。

「ちよーつと待ったあーっ！」

静寂を切り裂くような大声とともに、みちるがその場に駆け込んできた。

「みちるっ！？」

突然のみちるの登場に、峻佑とちひろの声が八モった。

「お姉ちゃん！ なにどさくさに紛れて告白してるのよ！？ 抜け駆けはなしって約束したでしょ！」

みちるは腰に手を当てつつ、ちひろに指を突きつけて怒鳴った。

当のちひろは、そんな知らないと言った表情でそっぽを向いている。

「……………」

川原たちはちひろの爆弾発言と、普段教室で見せる柔らかな表情とは全く違う、怒り狂ったみちるの登場に驚いたのか、その場に立ち尽くしている。

「川原さんと種村くんだけ？ あたしに免じてここは退いてくれない？ ちょっと3人で話しあいたいから」

ちひろは未だ立ち尽くしている2人に手を合わせて頼み込んだ。

「ちっ、やる気が失せたぜ。耕太郎はもう除名だつて伝えとけ。市原<sup>マエ</sup>もせいぜい背後に気をつけるんだな」

川原は峻佑にそう吐き捨てる、種村とともに階段下のスペースを立ち去った。

「さて、と。耕太郎の様子でも見に行くかな」

峻佑はさっきのちひろの爆弾発言を聞かなかったことにし、2人を放置して保健室に行こうとした。だが、

「しゅーんすーけーん？」

「どーこ行ーくのー？」

2人は笑顔で峻佑を呼びつつ、彼の肩を捕まえた。

「な、ななななに？」

峻佑はかなり動揺しているのか、素っ頓狂な声を上げて振り向いた。すると、

「さっき言ったとおり、あたしたちは2人とも峻佑くんのが好き。峻佑くんはあたしたちの——」

「——どっちを彼女にしてくれる？ 選んでくれるほうの手を握って答えて……」

2人は真剣なまなざしで峻佑を見つめ、それぞれ右手を差し出した。それに対し、

「ゴメン」

峻佑は手をポケットにしまい、ただ一言、つぶやいた。

「ゴメンって……両方ともダメ、ってこと……？」

みちるがわずかに目元を潤ませて峻佑に問いかける。

「いや、そうじゃないよ。突然すぎるし、2人とも甲乙つけがたいほどのかわいさだから、すぐには選べないってこと」

峻佑は自らの発言の真意を2人に話した。

「なーんだ、そうだったんだあ。でも、結論を先延ばしにして逃げたわけじゃない……よね？」

ちひろの鋭い指摘に対し、

「……も、もちろんだ」

どうやら多少なりとも凶星を突かれた峻佑は答えに一瞬詰まってしまった。

「なに？ 今の微妙な間は……もしかして凶星？」

ちひろが峻佑の動揺を見抜いたかのようにジロリと睨んでくる。

「そ、そんなことはないぞ？」

峻佑は悟られまいと必死に否定するが、その目は泳いでいる。

「本当に違うなら、あたしたちの目を見てもう一度言ってみて？」

ちひろはまるで猛獣が小動物を追いつめるかのようにクスクスと笑いながら峻佑に迫る。

（マズいな……十中八九見破られてる。こうなったら……）

「わりい！ その話はまた今度な！」

峻佑は自らの身の危機を目前に感じ取ったのか、ポケットの中で携帯を操作し、ちひろの携帯を鳴らして一瞬だけ注意を背けると、脱兎のごとくその場から逃走した。

「あつ、逃げた！ 峻佑くん、後で絶対答えを聞かせてもらうからね！」

あつという間に見えなくなった峻佑に対し、2人は叫ぶように言った。と、そこに、

「コラーっ、真野姉妹！ もうHR始まってるぞっ！ さっさと教室に入らんかーっ！」

ちひろたちの声を聞きつけて、HRにいない峻佑やちひろたちを

探していた4組と5組の副担任、佐々木ささきが怒鳴った。

「わわっ！ ご、ごめんなさい！」

2人はその怒鳴り声に驚き、慌てて教室に戻るのだった。

## VOL・22：溢れ出すココロ（後書き）

ついに封印が解かれたキャプテン流ラブコメ！（なんだそりや  
果たして、この先どうなっていくのか！

次回、ある意味ちひろたちが最も恐れる人物がやってくる……

VOL・23：来訪者（その1） お楽しみに！

VOL・23・来訪者・Part1・（前書き）

ちひろとみちる、双子の姉妹から同時に想いを告げられた峻佑。  
ひとます返事を保留にした彼だが――

ちひろとみちる、1年生のアイドルと呼ばれる2人が揃って峻佑に想いを告げたという話は、あつという間に学年中を駆け巡った。だが、伝言ゲームの要領で伝わった話はやがて内容が事実と異なるものになり――

「峻佑えっ！ てめえ、ちひろさんたちの告白を断ったというのは本当かあ！」

耕太郎が叫び、お約束のごとく峻佑は校内を走っていた。だがいつもと異なるのは、MMMとは関係のないはずの男子生徒までもが峻佑追跡隊に加わっていたことである。

「まだ答えは出してねえ！ って耕太郎、お前重傷だったはず！ しかも、MMMは除名されたはずじゃないのかあ！？」

峻佑は走りつつも後ろから追ってくる耕太郎たちに反論し、はつと気づいたかのように耕太郎に突っ込んだ。

「なんのこれしき！ 俺たちの嫉妬の力を甘く見るなよ！ それに、これはMMMとは関係なく、個人的な恨みだ！」

耕太郎はフンツと胸を張って自信満々に言い切った。

「そうか、じゃあ、ぶん殴っても問題ないな？ いつまでも逃げ回るだけのオレだと思ったら大間違いだぞ」

峻佑は校庭に飛び出したところで急停止して振り向くと、冷徹に耕太郎たちに告げた。

峻佑の本気を思わせる瞳に一瞬たじろいだ追跡隊一同だが、自分らに数的有利があることを思い出し、峻佑を取り囲んで身構えた。

「し、峻佑くん……」

当事者であるちひろとみちるは校庭の片隅から事態を見守っていた。峻佑がピンチなのを見て、みちるが動こうとしたが、それをちひろが制止した。

「みちる、ダメよ。峻佑くんが追い回されてる原因はあたしたちにあるんだから、ここはあたしたちの出る幕じゃない。彼ら自身が納得するようなやり方で解決させないといけないことなのよ」

ちひろは静かにみちるを制止した理由を話した。

「~~~~」

と、そのときちひろの携帯が鳴り響いた。携帯を開くと、画面には新着メールありと表示されていた。

「誰からかしら……？ あら、2件？」

言いながらメールを開いたちひろの顔がみるみる青ざめていく。

「お姉ちゃん、どうしたの？ メール、誰からだったの？」

ちひろは何も言わず携帯の画面をみちるのほうに向けた。みちるがそれを覗くと……

ちー姉、久しぶりに今日これから遊びに行くね      たくま

それが1件目、続けてもう1件を開くと、

ちひろちゃん、ごめんなさいね。ウチのバカ息子たくまが急にちひろちゃんたちに会いたいとか言い出して1人で飛び出して行っちゃったの。今夜にでも回収に行くから、それまでの間面倒を見ていてくれないかしら？      叔母より

みちるもそれを見て顔が青ざめた。と、そこへ……

「ちひろ、みちる、どうした？ 顔が青いぞ？」

取り囲まれていたはずの峻佑がいつの間にか2人のところに来ていた。2人が彼の後方を見やると、さっきまで彼を追い回し、取り囲んでいた男子生徒一同が全員校庭に倒れていた。どうやら峻佑が1人で全員倒したらしい。

「うっん、なんでもないよ。もしそう見えたとしたら、囲まれてた峻佑くんのが心配で、青ざめてたのかも」

ちひろは峻佑に本当のことを隠しつつ、

（まさか、琢磨たくまが来るなんて……）

内心で昔のことを思い出していた。

琢磨はちひろやみちるの従兄弟いとこにあたり、現在14歳の中学3年である。

彼の母親は姉妹の母親の妹にあたるため、当然彼も魔法の能力ちからを受け継いでいる。

だが普段あまり能力ちからを使わない2人に対し、もっぱら彼はイタズラのために能力を駆使し、ちひろやみちるも何度となく彼のイタズラに苦しめられたのだ。苦手意識はそう簡単に消えるものではない。(そういえば、昔はよく琢磨のイタズラのターゲットになってたっけ……)

ちひろの脳裏に数年前の記憶が蘇る。

ちひろやみちるが10歳、琢磨9歳のときのこと。ちひろはみちるやほかの友達と、琢磨は悪ガキグループと小学校の近くにある公園でそれぞれに遊んでいた。と、琢磨がいきなりちひろたちのところへ来て、

「ちー姉、みー姉、ちょっとこっちに来てー」  
と言ってきた。

「どうしたの？」

ちひろがたずねると、

「いいからいいから」

琢磨はそう答え、否応なしにちひろの手を引っ張っていった。

「わわっ！ わかったから一旦離して！」

ちひろは転びそうになったので一度琢磨の手を振り払い、改めてついていった。

しばらく歩いていくと、琢磨が遊んでいた悪ガキグループがその辺でまだ遊んでいたが、公園の広場の端っこしか使っておらず、ちひろは不思議に思っていた。と、真ん中に不自然なダンボールの山

が置いてあるのを見て、ちひろとみちるは同時に感づいた。

（なるほど、琢磨たちはあたしたちを落とし穴にはめるつもりなのね……子供らしくていいじゃない。気づかない振りしてはまってあげるのもいいかな）

琢磨の意図を察した2人は、気づかないふりをしながら琢磨の後をついていった。

と、そのとき。ドスンという衝撃とともに2人の視界が土気色に染まった。

「いたた……」

2人が目をパチクリさせながら辺りを見回すと、どうやら穴に落ちたらしいことがわかった。

「ど、どうなってるの？ 落とし穴はもっと先にあっただはずじゃ……」

2人は何が起こったのか把握するため、ひとまず穴から脱出しようとした。すると、

「よっしゃ！ 見事に引っかけたね、ちー姉、みー姉」

穴の外から琢磨たち悪ガキグループが2人を見下ろしながらガッツポーズをして笑っていた。

「琢磨、どういうことなのか説明しなさい」

どうにか穴から這い出した2人は琢磨を捕まえて尋問を始めた。

「あそこのわかりやすいダンボールはダミーで、そっちに意識をやっという手前の本物の落とし穴に落とす。これで引っかけた人がいるのか試したかっただけなんだよー」

琢磨はニヤリと笑って説明した。

「ふーん……反省してないわね？」

ちひろは静かにそう言い放つと、何かを察して逃げようとする琢磨を押さえつけ、ゲンコツを一発ぶちかました。

「いってー！」

「少しは反省しなさい！ あたしらもいきなり穴に落とされて痛かったんだからね！」

その後も琢磨のイタズラは治まるどころかさらにエスカレートし、だんだんと魔法を使ったイタズラも増えていった。

だが、ちひろたちが中学に入って女子校に通うようになると琢磨と会う機会もなくなり、今回は実に3年ぶりくらいに会うことになるのだった。

そんなことを考えながら授業を受けていたら、いつの間にか放課後になっていた。

「ちひろ、帰ろうぜ」

峻佑が声をかけた。

「う、うん。わかった」

ちひろは慌てて帰り支度を済ませ、みちると合流して帰路についた。

夕飯を済ませ、3人でテレビを見ながら過ごしていた、そのとき。玄関のチャイムが鳴り響いた。

「こんな時間に誰だ？」

峻佑が立ち上がり、玄関に向かうと、扉を開けた。

「ちー姉、みー姉、久しぶりー！」

開けた瞬間、何かが峻佑に向かってダイブしてきた。

「君はいったい誰だ？」

峻佑がたずねると、

「あれ？」

来訪者が見上げて首を傾げるのは同時だった。

「ちっ、間違えて男に抱きついちゃったのかよ」

来訪者はそう吐き捨て、峻佑をどついた。

「ぐっ！？」

どつかれた峻佑は勢いよく吹っ飛び、空き部屋のドアに叩きつけられた。

「な、なに！？ 峻佑くん、大丈夫？ って、琢磨！ あんた何したの！？」

ちひろは大きな音に驚いてみちるとともに玄関へ向かうと、近くで倒れている峻佑と、玄関に立つてる琢磨を見つけたのだった。

「ちー姉、みー姉、久しぶり。その兄ちゃんはちょっとどついたら吹っ飛んじやっただけ。心配はないと思うよ」

「……で、彼は誰？」

しばらくして意識を取り戻した峻佑は、顔をしかめてまだ痛む頭をさすりながらたずねた。

「オイラの名前は榊<sup>さかき</sup> 琢磨<sup>たくま</sup>だ！」

胸を張ってそう叫ぶように自己紹介をする琢磨。と、

「あんたは少し黙ってなさい！」

ちひろが琢磨をひっぱたき、黙らせた。

「ごめんね、峻佑くん。この子は私たちの従兄弟の琢磨。私たちに会いたくなってここまで押しかけてきたみたい」

みちるが事情を説明した。

「従兄弟か。つてことはやっぱり……」

峻佑がそこまで言って確認するように姉妹を見ると、2人は察したようで、軽く頷き、

「うん、琢磨くんも魔法使いだよ。まあ、困ったことにこの子はイタズラばかりでロクな使い方してないんだけど……」

ちひろがため息をつきながら補足した。

「まあ、それはいいとして、中学生つてことは親はどうしてるの？」

峻佑は琢磨にたずねた。

「母さんにメールしてから来てるから母さんは知ってる」

琢磨はぶっきらぼうに答えた。

「今夜中にこの子の母親の英里<sup>えり</sup>叔母さんが迎えに来るみたいよ」

みちるが琢磨の言葉に付け足してそう伝えた。

「そっか。それなら大丈夫だな。迎えが来るまでここにいればいい。でも、あまり親に心配かけるのはよくないぞ？ 休日とかを利用して親と一緒に来るなら構わないけどな」

峻佑は琢磨のほうを向いてそう諭<sup>さと</sup>した。と、そのとき玄関のチャイムが鳴り響いた。

「はい、どちらさまー？」

峻佑がドアを開けると、見たことない女性が立っていた。

「……………」

峻佑がドアを開けた状態のまま固まってるのを見て、女性はハツとしたかのように、

「ああ、ごめんなさい。私、榊 英里と申しますが、うちの息子が  
お邪魔してるみたいで……」

英里と名乗った女性はそう言いながら頭を下げた。

「あ、ああ、琢磨くんの親ですね。とりあえず、中にどうぞ」

峻佑は事態を把握し、英里を中に招き入れた。

「あつ、英里叔母さん、久しぶりです」

英里に気づいたちひろたちが挨拶をしたが、琢磨は「フン」とそっぽを向いたままだった。

「ちひろちゃん、みちるちゃん、久しぶりね。えっと、峻佑くん……  
だったかしら？　うちのバカ息子が迷惑かけちゃってごめんなさいね」

英里はちひろたちに挨拶を返し、一応の家主である峻佑にも謝った。

「いえ、大丈夫ですよ。なぜオレの名前を知ってるのかは突っ込むだけ無駄でしょうから何も言いません。ただひとつオレが言いたいのは、なにやら怒ってらっしゃるようですが、穏便に、ってことだけですよ」

峻佑は英里にそう話した。

「一応は努力するわ。さて、琢磨……あら？　琢磨はどこ行ったのかしら？」

その言葉に一同がさっきまで琢磨が座っていたソファのほうを見ると、すでにその姿はなかった。

「逃げたわね……ちひろちゃん、みちるちゃん、それと峻佑くん。  
悪いんだけど、あの子を連れてきてくれる？　今年は受験生だから

勉強しないといけないから塾に入れたのに、それが嫌でここまで逃げてきてるの。ちひろちゃんたちに会いたいからなんて口実まで作って……」

英里は満面の笑みでちひろたちに頼んだ。

「ええ、わかりました。峻佑くん、行こうっ！」

英里の頼みに頷き、峻佑の腕を引っ張って居間を出るちひろの表情にはなにやら焦りと怯えのようなものが伺えた。

「ちひろ、そんなに焦ってどうしたんだ？」

居間を出たところで峻佑がちひろにたずねた。すると、

「峻佑くん、いま英里叔母さんと話してみても感じた？」

ちひろは逆に質問で返してきた。

「えっ？ 優しそうな女性だと思っただけど……違うの？」

峻佑は感じたままをちひろに伝えた。

「半分正解つてところかしら。普段は峻佑くんの言うとおり優しい叔母さんなんだけど、一度怒らせたりして機嫌を損ねると手がつけられないの。英里叔母さんの裏の顔はまさに般若はんにゃと言っても過言じゃないわ……」

ちひろは微かに震えながら話した。

「そ、そうなのか……あれ？ じゃあもしかすると、オレたちが琢磨くんを捕まえたあとは結局修羅場になるんじゃない？」

峻佑はふとこの後起こりうることを想像してしまい、鳥肌が立ってしまった。

「うん。まず間違いなく琢磨くんはお説教でひどい目に遭うわね。でも、あそこで叔母さんの頼みを断ったり、あたしたちが捕まえられなかったら、あたしたち3人がひどい目に遭わされるわよ。だからさつさと琢磨くんを捕まえなくちゃ。行くわよ、2人とも」

ちひろは気合いを入れ直し、峻佑やみちるとともに家の中を探し始めた。

そのころ、居間から逃げ出した琢磨は、2階に上がり、目に付いた部屋に逃げ込んでいた。

「ここは、さっきオイラがぶつ倒した兄ちゃんの部屋かな？ とりあえず、クローゼットに隠れようつと。あれ、隠し扉？ よっしゃ！」

琢磨はどうやら峻佑の部屋のクローゼットに入ったらしく、さらにその中の隠し扉を発見し、そこに隠れたのだった。

「いったいどこに逃げたんだ？ 靴はあったから家の中にいるはずなんだけど……」

家の中をあちこち見回りながら峻佑がボヤいた。

「一階にはいないみたいね。二階へ行きましよう」

みちるが一階の最後の場所——脱衣所を覗いて、いないことを確認すると、3人で階段を上がっていった。

「まず、あたしたちの部屋には入った形跡はないわね」

階段を上がりきるなり、ちひろがつぶやいた。

「なんでわかるんだ？」

峻佑が首を傾げてたずねると、

「あたしたちの部屋には以前に峻佑くんがいきなり開けて着替えを見られたトラブルがあったから、勝手に入られないように魔法の罫マジックトラップが仕掛けてあるの。うかつに開ければ高圧電流とタライが待ってるわ」

ちひろがニヤリと表情だけで笑いながら説明した。

「なるほど、覚えておかないとな。でないと大変なことになる。……」

……って、高圧電流はいいとして、なんでタライなの？」

峻佑は初めて知らされた事実には震え上がりつつも、理解できないトラップの中身に突っ込んだ。

「それほど明確な意味はないけれど、高圧電流が肉体的なダメージなら、タライは精神的なダメージってところかしら？ ほら、よくテレビのお笑い番組とかでも使われるでしょ？」

みちるが意味を説明した。

「そっか。なるほどね。まあ、そこにいないなら、もう部屋はあと2つだな……うん、こっちにはいないみたいだ」

峻佑は言いながら現在は主のいない父親の書斎を覗き込み、琢磨がいないことを確認した。

「じゃあ、あとは峻佑さんの部屋だね」

**V O L ・ 2 4 : 来 訪 者 - P a r t 2 - ( 後 書 き )**

さて、琢磨は英里の怒りから逃れられるのか？

峻佑たちは無事に琢磨を発見することができるのか？

次回、V O L ・ 2 5 : 来 訪 者 - P a r t 3 - お楽しみに！

「じゃあ、あとは峻佑くんの部屋だけだね」

と言いながらみちるは峻佑の部屋のドアを開きかけ――

「って、部屋の主が後ろにいるのに私たちが先に入るのもおかしいか」

ドアノブに手をかけた状態で手を止めて峻佑に道を譲った。

「今さらそんなこと気にしなくてもいいんだけどな……まあいいや」

峻佑はボソツとつぶやくと、ドアを開けて部屋になだれ込んだ。

「いない、ね……」

部屋をぐるっと見渡してちひろがつぶやく。

「隠れてるんだろ。でもって、この部屋に隠れるなら、ここしかないな。あ、2人は部屋の入り口を固めといて。飛び出してくるかもしれないから」

峻佑はちひろたちに部屋の入り口に移動してもらうと、クローゼットの扉を開き、さらにその奥に自作した隠し扉を勢いよくスライドさせて開いた。

「くそっ、見つかったか！ でも、捕まってたまるかあ！」

その瞬間、琢磨が勢い良く飛び出し、峻佑を突き飛ばすと、部屋から逃げたそうとした。

「あつ、しまった！ ちひろ、みちる！」

しかし、峻佑はこういう事態を予測し、そのためにちひろとみちるを部屋の出入り口に移動させておいたのだ。琢磨は必死の抵抗もむなしくちひろたちに捕らえられ、英里のもとへ連行されたのだった。

「英里叔母さん、琢磨くんを捕まえましたよ」

再び脱走することを防ぐため、以前使った魔力封じの虫取り網を頭に被せ、ロープで腕を縛りあげた状態でちひろは琢磨を英里に引

き渡した。

「3人とも、ありがとね。さて、琢磨。ちひろちゃんたちに会いたなんて理由つけても、受験勉強がイヤで逃げ出したっていう本当の理由はごまかせないわ。さ、帰るわよ」

英里がそこまで言ったところで、「ピリリリ」と英里の携帯が鳴った。

「はい、榊。え、あ、はい。わかった。すぐに現場に向かうわ」

英里は電話の相手に向かって二言、三言話すと、電話を切った。

「ごめんなさい、急に現場からの応援要請がかかっちゃって行かなくちゃならなくなったの。ちひろちゃん、峻佑くん、悪いんだけど、今夜一晚琢磨の面倒を見てくれないかしら？ 明日は土曜だし、明日の夕方までには迎えに来るから」

英里はちひろや峻佑にそう頼むと、答えも聞かずに市原家を飛び出していった。

「なあ、ちひろ？ あの人って何の仕事してるんだ？」

あまりの慌ただしさに啞然<sup>あぜん</sup>としつつも峻佑がちひろにたずねた。

「警察官よ。たしか階級は警部だったかしら。警察内部の極秘扱いだけど、もう周囲に魔法のことを話して、犯人逮捕に役立てているそうよ」

ちひろはあっさりと答えた。

「ふーん、警察か……」

峻佑はつぶやきながらあれこれ考えていた。と、

「なー、オイラはいつまでこうしてりやあいんだー？」

虫取り網を被せられ、ロープで縛られたままの琢磨がふてくさされている。

「ごめんごめん、忘れてたよ」

みちるが虫取り網を外し、ロープを解く。

「母さん行っちゃったし、ちー姉、みー姉、それと兄ちゃん、一晩よろしく。……ホントはこのまま帰りたくないけど」

琢磨はニコツと笑って峻佑たちに言った。

「とりあえず一晩は預かることになったわけだし、夕飯にしようか。さっきの追いかけてこですっかりお腹減っちゃったし」

笑いながらちひろは言って、みちるとともに台所へ入った。

「なあ、琢磨くん。いくつか聞いてもいいかな？」

峻佑は琢磨と2人きりになったところでそう切りだした。

「なに？ オイラに答えられることだったら何でもいいよ」

琢磨は頷いて話の続きを待った。

「まず1つ目は、琢磨くんの志望校。どこの高校を受けるつもりなの？」

峻佑がまず1つたずねると、

「それはもちろんちー姉たちのいる竹崎高校だよ」

琢磨は事も無げに答えた。

「なるほどね。じゃあ2つ目、今の質問と関連するけど、竹崎高校<sup>ウチの</sup>は公立にしてはかなりの進学校で、レベルも高い。そこに受かるだけの学力の自信はある？ もちろん、魔法によるズルはなしで」

峻佑が次の質問に移り、現在自らが通う高校の現実を伝えると、

「うっ……オイラ、数学が苦手なんだ。他の科目はズルなしで十分な成績を取れてるけど、数学だけは少しズルしてる。ズルなしだときついかも」

琢磨は急に意気消沈したかのようにうなだれた。

「そっか。じゃあ、次で最後だ。琢磨くんはもしかしてちひろかみちる、どっかが好きなんじゃないか？ もちろん、親戚の姉さん<sup>いとこ</sup>としてではなく、1人の女性として、な。どうなんだ？」

峻佑が最後の質問をした瞬間、

「え！？ そそそそんなことはないよ？」

琢磨はものすごい動揺を見せた。

「やっぱりか。安心しろ、オレはそういうことを安易にバラしたりはしない。いまそれを聞いたのは、2人のことが好きなら、今後、週末とかだけでもうちに来て、ちひろやみちるに勉強を見てもらうとかすればいいと思ったんだけどな」

峻佑が質問の真意を話したところで、

「お待たせー。今日の夕飯はハンバーグにしたよ」

ちひろとみちるが4人ぶんのハンバーグを持ってきた。

「なんかさつきから2人でずっと話してたけど、何だったの？」

4人で夕飯を食べながら、みちるが峻佑たちにたずねた。

「ん？ あ、ちひろ、みちる、2人は数学得意だったよね？ 琢磨

くんは竹崎<sup>ウチの</sup>高校を受けるつもりみたいだから、主に週末とかに勉強を見てあげようと思うんだけど、いいかな？」

峻佑が琢磨と話していた内容の一部をちひろたちに話した。

「うん、それはいいよ。でも、そのかわりに、平日はきちんと英里叔母さんが言ってた塾に行くこと。それが条件だよ」

ちひろは快諾した上で、琢磨に条件をつけた。

「わかった。オイラ、頑張るよ」

琢磨は嬉しそうに頷き、早速少しではあるがちひろたちに勉強を教えてもらうのだった。

翌日、迎えに来た英里に対し、

「琢磨くんはもう逃げたりはしないって約束してくれましたので、お仕置きは軽めにしてあげてくださいね」

3人は軽く頭を下げて頼んだ。

「ええ、ちひろちゃんやみちるちゃんがそこまで言うのであれば大丈夫ね。それに、私も昨日の事件で疲れてお仕置きとかできる状況じゃないし」

英里はわずかに笑顔を見せてそう言うと、琢磨を引き取って帰っていった。

**V O L . 2 5 : 来 訪 者 - P a r t 3 - ( 後 書 き )**

今週はもう1話ぶん更新します。

塾に行くのが嫌で逃げ出した息子・琢磨を追って、現在ちひろとみちるが居候している市原家にやってきた榊 英里。峻佑や姉妹の協力のもと、琢磨を捕まえて、帰ろうかと言うときに突如として携帯が鳴った。

「はい、榊。え、あ、はい。わかった。すぐに行くわ」

英里は電話の相手にそれだけ伝えたと、いったん電話を切り、琢磨を峻佑たち3人に預けて市原家を飛び出した。すぐさま携帯を取り出し、たった今かけてきた人物にかけ直す。

「いつもの手段で現場に入るから、処置をお願い。10分後に行くわ」

手短に用件を伝えたと、『了解』とこれまた短い答えが返ってきた、電話を切った。

いつもの手段、それはいわゆる“瞬間移動”テレポートだ。魔法使いたる英里にとっては遠方へ向かうとき、あるいは急ぐ必要があるときの常套手段なのだ。こんなことができるのも、すでに英里が魔法のことを同僚に話し、捜査に役立てると同時に、同僚や上司が受け入れてくれて秘密厳守が徹底されているからなのだ。

そして10分後、英里が現場に入ると、現場からは人払いがされ、万に一つも見られないよう、青いビニールシートで壁が作られていた。おそらく、犯人が興奮して危険だから、という理由で人払いをしたのだろう。

「秋塚くん、状況は？」あきづか

現場に入った英里はすぐに部下の秋塚に現在の状況をたずねた。

「はい」

秋塚は短く返事して、これまでの状況を説明し始めた。

それによると、午後2時30分ごろ、サクラ銀行竹崎支店に2人組の男がやってきて、行員に拳銃を突きつけて金を要求。しかし行

員はやんわりと拒否しながら警察への通報ボタンをこっそり押し、警察が駆けつけた。この段階で犯人たちはそのとき中にいた客数名と行員たちを人質にとって立てこもり、現金一億円と逃走用の車を要求してきている。また、これまでの交渉により、人質は男性行員を除いて全員解放されている、とのことだ。

「わかったわ。じゃあ、私は裏口からそつと忍び込んで犯人を押さえるから、秋塚くんたちはこれまでどおり彼らの要求に応じる用意がある素振りをしておいて」

英里は状況を把握するとすぐに秋塚に指示を出し、自身は建物の裏側に移動した。

裏口の扉はかなりボロボロで、迂闊<sup>うかつ</sup>に開けば、その音で犯人に気づかれてしまう危険があった。気づかれたとしても英里なら余裕だろうが、まだ残っている人質を危険に晒すことだけはしたくない。

ここまではビニールシートで覆われていないので、英里は素早く周囲を確認し、誰も見ていないことを確認すると、ドアのすぐ先に瞬間移動した。

そのままゆっくりと移動し、犯人たちが立てこもるフロアまであとドア一枚のところまで来た。まだ犯人たちは忍び寄る英里に気づいていない。

（フロアの隅っこに人質の行員が計5名と、それを見張る犯人の1人。もう1人は……ああ、いた。外の秋塚くんたちに向かって怒鳴ってるわね）

扉一枚隔てたフロアの様子を透視で伺う英里。すでに事件発生から8時間以上経過し、人質の様子にも疲れが見え始めている。

（あまり長引かせると人質が保たないわね。とりあえず人質の方々には眠ってもらって、と）

英里がブツブツと何かつぶやくと、人質のいるフロアの隅っこを柔らかなピンク色の霧が包み込んだ。それを吸い込んだ行員たちは一瞬にして眠りに落ち、ついでに人質を見張っていた犯人の1人も一緒に眠ってしまった。

「おい、ヤス、どうした？」

出入り口のドア付近で外に向けて怒鳴っていた犯人の男が視界の隅の異状に気づいてもう1人を呼んだが、すでに深い眠りに落ちていたため、反応はなかった。

「いつの間にか人質どもまで寝てやがるし、こいつら緊張感なさすぎだな……おい、起きろ！」

男は眠りこけている相棒<sup>ヤス</sup>を蹴って起こそうとした。

「ZZZ……アニキ……見てくたせえ、札束ですぜ……」

しかし、何度蹴っ飛ばしてもヤスは起きなかった。それどころか寝言まで言っている始末だ。

「無駄よ。彼らは私が合図しない限り起きないわ」

英里がフロアに飛び出しながら蹴り疲れて荒い息をしている男に告げた。

「てめえ、警察<sup>サツ</sup>か！ どこから入りやがった！」

アニキと寝言で呼ばれた男は素早く拳銃を取り出すと、英里に向かって怒鳴りながら発砲した。

「どこって、裏口からよ」

銃弾を全てかわしながら平然と英里が答える。

「ちっ、表のヤツらは図か！ だが、俺は捕まらねえ！ ここにいる警察<sup>サツ</sup>はてめえ1人みたいだしな、てめえを殺してしまえば済むことよ」

男はニタリと気持ちの悪い笑みを浮かべると、2丁目の拳銃を英里に向けて連続で発砲してきた。

「見た目がゴリラだと知能もやっぱ低いのかしら。なぜ私が単独でこんな危険な現場に侵入してるのか、それがわからないわけじゃないでしょう？」

英里は銃弾をすべて避けながら、男を挑発するように言い放った。  
「へっ、強がりだろ。丸腰でマシンガンに勝てる気にいるのか？」

男は弾切れになった拳銃を2丁とも英里に投げつけて一瞬間を稼ぐと、眠りこける相棒から自動連射<sup>フルオート</sup>のマシンガンを奪い取り、

英里に向けて構えた。

「残念、強がりなんかじゃないわ。私は、単独であなたたちを制圧できる能力があるの」  
ちから

英里が目を細めてそう言い放った瞬間、マシンガンを構える男の周囲に黄色い霧が発生した。

「なんだ、これは……！？ 身体が、動か……な……」

男は最後までしゃべることができずに床に倒れ込んだ。

「強力な麻痺成分を含んだ霧を散布したわ。これで終わりね」

英里は犯人2人に手錠をかけると、行員たちの眠りを解き、外にいる秋塚たちに合図した。

こうして英里の活躍によってこの事件は1人の犠牲者も出さずに解決した。

「いやあ、榊さんが来てくださったおかげで事件がスピード解決しました。すいません、日勤の後に呼び出したりしまして」

事件の処理が全て終わって撤収するとすでに深夜1時過ぎで、秋塚は自分が奢りますと言って英里を食事に誘った。

「気にしないでいいわよ。自分で言うのも恥ずかしいけど、私がいなかったら解決までにもっと時間がかかってるか、それが少なからず犠牲者が出ていたでしょうね。それに比べたら私が呼び出されることくらいなんでもないわ」

英里は秋塚にそう話した。

「そう言っていたけると少し気が楽になりますね。あ、来た来た。榊さん、食べましょうか」

秋塚はホッとした表情を見せると、ちょうど来た料理に英里と2人で舌鼓を打つのだった。

VOL・27：番外編・バーナーナー！！ - (前編) (前書き)

今回と次回はちよつと本編をお休みして、この『小説家になろう』のサイトに来る前からの親友、ヒュンケル氏のキャラをお借りしたコラボ番外編！

長くなったので前後編に分けてお送りします。まずは前編、行ってみよう！

とある休日、朝からちひろは居間で魔法書を開いていた。

「ふあ……おはよう、ちひろ。休みだつてのにずいぶん早起きだな。何やってるの？」

そこに峻佑が起きてきて、あくびをしながらちひろにたずねた。

「あ、おはよう、峻佑くん。これ？ またこないだの体育祭のときみたいなことになったら面倒だし、この魔法書に記された魔法をいくつか覚えておこうかなって思ったの」

ちひろは少し笑みを浮かべながら話し、また本に目を落とす。

「ふーん、オレはその本の文字が読めないからさっぱりだけど、たしかその魔法書ってちひろの家系の始祖にあたる人の持ち物だったんだよね？ どんなのがあるの？」

峻佑は中身に興味を持ったのか、ちひろに聞いてみた。

「ご先祖さまは万能の魔法使いだったみたいだから、それこそ人を傷つけるものもあれば、逆に傷を治す癒やしの魔法もここには記されてるわ。あまりに数が多いから、いくつかの章に分かれてるみたいね。文字が読めなくても、イラストと一緒に書かれてるからある程度はわかるんじゃないかな？ ほら、これとか」

ちひろはそう言いながら、ページをめくっていき、あるページを開いた。

「これは、前に見た電撃の魔法？」

そこには、以前ちひろが真野家の地下迷宮探索時に使った、電撃を放つ魔法がイラスト付きで記されていた。

「うん、あたしやみちるが使える魔法は全部ここに載ってる。あたしたちが魔法の勉強に使った書物も、これを書き写したもののひとつだったからね」

ちひろは頷きながら話した。

「——へえ、こりやすごいな。ホントになんでもありだ」

峻佑はちひろと一緒に魔法書を眺めていた。とはいえ、この書の文字を解読できない峻佑はイラストだけでしかその効果を知ることができないけれど。

「あれ、なんか雰囲気ガラッと変わったな……」

ページがめくられたところで、峻佑がイラストの雰囲気の違いに気づいた。

「探索系はあたしやみちるはあまり得意じゃないのよね。結婚した姉さんならそういうのが得意なだけだ」

癒しの魔法が記された章が終わり、探索の章と記されたページに入ると、ちひろがため息をついた。

「ちひろの姉さん……って、ああ、さとみ姉さんか。あれっ、いつの間に結婚したの？ たしか年はオレらと6つくらいしか離れてなかったよな？」

峻佑が記憶を探りつつたずねると、

「うん、そう。さとみ姉さんはあたしたちの6つ年上で、今年大学4年生になってるよ。どこの大学かは忘れたけど、たしか教員免許取りたいって言って教職課程を勉強してるって言ってた気がするわ。結婚したのはつい最近よ。たしかまだ半年も経ってなかったはず。

相手の方が、姉さんの卒業まで待てないって言って半ば無理やり式を挙げちゃったのよ」

ちひろは苦笑しながら頷いてそう言った。

「そっか。小さい頃に少しだけ遊んでもらったことがあるような気がして、覚えてたんだ。あれっ？ これはなんて書いてあるの？」

パラパラと適当にページをめくっていたちひろを横から見ていた峻佑は、探索の章の後に数ページだけの章があるのに気づいてちひろにたずねた。

「えーっと……召喚の章って書いてあるわ。こんなの今まで見たことがなかったから、きつとご先祖さましか使えない魔法ってこの章のことかも……」

ちひろは文字を読んだ途端、表情から笑みが消え、手が震えはじめた。それでもページをめくる手は止まらない。

「召喚？ ゲームとかだとかかなり高度な魔法に分類されてるけど、ホントに大変そうなものなんだな。で、始祖さんはどんなのを喚び出せたんだろう？」

峻佑も興味津々にページをのぞき込むと、炎を吐く竜、フレアドラゴン、大剣を手にした戦鬼などが記され、その異常性に2人とも震え上がりそうだった。バー

そして最後のページを開くと、そこには今までの異常性を打ち消すような可愛いイラストが描かれていた。

「これは……バナナか？」

峻佑がイラストからそう判断し、ちひろにたずねる。

「えーっと、この名前は、黄色い魔神こと、バナナマスター08。またの名をバナナちゃんというみたいね」

ちひろは本に記された文字を読んでその名を話す。

「おかしな名前だな。バナナマスターってのはまあわかる。バナナの親分みたいな形をしてるから。でも、08ってのは？」

峻佑が笑いをこらえながらちひろにたずねた。

「08の理由？ ご先祖さまが初めてこのバナナマスターの召喚に成功したのが、西暦1408年だったから、と記されてるわ。ご先祖さまが召喚で喚びだせる中では最強で、ここにも『伝説の召喚魔法』とまで記され、ご先祖さまでさえこの魔法を使ったのはそのときのたった1回しかないと書いてあるわ。その1回は戦争中で、召喚してわずか数分で敵方の軍を殲滅したそうよ」

ちひろが説明した、そのとき。ズゴゴゴ、と地鳴りが起こり、本がぼんやりと光った。

「なんだ？ この地鳴りは……本も光ってるし。それに、何か聞こえないか？」

峻佑がつぶやいて、耳を澄ませてみると、

「……………バーナーナアアア！」

遠くのほうから何かが唸るような声が聞こえた。と、そこに、

「お、お姉ちゃん！ あ、あれ！」

みちるが2階から転がるように降りてきて、2人に2階から外を見るように促した。

「……………」

2階に上がり、窓の外に見えた‘それ’を見て、ちひろは言葉を失った。

遠目に見える学校の校庭の真ん中に、およそ高さ6メートルはあろうかという、巨大なバナナの怪物が出現していた。

「な、なんなんだありゃ!？」

峻佑は遠くに見える巨大バナナを指して叫んだ。

「あれは、この魔法書に記されたバナナマスター08……………なんでかわからないけど、バナナちゃんが召喚されたのは確かよ。とにかく、早くあれをなんとかしないと！」

ちひろはそう言うが早いか、魔法書を抱えて家を飛び出した。それを追ってみちるも駆けていく。

「あつ、2人とも待ってくれ！」

峻佑も慌てて2人の後を追いかけて、バナナちゃんが現れた場所——高校の校庭に向かうのだった。

3人が高校の校門前に到着すると、周辺住民の野次馬が見つめる中、校庭の真ん中でバナナちゃんは座り込んで休んでいた。

「バァ……………」

よくよく見ると、バナナちゃんの眼前には巨大なコップが浮遊しており、ときおりその中身——バナナジュースのようなものを飲んでくつろいでいた。

「……………巨大なバナナがバナナジュースって、共食いかよつ！」

その光景を見た峻佑は声の限り叫んでツッコミを入れた。

「……………あわてて走って来たけど、そこまで危険な存在でもないのかな？」



長い舌が一瞬にして警官を捕らえると、パクツと飲み込んでしまった。

「げっ！ 人を食べるのかよ、あのバナナ……」

峻佑がつぶやいた、そのとき。

「あれは、伝説のバナナマスター08……！？ うかつに手を出すとこつちがやられるわね。秋塚くん、急いで住民を避難させて、この辺一帯、ここを中心に半径5キロ以内を封鎖してちょうだい」

別のパトカーで様子を見ていた刑事——榊 英里が部下に指示を出しながらやってきた。

「英里叔母さん！」

ちひろとみちるが駆け寄っていく。

「ちひろちゃん、みちるちゃん。これはどうということなの？ 説明してちょうだい。あのバナナ——バナナマスター08は真野家一族に伝わる最強の召喚魔法よ。しかもあまりにも強力だから並の者じや呼び出せない。つまり、強い能力チカラを持ったあなたたちしか呼び出せるものは今はいないはずよ」

英里は責めるような口調でちひろとみちるにたずねる。

「あたしたちにもわからないんです。この魔法書を開いて、実用的な魔法を探していたときに、バナナマスター08の項を見つけて、眺めていたらいきなりアレが出現したんですから」

ちひろは英里に対して弁解する。

「そう……もしかして名をつぶやいたりしなかった？」

英里はちひろにたずねる。

「……………」

ちひろは見る見る顔が青ざめていった。

「どうやら名を呼んだのね。召喚魔法は私は扱えないけど、強大な魔力を持つものが名を呼べば現れると聞いたことがあるわ。まあ、出てきてしまったものは仕方ないわ。ともかくバナナマスターをなんとかしないと、被害者は増える一方よ。おそらく私たちの力じゃアレを倒すのは無理だから、なんとか召喚を解除して消すことを考

えましよう」

英里はそう言つと、周辺住民の避難誘導が終わつた秋塚警部補、それと十数名の交番勤務の巡査長、巡査クラスを集めて峻佑たちとともに作戦を立て始めたのだつた。

VOL・27：番外編・バーナーナー！！ - (前編) (後書き)

ひよんなことから出現してしまった黄色い魔神ことバナナマスター08。

果たして一同はどうやってこの状況を切り抜けるのか？

以下、後編に続く！

VOL・28：番外編・バーナーナー！！ -（後編）

「それで、どうするんです？ あんな伝説級の怪物とまともにやりあっても、まず勝ち目はないと思うんですけど」

作戦会議に入ったものの、沈黙が続く一同。それを破ったのは意外にも峻佑だった。

「この事態を解決するためにはアレを再び封印するしかないわ。で、喚び出したのがちひろちゃんである以上、その封印もちひろちゃんにしかできない。ちひろちゃん、封印の魔法がその魔法書のどこかにあるはず。それであのバナナを封印するのよ」

英里がようやく口を開き、作戦を周囲に伝えた、そのとき。

「バーナーナアアア！」

警官1名を飲み込んだ後、しばらく大人しくしていたバナナちゃんが急に暴れ出し、バナナレーザー08をぶつ放した。

放たれたレーザーは校舎を貫通、校舎は黄色い光に包まれ爆発し、無惨にも崩壊、瓦礫の山と化した。と、碎けた瓦礫がいくつか峻佑たちの方へ飛んできた。

「うおわあっ！」

「峻佑くん、危ないっ！」

そのうちのひとつが峻佑に当たりそうになり、峻佑は情けなくも悲鳴を上げた。だが、瓦礫は彼に当たることなく弾かれ、地面に落ちた。

「助かった……ちひろ、みちる、ありがとな」

峻佑に当たる直前に、ちひろとみちるが防御障壁を張ってくれたらしく、彼の前にはうっすら光る壁があった。

「峻佑くん、大丈夫だった？ ここは危ないから離れていたほうがいいかも」

みちるが神妙な表情で話した。

「いや、オレはここに残る。さっきヤツに飲み込まれた警察官は逃

げようとして離れていくときにあの長い舌に捕まった。うかつに逃げだそうとすればオレもあの舌に捕まるかもしれない。だからここに残るよ」

峻佑もまた真剣な表情でみちるに告げる。

「でも……」

「そうね。あんな怪物を前にしてうかつな行動はしないほうがいいわ」

なおも洩るみちるの言葉を遮ったのは、英里だった。

「叔母さん……わかりました。峻佑くんは私が守る！」

みちるがグツと拳を握りしめて決意した、そのとき。

「あつた！ これだわ！」

分厚い魔法書から封印の魔法を探していたちひろが声をあげた。

「ちひろちゃん、バナナマスター08は今は何もしてないわ。今のうちに封印を！」

英里がちひろを促し、ちひろは頷くと、魔法書を見ながら詠唱を始めた。

「C\*ωЖРЕНШЯП……」

峻佑にはなんと発音してるのかわからないが、ちひろが言葉を紡ぐたび、風もないのに彼女の短い髪が舞い上がり、それに合わせるように彼女の身体から幾何学模様の輪っかが出現し、バナナマスター108に絡みついていく。

——だが、そこまでだった。

「バーナーナー！」

バナナちゃんの叫び声ひとつで幾何学模様の輪っかは粉々に弾け飛び、封印の魔法は失敗に終わった。

「な、なんで……？」

上手く行くと思われた封印の魔法が失敗し、全員が呆然とする中、ちひろは魔法書を調べ直していた。そして、

「なるほど、失敗の理由がわかったわ」

魔法書をパタンと閉じてつぶやいた。

「この封印魔法は生物であればなんでも封印することができる便利な術みたいんだけど、効果を発動させるためには、その対象をある程度弱らせてからでないとダメみたいなの」

ちひろがそこまで話したところで、

「じゃあ、あのバナナを封印するには結局戦って弱らせないとダメってことなの？」

みちるが驚いた顔でちひろにたずねた。

「そういうことになるわね。だから、みちると叔母さんでどうにかアレを弱らせられないかしら？ あたしはさっきの封印魔法をいつでも発動できるように準備するから。はい、これ持っていて」

ちひろはみちると英里にバナナちゃんの相手を頼み、みちるに魔法書を手渡した。

「さあ、またバナナちゃんが暴れ出す前に、早く！」

ちひろはみちると英里を送り出すと、ゆっくりと力を溜めるように封印魔法の詠唱を始めた。

「弱らせろって簡単に言うけど、どうすりゃいいのよ……」

みちるは途方に暮れつつ、魔法書を開いて使えそうな魔法を探し始めた。

「とりあえず、真っ二つにしてみましよう。食らいなさい、“ウィンド  
・ブラスト風刃  
裂波”！」

一方の英里は、手に風を呼び起こし、バナナちゃんに向けてカマイタチとして放った。

「バーナーナ——！」

あっさり切り裂かれたバナナちゃんは悲痛な叫び声を上げると、二つに分裂して地面に落ちた。

しかし、次の瞬間。

「バーナーナー！」

二つに分裂したバナナちゃんは起き上がると、叫び声を上げながら再び合体して元の大きさに戻ってしまった。

「切られたくらいじゃ倒れないか。さすがに伝説級の怪物ね……」  
英里は特に落胆した様子も見せず、次の魔法に移ろうとした。だが、

「ヴウアアアヌウアアアヌアアア——！！！」

バナナちゃんが突然怒りのうなり声を上げ、英里に向かってバナナレーザー08を放った。

「なんて威力なの……回避できない——」

英里は最後に何か言ったように見えたが、聞き取れないまま黄色い光に飲み込まれ、光が収まったとき、そこに英里の姿はなかった。  
「バーナナナナナ！」

バナナちゃんはまるで笑っているかのような声を上げ、

「叔母さ——ん！」

ちひろとみちるが同時に叫び、さらにちひろの集中が途切れたことで封印魔法の溜めも消えてしまった。

「榊さん！ 総員、榊警部を搜索するんだ！」

「刑事さん、オレも手伝います」

英里の部下、秋塚と一緒に連れてきた他の警官たち、それと峻佑とともに消えた英里の搜索を始めるのだった。

「私は1人でもアレを弱らせてみせるから、姉さんはまた封印魔法の溜めをしないと。大丈夫、なんとかなるよ！ それに、叔母さんがそんな簡単にやられるなんて思えないのよね。きっと上手く逃げのびたわよ」

みちるは未だ落ち込んでいるちひろを励まし、バナナちゃんを弱らせるための魔法を探し始めた。

「そうね……あたしが引き起こしたことなんだし、きちんと責任取らないとね」

ちひろも元気を取り戻し、再び封印魔法の溜めを始めた。

「いない……くそっ、やはりさっきの黄色い光で跡形もなく消され

てしまったとしても言うのか!？」

英里を搜索する秋塚たちは、先ほどレーザーが着弾した箇所を探し尽くしたが英里を見つけることはできなかった。

「まだ諦めるには早いですよ。もしかしたら着弾の瞬間の爆発でどこかに吹き飛ばされてる可能性もあるでしょうし」

落胆し、地面を叩く秋塚に考えうる最後の可能性を告げたのは、峻佑だった。

「そうだな。よし、数人単位で固まって、その辺を探すんだ。くれぐれもバナナを刺激するなよ!」

秋塚は立ち上がると、部下に指示を出し、自らも峻佑と組んで崩壊し瓦礫の山となっている校舎跡に向かった。

「あつた! 対象を傷つけることなくその力を吸い取り、弱らせる魔法! でも、これはバナナちゃんにも効くのかな? 少し宙に浮いてるし……でも、やってみるしかないよね」

みちるはついにバナナを弱らせるための最も有効そうな魔法を見つけ、詠唱を始めた。

「И Е「ЯШЮРВЗЖ\*……」

先ほどのちひろと同様に、みちるの髪も舞い上がって行く。違うのは、幾何学模様が地面に魔法陣として出現しているところにあった。

魔法陣はバナナちゃんの真下で輝きを増していくかに思われたが、それ以上の変化は起きなかった。と、そのとき。

《我が末裔よ……》

魔法書から声が響いてきた。

「その声は……ご先祖さま?」

みちるが問いかけると、

《そうだ。私はジェン「マノール。我が末裔の危機を救うため、アトバイスを授けに意識だけを飛ばしてきた……いいか、バナナマスター108を封印するにはヤツを弱らせなくてはならん。弱らせる方

法は間違つてないが、宙に浮いてる者には効果がない。まずはヤツを地面に着かせないとならん。すべてはそれからだ……」

魔法書を通じて語りかけてきたジェンの言葉はそこで途切れてしまった。

「どうやってあんな大きな怪物を地面に落とせばいいの……？」

バナナちゃんを見上げて、改めてその巨大さに途方に暮れるみちる。と、そのとき。

「みちるちゃん、私がやるわ」

そこに現れたのは、バナナちゃんの攻撃で安否不明になっていたはずの英里だった。刑事のスーツはかなりボロボロになり、秋塚警部補と峻佑が肩を支えてようやく立っているといった状態だった。

「叔母さん！ 無事だったんですね！」

みちるが叫んで駆け寄っていく。

「ええ、あのレーザーが直撃する瞬間に防御障壁を張ったんだけど、爆発の衝撃まではガード出来ずに吹き飛ばされて瓦礫に埋まったの。でも、手は動かせたから、携帯を操作して秋塚くんたちを呼んだわけ」

英里は事情を説明した。

「そうだったんですか……でも、無事で良かったです。さあ、バナマスター08を封印してしましましょう」

みちるはひとしきり喜んだ後、英里にそう言った。

「ええ、私はバナマスター08を地面に落とせばいいのね？ 任せて。グラビティ・バレット“重力弾”！」

英里は軽く頷いて、バナナちゃんに向けて手をかざした。

「バァ〜？」

バナナちゃんは何かを感じたようだが、それが何かわからずに不思議そうな声を上げていた。

やがて、バナナちゃんの巨体が重力に負けてゆっくりと地面に着いた。

「みちるちゃん、今よー！」

英里が叫び、みちるは頷くと、詠唱を再開した。

「И Е Г Я Ш Ю Р В З Ж \*……」

その詠唱によって地面に幾何学模様の魔法陣が出現し、輝きがバナナちゃんを包んでいく。

「バーナーナー！」

魔法陣の輝きはバナナちゃんの力を確実に吸い取っていくが、元々の力が半端ではないので、多少吸い取られたくらいではバナナちゃんはピンピンしていて、うなり声を上げながら長い舌を伸ばし、

——ベロン！

一瞬にして舌は警察官の1人を捉え、飲み込んだ。悲鳴を上げさせるヒマさえ与えない、まさに神速の出来事だった。

「バーナーナー！」

——ベロン！ ベロン！ ベロン！

さらに舌は周囲を固める警察官や近隣の野次馬に襲いかかり、捉えては飲み込んでいった。

「なんてパワーなの……！？ 吸い取っても吸い取ってもキリがないわ……」

みちるはバナナちゃんから吸い取った力を自らのものとしていたが、有り余る力を制御するのに苦戦していた。

「みちる、しっかりしろ！」

「みちるちゃん、吸い取った力を開放して、周囲に流して！」

峻佑や英里がみちるに駆け寄り、口々にみちるに伝える。

「も、もうこれ以上は溜めきれない！」

みちるはその言葉とともに意識を失い、魔法陣も消滅した。

「みちる、ナイスよ。これなら……行ける！」

ちひろはみちるに駆け寄ってねぎらうと、これまでずっと溜めていた封印魔法を解き放った。

解き放たれた封印魔法は激しく回転する幾何学模様の輪っかとなり、バナナちゃんに絡みついていく。やがてバナナちゃんが見えなくな——

「バーナーナー……………」

断末魔の叫びらしきものを残してバナナちゃんことバナナマスタ  
ー08は再び封印されたのだった。

その後、崩壊した校舎が再建されるのに1週間かかり、その間学校が閉鎖されたのと、目撃した住民の記憶を消すために奔走したり、ちひろが英里にこっぴどく怒られ、「魔法書の『召喚の章』を見るのは禁止!」と言い渡されたのは言うまでもない。

VOL・28：番外編・バーナーナー！！ - (後編) (後書き)

いかがだったでしょうか？  
感想お待ちしております。

次回からは本編に戻ります。

峻佑がついにとある決意を……！？

VOL・29：峻佑の決意      お楽しみにっ！

## VOL・29：峻佑の決意

6月。季節は梅雨を迎え、雨が続く竹崎の街に大きな叫び声が響く。

「あー、もう！ ジメジメして鬱陶うつとつしい！ 中間試験テストが近いのに、集中できないじゃない！」

中間試験を3日後に控え、勉強も追い込み段階に入った峻佑たちなのだが、ここ数日雨が続きせいで湿度が高く、不快指数はむちゃくちゃ高かった。ずっと我慢していたが、ついにちひろがブチ切れて叫んだのだった。

「落ち着けて、ちひろ。叫んだって何も変わらんだろ。あれ？ そっいえば、魔法でなんとかならないの？」

峻佑がちひろをなだめ、ハツと気づいたことをたずねる。

「いくらあたしたちの魔法でも、天気までは操れないわ。せいぜいこの高い湿度を下げるくらいかしら……って、それをやればいいのか。えいっ！」

首を振って峻佑の問いに答えたちひろはできることに気づくと、気合いの一声をあげて、部屋の中の湿度を下げた。

「おっ、カラッとした。これならさっきよりは勉強に集中できそうだな」

峻佑はいったん立ち上がって伸びをしながら言うと、再び3人で勉強を始めた。

翌日、3人が登校すると、校内が妙に騒がしかった。

峻佑がたまたま見つけた耕太郎に何かあったのか聞いてみると、「誰かが職員室から今度の試験問題を盗み出してあちこちの廊下に張り出したんだ。生徒会の人たちが回収してる」

耕太郎がそこまで言ったところで、

「くおらー！ 神楽ー！ まーたあんたの仕業ねー！」

4人のすぐ横を2年生の男子生徒が1人走り去り、その後ろから、生徒会副会長の仙堂雲雀が追いかけていった。

「はーっはっは、俺を捕まえられるものなら捕まえてみるがいい」  
神楽と呼ばれた男子生徒は後ろから追ってくる雲雀を挑発するような言葉を残し、あつという間に廊下を駆け抜け、見えなくなってしまった。見失ったことで雲雀も仕方なく諦めて立ち止まり、乱れた呼吸を整えている。

「仙堂先輩、大丈夫ですか？」

峻佑たちが雲雀に駆け寄ってたずねる。

「ああ、市原くん。いま私が追いかけてたヤツが生徒会にとって最大の敵の1人、神楽よしあき義明、諸悪の根元よ。今までにもイベントの裏で、観月みつき涼、岩本いわもと浩行ひろゆきなど数人の仲間とともに、‘アンチ生徒会’を掲げて数々の騒ぎを起こしてきた。そう、こないだの体育祭でもね……」

雲雀は峻佑たちに神楽やその仲間のことを説明した。

「この平和な学校にそんな先輩がいたなんてな……」

峻佑はそうつぶやき、張り出された問題用紙を回収するために再び走り出した雲雀と別れた。

2日後、中間試験当日。どうやら試験問題の完全な作り直しは間に合わなかったらしく、神楽が盗み出したらしい問題用紙と半分程度一致した問題で試験は行われた。

3日間の試験は無事に終わり、帰宅した峻佑は、自室で1人考えていた。

（あの神楽っていう先輩、明らかに状況を楽しんでいた。試験問題を盗み出していい成績を取ろうなんて考えず、ただ単に生徒会をおちよくって遊んでる目をしていたな。生徒会の先輩たちは見た感じ人手不足だし……よし、決めた！）

あれこれ考えた末、1つの結論に達した峻佑は、部屋から出ると、

夕飯を作っているちひろやみちるにある相談を持ちかけ、2人はあっさり快諾してくれた。

週明けの月曜、朝のHRを終えた峻佑は、1時間目が始まるまでの休み時間を利用して3年3組の教室へ向かった。

「すみません、一条先輩はいらっしゃいますか？」

3組の教室に着いた峻佑は、ドアの近くにいた女の先輩にたずねた。

「一条……ああ、会長ね。ちょっと待ってて」

彼女は頷くと、教室の中へ入っていき、窓際の席に座っていた一条に話しかけた。一条は数回頷くと、立ち上がって教室の入り口で待っていた峻佑のところにやってきた。

「市原くん、どうしたんだ？」

開口一番、一条は単刀直入にたずねた。

「先輩、いや生徒会長。オレを生徒会に入れてください」

峻佑も簡潔に用件を伝えた。

「おお、入ってくれるのか。おっと、もう授業が始まるから、詳しい話は昼休みにしよう。昼休みに生徒会室に来てくれ」

一条は嬉しそうな表情を見せると、峻佑にそう告げ、また引っ込んでいった。と、授業の開始を告げるチャイムが鳴り響いたので峻佑は早歩きで自分の教室へ戻るのだった。

昼休み。峻佑は素早く昼食を済ませると、ちひろやみちるとともに生徒会室に向かった。

ロックをして部屋に入ると、あらかじめ一条が招集をかけていたのだろうか、今まで見なかった役員の姿もあり、どうやら全員集合らしかった。

「ようこそ生徒会へ、市原くん。おや？ 後ろの2人はたしか1年生で最も有名な双子の姉妹じゃないか？」

一条が立ち上がり、歓迎の意を示す。と、峻佑の後ろにいるちひ

るとみちるに気づいてたずねた。

「会長、朝は時間がなかったせいで言えなかったんですけど、2人も一緒に入ってもらっちゃダメですかね？」

峻佑は一条をまっすぐに見据えて頼んだ。

「君が生徒会に入ると決意した時点でもう君は生徒会の一員だ。その君がスカウトした人材という扱いになる以上、我々に拒否権はない。ただし、スカウトをして生徒会入りさせる場合、スカウトをした役員は彼らに対し責任を負わねばならない。これだけはわかっていてほしい」

一条は生徒会役員のスカウト条件を説明した。要は条件これを守れるならば基本的にスカウトは自由にできるらしい。

「そうなんですか？ 了解しました。ちひろ、みちる、改めてお願いする、一緒に役員をやってくれ」

峻佑は一条に向けて力強く頷くと、ちひろとみちるに向き直って頭を下げた。

「今さら頭なんて下げないでよ、峻佑くんらしくもない。私たちは峻佑くんだからこそ、この話を受けたんだよ」

2人は笑って峻佑に言った。

「まあ、その続きは後でやってくれ。これで今日から3人は生徒会の役員となったのでそのつもりで活動してもらおう。最初は仕事を覚えるために、誰でもいいから役員の下に見習いとしてついてもらうわけだが……書記、会計、治安対策、どこがいい？」

一条は少し呆れた表情を見せて峻佑たちを制止すると、表情を引き締めてたずねた。

「じゃあ、3人とも、治安対策チームをやらせてください」

## VOL・29：峻佑の決意（後書き）

峻佑の決意——それは、生徒会役員になることだった。

ちひろやみちるとともに役員になった峻佑。

神楽たち‘アンチ生徒会’との死闘が始まるうとしていた——

次回、VOL・30：対決——顔合わせ——

お楽しみにっ！

ご意見、ご感想などぜひぜひ送り付けてやってください。お待ちしております！

## VOL・30：対決 - 小競り合い -

「治安対策チーム？ それは本気で言ってるのか？」

峻佑たちの希望を聞いた一条は、驚いた顔をしてたずねた。

「ええ、本気です。先日、試験問題を盗み出して生徒会や学校側を混乱に陥れて楽しんでいた、神楽っていう先輩を見て決意しました。オレは平和な高校生活を邪魔されたくないですから」

峻佑はグツと拳を握りしめて理由を話した。

「そこまで言うならもう止めないよ。じゃあ、治安対策チームのトップは副会長の仙堂だから、今後は彼女に従ってくれ」

一条は笑みを見せて峻佑たちに言った。

「わかりました」

3人は頷き、雲雀のほうを向いた。

「じゃあ、今後の対策を話しましょうか」

雲雀は3人を呼んで作戦を立て始めた。

その頃、校内某所――

「おい、神楽。生徒会側が仲間を増やしたようだぞ。しかも1年生で最も有名なあの3人だ」

その声に神楽は眉をピクリと反応させると、

「それは本当か、観月？」

情報をもたらした男――観月 涼にたずねた。

「ああ、本当だ。おれが今まで一度でも間違った情報を持ってきたことがあったか？」

観月は不敵な笑みを浮かべて神楽に言った。

「そうだな。我々、アンチ生徒会、'にとっての情報屋だからな、お前は。頼りにしてるぜ」

神楽もまたニヤリと笑って観月に言った。

「で、どうすんだ？ 仲間を得たことによって、最近おれたちに連

戦連敗していた生徒会の治安対策チームが活性化しちまうんじゃないか？ そうなったらこのアジトもヤバいかもしれないな。なんせ噂じゃ真野姉妹は……いや、なんでもない。まだ裏が取れてない情報を話しても意味がないな」

観月が心配そうにボヤキ、何かを言いかけてやめた、そのとき。

「そんな心配したり、ましてや未確認の情報を話そうとするなんてお前らしくないぜ、涼」

そこに第3の男が現れた。

「岩本か。まあ、ひとまず様子見だ。新しく加わった1年生3人の実力も未知数だしな。さすがに中間試験が終わったばかりだから、当面はこちらも動く理由がない。アジトはガサ入れとかでヤバそうなら放棄する。だが、少し連中の動きを追う必要があるそうだな」

神楽はそう言つと、観月と岩本を連れてアジトを出た。

「とりあえず、神楽たちは当分は何もしないだろうけど、かといって放置するわけにもいかない。校内のどこかにあいつらのアジトがあるはずだから、それを搜索して、潰す。明日から捜査開始よ」

雲雀は峻佑たちにそう告げた。と、生徒会室の扉を誰かがノックした。

「——誰！？」

雲雀たち以外の生徒会役員もそれぞれの会議をしているので、まだ生徒会室内には役員全員が揃っている。仮に教師であればノックのあとすぐに入ってくるはずなので、ノックだけして入ってこないということは一般生徒ということになる。雲雀がとりあえずドアを開くと、

「よう、仙堂。新しい役員が入ったらしいな。しかも我々と直接敵対する治安対策チームに——」

そこにいたのは、雲雀たちが捕まえるべき相手、アンチ生徒会  
の主力メンバー3人だった。

「神楽、観月、岩本……さすがに情報が早いわね。で、なに？　まさかと思うけど、改心して自首でもしに来たの？」

雲雀が一応たずねてみた。

「ふはははは、俺らがそんなことするような人間に見えるか？　今日はその新役員とやらにご挨拶に来たまでよ」

神楽は高らかに笑いながら雲雀の言葉を否定した。

「そうよね、そんなことあるわけないわよね。まあ、正直全く期待してなかったから落胆はないわ。でも、私らは今ここであんたらを捕まえることもできるのよ？　敵の本拠地に乗り込んでくるなんて、ちよつと不用心すぎないかしら？」

雲雀はそう言いながら、制服のポケットから手錠3つを取り出し、神楽たちにかけてやった。だが――

「ふん、遅いな」

神楽のほうが早かった。もともと警戒していたのだろう、神楽は着崩した制服から短めのロープを数本取り出すと、神業的な速さで雲雀の手足を縛り上げてしまった。

「きゃあっ！　う、動けない」

雲雀はそのまま床に転がされ、身動きが取れなくなってしまった。

「副会長！」

「仙堂先輩！」

すぐに峻佑たちが駆け寄り、ちひろとみちるで雲雀のロープを解いた。

「あなたが神楽先輩ですね？　覚悟してください、オレたちは近いうちに必ず‘アンチ生徒会’を潰しに行きますから」

そして峻佑は神楽たちに指を突きつけて宣戦布告した。

「ふん、なかなか面白いことを言ってくれる1年生じゃないか。仙堂、そしてその1年生たちよ、今日はこれで引き上げるが、我々を捕まえられるものなら捕まえてみるがいい。また会おう、さらばだ！」

神楽はそう言いながら、制服の懷に手を入れ、煙幕弾を取り出し

た。

「あつ、待ちなさい！」

自由になった雲雀と手が空いた姉妹の3人で彼らを取り押さえようとしたが、一瞬早く煙幕弾が破裂し、姿をくらましてしまった。

「ちっ、逃げられたか……まあいいわ、必ずアジトを見つけてとっ捕まえてやるんだから」

雲雀が舌打ちしながら言い、それを見て峻佑たちも、  
「アンチ生徒会」との対決に静かに闘志を燃やすのだった。

## VOL・30：対決・小競り合い - (後書き)

神楽率いる‘アンチ生徒会’と雲雀率いる生徒会治安対策チームの戦いの火蓋は切って落とされた。

果たして峻佑たちは神楽たちの企みを阻止し、学校の治安を守れるのか？

評価および感想など、どしどし送りつけてやってください。些細なことでもうれしいので。

## VOL・31：サルのリターンマッチ

神楽たち‘アンチ生徒会’が生徒会室に乱入し、峻佑が宣戦布告を突きつけた騒動から数日が過ぎた。

雲雀たち4人はあの騒動の翌日から校内の搜索ガサいれを行っているが、なかなか神楽たちのアジトは見つからず、この日も放課後の空き時間を利用して搜索を行ったが、かなり巧妙に隠されているらしく、見つけれなかった。

——同時刻、校内某所の‘アンチ生徒会’アジトを男が1人訪れていた。

「ほう、生徒会ですら見つけれない我らのアジトを見つけるとは……貴様何者だ？」

突然の訪問者に驚きつつも、神楽は男にたずねた。

「拙者、1年6組の猿義と申す者。ここは‘アンチ生徒会’のアジトでよろしいか？」

男——猿義は名乗ると、神楽に確認した。

「ああ、そのとおりだ。猿義とか言ったな、貴様、よもや生徒会の回し者ではあるまいな？」  
スバイ

神楽は頷くと、猿義に問いかけた。

「とんでもない。むしろ最近生徒会に入った市原や真野姉妹と敵対する者。そこで本題だが、神楽どの。拙者を仲間に加えてくださらんか」

猿義は神楽にそう頼み込んだ。

「うむ、構わないぞ。たしか猿義という名は忍者の末裔まつえいと聞く。その技で思う存分生徒会の連中を攪乱かくらんしてくれ」

神楽はあっさり頷き、猿義にそう告げた。

「はっ、了解しました。ところで、神楽どの。真野姉妹は気をつけたほうがよろしいかと」

猿義は神楽に敬礼すると、神楽に耳打ちした。

「なに？ それはどういうことだ？」

神楽は訝しげな視線を猿義に向けた。

「実は、拙者が忍者の家系であるように、真野姉妹は中世ヨーロッパの魔法使いの子孫なのです」

猿義はさらに続けて耳打ちした。

「ほう、それはまた随分と突飛な話だが、証拠はあるのか？」

神楽はまだ訝しげな視線を向けている。

「これを」

猿義はいったん少し離れると、懐から1本のビデオカメラを取り出し、再生を始めた。

「ふむ、なるほど。どうやら本当のことらしいな」

そこに映し出された映像を見て、神楽は納得したようだ。すると、何かを思いついたのか、

「なあ、猿義よ。これをもらってもいいか？」

猿義にそう頼み、

「ええ、構いませんよ。では、拙者は彼らに用事があるので失礼させてもらいます」

猿義はそう言つと、アジトから出ていった。後に残された神楽は、  
「くつくつく……これは対生徒会の重要な武器になるな……」

などと言いながらアジトのなかで何度も映像を繰り返すのだった。

結局、アジトを見つけられないまま、下校時刻を迎えてしまったので、この日の搜索を打ち切つて帰宅することになった峻佑たちだったが、校門のところに待ち伏せしている男に気づいた。

「なんだ、またお前か？ 何度挑んでもちひろには勝てないんだから、いい加減諦めろよ」

峻佑が呆れたような口調で待ち伏せ男——猿義に話しかけた。

「ふつ、やってみなくてはわからぬはず。それに、以前敗れたときの拙者ではないぞ。先日、別の武術家の流派を襲撃して秘伝の書を奪い取ってきているのぞな」

猿義は胸を張ってそうのたまったが、

「前々から思ってたけどよ、お前のやってることって明らかに犯罪だよな。他人の家に侵入する住居侵入罪、その家のものを無理やり奪い取る強盗罪、場合によっては戦ってケガをさせることもありうるから、暴行罪または傷害罪。警察に捕まらないのが不思議なくらいだよ、ホント——まあ、これ全部テレビで見た知識だけだ」

峻佑はつい最近テレビの法律番組を見ていたらしく、そこでやってた内容を思い出して猿義に指摘した。

「う、うるさい！ これは拙者と真野家の話だ、関係ないヤツは黙ってろ！」

猿義は多少自覚があったのか、明らかな動揺を見せて峻佑に怒鳴った。

「イヤだね。2人はオレの幼なじみにして今は同居人の関係だ。関係ならある」

峻佑は引き下がることをきっぱりと拒否した。

「ならば、力ずくでも黙らせてやる！」

猿義はそう言うが早いか、峻佑に飛びかかった。

「峻佑くん！」

すぐさまちひろとみちるが加勢しようとしたが、

「すまん。2人とも、先に帰っていてくれ。これはオレとクソ猿の決闘だ！」

峻佑は右腕で猿義の攻撃を受け流しつつ、左腕で2人を制止した。

「でも……」

みちるが渋ったが、

「わかったわ。みちる、帰るわよ。でも、峻佑くん、せめてこれを使つて。いくらあたしたちより弱いとはいえ、普通のヒトよりは強いだろうから」

ちひろがみちるの腕を引っ張って下がらせ、峻佑にどこからともなく取り出した木刀を投げて渡した。

「サンキュー！ じゃ、また後でな」

峻佑は木刀をキャッチして構えると、2人に笑いかけた。

「気をつけてね、峻佑くん」

ちひろたちは最後にそう言い残すと、学校を出た。

「さて、待たせたな、クソ猿」

峻佑は最初の一撃以来攻撃してこなかった猿義に言い放った。

「ふん、別れは済んだか？ ならば始めよう。真野家にある秘伝の書はお前を病院送りにしたあとで姉妹を倒して奪えばいいな。ゆくぞっ！」

「へっ、返り討ちにしてやるよ！」

——決闘が、始まった。

「まずは、これでもくらえっ！ 猿義流忍法、『焰玉』っ！」

先に動いたのは猿義だった。ポケットから火薬玉を取り出し、峻佑めがけて投げつけた。空気との摩擦で発火し、破裂しかけたが……

「わりいな、これお前に返す」

峻佑は緊張感も何もない口調で猿義に言うと、破裂直前の火薬玉を木刀で打ち返した。打ち返された火薬玉は猿義の眼前で破裂し、激しい閃光を放った。

「ぎゃあああ！ 目が！ 目があああ！」

猿義はまさか打ち返されるとは思っていなかったため、完全に無防備で自分の技を受けてしまった。

「策士、策におぼれるたあこのことだな。つか、お前はム。力大佐か。さて、視力が戻る前に決着<sup>ケリ</sup>をつけるか」

峻佑はボソッと冗談を織り交ぜてつぶやくと、木刀を構え直して猿義のふところに飛び込み、木刀を連続で打ち込んだ。

「これだけやればもう……」

峻佑は最後に剣道で言うところの胴のような打ち込みをすると、少し距離をとって猿義のほうを向いてつぶやいた。だが、

「市原……峻佑……まだ、拙者は、負けてないぞ……」

だいぶボロボロながらも、猿義はまだ立っていた。

「まだ立てるのか。だけど、もう闘えないだろ。やめとけ。これ以上やればお前の身体がもたない」

峻佑は一応相手を気遣うような言葉を投げかけた。しかし――

「スキありいっ！ 食らえ、これが拙者の最後の一撃だ……奥義『ゴッド・バード 神速の鳥』！」

猿義は峻佑の一瞬のスキをついて高くジャンプすると、落下の勢いをプラスして峻佑に捨て身で体当たりをしかけた。

「最後の攻撃に打って出たか。だけど、中学のとき野球部の4番を打ってたオレをなめるなっ！」

峻佑は飛んでくる猿義に対して木刀をバットのように構えると――

タイミングを合わせて、振り抜いた。

猿義は奥義でスピードアップしていたのが災いし、避けきれずに打ち返された。速度が出ていたのでその分峻佑の木刀にかかる負荷も半端ではなく、気合で猿義の身体を弾き返したものの、木刀は真つ二つに折れてしまった。だが、その欠片の片方が、打ち返されて数メートル飛んでいった猿義に直撃し、『ゴン』という鈍い音と『ぎゃっ』という低い声が聞こえ、その場は静かになった。

「やれやれ……保健室はもう閉まってるし、コイツは完全に気絶してるし……ああもうかったりい」

峻佑はぶつくさ言いながらも、救急車だけ呼んで、家に帰るのだった。

数分後、学校に到着した救急隊は、通報者がすでにそこにいない状況と、ただ猿義が倒れているだけの状況を見て、何があつたのかと首を傾げるのだった。

## VOL・31：サルのリターンマッチ（後書き）

‘アンチ生徒会’に加わった猿義に再び襲撃をかけられるものの、峻佑が一騎打ちで撃退することに成功した。

‘アンチ生徒会’はどう動く？　そしてサルが神楽に渡したビデオカメラの中身とその行方は？

一方、学校には教育実習の時期が訪れていた。

次回、VOL・32：教育実習生は……（仮）　お楽しみに！

感想やご指摘などもばしばし送りつけてやってください。些細なことでとても非常に嬉しいので。

## VOL・32：教育実習生がやってきた

救急車で搬送されるほどのキズを負っていたはずの猿義だったが、翌日にはあっさり登校してきていた。

「悔しいが拙者1人では勝てないようだ。だが、諦めた訳ではないからな。それと、生徒会に入ったお前らにはあまりいい知らせではないが、拙者は神楽どこのの下につき、‘アンチ生徒会’に入った。いずれ再び戦うことになるだろう。そのときは覚悟しておくんだな」朝、登校するなり校門で待ちかまえていた猿義にそう告げられた3人だったが、

「あっそ。勝手にすれば？ 何回でも返り討ちにしてあげるから」ちひろは冷たくあしらうと、教室へ向かうのだった。

そして、朝のHR。

「ね、姉さん!？」

脇野とともに、ただ1人を除いて見たことのない女性が入ってきて、ちひろが立ち上がり叫んだ。

「あら、ちひろ。この高校にいるのは知ってたけど、このクラスだったのね」

女性はちひろに軽く手を振って微笑みかけると、再び真面目な表情になつて脇野のほうを向いた。

「なんだ、真野、知り合いか？ まあ、いい。紹介しよう、彼女は

私の大学時代の後輩で、今日から2週間の予定で教育実習に来た、

藍沢 あいざわ さとみ先生だ。それじゃ、藍沢先生、ここからはお任せしますよ」

脇野がさとみにバトンタッチして教壇を離れた、その瞬間。

「藍沢先生！ 年いくつ!？」

「先生の趣味は!？」

「先生は彼氏いるんですか!？」

「ちひろさんとは知り合いですか!？」

などなど、男子ばかり矢継ぎ早に質問を浴びせかけて、さとみは困っていた。そこに、

「ほらほら、お前ら。藍沢先生が困ってるぞ。HRが終わったらにしない」

脇野がパンパンと手を叩いて制止すると、渋々といった具合ではあったが、教室は静かになった。

「脇野先生、ありがとうございます。それじゃ、みなさん。一応自己紹介しておきますね。わたしは明正大学めいしょうから参りました、藍沢さとみと言います。そこにいる真野ちひろの姉で、まだ学生の身ではありませんが、結婚して苗字が変わっています。趣味は内緒です」  
で。ええと、現役の大学4年生なので、年は22歳です」

さとみが簡単に自己紹介した瞬間、「結婚してる」という言葉に反応した男どもの悲鳴のような声が響いた。

脇野がどうにか場を落ち着かせたが、その後もざわめきは収まらずにHRは終わった。と、そのとき。

「うっは、もうガマンできねえ……さつとみせんせー！」

奇声を上げながら、耕太郎が机の上から大ジャンプをしてさとみに飛びかかった。……が。

「きゃっ！」

「ぶぎゃっ！」

さとみが小さく悲鳴をあげた瞬間、耕太郎は何かに弾かれたように吹き飛び、床に叩きつけられた。

「な、なんだ？ 今のは……」

耕太郎の不自然な落ち方に、なにがあったのかと生徒たちがさとみを見つめる。しかしさとみは何も言わずにそそくさと教室を出ていった。

「なあ、ちひろ……」

峻佑が何かを言いかけると、

「何も言わないで。言いたいことはわかってるから。そして、答えも峻佑くんの思ってるとおりで間違いないよ」

ちひろは頭を抱えてうなだれた。

「ってか、誰か俺の心配もしてくれよ……」

床に叩きつけられひっくり返ったままの耕太郎のボヤキは誰にも届かなかった。

そして、昼休み。どこで昼食にするか相談していた峻佑たち3人のところに、さとみがやってきた。

「屋上に行かない？」

屋上で4人はそれぞれの昼食を広げていた。

「ところで、姉さん。あたしたちは魔法のことはここにいる峻佑くん以外には隠してるの。なのに、姉さんってば……」

ちひろが呆れたようにさとみを糾弾する。きゅうたん

「そんなこと言われても、急なことだったんだから仕方ないじゃない。それに、なんでそこまでして隠す必要があるの？」

さとみも負けじと反論する。と、

「普通の人間であるオレらから見たら魔法使いなんて存在、信じられるものじゃないし、最悪化け物扱いされるでしょう。まあ、オレはちひろやみちるがなんであるうと受け入れられますが、それができない人もいるでしょう」

峻佑が口を挟んだ。

「まあ、それはそうだけど、今朝見た感じじゃ、あの子たちは快く受け入れてくれそうだけだね。それに、すでにあなたたちと関係がなさそうな生徒が2人、秘密を握ったみたいよ？ ああ、この2人ね」

さとみはそう言うと、空中に映像を出現させた。

「あつ、猿義！ こっちは……神楽先輩！？」

映像を見た峻佑が声をあげた。

「彼らは？」

さとみが3人に問いかける。

「『アンチ生徒会』と名乗る集団で、その名の通りあたしたちが所属してる生徒会治安対策チームと敵対しているわ」

ちひろが拳を握りしめながら話す。

「そう……マズいわね、彼らは今日にでも全校に映像をバラまくつもりよ」

さとみはおそらく魔法で調べたのだろう、神楽たちの動きを峻佑たちに伝えた。

「藍沢先生、彼らの居場所はわかりますか？」

峻佑がたずねると、

「任せて。んーっと……旧校舎2階の端っこにある消火器の格納庫に隠されたスイッチを押せば扉が現れるみたいね。ちょうどいま何人かそこに入ってたわ」

さとみは自身の能力をフル活用して居場所を割り出した。

「さすがに探索系の魔法では姉さんにはかなわないわね。みちる、峻佑くん、行こう。アンチ生徒会を止めないと」

「ああ、秘密を守るためにも間に合わせないとな」

ちひろたちは昼食を片づけると、屋上を後にした。

「さて、と。わたしは職員室に戻ろうかな。実習生として、先生たちにいる聞いておかないと」

さとみは峻佑たち3人を見送ると、ゆっくり立ち上がって職員室に戻るのだった。

そのころ、神楽たちのアジト――

「サル、各教室のテレビはジャックできたか？」

神楽がサル――猿義にたずねていた。

「はっ、全て完了しております。あとはここでビデオを再生し、ス

イッチを押せば全教室に真野姉妹の秘密が流れることになります」  
猿義はニヤリと笑いながら神楽にスイッチを渡す。

「くつくつく…… よろしい。では、そろそろ実行するでしょう」

神楽が笑いながらビデオをセットしようとした、そのとき。

「神楽義明、及びアンチ生徒会諸君に告ぐ！ 君たちは我々生徒会によつて包囲されている！ 大人しく投降して出てきなさい！」

外からそんな怒鳴り声が響いてきた。

「くそつ、生徒会の連中め、どうやってこのアジトをかぎつけたのだ？ このままでは脱出もできないではないか」

生徒会の急襲を受けた神楽たち4人は脱出路を確保する間などなく、もはやビデオを公開している場合ではなくなっていた。もはやこれまでか、と神楽が諦めかけた、そのとき。薄暗い部屋の中に不思議な幾何学模様が浮かび上がり、まぶしい光が部屋を包み込んだ。  
「な、なんだ？ 部屋からものすごい光が漏れてきてるぞ」

中から応答がないので、扉をこじ開けにかかっていた峻佑たちは、部屋から漏れてくるまぶしい光に手を止めた。

「こ、これは召喚の光！？ いったい扉の向こうで何が起こってるの？」

ちひろとみちるがそろって声をあげ、

「召喚？ なにそれ？」

そんな疑問を投げかける雲雀に対し、

「先輩、もう隠し通すのは無理ですね。あたしとみちるは魔法使いの血を引いているんです。いま、この向こうでは何が起こってるかわからないですけど、何らかの魔法に関するモノが動いてるのは間違いないです。魔法でドアをぶち破りますから離れててください」

ちひろは雲雀に秘密を明かし、頭にクエスチョンマークを浮かべる雲雀を峻佑とともにドアから遠ざけた。

やがて、光が収まり、まぶしさに目を閉じていた神楽たちが目を開けると、女性が1人、空中に出現した幾何学模様——魔法陣の上

に立っていた。

「ちっ、出る場所を間違えたか。そこのおぬし、ジェンはどこじゃ！」

謎の女性は辺りを見回して舌打ちをひとつすると、近くにいた神楽の胸ぐらをつかみ上げて尋ねた。

「ジェン、だと？ そんな外人みたいな名前は知らないな。それより貴様は何者だ？」

神楽は冷静に質問に答え、逆に問いかけた。

「我が名はフラール。フラール＝ボードン。数百年前のヨーロッパに生きた魔法使いじゃ。旧き知<sup>ふる</sup>り合い、ジェン＝マノールへの恨みを晴らすためやってきた！」

フラールと名乗った女は、神楽を解放しつつそう言い放ったのだった。

**VOL・32：教育実習生がやってきた（後書き）**

突如現れたフラール<sup>II</sup>ボーデン。彼女はなぜジェンに恨みを抱いているのか？

評価および感想など、お待ちしております。

ほんの些細なことや一言でもいいので、何か残してくださると非常に嬉しいです。

### VOL・33：過去からの来訪者？

「魔法使い、だと？ 真野姉妹以外にまだいたのか？」

話を聞いていた猿義がフラールにたずねる。

「我はジェン＝マノールによって封印され、長き眠りにつかされていた。その後ジェンをはるか東の日本ヤパンという国に渡ったと聞いて、我はここまでやってきた。そういうわけで我はジェンを探しているのじゃ」

フラールはペラペラと身の上話を神楽たちにし、話がひと段落した、そのとき。

ズドン！ という音とともにドアがぶち破られ、ちひろ、みちる、峻佑、雲雀の順でアジトに突入してきた。

「神楽義明、およびアンチ生徒会の面々、もう逃げられないわよ。おとなしくお縄につきなさい！」

雲雀が前に進み出て、神楽たちにそう告げた。

「ところで、その人は誰だ？ 見たことない顔だけど」

峻佑がフラールを指して神楽たちにたずねる。

「我の名はフラール＝ボーデン。この地にジェン＝マノールという魔法使いがいるはずだが、おぬしらは知らぬか？」

フラールは峻佑たちにも同じようにたずねた。

「ジェン＝マノールですって？ もうとつくに亡くなってるあたしたちのご先祖様にいったい何の用なの？」

ちひろがそう声をあげる。

「おぬし、ジェンの子孫と申すか？ ……ん、なに、死んでいるだとか？ そうか、我が封印されてから500年の時が流れているからのう……さすがのジェンでも500年は生きられなかったか」

フラールは少しシヨックを受けたようで、がっくりとうなだれてつぶやいた。

「あの、フラールさん？ よかったら話を聞かせてもらえませんか

「？」

峻佑が間に立ってフラーに話しかけた。

「ふむ。いいじやろう。あれは、500年前のことじゃった——」

## 回想

——500年前のヨーロッパ。

ジェンはすでに魔法使いとしてその道を極め、その能力を買われて各地の戦争に傭兵として雇われてはその軍を勝利に導いていた。我がジェンに出会ったのはちょうどそのころじゃ。

我はそのころ師を失い、さらなる修行の場を求めて諸国を渡り歩いているなかで、あやつに出会った。ちょうどあやつは自らの過ちに気づき、戦争への協力をやめて、平和な世の中にするために努力を始めたところじゃった。我はジェンを新たな師とするため、あやつの暮らす家に向かった。

「失礼、ここはジェン・マノールどのの家でよろしいか？」

我が確認するようにあやつにたずねると、

「ああ、たしかにここは俺の家で、俺の名はジェン・マノールだが、お前さんは？　俺に何の用だい？」

あやつは明るい声で我にたずねてきた。

「ジェンどの、いや、師匠。私を弟子にしていたきたい」

我はあやつに頼み込んだ。だが、あやつは……

「すまん、俺は弟子は取らない主義なんだ。俺の編み出した魔法はどれも強力すぎてな、変に弟子を取るとまた戦争の道具にされてしまうかも知れん。だから、一子相伝にして子孫に継がせることにしたんだ。そういうわけだから、帰った帰った」

あやつは我を全く相手にせず、門前払いを続けた。だが我とてある程度の魔法は身に着けていても、まだ修行が足りないと思っていた故に、諦めるわけにはいかなかった。そうして何年もあやつの元

に通い続けた、ある日のこと――

「おい、お前。名前はなんていうんだ？」

毎日のように訪ねてくる我に根負けしたのか、あやつは我に名を聞いてきた。

「私はフラール」ボードンと申します。弟子入りを認めてくれるのですか、師匠？」

我が期待に満ちた目であやつを見つめてたずねると、

「まあ、とりあえずこんなところで立ち話もなんだし、入れよ。話はそれからだ」

あやつは我を家の中に招き入れた。そのイスに座って待つてろと言われたので待つてっていると、イスの上に魔法陣が浮かび上がり、光の鎖が我に絡みついてきた。

「こ、これは!？」

我はあわてて鎖を振りほどこうとしたが、まったく歯が立たなかった。そこにあやつが現れ、

「フラールとやら、俺に弟子入りたい気持ちだけは伝わった。だが、ダメだ。口で言ってもわからないなら、すまないが数百年の間眠ってもらう。なに、死にはしない。もし目覚めてな俺に弟子入りしたいのなら、俺が後世に遺す魔法書を探し出すといい。では、さらばだ、フラール」

その言葉をきっかけに鎖が絡みつくスピードが格段に上がり、

「師匠……いや、ジェン」マノール! こんな姑息な手を……この恨み、忘れはせぬぞ……」

我はその言葉を最後に意識を失い、封印されたのじゃ……

その話を終えると、フラールはふう、とひとつため息をついた。  
「そのときの真意を問い、恨みを晴らすためにわざわざこの国までやってきたのじゃが、あやつがすでに亡くなっているとは……」

ところで、ジェンの子孫とやら、おぬし名前をなんといいう？」

フラールはボソツとつぶやくと、ふと思い出したようにちひろのほうを向いてたずねた。

「あたし？ あたしはちひろよ。そっちが双子の妹のみちる。で、あたしたちに何か用かしら？」

ちひろが名前を告げてフラールに聞き返すと、

「チヒロ、か。のう、チヒロよ。おぬし、ジェンの遺した魔法書を持つてはおらぬか？ ジェン是我に直接魔法の指導をするのは断つたが、封印されるときに、後世に遺す魔法書を見るなら構わないと言つておつた。じゃから、それをもし持つておつたらぜひ見せてほしいのじゃが……」

フラールはちひろにそう頼んだ。

「ええ、それなら家に帰ればいっぱいコピー本があるから、1冊あげるわ。あとで家に行きましよう」

ちひろは快諾し、喜ぶフラールとがっちり握手を交わした。と、

「あのー、話がまったく見えないんだけど……」

「拙者たちのアジトで拙者たちを無視して話を進めるでない。混ぜろー！」

「つて、馬鹿サル！ そんなことより逃げるぞっ！」

展開についていけず、頭にクエスチョンマークを浮かべた雲雀と自分たちを無視されてることが面白くない猿義がそろって声をあげた。と、これをチャンスと見たか、神楽や観月たちは逃げようとしている。

「あ、そういえば、こいつらのこと忘れてた。ちひろ、みちる、それと雲雀先輩。神楽先輩たちを捕まえないと！」

峻佑はハツとしたかのようにつぶやくと、こっそりと逃げようとしている神楽たちを追いかけ始めた。

「峻佑くん、追いかける必要はないわ。БИМЭВД、……」

ちひろが峻佑を制止し、何事かつぶやいた。すると、逃げようとしていた神楽たちの体に光の鎖が絡みついて動きを止めた。しかし、

そこまではよかったのだが、なぜか鎖は神楽たちだけでなく、その場にいた者すべて、峻佑やみちる、雲雀、フラールまでも捕らえていた。

「ちょ、ちひろ！？　なんでオレたちまで！？」

峻佑があわてて顔だけをちひろのほうに振り向かせて抗議の声をあげる。

「あれ？　ミスっちゃった。ゴメンゴメン」

ちひろは謝りながら峻佑、みちる、雲雀、フラールの拘束を解く。「ふむ、これが本物の魔法か。これは素晴らしい。俺はロープくらいなら懐の七つ道具で断ち切って逃げられるのだが、光の鎖ではどうにもならんな。……もう一度ミスって俺たちも解放してくれればよかったのだが」

神楽が残念そうな声をあげたが、そんな声は無視され、神楽たちは生徒会室へ連行されていくのだった。

## VOL・33：過去からの来訪者？（後書き）

やっとかさ神楽一派を捕らえることに成功した生徒会。

神楽たちはこのまま大人しくしているのだろうか？

そして、姉妹は大きな決断をする。

次回、VOL・34：姉妹の秘密を話するとき（仮） お楽しみに！

感想や評価のほうもお待ちしております。

どんな細かいことでもいいので、気軽に書き込んでやってください。

## VOL・34：秘密が秘密でなくなる日

捕まえた神楽たち一味を生徒会室に連行し終えると、ちひろは神楽たちの拘束をそれまでの両手両足縛って引きずっていた状態から両手のみに軽くし、足は解放した。

「……くそっ、今回は我々の負けだな。罰を受けるのはやむを得ない。だが、仙堂よ。ひとつ、いやふたつだけ聞いてもいいか？」

神楽は神妙な面もちで雲雀にたずねた。

「ふふん、いいわよ。何かしら？」

雲雀は初めて神楽に勝った喜びを存分に顔に出した、にやけた表情で神楽に聞き返した。

「どうやって我々のアジトを見つけ出した？ あの入り口のスイッチは普通に見つけられるものじゃなかったはずだが……。それともひとつは、なぜオレたちを引きずって連行した？ 嫌がらせのつもりか？」

「ああ、あれ？ 突入の少し前に私たちが生徒会室にいたら、市原くんたち3人が駆け込んできて、アジトを見つけたから一緒に来てくれて言ってきたのよ。半信半疑だったけど、見事にアンタを捕まえられたし、よかったわ。アンタらを連行するのに引きずったのは、ちひろちゃんが両手両足まとめて縛っちゃったからよ。そういえば、そのことで私もちひろちゃんとみちるちゃんに聞きたいことがあったんだっけ。さっきからのこと——魔法使いがどうのとか——も含めていろいろ説明してくれないかしら？」

雲雀はちひろのほうを見てたずねた。

「もう説明しないワケには行かないですよ。仙堂先輩はさっきも見たのである程度は信じてくれるとは思いますが、あたしとみちる、それといま教育実習に来てる、藍沢先生はみんな中世に実在した魔法使いの末裔です。それとなぜかここまでついてきてる、フラールさんは当時を生き、あたしたちのご先祖さまにフられて永い眠りに

つかされていたそうです。まあ、うだうだ話すよりも見てもらった方が早いですね」

ちひろはそう言うが早いか、右手を上にかざして、何かつぶやいた。すると、その手のひらに光る玉が出現した。

「ほう……」

その場にいた事情を知らないほぼ全員が驚いて声も出せない中、ただひとり声を上げたのは、両手を光の鎖で縛られた神楽だった。

「ふう。一応、説明しておきますと、今のはあたしが得意とする電気ショックの魔法です」

ちひろは光る玉を消して説明した。と、呆けていた一条が口を開いた。

「なるほど、すごいな。まさかマンガの中にしかないと思っていた魔法使いが目の前に実在していたとはな……」

「あーっ！ 思い出したあ！」

と、その場の空気を壊すような大声が響いた。

「どうしたんですか？ なつき先輩」

キーンと響く耳を押さえながら雲雀がたずねると、

「私、前に市原くんをスカウトしたいって時に市原くんの家がなんか怪しいって言われて調べたことあった！ でも、なんでそのことを忘れてたのかしら……？」

なつきはさつきの叫び声とは打って変わって小さな声でつぶやいた。

「それもあたしたちのチカラによるものですね。今だから言えますけど、あのときはバレたくない思いで先輩たちに暗示をかけて当時の記憶を忘れさせたんです。ごめんなさい」

ちひろとみちるが同時に説明して謝った。

「たとえ意図的に忘れさせられたものとしても、覚えてない以上謝る必要はない。まあ、事情はだいたいわかったが、別にこのことで役員を解任したりはできないから、安心して治安対策に当たってくれ」

一条は柔らかな笑みを見せてちひろとみちるに言い、

「まあ、私も納得は行つたし、あんまり深入りするとまた記憶消されるかもしれないからこれ以上は突っ込まないわ」

なつきも冗談交じりに話した。

「さて、話がひと段落したところで、神楽たちの処分だが――」

一条が話を切り替えて神楽たちを見た。

「たしか校則だと停学以上が相当とされる場合は職員会議にかけなくてはならなかったはずだ。逆にそれ以下なら生徒会で処分を決定できる。そうだったな？」

神楽は一応校則を把握していたようで、一条に確認するように問いかけた。

「そうだ。本来なら今までの処分も合わせて職員会議送りで行きたところだが、あいにく過去の事件の大半は校則によって時効が成立してしまっている。よって、今回の処分は――」

一条はそこで言葉を切り、神楽たちの顔を順番に見つめた。

「って、会長！ み。さんじゃないんだから、無意味なタメはやめるといつも言っているでしょっ！」

沈黙に耐えきれず、なつきがどこから取りだしたのか、一条をハリセンでひっぱたいた。

「む、やはりダメか。まあいい、今回の処分は、校舎裏の草むしりだ。だいぶ長いこと放置されていて、そろそろ生徒会でやらねば、と思っていたところだし、ちょうどいい、キミらにやってもらおう。それに加えて、今後騒動を起こさない確約書を出してもらおう。それを破れば、次はないと思ってもらえればいい」

一条は冷静に神楽たちに言い放つと、ちひろに拘束を解くように言った。

確約書を書かされた神楽一味は、ひとまず釈放されたが、処分から逃げられないよう、今日の放課後に草むしりをやらせることにした。もし逃げたらその時点で停学が相当として職員会議にかける、と脅しをかけて。

「ところで、いつ魔法書はくれるのじゃ？」

生徒会室を出たちひろとみちるに、フラールが話しかけた。

「今はお昼休みで学校が終わらないから、まだ無理よ。そうね、今は部外者のあなたが見つかると思わないうから、最初にあなたが現れたあの部屋にでも隠れていて。帰るときになったらテレパシーで呼ぶから。あなたも魔法使いなら使えるわよね？」

ちひろは首を振ってまだだ、という意思を示すと、フラールにたずねた。

「ああ、封印される前はまだ修行中の身だったが簡単な攻撃魔法やテレパシー、レポートくらいは使えるぞ。うむ、承知した。ではあそこに潜んでおるからあとで会おう」

フラールは頷くと、レポートでその場から姿を消した。

そんなこんなで放課後。

「ほらっ！ キビキビ草むしりしなさいっ！」

監視役のなつきと雲雀のゲキが飛ぶ。

「くそっ……なんだってこんなにあるんだよ……しかも暑い……」  
観月がしゃがんで草をむしりながらボヤき声をあげる。

「……ってか、神楽はなんでそんなに涼しい顔をしてるんだ……」  
普段は物静かな岩本も額に汗をかきつつ草をむしり、神楽のほうを見てボヤク。

「ふん、この程度の暑さでへばるとは、お前たちもまだまだだな。」

別にたいしたことはないではないか」

当の神楽はなぜか草むしりをせず、校舎の壁に寄りかかって皆を眺めていた。

「くおらあ、神楽あ！ あんたが一番やらなくてどうするのよ！ あんたが全ての元凶でしょうがっ！」

サボりを発見した雲雀が飛んできて神楽を怒鳴った。

「ちっ……めんどくせえな。この神楽、生徒会ごときに捕まるなど不覚を取ったものよ……」

神楽はボヤきつつも、仕方なく草むしりを始めた。

「猿義流忍法、えんぎ『除草術』」

猿義はなにやら大仰な技を叫ぶと、地面を思い切り殴りつけた。

すると、猿義の周囲の草が衝撃で弾け飛んだ。

「こーら、そこのおサル！ 楽をしようとしなくてマジメに手で抜きなさい！」

当たり前だが、草と一緒になつきの怒号も飛んだのだった。

一方、その頃――

（フラールさん、フラールさん、聞こえる？）

帰る準備の整ったちひろはテレパシーでフラールを呼び出した。

（うむ、聞こえておるぞ。時間か？）

どうやら届いているようで、フラールから返答が聞こえてきた。

（ええ、行きましょう。裏門に来て。正門だと下校中の人がいて面倒なことになるから）

ちひろは場所を指定すると、通信を切って峻佑やみちるとともに裏門へ向かったのだった。

**VOL・34：秘密が秘密でなくなる日（後書き）**

ずっと隠してきた秘密を話し、2人はすっかりできたのだろうか？  
次回、フラールとジェンの過去が明かされる。

**VOL・35：邂逅（仮）**      お楽しみに！

評価および感想などもお待ちしております！

「じゃあ、行きましようか。飛ぶから、掴まって」

裏門にて合流した峻佑たち3人とフラールは、そのままテレポ―トで松海市内にある真野家所有の洋館に向かった。

「はい、これ。約束の魔法書。あたしたちが使ってる原本よりも少し載ってる種類の少ないコピー版だけど、外されてる物はどれも並大抵の魔力じゃ使えないものばかりで、今の時代には使う必要のない魔法<sup>もの</sup>だから、あまり気にしないで使っていただければ」

ちひろは倉庫から比較的保存状態の良い書を選んで持ってきて、フラールに渡した。

「うむ、感謝する。チヒロ、ありがとう。では、私の用事も済んだ。ジェンはすでに亡くなっていたとは言え、魔法書を手できただけで満足じゃ」

言いながら、本当に満足そうに笑みを浮かべるフラール。と、

「フラールさんはこれからどうするんですか？」

峻佑が不意にたずねた。

「そうじゃな……私も長いこと封印されていたおかげでまだ寿命は余るほど残っておることじゃし、時代の流れによって変わってしまった世界を見て回るとするかの。そうと決まれば旅立つでしょう。世話になつたな、さらばじゃ」

フラールはちひろたちに礼を言っ、屋敷を出ていこうとした。と、そのとき。

「待って、フラールさん」

突然みちるがフラールを呼び止めた。

「なんじゃ、ミチル？ 何か話し足りないことでもあったかの？」  
フラールは振り返りながらみちるにたずねた。

「ご先祖様——ジェン」マノールに会いたいつて言っていましたよね

？ この屋敷の地下迷宮の先に、ご先祖様の意識が宿った銅像が置いてあります。どうせなら、会って行きませんか？」

その提案を聞いた3人は、三者三様の反応を示した。

「あつ、それいいわね。行きましようよ、フラルさん」

「またあの迷宮を進むのか……不穏なトラップの数々が思い出されるな……」

「なに、それは本当か？ ならば旅立つ前には是非会っておきたい。連れて行ってくれまいか？」

かくして4人は屋敷の地下迷宮へと入っていった。

「迷路の構造やトラップの種類が変わってるのはどういうことだ——  
っ！」

峻佑が力の限り叫んだ。

「叫んでも何も変わらないよ、峻佑くん。それに、どんなトラップが来ようとも、ここには魔法使いが3人もいるんだから、よほどのことがない限りは大丈夫よ」

ちひろが峻佑をなだめながらも自信に満ち溢れた笑みを見せる。

「ああ……だけど、さっきからおかしくないか？ 明らかに以前より殺傷性の高いトラップを仕掛けてると思うんだけど。壁から飛び出る槍とか、どこの宝の洞窟だよって思ったよ」

峻佑が苦笑しながらここまでの道筋を振り返る。

以前より通路が広くなったことに首を傾げるヒマもなく、広くなったぶん巨大化した転がる岩のトラップ、床の模様と思つて踏んだところ、壁から槍が飛び出し、目の前を横切つて反対の壁に刺さつた——などなど、以前探索したときより危険度は数段上がっていた。「まるでご先祖様がフラルさんに会いたくないように思えてきたわ……前はあった“声”が今回はないのも気になるし……あ、最深部へ続く回廊よ。ここは前と変わってないのかしら」

いろいろ考えつつも、最後の回廊にたどり着いた一行だったが……  
「スイッチが……増えてる!？」

ちひろの驚きはもつともであった。以前は本物1個に偽物9個だったのが、今回は壁一面にスイッチが並び、その総数は20とも30とも見えた。

「落ち着け。前は観察していたら偽物は消えたんだ。きっと今回も……」

峻佑は前回のことを思い出して、慌てるちひろたちを落ち着かせようとしたのだが……

「あれ、また壁に何か文字が書いてあるわよ。なににな……」余計な客人はいらん。腹いせにトラップを難しくしたのによくもここまで来やがったな。しかし、最後のスイッチトラップは観察していても無駄だ。本物を見破ってみせる”ですって”

みちるが壁の文字に気づいて読むと、どうやらジェンからのメッセージだったらしい。すると、

「余計な客人とはすなわち我のことじゃな。ジェンめ、我を無理やり封印した手前、顔を合わせるのは辛い。じゃが、この程度でくじけるほどジェンへの恨みと今も残る尊敬の念は軽くはない。真実は常に1つ。本物は……これじゃ！」

フラールはポジティブに考え、どこかのちびっ子名探偵のようなことを言った後、スタスタと大量のスイッチの中のひとつを選ぶと、躊躇<sup>ためら</sup>うことなく一気に押した。すると、見事正解を押したらしく、扉が現れた。

「おお、フラールさんすごい！」

3人は拍手しながら扉の前で待つフラールのところへ駆けていった。

《ついに来てしまったか……途中で引き返させるためにトラップの難度を上げたのに、全てを突破するとは、流石<sup>さすが</sup>だな》

ジェンの銅像から、以前と同じように声が聞こえてきたが、その声色は以前とは違って少し疲れたようだった。

「ジェン殿……お久しぶりです。あなたに弟子入りを志願し、断ら

れた挙げ句500年もの長い眠りにつかされたフラール「ボーデンです。覚えておいでですか？」

銅像の前に跪き、ジェンに挨拶したフラールだったが、

「よう、フラール。元気そうで何よりだ。俺の末裔に会ってここに来たと言うことは、俺の遺した魔法書を手に入れたのだな。壁のメッセージはウソで、トラップの危険度を上げたのはジョークのつもりだ。本当は俺もいろいろ話したいことがある。だが、この状態は話しづらいな。すまぬが少年よ。カラダを貸してもらってもよいかな？」

ジェンは意外なほど明るい声でフラールに呼びかけると、突如として銅像から幽体を現し、峻佑にたずねた。

「フラールさんを連れてきたのはオレたちですし、話したいこともいっぱいあるでしょう。好きに使ってください」

峻佑がそう言った直後、ジェンの幽体が峻佑に乗り移った。と、

峻佑の顔がヨーロッパ系の外国人風に変化した。

「ジェン殿……！」

フラールの驚きようから察するに、ジェンの若かりしころの顔らしい。

「俺が流行病で死んでからもうかれこれ350年くらいあの銅像に幽体を宿らせていたから、ずいぶん久しぶりの生身の肉体になるなフラール、率直に聞こう。俺に封印されたことをまだ怒ってるか？」

峻佑の体に移ったジェンは、少し身体を動かして感触を確かめると、単刀直入にフラールにたずねた。

「あなたの末裔、チヒロとミチルに会うまでは、正直恨んでました。こんなにも真剣に弟子入りを志願していた私をどうして、と。しかし、2人に会って、あなたの遺した魔法書を手に入れることができただけでなく、こうしてあなたと再会できた。それを思ったら恨みなどどこかへ行ってしまいました」

フラールは少し惚けた顔でジェンの問いに答えた。

「そうか。それなら安心した。あのときは後先考えずに封印魔法を

使ってしまったが、後からそれを後悔していたんだ。しかし、あの封印魔法は一度発動し、封印が完了してしまえば術者自身にさえ簡単には解けない、危険な魔法なんだ。だから、2人が持っている魔法書の原本にはそのオリジナルではなく、少し効果を弱くしたものを載せてある。バナナマスター08の封印に使ったのはその魔法だ。今さら謝っても遅いかもしれないが、本当にすまなかった。詫びと言ってはなんだが、フラール。俺はいつでもここにいる。普段はあの銅像に宿っているが、話ができる。何か困ったことができれば、いつでも来てくれ。もうわざわざあの迷路を抜けなくてもいいように庭にお前専用の、この部屋に直接通じる転送魔法陣を作っておくから」

ジェンはフラールに対して謝り、頭を下げた。

「ジェン殿……！ 頭を上げて下さい……私などに頭を下げられては困ってしまいます……！」

フラールは他にも言いたいことは山ほどあったろうが、すでに顔が涙でくしゃくしゃになっており、言葉も途切れ途切れにしか聞かえなかった。

「本当にありがとう。チヒロたちには感謝しても足りないな」

ジェンとの話も済み、落ち着きを取り戻したフラールと峻佑たち3人は、屋敷の外に出てきていた。すでに陽は落ち、暗くなり始めている。

「では、今度こそ当て処<sup>ど</sup>のない旅に出るとしようかの。この場所にはいつでも戻ってきていいと言われたが、修行のためにはあまりジェン殿に頼っていてはいけなから、たまに戻るくらいにしておこう。では、さらばじゃ」

フラールはそう言い残すと、テレポートで姿を消した。

「行っちゃったか……かなり慌ただしい人だったな。まあ、明日からはまた生徒会治安対策チームの活動を頑張ろうな、ちひろ、みちる」

「そうだね、頑張ろう。きっと神楽先輩たちはあれくらいじゃ懲りないだろうから。……あれ、もうこんな時間なの？ 遅くなっちゃってるから、一気に飛ぶよ！ 掴まって！」

フラールを見送った峻佑たちは、だいぶ時間も遅くなってるのに気づき、テレポートを使って帰宅するのだった。

## VOL・35：邂逅（後書き）

かくしてフラールは峻佑たちの前から姿を消した。

神楽たちもなりを潜め、生徒会にも一時の安息が訪れたのだろうか？  
次回は、序章以来すっかり出番のなかったあの人たちが帰ってきます。

VOL・36：両親の帰宅騒動（仮）      です。

感想や指摘、質問などお待ちしております。 ちょっとしたことでもいいので、どしどし送ってやってください。

VOL・36：BACK HOME（前書き）

サブタイトルだけ見ると何か誤解を受けそうですが、あくまでこの小説は『幼なじみは魔法使い！？』です。野球小説ではないので安心して本編へお進みください。

7月に入ったある日、峻佑の携帯にメールが届いた。

『だいぶ出張が長引いていたが、近いうちに帰れそうだ。ところで家は片づいているのか？ あんまり散らかしておかないようにな』

父親からのそんなメールに対し、峻佑は、

『わかった。今はちひろやみちると一緒に過ごしているから家のことは心配いらない。気をつけて帰って来てな』  
と返信した。

それから数日後の夕方、峻佑は勉強を終えて居間でテレビを見ようと部屋を出た。

と、ちょうどその時、掃除機をかけ終えたちひろが掃除機を階段の上においたまま階段を降りていくところだった。

峻佑は掃除機のホースを跨いで階段を降りようとしたのだが、跨いだつもりが跨ぎきれていなかったようで、バランスを崩して階段から転落してしまった。

「やべっ……ちひろ、避けるっ！」

峻佑は慌てて少し下にいるちひろに叫んだが、ちひろは「え？」と振り向いただけで、避ける時間はなく、峻佑と一緒に階段を転げ落ち、ドガシャンという轟音が響いた。ついでに、足をひっかけた掃除機まで後から落ちてきて、峻佑の頭に直撃した。

「いってえ……ちひろ、ゴメン。大丈夫……か……」

峻佑はすぐに掃除機を振り払い、起き上がるうと頭を持ち上げながらちひろにたずねた。と、その時だった。

「ただいま。駅で母さんと会って一緒に帰ってきたぞ」

玄関のドアが開いた気がしてそちらを見ると、ちょうど峻佑の両親が帰宅したところだった。

「し、峻佑…… お前何やってるんだ！」

ドアを開けてみたら息子が隣の家の幼なじみを押し倒している格好に出くわした父親は、峻佑を怒鳴りつけた。

「あらあら、いつの間にかそんな仲になってたのね」

その後ろから母親も現れ、押し倒した形のまま固まってる峻佑を見て嬉しそうな表情をしていた。

「ち、違う！ これは事故だ、事故なんだ！ なあ、ちひろ？ そうだよな？」

峻佑は慌ててちひろの上から退き、弁解を始めた。しかし、ちひろは峻佑の顔を見て軽く笑みを浮かべると、

「もう、峻佑くんってば……こんなところでやらなくても……」

などと顔を赤らめながら言うものだから、父親がすぐさま食いついた。

「し、峻佑！ まさかお前、高校生の分際でお嬢さんを傷物にしたんじゃないだろうな！」

そんなふう慌てふためく父親をよそに、母親は、

「あらまあ、大変」

と、言葉のわりには大変だとは思ってない表情で言うだけだった。

「ち、ちひろ！？ 何言ってるのさ！ オヤジ、信じてくれよ！」

オレはまだちひろにもみちるにも手を出しちやいない！」

峻佑は必死に弁解するも、

「“まだ”？ つまりはいずれ手を出すってことか？ まだお前には早い！」

父親は変なところにガンコなようで、峻佑の弁解の一部分を曲解して噛みついてきた。

「そ、そういう意味じゃない！ 言葉のアヤを曲解するな、このバカ親父！」

「なんだと！？ 親に向かってバカとは何事だ！」

ついには親子ゲンカに発展してしまった今回の騒動に、ちひろは

「ゴメンゴメン。ちょっと峻佑くんをからかってみたただだよ。おじさま、おばさま、大丈夫です。あたしたちはそんな関係じゃありませんから」

半ば笑いながら口を挟んだが、すでにヒートアップしている2人は聞いていなかった。

「バカにバカと言って何が悪い！」

「何度もバカバカ連呼するな！ それに、私がバカならその息子のお前もバカだぞ！」

もはや小学生のケンカにしか見えない光景にも、母親は「あらまあ、でもいつものことかしらね」と気にする素振りも見せずに家の中に入ってしまった。

「とにかく、止めないと……ねえ、2人とも、話を——」

ちひろは親子ゲンカをどうにか止めようと、睨み合いを続ける峻佑たちの間に入り込もうとした。だが、

「うるさい！ 引っ込んでくれ！ 今はこのバカ息子を更正させねばならん！」

「お望みなら何回でも言ってやるよ！ この、バカ親父！」

どちらも話を聞く気はゼロで、2人の間に立つたちひろは邪魔だとばかりに突き飛ばされた。

「……あたしのイタズラが発端とはいえ、ちょっと2人ともヒートアップしすぎかな。少し冷静になってもらわないと。でも、いきなりやるのはなんだし、様子を見ようかな」

突き飛ばされたちひろは階段に座り込み、様子を見ていたが、落ち着きそうにない2人に、ついに立ち上がり――

「あーもう！ 2人とも一旦落ち着いて話を聞いて！」

ちひろは魔法で空気の塊を発生させると、相変わらず口汚い罵りあいが続けていた峻佑たちにぶつけた。

「いたっ！ 何するんだよ、ちひろ！ そもそもちひろが原因だろ！？」

無反応の父親に対し、峻佑はちひろにターゲットを変更しなおも

ヒートアップを続ける。

「峻佑くん……落・ち・着・い・て？」

ちひろは手を握ったり開いたりしながら、笑顔で峻佑に頼んだ。

「ひゃ、ひゃいっ！ オ、オヤジ、一時休戦だ！」

峻佑はちひろの笑顔に何か本能的な危機を感じ取り、慌てて従った。

「まあ、私もつい少しアツくなりすぎたが、息子とケンカをするために3カ月ぶりに帰ってきたわけじゃない。しかしなんだ、私たちがいない間お嬢さんたちと一緒に暮らしていたようだが、尻に敷かれているようだな？」

父親もすっかり落ち着きを取り戻し、今のやりとりで2人の力関係を打破したらしく、ニヤリと笑みを浮かべながら峻佑の耳元でたずねた。その様子はとても数分前まで口汚い罵りあいをしていた親子とは思えなかった。

「うるさいな、ほっといてくれよ」

峻佑はブツクサ文句を言いつつも、いつまでも玄関で騒いでいるのもなんなので、父親と居間に入っていた。

「なるほどな。真野さんのご両親も旅行に行ってるから一緒に暮らしていたのか」

父親は峻佑から事情を聞いて、納得の表情を見せた。

「で、峻佑はちひろちゃんとみちるちゃんのどっちがお気に入りなの？ やっぱさっき押し倒してたちひろちゃん？」

なにが“で”なのかはわからないが、唐突に母親が峻佑に訊ねてきた。

「母さん、その問いには答えられない。どっちも大事な幼なじみだから、選べないよ」

峻佑は軽く首を振ると、母親の目を見て真剣な表情で答えた。

「なんだ、つまんないの。ついに峻佑にも春が来たと思ったのに」

母親はあからさまに残念そうな顔をし、峻佑は苦笑するしかないのだった。

翌日。

朝、峻佑たちが起きると、すでに両親の姿はなく、テーブルに書き置きが2枚置いてあった。

『今朝方緊急で呼び出しがかかったのでまた母さんともどもしばらく家を空ける。お嬢さんたちと家のことは任せたぞ。高校生なんだから節度を守って暮らしなさい。』 父

『次に私たちが帰ってくるのはいつになるかわからないから、帰るまでにちひろちゃんでもみちるちゃんでもどっちでもいいから関係を進展させとくように』 母

「いったい何しに帰ってきたんだか……慌ただしい両親だぜ、全く。つてか、母さんは余計なお世話だったの」

書き置きのメモを読んだ峻佑は、ため息をつきながらつぶやいた。

かくして、再び3人だけの生活が始まるのだった。

**VOL・36：BACK HOME（後書き）**

いったい峻佑の両親は何しに帰ってきたのか。

そんな疑問を抱きつつも、峻佑たち3人だけの生活が再び始まる。

次回は、さとみの教育実習の最終日の出来事。

VOL・37：教育実習最終日・そして……（仮

感想などお待ちしております。

## VOL・37：教育実習最終日とその夜

梅雨明けも近づいてきた、暑いある金曜の昼休みのこと。

「そういえば、藍沢先生の教育実習っていつまでだっけ？」

現国の授業が終わって実習生のさとみが本来の担当の野村という引退間近のジジイと一緒に出ていくのを見てから、峻佑はちひろにたずねた。

「たしか……今日じゃなかった？」

ちひろも日程を思い出すように少し中空をボンヤリ眺めてから言った。

「あー……今日までか。んじゃあ——」

確認するように峻佑が繰り返し、何かを言おうとした、そのとき。「なにっ！ さとみ先生今日までなのか！？」

その話が聞こえていたのか、耕太郎が血相変えてすっ飛んできた。「うん、今日までね。でも、普通の実習生はもうとくに終わってるはずなのよ？ 姉さん、いや藍沢先生は来るのが少し遅かったから今日までになってるみたいね」

つつい身内なので姉さんと呼んでしまったものの、学校であることを思い出して言い直したちひろは、大きく頷いて耕太郎に事情を説明した。

「そうなのかー。んじゃあ帰りのHRで最後ってわけか……」

耕太郎はよほどさとみがお気に入りだったのか、ものすごく残念そうにつぶやくのだった。

——なんだかんだで午後の授業も終え、帰りのHR。

「と、言うわけで藍沢先生は今日で実習を終えて大学へ戻られる。最後に言っておきたいこととかはあるか？」

脇野が教壇の端っこから教室内に呼びかけると、晴香が立ち上が

って、

「藍沢先生、ありがとうございます！ 大学へ戻っても頑張ってくださいね！ 来年か再来年、この学校に戻ってこられるのを待ってます！」

予め混乱を避けるために峻佑とちひろがクラスメートに声をかけておき、代表して委員長——晴香にみんなの想いを伝えてもらうように根回ししておいたのだが、その作戦が大当たりしたらしく、パニックにならないどころか、最初にさとみが来たときは違ってあまりにも統率の取れた姿に脇野は驚き、さとみに至っては感激のあまり涙を流しかけていた。

「……そ、それじゃ、藍沢先生からは最後に何かありますか？」

しばらく呆けていた脇野がハツとしたように今度はさとみに話を振った。

「えと……皆さん、今日までありがとうございました。正直、実習中の身なので至らない点は多々あったでしょうが、皆さんのおかげでやり切ることができました。わたしは大学に戻って教員免許を取るために勉強を続けてきつとこの高校に帰ってきます。だから、皆さん、一人も欠けることなく進級してくださいね」

さとみがそんな挨拶をして最後に一礼すると、クラスの半分くらいが泣いてしまったのだった。

「ちひろ、泣かなかったね。やっぱり実のお姉さんだから？」

放課後、ちひろのところに、先ほどのさとみの挨拶で大泣きしたのか目を真っ赤にした晴香がやってきて話しかけた。

「うん、まあね。結婚していまは離れて暮らしているとはいえ、会おうと思えば結構簡単に会いに行けるし。それに、つい半年前まで一緒に育ってきたんだもの。このくらいで泣きはしないわよ。まあ、晴香みたいに泣く人の気持ちかわからないわけじゃないけど」

ちひろはケロツとした顔でまだ泣きそうな顔をしている晴香をなだめてあげるのだった。

帰宅した峻佑たちは、夕飯の支度をしていた。もともと、主にちひろとみちるが料理を担当し、峻佑はその間に風呂を洗ったり、食卓を片づけたりなどの雑務をやるのだが。

今日のメニューはスパゲティらしい。麺を茹で、ソースや具を用意していた、そのとき。玄関のチャイムが鳴り響いた。

「はいはい、どちらさまですか？」

皿を準備していた峻佑が小走りで玄関へ向かい、扉を開けると――  
「こんばんは、遊びに来たよ」

そこにいたのは、さとみとその夫と思われる若い男だった。

「あれ、さとみさん、いらっしやいッス。ウチに来るのはずいぶん久しぶりですね。とりあえず上がってください」

峻佑は突然のさとみの来訪に驚きつつも、家の中に招き入れた。

「ちひろやみちるは知ってるだろうけど、改めて紹介するわね。わたしのダンナの一樹<sup>かずき</sup>くん。23歳の公務員よ」

人数が増えたのでスパゲティを追加で茹でて、出来上がった夕食の食卓を5人で囲みながら、さとみが峻佑のために隣にいる夫を紹介した。

「あ、どうも初めまして。市原峻佑です」

「初めまして峻佑くん。ボクはいまさとみから紹介された、藍沢一樹だ。いきなり押しかけてしまってすまないね。迷惑じゃなかったかな？」

「いえ、大丈夫ですよ。お気になさらず」

峻佑と一樹が互いに自己紹介し、和やかに食事は進んでいった。

「そういえば、姉さん。教育実習お疲れさま。学校はどうだった？  
みんな食べ終わり、くつろいでいる中でちひろがさとみにたずねた。

「そりゃ、楽しかったわよ。みんないい子たちばかりで苦労もなかったしね。まあ、初日のアレは少し驚いて1人——沢田くんだった？——ぶっ飛ばしちゃったけど……」

さとみはこの実習期間を振り返ってそうまとめた。

「ああ、うん、あったねそんなこと。あたしたちはまだクラスの中では魔法のことは秘密にしているのに姉さんってば普通に使ってるんだもんなあ」

ちひろが思い出したかのように以前もこぼしたグチを再び言い始めた。

「もうそのグチは聞き飽きたわよ。さて、実習の間は我慢してたけど、晴れて終わったことだし、お酒解禁しようっと」

さとみはあからさまにちひろのグチに対して嫌そうな顔をした後、ハツと気づいたかのように持ってきたカバンの中から大量の酒類を取り出し、一樹と乾杯して飲み始めた。

「お、お姉ちゃんってばこんなところで酒を飲む気！？ 一樹義兄さんまで一緒になって……ってもう呑んでるし！」

みちるが驚いて止めようとしたが、すでに呑み始めた2人には届かなかった。

「もう、そんな力太いこと言わないの。どうせなら3人も一緒に呑む？」

さとみは早くも酔い始めているのか、トロンとした目でちひろたちにも酒を勧め始めた。

「あ、ありがと——じゃなくて！ 姉さん、あたしら未成年よ！？ 仮にも教職を目指そうって人が何を言い出すのよ！」

酒を渡された3人はノリで開けそうになったが、プルタブに手をかけた状態でちひろが怒鳴った。すると――

「んー？ わたしの酒が受けられないってかあ？」

さとみが豹変した。完全に目が据わっていて、さっきまで上機嫌に話していたのがウソのように顔をしかめている。

「いやあのだからオレたち未成年――」

さとみの勢いに気圧されつつも峻佑が断りを入れると、

「ガタガタ言ってんじゃないよ！ 吞め！」

さらに事態を悪化させてしまったらしく、それまでソファ―に座って呑みながら話していたのを、立ち上がった3人に迫りながらなおも「吞め」と言ってきた。

「マズいわね、こうなったら……」

ちひろがジリジリと後退しながらつぶやき、

「何かいい手でもあるの？」

峻佑も下がりがりながらちひろにたずねる。

「……逃げるわよっ！ 父さんや母さんがいない以上、ああなった姉さんは止めらんないわ！」

ちひろの叫びを合図に3人は脱兎のごとく逃げだそうとした――のだが。

「ふぎやつー？」

居間の扉が開かず、3人揃って激突した。

「わたしから逃げようたって無駄よ」 さあ、覚悟はできたかしら？」

もはやどここの悪役かと言うような言葉とともに迫ってくるさとみに対し、

「ちひろっ、テレポートで逃げられないのか！？」

峻佑は居間の中をジリジリと逃げながら最後の望みをつなぐ可能性にかけたのだが、

「ダメ、すでに封じられてるわ！ 姉さんはこういう補助系の魔法は大得意だから……」

そうこうしている間に、峻佑たちのすぐ後ろにさとみが迫っていた。

「か、一樹さんは！？ 奥さんの暴走を止めて——」

峻佑は魔法がダメなら物理的に止めてもらおうと一樹のほうを見たが、すでに酔いつぶれてソファで眠っていた。

「一樹くんは吞めるんだけどすぐ潰れちゃうのよ。だ・か・ら……あんなたちをお供にするの——」

「わあああ——！！！」

## VOL・37：教育実習最終日とその夜（後書き）

注：未成年の飲酒は法律で禁止されています。絶対にマネをしないでください。

お酒は20歳になってから！

で、今回の話は次回の前半まで続きます。ひとつにするにはちと長く、二つに分けたら短くて物足りない、にっちもさっちも行かない状況に陥ったため、こんな編成になりました。

次回、VOL・38：二日酔いとアンチ生徒会の再襲来（仮）

評価および感想待ってます。どんな細かいことでも構わないので、書き込んでくださると嬉しいです。

VOL・38：期末試験近づく

——翌日。

「うーん……頭が痛い……」

ちひろとみちるは揃って無理やり酒を飲まされたことによる二日酔いで完全にダウンしていた。

峻佑もかなりの量を飲まされたものの、2人に比べると回復が早く、どうにか動いていた。

「やれやれ……動けるのはオレだけか。酔いつぶれたみんなの看病をしないとな」

部屋で寝込んでいるちひろとみちる、それと客間で寝ているさとみと一樹の看病のために峻佑は奔走していた。

「さとみさーん、大丈夫ですか……って、ええ!？」

客間の扉を開けてさとみの様子を見ようとした峻佑は、開けた瞬間に絶句した。

「んー？ なぁに?？」

そう答えたさとみの服装はなぜか半裸だった。どうやら酔って寝ているうちに脱いでしまったらしい。

「なぁに？ じゃないですよ！ 服を着てください、服!」

峻佑は慌てて回れ右して客間の扉を閉めると、ドア越しに呼びかけた。

「あはは、ゴメンゴメン。わたしってどうも寝ているときに服を脱ぐクセがあるみたいなんだよね」

さとみは笑いながら部屋から出てきて弁解したが、まだ半裸だった。

「だから服を着てください！ 一応、オレも年頃の男子高校生なんです……」

峻佑は顔を真っ赤にして、後半を少し口ごもりながらさとみに言った。

「ふん、峻佑くんも大きくなったねえ……ふふっ」

さとみは軽く笑うと、半裸を見ないように顔をそらしている峻佑の手を掴んで自分の胸に触らせた。

「うわっ！ 何するんですかさとみさん！ ってか、一応結婚してて人妻なんですよ！？ 何やって……」

峻佑は焦って手を振り払いながらさとみに文句を言いかけたのだが、途中でその表情が恐怖に歪んだ。

「どうしたの、峻佑くん？」

さとみは首を傾げて峻佑にたずねたが、峻佑はただ震えながらさとみの後方を指差しただけだった。そこでさとみが首を傾げつつも振り向くと――

「姉さん……峻佑くんも、いったい何をやってるの？ そんな格好で……」

――そこには、修羅と化したちひろとみちるがいた。いつもはちひろに比べると穏やかなみちるでさえもその表情は怒りによって引きつっている。

「いやあのこれは……」

必死に言い訳を考えようとするさとみを尻目に、

「これはさとみさんがいきなり迫ってきたんだ！ オレは何にもやましいことはない！」

峻佑が早口でそう言い訳して逃亡を図る――が、逃げ道を見えない壁でふさがれ、峻佑はひっくり返った。

「やましいことがないなら逃げる必要ないよね？ なんで逃げようとしたの？」

みちるがゆっくりと峻佑に近づく。その目はいつものみちるではなかった。完全に怒りでトリップしている。

2人の表情が怖いからだ、と峻佑は言いかけたが、それを言うとさらに事態が悪化しそうなので言わないでいた。

「何も言わないで。何を言っても言い訳にしか聞こえないから、問答無用でぶっ飛ばすよ。」

峻佑とさとみを挟み撃ちする形で囲んだ2人は、何かの魔法を使ったのか、手に光るものを構えてその包囲網を徐々に狭めてきた。

「さとみさん、どうにか逃げられないんですか、これ？」

峻佑は最後の望みをかけてさとみに問いかけたが、

「2人のほうがはるかにチカラが強いからわたしじゃ逃げ出すこともできないわよ。昨日みたいに封じるためには使う前にこつちが使わないとならなかったし。峻佑くんこそずっと2人と一緒にいたんだから止められないの？」

さとみはさとみで首を振って否定し、峻佑に望みをつなこうとする。

「ああなったらオレでも止められない——」

「——何をボソボソ内緒話してるの？ お仕置きを受ける覚悟はできた？ まあ、出来てないって言ってもやるけれど」

いつのまにかちひろたちは峻佑たちの目の前にまで接近していて、ニヤリと笑うと、その手の魔法をぶつ放した。

「ぎゃあああ——っ！ オレは悪くねえ——っ！」

「きゃああ——っ！ ちひろ、みちる、ごめんってば——っ！

もうやめてえ——！」

——その日、市原家の窓から激しい光が発せられるのが目撃され、近所の話題の的になったのは言うまでもない。

週明けの月曜。期末試験が近づいてきたということで、峻佑たちは生徒会の緊急会議に呼び出された。

「——というわけで、中間試験の際の神楽一派の悪事を繰り返させないために、先生方から依頼を受けて我々生徒会で警備及びパトロールを実施することになった。これが各自のシフトだ。各々、気を引き締めて当たってほしい」

一条はプリントを回しながら役員たちに告げた。

「なお、基本的に2人1組だが、1年生の市原君たちは加入してから間がなくて不慣れなこともあるし、何より姉妹と一緒にいたほうがやりやすいだろうと言うことでそこだけ3人1組にしてある。頑張ってくれ」

全員にプリントが行き渡ったところで、一条は思い出したようにつけ加えた。

「警備か……神楽先輩たちはまたやるつもりなのかな？」

峻佑は警備シフトが書かれたプリントを見ながらボソツとつぶやいた。

「前回捕まえたときに、次はないって警告したはずだけど、たぶん懲りてないと思う。あたしたちはまだ“アンチ生徒会”の全貌を知ってる訳じゃないから、どこに連中の仲間が潜んでるかもわからないし、連中の能力も未知数だから、もしかするとあたしらに捕まらない方法を研究しているかもしれない。とにかく、しっかり警備しましょう。——生徒会治安対策チームの威信にかけて。まあ、加入して1カ月のあたしらが言っても説得力に欠けるけど」

峻佑のつぶやきに応えるように、ちひろが峻佑に話しかけた。

「あ、ああ。この表を見る限り、警備の主力はオレたち3人だ。やつば会長をはじめとして先輩たちは忙しいみたいだから、オレたちが頑張らないとな」

峻佑は自分たちに割り当てられたシフトの多さに、驚き戸惑いながらも、やる気を見せていた。

「主に警備に当たるのは朝の始業前、昼休み、放課後ね。このうち放課後はほぼ毎日私たちの担当、朝も半分くらいは私たちね。そのぶん昼休みはゆつくりできるみたい。でも、あの先輩たちに立ち向かうには、私や姉さんの魔法が必須になるよね……」

みちるが自分たちのシフトを確認しつつ、求められてるのは魔法なんだと推測し、少し落ち込んだ。

「そうかもしれないけど、グチっても始まらないわよ。文句は神楽先輩たちにぶつけましょ」

すでに開き直れているのか、ちひろがみちるを励ました。

「姉さん……そうね。でも、相手は魔法使いじゃない一般人だし、どこまでやるかは考えないといけないよね……？」

みちるは変なところでマジメなのか、相手を気遣っていた。

「悪人に情けは無用よ、みちる。特に神楽先輩みたいな学校の絶対悪には優しいさんかいらない。二度と悪事を働こうなんて思わないくらい叩きのめすわよ」

ちひろはニヤリと笑って、気合いを入れるために片方の拳でもう片方の手を叩き、峻佑はそれを見て苦笑していた。

翌朝、早めに登校した3人は、早速職員室周辺を中心にパトロールを始めた。期末試験は次の月曜からなので、残すところあと6日、会長によるとそろそろ問題を作り始めているらしい。

「会長が言ってたけど、基本的に試験問題のデータは先生方のパソコンにパスをかけて入れてあるみたいだから、安全だと思う。でも、相手はあの神楽先輩だから100%の安心はない。まあ、職員室に出入りする人をチェックしていけばかなり防げるはずだよな」

峻佑は職員室周辺の壁を丹念に調べて扉以外の侵入経路がないか調べながら、そうつぶやいた。

と、予鈴が鳴り響き、HRに向かう教師たちが出てきた。

「これで今朝の見回りは終わりだな。2人とも、戻ろうか」

峻佑がそう声をかけると、  
「そうね。一応、裏をかかれないために、扉に不審人物チェッカーをかけとくわ」

ちひろは辺りを見渡して、誰もいないのを確認すると、教職員以外の人物が通つたらすぐにわかる魔法をかけた。

「これで私たちが警備に当たってない時間でもしっかり守れるね」  
みちるが笑いながら話し、3人は教室に戻っていった。

——約30分ほど時間は戻って、‘アンチ生徒会’アジト。

「くっそー、生徒会がパトロールに当たってる上にあっちには例の魔法使い姉妹がいるんだよな。こんな状態でどうやっていつものアレをやるつもりだ、神楽？」

観月がやられた、といった表情をして神楽にたずねた。アレとは無論、試験前に問題データを盗み出すことである。

「我々の目的は連中の目を欺き、職員室に潜入し試験問題のデータを盗み出すこと。いつもであれば誰もいなくなる時間を狙って職員室に侵入しパソコンをクラックしてデータを盗み出していたが、今回は生徒会が警備に当たる以上それは難しいだろう。そこで……」

神楽には何か秘策があるらしく、ヒソヒソ話で作戦を伝えた。

「なるほど、それは行けるぞ。だけど、ここまで来るともう完全な悪役<sup>ヒール</sup>だよな、おれら」

観月が苦笑しながら言うと、

「何を今さら。我々は退屈な学校を楽しむために、悪役<sup>ヒール</sup>になるのを覚悟で‘アンチ生徒会’を結成したんじゃないか」

神楽はそんな観月を諭すように改めて‘アンチ生徒会’の理念を語った。

「そうだったな。そんじゃま、パーツと派手にやらかしますか！」

観月が気合いの一声を上げ、今回の作戦を実行する神楽と2人だけでアジトを出ていったのだった。

## VOL・38：期末試験近づく（後書き）

神楽と観月が取る作戦とは？ 果たして、試験問題の行方は？  
次回、生徒会治安対策チームvsアンチ生徒会、激突！

## VOL・39：決戦（仮）

感想や評価、ご指摘やご要望など気軽に送ってやってください。  
ご要望については、できるだけお応えできるように頑張りますので。

VOL・EX：キャラクターデータ・改（8/18改）（前書き）

以前、連載を再開する際に、キャラを忘れてるかも、という心配から載せたデータ集ですが、VOL・27以降の新キャラの増加と、最初から読み進めている方々へのネタバレを防止するため、一度場所を変えることにしました。

一応、現時点での登場キャラは押さえてあると思われます。たぶん、今後も新キャラが登場次第、こちらでデータを掲載する予定です。

## VOL・EX：キャラクターデータ・改（8/18改）

幼なじみは魔法使い！？キャラクターデータ集

いちはらしゅんすけ

・市原 峻佑：主人公。172cm、59kg。

頭髮は短い黒髪を少し立たせている。平均的な体格で格好も地味な部類に入るため、集団の中では埋もれてしまつて目立たないことが多い。しかし、高校でちひろたちと再会したことによって周りの男どもに嫉妬される日々が始まつた。性格は非常に温厚で追いかけるる日々にもブツブツ文句は言うが怒るまではしない。

・真野 ちひろ&みちる：ヒロイン。158cm、41kg（ちひろ）、157cm、40kg（みちる）

双子の姉妹で、中世に実在した魔法使いの能力を受け継いでいる。姉のみちるは活発な性格、妹のみちるはどちらかというとおとなしい性格をしている。2人とも中学は女子校だったが、高校で共学にしたところ、男子たちの人気が発散した。だが、2人ともそれらを相手にする気はなく、峻佑に告白した。たいてい峻佑と一緒に居るため、峻佑が嫉妬を買う原因となっている。

さわだこうたろう

・沢田 耕太郎：峻佑の親友。身長175cm、体重62kg。

峻佑とは中学からの同級生で、高校でも同じクラスになった、いわゆる腐れ縁。同じクラスになったかわいい女子（ちひろ）と峻佑が入学式の朝から仲良さげに話しているのを見て、嫉妬の炎が燃え上がる。その後、ほかのクラスの男子たちを従え、MMMなる真野姉妹非公認ファンクラブを結成、リーダーの座に収まる。その後、脱退しようとして仲間にもボコられたりするなど、受難の日々が続く。頭髮は少し伸び気味の茶髪で、いつも制服を少し着崩している。

かわはらよういち

・川原 陽一：MMM副リーダー（耕太郎が脱退する22話以降リ

ーダー昇格)。身長169cm、体重60kg。

入学式の放課後、耕太郎が峻佑を追いかけて校内を走り回っていたときにいつの間にかいた。茶髪な上、髪に隠れてあまり見えないが、実はピアスもしていて不良っぽい外見だが、意外と普通な少年。5組で、みちると同じクラスではあるが、どっちかというところちひろのほうが好みである。

・MM構成員たち：真野姉妹非公認ファンクラブ<sup>トリプルエム</sup>のメンバー。数十名の1年生男子生徒からなる。峻佑を敵視しているが、常に憧れのちひろたちが峻佑のそばにいたためなかなか手出しできないでいる、かわいそうなヤツら。

・脇野 亮一郎<sup>わきのりやう</sup>：峻佑のクラスの担任。まだ教師2年目の若い男。学生時代は髪をいろいろな色に染め、やんちゃなこともしていたが、一応社会人であるため、髪は黒く染め直し、短く整えている。

・仙堂 雲雀<sup>せんどううねづ</sup>：竹崎高校生徒会副会長。157cm、42kg。生徒会にいたためか、髪は染めずに黒髪を肩の下ほどまで伸ばしている。2年生なので普通なら峻佑たちとの接点はなかったはずだが、週末に東松海の駅手前の列車内で痴漢に遭っていたところを峻佑に助けられた。>7話<それがきっかけで峻佑を生徒会に生徒会にスカウトする。>11話<14話<峻佑やちひろたちが生徒会に加入した後は治安対策チームとしてともに活動することになる。32話でちひろたちから秘密を明かされるが、あまり気にしていない。

・一条 流星<sup>いちじょうりゅうせい</sup>：竹崎高校生徒会長。179cm、68kg。仙堂と同様、全く染めていない黒髪で、表現しづらいがさわやかに見える、短めの髪型をしている。峻佑との直接的な接点はないが、副会長の仙堂が峻佑をスカウトしたいと言っているのを理解し、協力する。加入後は、どの役職に就くかの選択を迫り、治安対策を任

せることになる。

・西園寺 さいおんじ なつき…竹崎高校生徒会書記長&隠密部隊長。 160cm、48kg。

峻佑が生徒会のスカウトを断って出ていったあとに突然登場した女性。峻佑の身辺調査を始め、もう少してちひろたちの秘密を握るところまでいったが、あと一歩のところで失敗に終わった。ちひろたちから秘密を明かされた後は、逆にそれを守るため裏で動いている（らしい）

・ジェン＝マノール…ちひろたちの家系の始祖にあたる偉大な魔法使い。すでに亡くなってから数百年以上が経過しているため、現在では真野家所有の洋館の地下迷宮の最深部で眠っている。過去に弟子入りを志願してきた見習い魔法使い（フラール）を封印し、数百年の眠りにつかせていたこともあったが、無事に（？）再会し、仲直りできた。

・委員長（酒井 さかい 晴香）…峻佑たち4組のクラス委員長。 151cm、39kg。

委員長と呼ばれていて、存在感の薄いかわいそうな女の子だった。体育祭での活躍により本名を覚えてもらえ、少しクラス内での存在感が上がったそう。

・猿義 さるよし 半助 はんすけ…猿義流 えんぎりゅう という謎の忍者の末裔（らしい）。 169cm、63kg。

ちひろの持つ秘伝の書（ジェンから受け継いだ魔法書）を欲していて、ちひろに勝負を挑むが、返り討ちにされた。しかし、まだ諦めてないらしく、後述のアンチ生徒会に加入し、生徒会に入ったちひろたちに真っ向から対抗している。

・種村 健介たねむらけんすけ…MMMの一人。175cm、66kg。  
体育祭で峻佑に恥をかかせ、評判を落とそうとしたが失敗に終わった。その後、脱退しようとした元リーダー・耕太郎にリンチまがいのことをしたりもした。基本的に使い捨て系のサブキャラ。今後出番はあるのか？

・榊 琢磨さかきたくま…ちひろたちの従兄弟で、現在中学3年生。163cm、52kg。  
魔法使いだが、イタズラ盛りのガキンちょ。母親は何よりも怖い。

・榊 英里さかきえり…琢磨の母親で、警察官。165cm、48kg。  
階級は警部で、事件捜査や犯人逮捕に魔法使いとしての能力を活かして活躍している。普段は温厚だが、ひとたび怒ると大変なことになる（らしい）。番外編では主役の座を勝ち取ったが、今後の出番は……？

・秋塚あきづか…英里の部下の警察官。175cm、60kg。  
階級は警部補。英里の魔法のことをすんなり受け入れた柔軟な心の持ち主。警察官としても優秀なほうで、英里のよき部下にしてパートナーである。

・神楽 義明かぐらよしあき…アンチ生徒会を率いる、学園の問題児。174cm、62kg。  
生徒会副会長、雲雀を敵視していて、しょっちゅう問題行動を起こしては彼女と攻防を繰り返している。

・観月 涼みづきりょう…神楽の仲間。170cm、65kg。  
面白いことが好きで、神楽についていつてる。情報通で、生徒会の動きをよく事前に察知して先手を打っている。

・岩本 浩行<sup>いわもとこうゆき</sup>：180cm、72kg。  
同じく、神楽の仲間。常に冷静で、物事の流れをよく眺める物静かな男。

・藍沢<sup>あいざわ</sup> さとみ：ちひろたちの姉にして、峻佑たちのクラスにやってきた教育実習生。160cm、45kg。  
当然ながら魔法使い。能力はちひろたちより劣るものの、ちひろたちが苦手の探索系の魔法を得意としているのでちひろたちも彼女を頼ることは結構ある。22歳の大学生だが、すでに結婚しているため苗字が真野ではない。

・フラール＝ボードン：ジェンの古い知り合いで、ジェンを恨んでいる。だが、ジェンがすでに亡くなっていると知り、その子孫、ちひろたちと魔法書を巡る交渉の末、和解する。ジェンとも和解した今、変わってしまった世界を見るために世界各地を旅しているそう。  
な。

・藍沢<sup>あいざわかずき</sup> 一樹：さとみの夫。178cm、69kg。さとみと結婚し、実家を出てはいるが、実家は日本有数の会社を経営している大金持ちで、別荘もいくつか持っている。

以下、VOL.41からの登場キャラ。ネタバレには注意してください。  
さい。

・さゆり<sup>にしださゆり</sup>：メイド喫茶・シエルの店長。本名・西田小百合。若く見せているものの、実は28歳。面接にやってきたちひろたちを気に入って、即採用した。

・藤原<sup>ふじわらたかゆき</sup>：メイド喫茶・シエルの厨房スタッフ。本名・藤原貴之。調

理師専門学校を卒業したものの、就職先が見つからず、腕を持て余していたところをさゆりに拾われた。24歳。

・エリコ…メイド喫茶・シエルのホールスタッフ。本名・和田恵理子<sup>わだえりこ</sup>。条件のいいバイトを探していて、たまたまここに立ち寄ったときにさゆりに見初められ、今ではすっかりベテランである。21歳の大学3年生。

・あやの…エリコ同様、シエルのホールスタッフ。本名・伊藤彩乃<sup>いとうあやの</sup>。服飾の専門学校に通ってデザイナーを目指していたが、夢を断念して中退、フリーター暮らしをしている。シエルで働いているのは、かわいい服が好きだから。エリコと同じ21歳。

・千佳…エリコやあやの同様、シエルのホールスタッフ。本名・都築千佳<sup>つぎちか</sup>。高校卒業後も進学せず、フリーター暮らしをしている。シエルで働く理由は、自宅からほど近く、条件もいいところだから。ホールスタッフの中では最年長で、リーダー的存在。23歳。

以下、VOL・49以降の最終章にて登場。やはりネタバレには注意してください。

・熱田<sup>あつた</sup> 輝…熱海の海岸付近に住んでいて、峻佑たちが熱海を訪れた際、ちひろたちが魔法使いであることに気づいて、確かめるために溺れたフリまでして接近した。その後、竹崎高校に転入してきて騒動を引き起こす。自身も魔法使いだと言っているが……？

・北海<sup>きたつみ</sup> 道雄…熱田家に仕え、輝の身の回りの世話をする執事。54歳。その実体は魔法使いたちの裏組織【ノアの箱船】の幹部クラス。年の割に武闘派で、戦闘は格闘による近接戦闘がメイン。

・【ノアの箱船】：数百年ほど昔、道を踏み外した魔法使いによって設立された、武闘派組織。現在の総帥は長い歴史の中で初めて日本人、それも非魔法使いの熱田光輝<sup>あつたこうき</sup>が座っている。世界各地に拠点を持つが、うち現在は竹崎市内にある熱田邸を本部としている。

・熱田<sup>あつた</sup> 光輝<sup>こうき</sup>：【ノアの箱船】第27代総帥にして輝の父親。もとは組織の中の研究者だったが、研究の成果である、「一般人に魔力を付与する薬品」を実用化したことにより、一気に総帥に昇格した。その後、実の息子や組織の末端を構成するチンピラに次々と薬を投与し、魔力を与えていった。自分にも使ったらしいが……？

## VOL・39：アンチ生徒会の陰謀を打ち破れ

「では行くか、観月」

昼休み、作戦実行のための準備ができた神楽と観月は、それぞれ大きなカバンを持ってアジトを出た。

「なあ、神楽。なんでまた昼休みに行くんだ？ 絶対生徒会のヤツらが警備してるし、それに、先公どもだつて……」

観月は神楽の真意が計りきれず、理由をたずねた。

「ふむ。確かに生徒会が警備に当たってる中に行くのは愚の骨頂かもしれない。だが、そこをあえてやることで連中の裏をかくのだ。先公対策は、今回の作戦に絶対の自信を持っているから問題ない。並の人間ではまず見破れんよ」

神楽は笑いながら観月に理由を話した。

「なるほど。お前を信じてるぜ、神楽」

そう言いながら、2人は作戦実行のためにトイレに入り、着替え始めた。

そう、今回彼らがとる作戦、それは変装だった。学校の教師にそれぞれ変装し、職員室に潜入するというわけである。

「こちら一条、職員室付近異状なし、どうぞ」

「了解、こちら仙堂、中央階段付近不審人物確認できません、どうぞ」

本日の昼休みの警備担当は一条と仙堂のコンビだった。2人はそれぞれ分かれて、トランシーバーで連絡を取りながら警備に当たっていた。

「あら？ こちら仙堂、いま中央階段を脇野先生と石川先生が通りにかかりました。けど、なんか脇野先生の様子がおかしかったような……どうぞ」

「こちら一条、いまこちらでも確認。確かに何かおかしい……仙堂くん、済まないが市原くんとちひろちゃんを呼び出してくれないか？ 彼らの担任が脇野先生だったはずだから、何かわかるかもしれない。どうぞ」

一条は仙堂にそう指示を出した。

「こちら仙堂、了解。通信終わります」

雲雀はトランシーバーをしまうと、急いで携帯で峻佑を呼び出した。一方、一条は不審なコンビに話しかけていた。

「こんにちは、脇野先生、石川先生。珍しい組み合わせですね？」

そう、普段の脇野と石川は犬猿の仲とまでは行かなくとも、同じ大学出身の先輩後輩なのにあまり会話をしない2人として校内では有名だった。もうお分かりだろうが、この2人は当然ながら神楽と観月の変装である。

「ああ、私は少々脇野先生のことを誤解していたというか、偏見を持った目で見ていた部分があった。今回、話してみてもそれが間違いであることがわかって、こうして分かりあえたというわけなんだ」

石川に扮した神楽が話した、そのとき。雲雀と、彼女が呼び出した峻佑たちが合流した。

「会長、どうしたんですか？」

峻佑が一条に呼び出しの理由をたずねると、

「おっと、では参りましょうか、脇野先生」

石川と脇野が職員室に入っていた。

「済まないな。呼び出したのは、今の2人のことでだ。市原くんとちひろちゃんなら、脇野先生のクラスだからわかるかもしれないと思ってね。正直な話、いまの脇野先生はどこかおかしくなかったか？」

一条が呼び出しの理由を話すついでにたずねると、

「確かにめっちゃおかしかったっすね。脇野先生、たまにホームルームで石川先生のグチをオレらにぶちまけることがあったんで、今のはどう考えても不自然です」

峻佑が不自然と断言した。それに合わせるように、

「……なるほど、そういうことか。あれはきつと変装ね。顔のマスクとかまで用意して一見完璧に見えるけど、人間関係を把握しきれてなかったことでボロが出たわ。アレは十中八九、‘アンチ’のヤツらよ。行きましょう」

雲雀が変装であることを見破り、職員室内で試験の問題を盗み出そうとしている2人を逮捕するために突撃をかけようとしたが、一条が制止した。

「待つんだ、仙堂くん。ここで焦って取り逃がしては元も子もない。ちょうど市原くんたちもいることだし、それぞれのチームを職員室の両のドア付近に張り込ませ、ターゲットが出てきたところを確保する。いいね？」

一条が‘アンチ生徒会’、捕獲作戦の概要を説明し、峻佑たちは持ち場についた。

「お、これだな？ 前回の反省が活かされてないな、パスワードこそ変わってるが、データの保管フォルダは以前と変わらず。ふつ、ちよいいな」

ちようどみんな昼食に出ているのか、職員室内は無人だった。静かな室内でパソコンを操作する神楽と観月。以前、中間試験の時にデータを盗み出したフォルダを開けてみると、パスワード入力画面になったので、カタカタツと神楽が打ち込むと、フォルダが完全に開いた。

「あとはこのデータをコピーして、と……よし、撤収だ」

神楽がデータをコピーしたフロッピーディスクをポケットにしまい、何食わぬ顔で職員室を出ようとした。

「そこまでよ、神楽」

ドアを開けたところに、一条と雲雀が立ちふさがっていた。

「神楽？ 変な言いがかりはやめたまえ。私は石川だぞ？」

神楽扮する石川もどきは内心冷や汗をかきながら平静を装ってそ

の場を離れようとするが、雲雀ががちり腕を掴んでいて逃げられなかった。

「無駄な抵抗はやめなさい。正体ならとくにバレてるわよ。あんなたちがデータの抜き出しに集中した一瞬のスキを利用してちひろちゃんマスクをはぎ取っちゃったから。なんなら鏡見る？」

雲雀がふふんと笑いながら言つて、神楽に手鏡を差し出した。

「くっ……おのれ生徒会……だが、こんなこともあるつかと、脱出手段は用意してある。観月、行くぞ！」

神楽は観月に合図の声を出すと、2人同時に片手を懐に入れ、煙幕弾を床に投げつけた。

「はーっはっは……データはまだ持つてるから今回は我々の勝利だな。さらばだっ！」

煙幕であたりの視界がゼロになるなか、神楽の高笑いが響いた。

だが……

「いえ、私たちの勝ちです。データは回収、そして先輩も逮捕します」

ちひろが魔法で風を起こして煙幕を晴らすと、みちるが口を開いた。その手には、先ほど神楽がデータをコピーしたフロッピーディスクがしっかりと握られていた。

「げえっ、いつの間に!？」

フロッピーディスクを持っていたらしい観月がポケットを漁りながら驚愕の声をあげた。

「魔法使いをなめてかかると痛い目に遭いますよ。これ以上抵抗しないなら、私や姉さんはあなたたちに危害は加えずに無傷で逮捕できます。ただ、まだ逃げようとしたり、抗戦するつもりなら、こちらにも応戦しますよ。どうします？」

みちるはにつこりと笑いながら、神楽たちを選択を迫った。

「くっ……投降するしかあるまい。この人数から逃走することなど、煙幕などで不意をつかないと到底不可能。戦うなど論外だ。能力未知数な魔法使いが2人もいる上に、それ以外にも3人もいては勝ち

目はほぼゼロに近い。よって我々は投降するが、処分においては情状酌量を求める」

神楽は観月とともにどっかりと廊下に座り込むと、両手を頭の上において無抵抗であることをアピールした。

その後、一条による審判の結果、主犯の神楽は2日、追隨した観月は1日の自宅謹慎と決定された。

ちなみに、“停学”は最低1週間からとなっている。また、前回逮捕した際の念書を彼らは破ったわけだが、今回は計画が未遂に終わったこと、及び無抵抗に捕まったことを考慮して停学相当にはしなかった。

その後、峻佑たちは無事に1学期の期末試験を終え、楽しい夏休みを思っ  
てニヤニヤするのだった。

## VOL・39：アンチ生徒会の陰謀を打ち破れ（後書き）

次回予告：いよいよ待望の夏休み。だが、夏休み突入早々、峻佑の様子がおかしい？

ちひろとみちるは、その理由を探るため、峻佑の部屋を含めた大掃除（という名のガサ入れ）を決行する。途中、耕太郎も巻き込みながら……

VOL・40：お掃除狂想曲（仮）      お楽しみにっ！

感想などお待ちしております。細かい指摘や要望でも結構なので、どしどし送ってやってください。

## VOL・40：大掃除狂騒曲

いろいろなことがあった1学期が終わり、夏休みに入ってから数日が過ぎた、ある日の朝。

「ねえ、みちる……夏休みに入ってから、峻佑くんのおかしいと思わない？」

2人の部屋のベッドの上で、密談が行われていた。

「姉さんもそう思うの？ 私もよ。急にカバンを持って1人で出かけたと思ったら、今度は部屋に籠もりきりになったりとか……何やってるんだらう？」

ちひろの疑問にみちるも同調し、2人で首を傾げた。

「……うん、決めた。みちる、久しぶりに大掃除をやるわよ」

ちひろは少し考えてから、みちるにそう告げた。

「そうだね、それで峻佑くんの部屋のガサ入れをすればいいね。それじゃ、早速峻佑くんを起こして始めようか」

みちるもノリノリで大掃除大作戦を決行することになり、峻佑を起こしにいった。

ちなみに、2人の魔法なら峻佑の部屋を透視することも不可能ではないが、それはフェアじゃないと自粛していた。

「ええー？　なんでまた急に大掃除なんだ？」

案の定、峻佑は掃除にあまり乗り気ではなかった。

「それは峻佑くんの部屋が気に……ゴホン、最近試験勉強とかで忙しくてあんまり掃除しなくて、あちこち汚れてきてるからね。夏休みに入って余裕もあるしってことで、決めたのよ」

ちひろは本音を言いかけたが、うまく隠してもっともらしい理由を話した。

「ま、この場で抵抗しても多数決で却下されるのがオチだろうし、わかったよ。でも、自分の部屋は自分でやるから。前みたいにいき

なり入ってこられて宝物を捨てられちゃたまらないし」

峻佑はそう言つと、さっさか部屋に引き上げようとしたが、ちひろが峻佑の首根っこを捕まえた。

「あれ？ まさかとは思うけど峻佑くん、前にあたしたちが捨てたエツチな本、また増やしたりなんかしてないよね？」

首根っこを掴んだまま峻佑を振り向かせて、ちひろは満面の笑みでたずねた。

「や、やだなあちひろ……何を言ってるんだよ。ソナコトスルワケナイジャナイカ、アハハハハ……」

峻佑は必死に否定しているが、目が泳いでいる上に言葉が動揺のあまりカタコトになっていた。

「じゃあ、あたしたちに部屋を見られても大丈夫だよ？ みちろ、行きましょ。峻佑くんの部屋から大掃除始めるわよ」

ちひろは満面の笑みを崩さぬまま、峻佑を投げるように解放すると、みちろとともにトタトタと階段を上がっていった。

「ちよつと待ったーっ！ いま部屋の中には、オレのじゃないエツチな本が積んであるんだ。今度は真正銘の預かりものだから、捨てられたら困るんだ！ それらをまとめて片付ける間だけ待っててくれよ」

峻佑は急いで階段を駆け上がって素早く姉妹を追い抜き、自分の部屋のドアの前に立ちふさがると、姉妹を足止めしつつそう主張した。

「前もそう言つて結局峻佑くん自身のだったよね？ じゃあ訊くけど、誰から何冊の本を何のために預かってるの？」

みちろがジト目で峻佑を睨みながら質問責めにする。

「えーと、コートローから計15冊。あいつの家でも最近親のガサ入れがあつたみたいで、それを逃れるために一時的にオレに預けてきたんだ」

峻佑はみちろの尋問に焦らず素直に答えた。

「わかったわ。じゃあ、今から沢田くんに電話して確認するから、

峻佑くんの携帯貸して。あたしたちは沢田くんと番号交換してないのよ」

ちひろが耕太郎に確認すると言い出しても、峻佑の顔色は全く揺るがずに、携帯を出した。相当自信があるようだ。

『もしもし、どうした？』

耕太郎は峻佑からの着信だったので、普通に応答した。ちひろからだとは知らずに。

『もしもし、沢田くん？　ちひろだけど、いま大丈夫かしら？』

ちひろはそういう反応は予測済みだったので、あえて何も気にすることなく、そのまま話し始めた。

『えっ！？　ち、ちひろさん！？　ど、どうしたんですか？　もちろん大丈夫ですよ！』

だが、耕太郎のほうはそれどころではない。いきなり憧れのちひろが電話をかけてきたのだ。耕太郎の胸は何の用事かとときめいた。「いきなり電話したりしてゴメンね。ちょっと聞きたいことがあるんだけど、沢田くん、最近峻佑くんに、その……エッチな本を預けたかしら？」

ちひろはそんな耕太郎の心境など知るよしもなく、聞きたかった用件を単刀直入にたずねた。“エッチな本”のところで少し口ごもったのは女の子ならではの恥じらいだった。

『ち、ちひろさん？　いきなり何を聞くのかと思ったら、なんでまたそんなことを……』

どんな用件かわくわくしていた耕太郎は、予想外な質問に驚き、理由をたずねる。

「今日、ウチで大掃除をやってるんだけど、峻佑くんの部屋にエッチな本が転がってるみたいで、峻佑くんが“コータローからの預かりものだから捨てたらダメだ”って言い出したから、その確認なの。女の子がいきなり男の子に聞くことじゃないのは十分承知してるわで、どうなのかしら？」

ちひろは、さすがにいきなりこんなことを聞いたのはまずかったかな、と反省して鼻の頭をかきながら、理由を話した。

『そうでしたか。ええ、うちの親の目を欺くために、少しの間峻佑に預けましたよ。こっちの危機は去ったので、明日か明後日にでも引き取りに行くつもりだったんですけど、早い方がいいんなら今から行きますよ？』

耕太郎は理由を知って、確かに預けた、とちひろに話す。

「うつん、それが確認したかったただだから、明日とかでも大丈夫よ。あ、ちなみに、何冊預けたか覚えてる？」

ちひろは耕太郎の申し出を丁重に断ると、もうひとつ質問してみた。

『えーっと、たしか全部で10冊だったハズですよ。俺の手持ちが全部で10冊だけなんで。あ、軽蔑しないでくださいね。他の連中は俺なんかよりもっといっぱいそういう本を持つてるはずですから』

耕太郎は頭の中で本の数を数えてたのか、少し考えてから、ちひろに数を伝えた。

「そうなの、わかったわ。ありがとう、沢田くん。変なこと聞いちやってゴメンね。それじゃ、また」

ちひろは耕太郎に礼を言って電話を切ると、

「さて、峻佑くん？ …… あれ、みちる、峻佑くんは？」

ちひろは峻佑のウソを問いつめようと辺りを見回したが、姿が見えない。みちるに聞いてみると、

「姉さんが電話してる間に私、トイレに行ってたんだけど、戻ってきたらもういなかったわよ？ 部屋の中に逃げ込んだかしたら？」

みちるが話しながらドアノブをひねるものの、ドアは開かなかった。

「峻佑くん、ウソをついてたわね？ 沢田くんが預けたのは15冊じゃなくて10冊だって。峻佑くんの手持ちの本は没収するからこ

「こを開けなさい！」

ちひろがドンドンと激しくドアを叩いて峻佑を呼ぶ。あまりに強く叩くもんだから、震動が伝わって家が揺れていた。

「ちっ……コータローめ、空気読めよ。悪いけど、中から力ギをかけてるから、開かないよ。コータローに返す分も含めて片づけたら開けるから、少し待っててよ。前も言ったけどさ、たかがエロ本ごときでそんなにギヤーギヤー言わなくなたっていいじゃんかよ」

峻佑は頑なに没収を拒む。いつの間にかドアの内側に力ギを取り付け、守りを強化していたらしい。

「わかったわ。仕方ないから、5分だけあげる。それが過ぎたら問答無用で力ギごと壊してぶち破るから、壊されなくなったら力ギは開けといった方がいいわよ」

言い争っても無益と判断したのか、ちひろが折れてくれた。峻佑はさつとドアの力ギを外すと、素早く床に散乱したエロ本をまとめてクローゼットの隠し扉の奥にしまっていく。エロ本を捨てられたくない想いの力は相当なものだったようで、5分経って姉妹が突入してきた時点で、床には紙屑が少し散らばっているだけだった。

「そこまでしてエッチな本を守り通したいなんて……どこに隠したかはわからないけど、せいぜいあたしたちに見つからないようにね。見つけたら今度から問答無用で処分するから、そのつもりでね」

ちひろは峻佑の鼻先に指を突きつけてそう宣告すると、協力して紙屑や他に散らばっていた脱ぎっぱなしの服などを片づけていった。

しかし、ここでハプニングが起こった。

運の悪いことに、竹崎市周辺を地震が襲ったのだ。幸いにも揺れ自体はあまり大きくなく、家や家具類に被害はほとんど出なかったが、峻佑の部屋のクローゼットのドアだけが外れてしまい、峻佑に直撃して押しつぶすと同時に、隠し扉の奥の峻佑秘蔵のエロ本の数々がバサバサと降り注いだ。

「ぶぎゃっ！」

「し、峻佑くん！ 大丈夫！？」

「……………あ」

ちひろが急いで扉を峻佑の上からどかしていると、降り注いだ工口本にみちるが気づいてしまった。

救出された峻佑が慌てて拾おうとしたが時すでに遅し。顔を真っ赤にして怒り出したちひろとみちるによって、落ちてきた分の工口本はすべて処分されてしまった。

だが、不幸中の幸いか、耕太郎からの預かりものは紙袋に入れて別にしてあったのと、峻佑が特に気に入っている本はさらに別の紙袋に入れてあつて落ちてこなかったため、無事だった。

また、外れてしまったクローゼットの扉は、姉妹が魔法で重さを軽くしてる間に峻佑がはめ込んで修理した。

後にニュースを見たところ、この地震は竹崎市とその周辺のみだけでなく揺れを観測しておらず、しかも震源地が不明という謎の地震として報道されていたのだった。

## VOL・40：大掃除狂騒曲（後書き）

いったいこの地震はなんだったのか？ その答えは誰も知らない――

### 次回予告

大掃除をしてきれいになった家の中で、ため息が3つ。  
そのワケは……？

VOL・41：アルバイトをしよう（仮）      6 / 1 1      0時更新  
予定、お楽しみに！

感想や評価など、お待ちしております。

## VOL・41：アルバイトをしよう

久しぶりの大掃除をしてきれいになった居間で、ちひろとみちるがうなっていた。

「うーん……どうしよう……」

2人は自分の財布と、何かの紙とをにらめっこしていた。

「どうしたの、2人とも？」

エッチな本を捨てられたショックからなんとか立ち直れた峻佑が居間に入ってきて、2人にたずねた。

「夏休みだからいろいろ遊びに行ったりしたいんだけど、お金がないのよ。あたしたちも両親から生活費は入れてもらってるけど、あんまり使いすぎるとツラくなるし……」

ちひろはしかめっ面で峻佑に話した。

「なるほどね……そういえばオレもあまり小遣いは余裕ないなあ……」

峻佑はポケットに入れていた財布を取り出すと、中の小遣い分の残額を見てへこんだ。

生活費として親が用意しておいてくれた分は、姉妹が料理を担当してくれて、しかも材料費は主婦なみに節約してくれているので、足りないとは泣きつくには至っていない。だが、それ以外のそれぞれの小遣い分は高校生らしく、常に金欠な3人だった。

「それで、いま姉さんとどこかでアルバイトでもしようかって話になったの。一応うちの学校は禁止じゃないみたいだし。ちなみに、松海学園はいくら高校生でも禁止らしくて、学校にバレたら停学は免れないって言われてたけどね」

みちるはちひろの言葉を継ぐように、峻佑に話した。

「アルバイトか、それはいいかもな。でも、16歳で働けるところってかなり限られてるよな？」

峻佑は楽しそうな表情になって頷いたが、年齢制限を思い出して

笑みが消えた。

「確かに、16歳で働けるところは少ないけど、あたしたちはここを受けるつもりだよ」

そう言ってちひろが求人広告のある一点を指差した。そこには――  
『ホールスタッフ2名(女子)、キッチンスタッフ1名(男女問わず)急募！ 時給800円から、出勤日数や時間は応相談 喫茶店シエル 連絡先……』

と書いてあった。

「へえ……喫茶店にしてはずいぶん待遇良くな？ このキッチンスタッフでオレも応募しようかな」

「あつ！ それいい！ そうと決まったら早速電話しようっ！」

――かくして、3人で喫茶店シエルという店の面接を受けることにしたのだった。

そして、面接の日。電話のときに、高校生であることを告げると、証明のために面接には学校の制服で来るようにと言われたので、それに従って、制服姿で3人は喫茶店シエルにやってきた、のだが……  
「えーっと、ここ、だよな……」

峻佑が姉妹のほうを振り返ってたずねる。

「え、ええ、ここみたいね」

「峻佑くんも姉さんもなにを尻込みしてるのよ？ 喫茶店の制服、かわいいじゃないっ」

ちひろも動揺を隠せないなか、ただひとりみちるだけは中に見えるスタッフの制服のかわいさにウキウキしていた。

「いや……でも、これは……いくらオレにはあまり関係ない制服とは言え……」

峻佑は中のスタッフの制服を直視できずに、顔を逸らしてつぶや

いた。

「まさか、喫茶店は喫茶店でも、“メイド喫茶”だなんて思わなかったわよ……」

ちひろも苦笑いしながら話した。そう、喫茶店シエルの正体は、メイド喫茶だったのだ。

「ここまで来て、やめるの？　姉さんたちがやめても私は行くよ。だって、楽しそうじゃない」

みちるは峻佑たちに宣言すると、自動ドアをくぐってひとりで中に入ってしまった。

「あつ、待つてよ、みちる！　やめるとは言っていないでしょっ！」  
ちひろと峻佑も慌ててみちるの後を追って中に入ってしまった。

「……で、あつさり採用と。こんなにあつさり決まっちゃっていいのか？」

シエルを出て、帰路につきながら峻佑はつぶやいた。

3人で面接に入るなり、店長が「キヤーツ、いいわ！　あなたたちみたいな子を待つてたのよ！　ええ、即採用！」などと狂喜乱舞してしまい、3人はあつけにとられつつも採用を喜んだ。

「まあ、決まってよかったわ。明日、早速初出勤だし、頑張ろうねっ！」

面接のことを思い返しつつ、ちひろは笑顔で話したのだった。

そして、翌日。

「うわゝ、やっぱり制服かわいいね」

制服に着替えて、みちるは目を輝かせ、ちひろはちょっと照れていた。

「2人ともやっぱり似合うわよ」。初めてのアルバイトで不安かもしれないけど、ウチのお店に来る“ご主人様”はいい人ばかりだし、

スタッフのみんなも優しいから、安心して。さあ、行きましょうか。キッチンスタッフの市原くんはもう少し待っててね」

店長、さゆりは2人を連れて、スタッフルームからホールに出ていった。と、その瞬間、ホールの空気が変わった。

（うわっ、すげえかわいい……けど緊張してるみたいだし、新人さんかな……？）

（しかも双子だよ……おれ、今日はツイてるなあ。こんないいもの見れて、来てよかった……！）

店の中にいた客が一斉に姉妹のほうを見て、ひそひそ話を交わしていた。さらに、

（新しい子かあ……うわーかわいいー）

（これは運がいいわ……こんなかわいいメイドさんがいれば近くのライバル店に差をつけられる……！）

などといった、先輩スタッフのひそひそ声までも丸聞こえだった。「そんなわけで、今日からこのシエルに新しく加わることになった、ちひろちゃんとみちるちゃんよ。まだ高校1年生の16歳で、ここが初めてのアルバイトみたいだから、優しくしてあげてね。それじゃ、2人とも、挨拶して」

さゆりがスタッフ一同とそこにいた客に姉妹を紹介しているころ、峻佑は――

「オレはいつまで待つてればいいんだ？」

さゆりがホールにかかりつきりになってるために、すっかり放置され、ひとり寂しくスタッフルームで待機していた。

それからしばらくして、峻佑も他のスタッフに紹介され、キッチンスタッフとして早速厨房に入ることになった。

「オムライスとハンバーガー1つずつ入りました！」

峻佑が先輩スタッフたちに自己紹介し終えたところに、早速注文

が入った。

「よし、じゃ市原くんだったか？ ハンバーグは作れるな？ 僕はオムライスをやるから、君はハンバーグを焼いてくれ」

注文を受けて、厨房の先輩スタッフ、藤原が峻佑に指示を出した。

「はい、わかりました！」

峻佑は返事をする、材料の場所を聞いて、手際よく作っていた。

「はい、ハンバーグとオムライス上がりしました！」

藤原は出来上がった品を厨房とホールの間の台に載せながら言った。

「お待たせ致しました、ハンバーグとオムライスになります。オムライスのケチャップ文字はどうなさいますか？」

ちひろがテーブルに運び、注文した客にたずねた。この店は、こういったサービスはもちろん、制服やスタッフそのもののかわいさで人気なのだ。

「うーん、それじゃあ、あなたの今の気持ちを書いてもらえますか？」

客の男は、少し迷ってから、ちひろにそう頼んだ。

「はい、かしこまりました、ご主人様」

今日が初日の割には順応性が高いちひろは、にっこりと笑って、オムライスにケチャップで“ ”と書き込んだ。

「これは…… “ ” ？ どういう意味ですか？」

ちひろの意図が掴みきれない男は、ケチャップを抱えて引き上げようとしているちひろを呼び止めて聞いた。

「はい、えっと…… あたし今日が初めてのアルバイトで緊張してたんですけど、いますごく楽しいんです！ だから、そんな気分を表すのに “ ” を使ってみたんです」

ちひろは一旦男のテーブルの脇まで戻ると、この日一番の笑顔で意図を説明し、最後に可愛くウインクをした。

それを見ていた他の客が一斉にオムライスを追加注文し、ちひろに書いてもらっていた。

一方、みちるは――

「お、お帰りなさいませ、ご主人様」

制服がかわいいとはしゃいでいたのはどこへやら、緊張のあまり笑顔も引きつっていた。挙げ句の果てには……

「し、失礼します。お水をお持ちいたしました。ご注文がお決まりになりましたらお呼び……きゃあっ！」

客の青年2人を席に案内し、水を置きながら注文が決まったら呼ぶように言った瞬間、足を滑らせて手が水の入ったコップを2つとも弾き飛ばしてしまい、1つは自分に、もう1つは客の1人（青年A）にかかってしまった。

「わわっ！ 大変失礼いたしました！ ただいまタオルをお持ちいたします！」

みちるは水が青年Aにかかってしまったことに気づくと、自分も濡れているのをお構いなしにスタッフルームへ走り、タオルを取りに行った。だが、角を曲がった瞬間にまたも足を滑らせ、派手にずっこけた。

「きゃあああ！？」

（ドジッ子だ……）

（今までここにはいなかったタイプだ……ドジッ子萌え）

あちこちで客のひそひそ話が聞こえる中、タオルを取ってきたみちるが水をかけてしまった青年のテーブルに戻ってきたのだが、二度あることは三度ある、またも派手にずっこけてタオルが飛び、青年の顔に直撃した。だが、ここまでされても青年は全く怒ることはなく、穏やかな表情のまま、タオルで水を拭いていた。

この一連の流れを見ていた客が、みちるのことをドジッ子メイドと認識したのは言うまでもない。

## VOL・41：アルバイトをしよう（後書き）

精神面の不調から休載をした時期もありましたが、どうにか復活し、今日こうして連載開始から1周年を迎えることができました。

毎回読んでくださっている読者の方々にこの場を借りて感謝させていただきます。

そして、少し前から告知していたとおり、1周年を記念した特別短編を制作し、本日投稿いたしました。

良かったら、こちらも含わせて読んでいただければと思います。

無事、アルバイトも決まって働き出した3人。しかし、接客業に妙な事件はつきものなわけで――

VOL・42：アルバイト事件帖・前編      18日午前0時更新予定です。

感想や評価もお待ちしております。細かいことでも嬉しいので、書き込んでくださると幸いです。

## VOL・42：アルバイト事件帖（前編）

「おかえりなさいませ、ご主人様」

扉が開いて客が入るたび、そんな声が響きわたるメイド喫茶・シエル。キッチンスタッフの峻佑、そしてホールでメイドをやるちひろとみちるは、この日も元気良く働いていた。

だんだん店が混雑し始める夕方のこと。店長・さゆりがメイド服からスーツに着替え、バッグを持って出てきた。

「あれ、店長おかけですか？」

たまたま手が空いて、休憩に入ろうとしたちひろがさゆりにたずねると、

「ええ、急な用事が入っちゃって、どうしても行かなきゃならなくなっちゃったの。閉店後には戻れると思うから、他のみんなにも言うておくけど、少しの間店をお願いね！」

さゆりは早口でちひろに事情を説明すると、慌ただしく飛び出していた。

「わかりました。お氣をつけて行ってきてください」

ちひろはさゆりを見送ると、休憩に入った。

「はい、オムライスとパフェ上がりました！ ついでにケーキセツトも出ます！」

この日は厨房の先輩・藤原が休みで、峻佑と臨時で普段はメイドをやっているはずのみちるが厨房に入っていた。ホールではドジを連発して“ドジ子メイド”と呼ばれたみちるだが、厨房で調理を始めるホールでのドジ子ぶりはどこへやら、本職の峻佑や先輩の藤原をも越えるのではないかというような手さばきで注文をさばいていた。

「次の注文、麻婆豆腐とケーキセット入りました！」  
ちひろが次の注文を厨房に持ってきた。

「了解！ みちる、ケーキは任せた！」

峻佑が素早く麻婆豆腐を作り出しながら、みちるに指示を飛ばす。  
「かしこまりました、ご主人様……じゃなくて峻佑くん！」

みちるはいつものクセでそう返事してしまい、少し顔を赤らめながら言い直した。

一方その頃、ホールの片隅のテーブルでは……

「やっぱ……ちゃんは可愛いし、……だよね……」

「うん、やっぱ今度……しちゃうかな……？」

怪しい雰囲気醸し出す4人組の男性客がひそひそ話で何かを相談していた。

メイド喫茶・シエルの閉店は午後7時30分。ギリギリまで楽しんで、名残惜しそうに帰っていく客を、「行つてらっしゃいませ、ご主人様」と送り出し、片付けや掃除などの閉店作業をしているうちに、さゆりが帰ってきた。

「ごめんね、忙しかったでしょ？ 特に市原くんやちひろちゃんたち姉妹はまだ慣れてないところにやらせちゃったりして、ホント申し訳なかったわ。お疲れ様、今日は上がってもらって大丈夫よ」  
済まなそうに今日のことを謝るさゆりに対し、峻佑たちは「忙しかったけど、楽しんで仕事ができたし、目立ったトラブルも起きなかったので大丈夫です」と笑顔で話し、帰路についた。

翌日は峻佑が休みで、姉妹だけの出勤。

厨房を守るのは、藤原と店長のさゆりだったのだが……

「ゴメン！ 今日も出かけなくちゃなくなつたの！ 藤原くんも次のバイトがあるから上がりの時間だし……ホントーに申し訳ないんだけど、ちひろちゃんとみちるちゃんで厨房に入ってもらえないかしら？」

夕方になって、また混み始めるころに、さゆりが出かけ、さらに

厨房の藤原も帰ってしまいうらしい。

「わかりました。やるだけやってみます！」

ちひろとみちる、2人の戦いが幕を開けた。

特に混乱は起きることもなく、無事に閉店を迎えた。だが……

「店長、遅いですね……」

掃除を終えて、あとは店長の帰りを待つだけなのだが、午後8時を回っても帰ってこなかった。

「マズいなあ……」

ホールスタッフの1人、エリコが時計を見てつぶやいた。

「あれ、エリコもなんかあるの？」

もう1人のスタッフ、あやのがエリコにたずねた。

「うん、ほら私大学生じゃない？ 明日は前期試験の最終日で大学に行かなきゃならないのよ……って、あやのもなんかあるの？」

エリコは事情を話し、あやのがエリコ“も”という言い方をしたことに基づいてあやのにたずねると、

「あたしはもうひとつのバイトが9時からなのよ……もうそろそろ出ないと間に合わないわ……」

こちらもしきりに時計を気にしながら、あやのが答えた。

「あのー、あやのさん、エリコさん」

そこに、ちひろが割って入った。

「なーに、ちひろちゃん？」

あやのが聞き返すと、

「あたしとみちるで店長を待ってますから、上がってもらって大丈夫ですよ。あたしたちは高校生で夏休みに入ってるから課題も急ぎじゃないですし、他のバイトもありませんから」

ちひろはあやのたちにそう提案した。すると、

「ありがとう。でも、大丈夫？ 最近このあたりも何かと物騒らしいわよ。今日もテレビのニュースで、閉店後の喫茶店に男が侵入し

て店員の女の子を襲ったって言ってたから……」

エリコは礼を言つて上がろうとしたが、思い出したようにニュースの話をして心配なことを伝えた。

「大丈夫ですよ。あたしたち2人ですから。1人ならともかく、2人ならそう簡単に襲われませんよ。それに、あたしたち、こう見えても腕っぷしには自信あるんですよ」

ちひろは軽く力こぶを作つて笑いながらエリコたちに話した。もちろん、本来の2人はそんなに力は強くない。自信あるのは魔法だけなのだが、そんなことは言えるはずがなかった。

「ちよつと不安は残るけど、背に腹は替えられないわね。それじゃ、悪いんだけど、お願いね。私たちが出たらすぐに鍵をかけてね。お疲れさまー」

エリコはちひろたちに念を押すと、あやのとともに着替えて帰つていった。

「じゃあ、みちる。あたしは1階の通用口の鍵を閉めてくるから、みちるは2階にある窓とかの鍵を閉めてきて」

午後9時を回つても店長は帰つて来ない。ちひろとみちるは、手分けして各所の施錠を確認しに行った。

1階の裏にある通用口。

「ここの鍵を閉めて……あれ、ドアが少し開いてる？ あやのさんたち、急いでたから閉め忘れたのかな？」

ちひろが首を傾げて施錠しようとした瞬間。

「今だ！ 手を縛れ！ 早く！」

通用口の内側の暗がりには潜んでいた何者かがちひろに後ろから襲いかかった。

「きゃあつ！」

完全に不意をつかれたちひろは、魔法で逃げることはおろか、身を守ることさえできずに身動きを封じられた。

一方その頃、2階を見回っていたみちるは――

「いま何か悲鳴みたいなの聞こえた……？」

窓の鍵を確認している途中、ちひろの悲鳴が聞こえてみちるは足を止めた。

（みちる、聞こえるっ！？）

と、そこにちひろからのテレパシーが聞こえてきた。

（姉さん、どうしたの？　いま何か悲鳴みたいなの聞こえなかった？）

みちるがテレパシーを送り返すと、

（裏口から変質者が侵入してあたし、捕まっちゃったの。まだ仲間がいるかもしれないから、あんたは階下<sup>した</sup>に降りて来ちゃダメよ、いいわね！）

ちひろは冷静に状況をみちるに伝えた。

（姉さん、魔法使って逃げられないの？　それか私がそつと階下<sup>した</sup>に行って姉さんを救出するのもありだけど……）

みちるはなんとか抜け出せないかちひろにたずねた。

（できれば一般人相手に魔法は使いたくない。それに、みちる、あなたの最近のドジッ子ぶりを見ると救出作戦も不安が残るわ。そうだ、携帯をさっき取りに行って持つてるわね？　それで峻佑くんを呼んで、そこから警察を呼びましょう。頼んだわよ）

ちひろはそれっきり応答がなくなったので、みちるはメイド服のポケットに入れておいた携帯を取り出し、峻佑にメールを送るのだった。

## VOL・42：アルバイト事件帖（前編）（後書き）

シエルに侵入した変質者（？）の目的はいつたいなんなのか。そしてちひろは無事なのか。

以下、後編へ続く。6 / 25 0時更新予定です。

感想や評価など、お待ちしております。細かいことでもいいので、残してくださると作者の気力アップにつながりますので、よろしく願います。

VOL・43：アルバイト事件帖（後編）

「ん？ メール……みちるからか。ずいぶん帰りが遅い気がするけど、その連絡かな？」

峻佑は携帯が鳴ったのに気づいてメールを開いた。

「店内に不審者が入ってきて、姉さんが捕まった。私はまだ無事だけど、救出作戦はちょっと難しい。助けに来て！」

メールを見た峻佑は、「わかった！」とだけ返信し、携帯と財布を持って家を飛び出し、自転車でシエルへ向けて走り始めた。

その頃、メールでSOSを伝えたみちるの背後にも、侵入者の影が迫っていた。

「いないと思ったら、こんなところにいたんだね……？」

声に振り向いたみちるは、月明かりで侵入者の顔が照らし出されるのを見た。

「あなたたち……たしかかなりの常連さん……！」

そこにいたのは、店長のさゆり曰く、ちひろやみちるが入る前からの常連で、特に2人が入ってから滞在時間が急激に長くなったと噂的になっていた男たちだった。

「——！！できれば傷つけたくはないから、大人しくしてくれと助かるな」

正体を見抜かれて動揺した男たちの1人が、スタンガンをちらつかせてみちるを脅しにかかった。

「……………」

いくら魔法使いでも、相手が武器を持っている上に、背後を取られては対抗できなかった。みちるも後ろで手を縛られ、階下にいるちひろのところへ連れてかれた。

「あんたたち、いったい何が目的なのっ！？　こんなことして、タダじゃ済まないわよ！」

手を拘束されているとは言え、口はふさがれていなかったのも、ちひろはみちるが男たちに連行されてくるのを見るなり、そう叫んだ。

「僕らの目的は――」

一方その頃、自転車でシエルへ急行中の峻佑は――

「着いた！　待つてろよ、2人とも！」

シエルの裏口付近に自転車を止めると、途中の工事現場で拾った鉄パイプを持って、裏口のドアに近づいていった。

「僕らの目的、それは、君たちにイジメられたいんだ」

男たちは声を揃えて目的を話した。

「……はい？」

男たちの言った意味が理解できず、ちひろはポカンとした表情で聞き返した。

「つまり、僕らは根っからのどMなんだよ。メイド喫茶に通うようになったのは、メイドなのにどSっていうギャップを持った女の子を探す為だったんだ。ずいぶん時間はかかったけど、君たちが入って来たときに、確信したんだ。君たちはかなりのSタイプだと」

男のひとりがそこまで話したところで、ドアが開け放たれた。

「ちひろっ！　みちるっ！　無事か！？」

鉄パイプを構えた格好のまま、峻佑が飛び込んできた。

「峻佑くん！」

手足を拘束されて動けないので、首だけでちひろたちは振り向いて峻佑の名を呼んだ。

「ちっ！　余計なのが来ちまったか！　とにかく、目的は果たさねばここまでやった意味がない！　ってわけで、イジメてください！」

男たちは頭を下げてちひろたちに懇願した。

「なんなんだ、コイツら……？ まあ、大して害はないみたいだし、ちひろ、やってあげれば？」

峻佑は拍子抜けしたのか、手に持っていた鉄パイプを外に投げ捨て、呆れた表情でちひろに言った。

「まったく、人騒がせな連中ね……ま、今回は訴えないけど、次はないわよ？ さあ、覚悟はいいかしら？」

ちひろはクスクスと笑いながら言うと、手を拘束していた手錠を引きちぎり、男たちに近づいていった。

「イジメてほしって言ったわよね？ 思う存分叶えてあげるわよっ！」

暗い店内で、小さな爆発音と、何かが床にたたきつけられるような鈍い音が数回続けて鳴り響いた。

男たちが完全にノビたあと少しして、ようやく店長のさゆりが帰ってきた。

「ちひろちゃん、みちるちゃん、これはいったい何があったのかしら……？ なんで閉店後の通用口で常連のお客さまがノビてるの？」

帰ってくるなり、店内の惨状に失神寸前な状態のさゆりが2人にたずね、ちひろが事情を説明すると、

「そうだったの……怖い思いさせてしまつてごめんなさいね。今後はこんなことにならないようにシフトを調整するから。それと、この人たちは警察に引き渡してこつてり絞つてもらうわ」

さゆりは神妙な面もちでちひろたちに謝った。

「あ、店長……確かに少し怖かったですけど、実害はなかったの、今回は嚴重注意とかで済ませられないですか？」

みちるがさゆりに手を合わせて頼んだ。

「2人がいいなら私はそれでいいわよ」

さゆりは2人に笑みを見せながら言った。

「そついうわけです。では、行つてらっしゃいませ、ご主人様。ま

たのお帰りをお待ちしております」

いつまでも従業員用の通用口に放置しておくわけにもいかないの  
で、4人で力をあわせて、なにやら満ち足りた表情を浮かべる男た  
ちを外に放り出すことにしたのだが、その際に、ちひろがお決まり  
のセリフで男たちを送り出した。

「え……僕ら、こんなことをしたのに、またここに来てもいいんで  
すか……？」

男たちがポカンとした顔でたずねると、

「実害はなかったですし、そんな方でも、大切なご主人様ですから。  
でも、もうこんなことをされてはいけませんよ。次はあんなおしお  
きでは済まされませんからね。」

ちひろは笑顔で男たちに言った。すると、

「やっぱりキミは最高のメイドさんだーっ！」

男のひとりが突如振り返って、ちひろに飛びかかった。

「だ、か、ら……そういうことをしないでと言ったばかりでしょっ  
！」

これにはさすがにちひろも驚いたが、飛びかかってきた男の力を  
上手く受け流し、瞬間的に魔法で自分の腕力を増強した状態で男に  
綺麗な一本背負いを決め、床にたたきつけた。

「なあ、やっぱり警察に引き渡したほうがよかったんじゃないか？」

ようやく店の片づけを終え、帰路に着いた3人。自転車を押しな  
がら、峻佑がちひろにたずねた。

「そうかもね。でも、反省してくればあたしはそれで十分だよ。

あの人たちを投げ飛ばしてあたしも結構いい運動になったしね」

そう言って笑うちひろを見て、峻佑は「やっぱりSなのか？」と  
不意に思ってしまった。すると、

「ちよつと、峻佑くん？ いま、あたしのことSなのか、って思っ  
たわね？ 峻佑くんもお仕置きされたいの？」

ちひろがこめかみをヒクつかせながら峻佑にたずねた。

「げっ！ い、いや、なんでもないって！ そんなこと考えてないってば！」

峻佑は言い訳しつつ、自転車に乗って逃げ出した。

「逃げるってことはやっぱりそう思ったのね！ 逃げてもムダよ！」

ちひろは走り出した自転車を追いかけるわけでもなく、ただ叫ぶと、みちるを連れてテレポートした。――峻佑の乗る自転車の荷台に。

「……あのー、ちひろ……さん？ もしかして、かなーり怒ってらっしゃる？」

観念したのか、途中鉄パイプを拾った工事現場の横で自転車を止めて振り返り、峻佑はたずねた。

「……峻佑くん……バカー……ッ！ もう、知らないっ！」

その夜、付近の住民が、晴れているにも関わらず工事現場に雷が落ちるのを見たという話が相次いだ。

## VOL・43：アルバイト事件帖（後編）（後書き）

姉妹を襲った変態も退治し、これにて一件落着——でいいのか？

夏休みは中盤へさしかかり、峻佑たち3人のもとにあるお誘いが

次回、VOL・44：いざ行かん、海が待っている（仮）

7/20時更新予定です。

評価および感想、ご指摘など、随時お待ちしております。

細かいことでも励みになりますので、バシバシ送ってくれと非常にありがたいです。

## VOL・44：海へ行こう

先日の事件から数日後――

それは、突然のお誘いだった。シエルでのアルバイトを終えて3人が帰宅すると、家の電話が鳴っていた。峻佑が急いで電話を取ると、相手はさとみで、ちょっと会って話がしたいから今から行っても大丈夫かと聞いてきたので、バイトから帰って何もすることがない3人は二つ返事でOKした。

それから30分ほどして、さとみが夫の一樹を連れてやってきた。

「それで、話ってなに？」

居間に通して、麦茶を出してからちひろがたずねると、

「ああ、うん、あのさ、みんなで海に行かない？ 3泊4日くらいで、さ」

さとみは唐突にそう切り出した。

「海？ どうして急に……」

みちるが頭の上にクエスチョンマークをいくつも浮かべながら聞き返した。

「それは僕から話そう。いや、別に大したことじゃないんだけど、熱海の海辺に藍沢家ほくんちの別荘があるんだ。そこにさとみと行くことにしたんだけど、別荘は広いから、みんなも誘ってみようかって話になったんだよ。で、どうかな？」

一樹がさとみの話を引き継いで理由を峻佑たちに話した。

「なるほど。でも、オレたちがいてお邪魔になりませんか？」

峻佑が心配になってたずねると、

「ははっ、心配はいらないよ。とにかく無駄に広くて、ここにいる5人でもまだ広すぎるくらいなんだ。そうだ、どうせだし、峻佑くんやちひろちゃんたちの友達も何人が誘ってみたらどうだい？ 別荘の部屋は10以上あるから、かなりの人数を誘えるはずだよ」

一樹は峻佑の心配を軽く笑い飛ばし、さらに人数を増やしてはどうかと持ちかけた。

「人数が多いほうが楽しいし、高校でのクラスメートたちも誘えばいいんじゃない？ それに、あんたたち、アルバイトを始めたんでしょ？ その方たちも一緒にどうかしら？」

一樹の提案に真っ先にノったのは、さとみだった。いったいどこで峻佑たちがアルバイトを始めたことを知ったのか、その人も誘おうと言ってきた。

「なんかもう行くことは決定みたいね。わかったわ、みんなに声をかけてみる」

ちひろが軽く息をついて言うと、

「それじゃあ、何人行くか決まったら連絡ちょうだい。一応、出発は1週間後の8月1日を予定してるから」

さとみはそれだけ言うのと、さっさか帰っていった。

「海か……ガキのころ行つたつきりだったな」

峻佑がポツリとつぶやき、3人で手分けしてクラスメート、生徒会、そしてシエルのメンバーに連絡を取り、熱海へ行けるかどうかを聞いていった。

——耕太郎の場合。

『おう、峻佑、どうした？ どっかで遊ぶか？』

峻佑からの着信に、遊びの誘いと思った耕太郎が明るい声で電話に出ると、

「いや、それに近いっちゃ近いんだが、お前さ、8月1日から4日くらいヒマじゃねーか？ ヒマなら、藍沢先生の旦那さんの別荘に誘われたんだけど、どうだ？」

峻佑は、さっきのお誘いの話をそのまま耕太郎に伝えた。

『なにっ！ さとみ先生の！？ もちろんヒマだぜ。夏休みに入ってからヒマすぎてどうしようか悩んでたところだ。それに、さとみ先生と聞いて俺が黙ってると思うか？』

耕太郎は、“藍沢先生さとみの”という単語に過敏な反応を見せ、話に食いついてきた。

「それもそうだな。じゃあ、コータローは参加確定だな。集合時間と場所は追って連絡するわ」

峻佑は苦笑しながら耕太郎を参加者リストのメモに書き加えた。

『おう、わかった。楽しみにしてるぜ』

耕太郎は明らかに舞い上がってる声色でそう言つと、電話を切った。

——生徒会副会長、雲雀の場合。

『あら、ちひろちゃん、どうしたの？ また神楽がなんか企んでそうなの？』

ちひろからの着信に、雲雀は神楽のことかとピンときて聞き返したのだが、

「いえ、今回はそうじゃないんです。先輩、来週の8月1日から4日くらいなんですけど、熱海に行きませんか？ あたしの姉で、先日まで教育実習に来ていた藍沢先生の旦那さんの別荘に誘われたんです。そこが相当な大きらしく、人数が多いほうが楽しいだろうってことでいまいろんな人に声をかけてるんですけど……」

ちひろはそうじゃないと苦笑した上で、別荘へのお誘いを雲雀にも話した。

『熱海？ いいわね。今年はどこにも旅行に行く予定が立たなくて退屈してたのよ。ぜひ同行させてもらおうわ』

雲雀はその話を聞いて、ぱあっと声が明るくなり、誘いを快諾した。

「わかりました。それじゃあ、時間とかはまた連絡しますね」  
ちひろはそう言つて、電話を切った。

——メイド喫茶・シエル店長、さゆりの場合。

『あれ、みちるちゃん？ お疲れ様。どうしたの？』

さゆりはみちるからの着信に、シフト上の問題でも起こったのかと心配そうな声で電話に出た。

『お疲れさまです。それで、店長、いきなりなんですけど、8月1日から4日ほど、熱海に行きませんか？ 私の姉の旦那さんの別荘に誘われたんですけど、人数が多いほうが楽しいだろうってことで

……」

みちるは特に話す話題もないので、単刀直入に用件を話した。

『熱海かあ……行きたいけど、お店もあるし……あ、ちょっと！みんな！？ きゃあつ！』

さゆりは熱海と聞いて心が揺れ動いているようだったが、やはり店を休むわけにはいかないと考えているようだった。と、突然さゆりが悲鳴を上げてガタガツという音がした。

『もしもし、みちるちゃん？ シエルの千佳<sup>ちか</sup>だけど！ 熱海ってホント！？』

何が起こったのかとみちるが心配していると、電話口に出たのはさゆりではなく千佳だった。

『千佳さん……店長はどうしたんですか？ いまなんか悲鳴らしきものが聞こえた気が……』

みちるはとりあえず今何が起こったのか千佳に聞いてみた。

『あはは、ちょっと無理やり代わってもらったただだよー。で、熱海行くの？』

千佳は笑いながらいま起こったことをみちるに説明し、気になっていた本題をみちるにたずねた。

『ええ、かなり大人数で行きたいと姉が言ったので知り合いに片っ端から連絡してるんですけど、店長はお店があるからダメみたいで……』

みちるはそう答えてさゆりはダメそうだから、と伝えると、

『何言ってるのよ、みちるちゃん。わたしらアルバイトチームは全員参加可能よ？ つ・ま・り、いくら店長がお店があるからと言っ

ても、働くスタッフがいなかったら、どうなるかしら？ あら？

店長、ふりほどいたんですか？ あやのとエリコの2人がかりでも抑えきれないって……きゃあっ！」

千佳は自分たちは無理やりにでも行くと言い放ち、横でもがいているさゆりを脅すような発言をした。と、どうやらさゆりがあやのたちの拘束を振りほどいたらしく、今度は千佳の悲鳴が聞こえた。

『もしもし、みちるちゃん？ さゆりよ。まさかスタッフの反乱があるとは思わなかったわ。いま千佳ちゃんを投げ飛ばして電話を奪い返したけど……でも、これは仕方ないわね。8月1日から4日間だったわね？ お店を臨時休業にして、みんなで行きましょう』

さゆりが少し疲れた声で電話に出ると、店を休んでみんなで熱海に行こうと話した。

「店長、すみません。私の個人的事情にお付き合いさせてしまつて……」

みちるは半ば無理やりに了承させたみたいで、少し申し訳なくなつて謝つた。

『気にしないで。今回の件は慰安旅行つてことにしておくから。スツフどうしの絆も深められるし、悪いことはないわ』

さゆりは苦笑しながらみちるにそう話すと、電話を切った。

その後、連絡を繰り返した結果、熱海には耕太郎、雲雀、一条、なつき、さゆり、エリコ、あやの、千佳、そして藤原が行くことになった。

それをちひろがさとみに連絡すると、「じゃあ、8月1日の午前9時に竹崎駅に集まっていって。わたしと一樹くんでレンタカーを2台借りて迎えに行くから」とのことだったので、それを峻佑たちがみんなに伝え、日は過ぎていった。

## VOL・44：海へ行こう（後書き）

夏休みといえば旅行、夏の旅行と来れば海。

そんなわけで熱海の海岸へ旅行に行くことになった一行。

熱海でどんなドタバタが待っていることやら——

次回、VOL・45：熱海へ（仮） 7月9日0時更新予定！

感想や評価など、ぜひぜひお待ちしております。

——そして、あつという間に時は流れて8月1日の朝。熱海旅行ご一行様は、竹崎駅の北口で集まり、さとみと一樹が迎えに来るのを待っていた。

「まだかしら……ねえ、ちひろちゃん。藍沢先生、9時に迎えに来るって言ってたんでしょ？ もう9時30分よ。そろそろ来てもいい頃だと思っただけど」

暑さにしびれを切らした雲雀がちひろにたずねる。

季節は真夏。しかもこの日の天気は快晴で、気温は朝からグングン上昇し、駅前の液晶温度計の数値は、すでに32 を表示していた。

「さつきメールが来て、あと少しで着くようなことを言ってたんですけ——」

ちひろが最後まで言い終わらないうちに、駅前に行く人々がざわめいた。

「なんだ、あれ！」

「でっけえ！ カッコいい！」

そんな人々の声が気になった一行が駅前ロータリーの入り口付近を見やると、普通の車を2台くらい縦につなげたような長さの黒塗りの車が、存在感をありありと示しながらロータリーに入ってくる場所だった。

「すげえな……どこの金持ちの車だよ……」

峻佑がつぶやきながらその車の行く先を目で追っていると、なんと峻佑たちの前で停車した。と、ドアが開き、出てきたのは——

「やつ、お待たせ！ 遅くなつてゴメンね！」

「ね、姉さん！？」

そう、そこにいたのは誰だろう、さとみだった。

「姉さん、この車は……？ レンタカーで来るはずじゃ……」



「あ、申し遅れました。わたくし、藍沢家の執事を務めさせていた  
だいている、近藤と申します。熱海までの道中、安全運転で皆様を  
送り届けさせていただきますので、宜しくお願い申し上げます」  
ふと思いついたように、車を運転してる執事の近藤が自己紹介し  
た。

「近藤さん、忘れてたのなら着いてからでもよかったんじゃない？  
何も運転中に挨拶しなくても……」

一樹が助手席から近藤をたしなめた。

「坊ちゃん、これは失礼いたしました。それでは、到着後に改めて  
ご挨拶させていただきます」

近藤は一樹に謝り、再び運転に集中し始めた。それっきり車内は  
静かになり、しばらくして一樹が後ろの様子を見るために振り返る  
と、全員寝ていた。

「ん？ みんな寝てしまったか。近藤さん、僕も着くまで寝るから、  
着いたらみんなと一緒に起こしてくれ。到着を急ぐ必要はないから、  
安全運転で頼むよ」

一樹も近藤にそう頼むと、目を閉じた。

「かしこまりました、坊ちゃん」

近藤は一樹に対し大きく頷くと、車を走らせていった。

そして、3時間後。

「坊ちゃん、皆さん、着きましたよ」

近藤の声にのそのそと起き出し、車から降りた一行は、景色を見  
て一瞬にして目を覚ました。

「では改めまして、わたくし——」

「すごい！」

「ホントに海が目の前だよ！」

口々に感嘆の声を上げる一行に、近藤の挨拶は無残にもかき消さ  
れた。

「それじゃあ、ちょうどいい時間だし、荷物を置いて昼食にしよう

か。そうしたら早速遊びに行こう」

一樹もあえて何も言わず、近藤からカギを受け取ってドアを開けながら、未だに海を見て騒いでる一行に言った。

「はい！ あれっ、ところで、メシはどうするんですか？」

峻佑が元気良く返事をして走り出したが、急に立ち止まって一樹に聞いてみた。

「心配は無用だよ。ここに来ることはもう藍沢家のメイドさんに伝えてあるからね。内部の掃除はもちろん、食材もきちんと買い揃えて冷蔵庫にしまっているのさ。ああ、今はいいよ。今朝までに準備を済ませてもらって、帰京してるはずだから」

一樹は笑いながら峻佑に言ったが、その中の“メイド”という単語にシエルの面々がピクツと反応した。

「みんな……ここは‘アレ’の出番ね。用意はいい？」

さゆりが瞳に怪しげな光を宿しながらちひろとみちるも含めたシエルスタッフ一同にたずねる。一同は一斉に頷くと、女性陣は「ちよつと失礼」と言って冷蔵庫とかのある食堂から姿を消した。その間に峻佑と藤原の男性陣は、すぐに食事を作るから、とみんなを座らせていた。

「しかし、お客様である皆さんに食事の用意をさせるわけには……」  
やはり一樹や近藤は少し慌てて止めようとしたが、

「まあ、ここは任せてください」

峻佑と藤原のコンビに押し返され、仕方なく座って待つことにした。

やがて、女性陣が戻ってきた。——メイド服で。

「さあ、始めるわよ！」

あ然として声も出ない一樹たちを尻目に、さゆりの号令でみんなが一斉に動き出す。さすがに食べる人数が多いので、エリコと千佳以外は全員調理をしていた。

普段からやり慣れてるだけあり、てきばきと昼食のオムライスが

できていく。

「はい、これで全員分ね！」

ちひろが最後の1人分を完成させ、賑やかな昼食が始まった。

「ちひろさんのメイド姿……素敵だ」

オムライスをほおばりながら、耕太郎はちひろのメイド服を眺めていた。

「もう、沢田くんってば、ほめても何も出ないよ？」

ちひろは笑いながら耕太郎を軽くあしらひ、食堂は笑いに包まれた。

「それにしても、どうりで私たちに比べて荷物が大きいと思ってたら、まさかそういうアルバイトをしていて、そんなものを持ってきたなんてね。驚いたけど、よく似合ってるじゃない」

雲雀がちひろやみちるをからかうようにニヤリと笑いながら指摘すると、2人は真っ赤になってしまい、さらに食堂は賑やかな笑い声に包まれるのだった。

「ん、もう！ 峻佑くんは笑いすぎ！ あとで覚えてなさいよ！」

**VOL・45：熱海到着（後書き）**

多少予定とは違ったものの、一行は熱海に到着。

次回、一行は海岸へ遊びに出る。これだけの人数が集まれば、トラブルが起こるのは必然なわけで――

次回、VOL・46：海で遊ぼう―セクハラは制裁よ―

感想・評価お待ちしております！。

VOL・46：海で遊ぼう―セクハラは制裁よ―

昼食を終えた一行は、早速海へ出ることにした。

峻佑たち男性陣は先に着替えを済ませて別荘を飛び出していき、後には女性陣だけが残された。

「うわ、千佳さん胸おっきい」

水着に着替えながら、ちひろが自分の胸と比べてため息とともに呟いた。

「そ、そう？　ちひろちゃんやみちるちゃんだって決して小さくはないと思うわ……って、何？　皆してその野獣みたいな目は……」

千佳は落ち込むちひろをなんとか取り繕おうとしたが、周りで見替えているみんながジッと見ているのに気づいて、内心冷や汗をかきながら訊ねる。

「うふふ……千佳ちゃんってずいぶん着やせするのね。普段のメイド服姿からは想像できなかったわよ」

「そうそう、よかったら私たちにもその巨乳の秘密、教えてくれないかな」

などと言いながら、さゆりやエリコ、さらにはちひろやみちるまでもが手をわきわきさせながら千佳に迫る。

「あはは……ちよつと待って、落ち着いてよ、ねえ、みんな!？」

千佳はどうにか逃れようと後ずさりしていくが、部屋の広さは無限ではない。やがて壁にぶち当たってしまった。

「もう逃げられないわね、千佳。さあて、覚悟はいい？　みんな、やっちゃえー!」

千佳を追い詰めたのを確認すると、先頭に立っていたエリコの号令の下、いつの間にかいた雲雀とさとみを含めた全員が千佳に飛びかかった。

「い——————や——————!!」

哀れ、千佳は全員にもみくちゃにされ、海で遊ぶ前から疲れ果て

てしまうのであった。

同時刻、海辺にて。

「あれ？ いま何か別荘のほうから悲鳴みたいなの聞こえなかった？」

パラソルとかを設営していた男性陣のうち、峻佑が千佳の悲鳴を聞きつけ、みんなに聞こえたか訊いてみた。

「うつすらとだけど、聞こえたぜ。もしかして、何かあったのかな？ 俺、ちょっと見てくる。こっちは任せたぜ」

耕太郎がそう言っただけで別荘のほうへ歩いていった。すると、一樹と藤原が「一緒に行こう」と言っただけで別荘に向かい、残された峻佑と一条は引き続きパラソルを立てていった。

「なんでもないと思うのはオレだけだろうか……」

峻佑がボソッとつぶやき、

「いや、私も同感だ。おそらく、今の悲鳴は女性同士のスキンシップのひとつだろうな。我々男の出る幕ではなからう」

黙々とパラソルを設営していた一条が峻佑の意見に同意した。

「やっぱ会長もそう思いますか。あの3人、生きて帰って来れるといいけどな……」

峻佑が彼らを心配する声は、当然だが彼らには届かなかった。

「大丈夫か！？ 何かあったのか！？」

一樹がそう叫びながら別荘に飛び込むと、揉み尽くされて身体をピクピクと痙攣させた千佳が床に倒れ伏していた。そして、女性陣の半分くらいは着替えの途中で千佳の揉み倒しに突入したため、半裸だった。慌てて脱ぎかけの服で体を隠したが、耕太郎も藤原もバツチリ見てしまったらしく、鼻血を垂らしていた。

「えーと、別になんでもなかったんだね。僕らはお呼びでないと。こりゃ失礼しました」

一樹は鼻血を垂らして固まっている耕太郎と藤原を引っ張って、

「お後がよろしいようで」と言いながら出ていこうとしたが、その肩を誰かに掴まれた。嫌な予感がビンビンするなか、恐る恐る振り向くと、笑顔で釘バットを構えるさとみ・ちひろ・みちるの3姉妹の姿があつた。

「女の子の着替えの途中に堂々と突入してくるなんて、覚悟はできてるわよね、あなた？」

さとみがまず釘バットを一樹に突きつけ、

「いま見たものを忘れてくれないと、あたし怒っちゃうよ」

続いてちひろが満面の笑みで耕太郎に釘バットを突きつける。

「あんまり職場の先輩にこんなことはしたくないですけど、女の子の着替えを堂々と見に来るようなおイタをする人には、お仕置きをしないといけませんよね」

さらにはみちるまでもが釘バットを構えて藤原に突きつけた。

「待った！ 話を聞いて——」

凶器を前に一樹は事情を話そうとしたが、

「問答無用！ 真昼の星になりなさいっ！」

さとみはバツサリ斬り捨てて、釘バットを炸裂させた。

「つて、どこから釘バットなんか持ち出したんだああああ……」

……」

耕太郎の叫びも空しく響くだけで、彼らは窓ガラスをぶち破って空高く飛ばされ、星になった……

「やつぱりこうなったか。止めようとしたのに、さっさか突撃していくから……」

パラソルを設営し終わった峻佑は、さとみたち3姉妹に弾丸のごとくかつ飛ばされたあと、潮の流れで浜辺に流れ着いた3人を見て、つぶやきながら手を合わせた。

「ふっ……痛い目には遭ったが、いいもん見れたぜ……」

いち早く復活した耕太郎が親指をグツと立てて、ニヤリと笑って見せた。

と、その直後。突如として上空を黒雲が覆い、耕太郎めがけて雷が落ちた。

「のわあああ！」

避ける間もなく雷の直撃を受けた耕太郎は、黒こげになって再び倒れた。上空にあった黒雲は、雷が落ちたあとは何もなかったような青空に戻っていた。

「全く、沢田くんつてば、反省してないみたいね」

あまりに突然すぎ、またあまりにも正確すぎる落雷に、峻佑や一条は魔法ではないか、と考えて別荘のほうを振り向いた。すると、やはりちひろとみちる、そしてさとみがにこやかにこちらに向かってきていた。

「おいおい、ちひろ。こんなところで魔法なんか使って、誰かに見られたらどうするんだよ？」

峻佑は黒こげになった耕太郎をあえて見ないフリして、小声でちひろに詰め寄った。

「大丈夫よ。ほら、いまこのビーチにいるのは魔法のことを知っている人だけだし、唯一知らない藤原さんは釘バットで気絶したまま。他の女性陣はまだ着替え中で出てきてないしね」

ちひろは安心してと言わんばかりに胸を張った。

「まあ、大丈夫ってんならいいんだけどさ、殴り飛ばした上に雷まで落として、コートローのやつ、生きてるか？」

そこでやっと黒こげの耕太郎に目を向けると、まだ倒れていたが、ピクピクと動いていたので大丈夫と判断された。

「お待たせ」。覗きトリオの制裁は終わった？」

ようやく着替えが終わった他の女性陣が別荘からビーチに出てきた。

「……………デカイ」

女性陣を見て、峻佑たちが真っ先に目があった場所、それはやはりというかなんというか、千佳の胸だった。峻佑や一条だけではなく、いつの間に復活したのか、耕太郎たちも千佳の胸に釘づけにな

っていた。

「推定Gカップ、いやHはあるんじゃないだろうか……」

耕太郎がジッと千佳の胸を見つめてそうつぶやいた。

「そんなに见ないで」

千佳はすっかり恥ずかしがって胸を手で隠そうとしているが、あまりの大きさに隠し切れていなかった。

「でも、千佳さんだけじゃなくてさとみ姉さんやさゆりさんもなかなか……」

峻佑もやはり年頃の男子。胸にばかり視線が行っていた。パツと見で見比べて、大きめのサイズを持つさとみやさゆりに気づいて、つぶやいた。

「おおう、これはこれでなかなか……さとみさんがDにさゆりさんはCってとこ……ん？」

耕太郎がそちらを見て、サイズを推測していると、誰かが肩を叩いた。耕太郎が振り向くと――

「この、セクハラ大魔神っ！ 煩惱、退散っっ！」

今度は全員からの釘バット攻撃だった。同時に峻佑もターゲットにされ、殴り飛ばされていた。

「だから、いったいどこからそんなに釘バットを出したんだああああああああ！」

全員にタコ殴りにされた挙げ句、峻佑はちひろに、耕太郎はさとみによって特大のホームランとして空高く打ち上げられたあと、そのまま海に沈んだ。

数分後、2人は潮の流れでなんとか浜辺にたどり着いたものの、日が暮れるまで一切女性陣の胸の話はおろか、話しかけることすらせずに、同じ心の傷を持つ藤原や一樹とともにみんなから離れた場所で遊んでいたのだった。

VOL・46：海で遊ぼう―セクハラは制裁よ―（後書き）

楽しげに海を満喫するちひろたち一行。だが、そんな彼らを見つめる怪しい影があつた。果たして彼らの正体と目的は？

次回、VOL・47：謎の男（仮） 7月23日0時更新予定、  
お楽しみに。

## VOL・47：怪しい男

——少し時間は戻って、まだ太陽が照りつけているころ、ちひろたちが遊んでいる海辺を一望できる崖の上の建物から、男が一人、双眼鏡を使つてその様子をうかがっていた。

「じい、いるかい？」

おもむろに双眼鏡を置いて窓辺から少し離れ、誰もいない部屋の入り口に呼びかけると、

「お呼びですか、輝坊<sup>ひかる</sup>ちゃま」

先ほどまでは誰もいなかったはずの部屋に、執事風の老人が姿を見せた。

「済まないんだけど、眼下<sup>した</sup>の海岸で遊んでる双子の女の子たちのことを調べてくれないかな」

輝と呼ばれた男は老人にそう頼んだ。

「海岸で遊ぶ女性たち、ですか。……失礼します。ふむ、かしこまりました、輝坊<sup>ひかる</sup>ちゃま」

じいと呼ばれた執事風の老人は窓辺に寄つて双眼鏡を使い、目標<sup>ターゲ</sup>物<sup>ット</sup>を確認すると、一礼して部屋を出ていった。

「夕飯できたよー」

ちひろとみちるがおたまでフライパンを叩いて知らせる。それを聞いて、あちこちに散らばっていたみんなが集まってきた。

「おっ、カレーか。どつりでいい匂いだと思った」

昼間の心のキズは癒えたのか、峻佑がいち早く食堂に駆けつけた。その後、続々と食堂に集まり、賑やかな夕食が始まった。

「うわ、このカレーうんめえ！ おかわりっ！」

耕太郎もすっかり元気になって、ものすごい速さでカレーを食べていた。

「おいしいって言ってもらえてよかったわ。でも、そんなに焦って食べなくてもまだおかわりはいっぱいあるよ。そんなに焦って食べて、喉に詰まらせても知らないわよ？」

耕太郎におかわりを盛ってやりつつ、笑いながらたしなめたちひるだったが、

「いやホントおいしいですよ！ これならあと2〜3杯は……うぐっ、み、みず……」

言ってるそばから耕太郎はご飯を喉に詰まらせて苦しみ始めた。

「もう、だから言ったのにー！ はい、お水！ しっかりして、沢田くん！」

ちひろは慌ててコップに水を汲んでくると、耕太郎に手渡して飲ませた。

「ぶはあっ！ あぶねえ、美味しいもの食いながら死ぬところだった……」

なんとか耕太郎は水を飲み干して生還すると、冗談混じりの言葉でおどけてみせた。しかし、本気で心配していたみんなにそんな冗談は通じるはずもなく、全員ただ無言で耕太郎を睨みつけた。

「……ゴメンナサイ。もう少し落ち着きます」

何度殴り飛ばされてもピンピンしていた耕太郎だが、さすがにこの無言の圧力はこたえたらしい。素直に謝ってしゅんとしていた。

「坊ちやま、入りますぞ」

その頃、崖の上の建物では、先ほどの老人が輝の部屋をノックして入っていくところだった。

「早いね、もうわかったのかい？」

輝は嬉しそうに老人にたずねた。

「はい、彼らは東京の高校生とその姉夫婦、さらに友人たちのようですね。何か気になるところでもございましたか？」

老人はいったいどこでどのようにして調べたのか、調査結果を淡

々と伝え、最後に聞き返した。

「あの中に、同志がいるみたいなんだよ。誰がそうなのか、もしかしたら全員そうなのか、まだわからないけど、ぜひとも仲間に加えたいね」

輝はニヤリと気味の悪い笑みを浮かべると、老人に話した。

「なるほど、そうでしたか。では、明日もう一度調べてみましょう。どうやら彼らはまだここに滞在するよう――」

老人もまたフツと薄い笑みを浮かべながら言った。と、

「いや、明日はボク自身が行こう。近くまで行けば誰がチカラを持つてるのか感じ取れると思うしね。まあ、ボクの見立てでは、あの子の姉妹がそうなんじゃないかと思ってるけど」

輝はじいの言葉を遮って自ら動く意思を見せた。

「大丈夫ですか、坊ちゃん。必要なことはこのじいに言ってお下されば全てこなしますぞ」

じいは輝を心配して、そうたずねた。

「大丈夫さ。彼らの中にいる“チカラを持つ者”がどんなものかまだわからないけど、ボクもまた“魔法使い”なんだから。じいが心配することはないよ」

輝は自らが“魔法使い”だから、という理由で大丈夫だと言った。

「……そうでしたな。じいが出過ぎたマネをいたしました。では、私はこれで」

じいは軽く頭を下げると、部屋を出ていった。

「フフフ……同志を見つけるのは初めてだから胸が高鳴るよ。ああ、明日が楽しみだ」

後には、輝の独り言が不気味に響くのがあった。

翌日。昨日とは打って変わってどんよりとした曇り空。しかし、雨は降ってないので、ちひろ、みちる、峻佑、耕太郎、そして一条の5人だけが海辺に出ていった。雲雀が出てこなかったのは、昨日はしやぎすぎて全身筋肉痛を起こしてしまい動けないかららしい。

また、さとみたち夫婦やシエルの面々は、“そんなに焦って遊ばなくても、まだ時間はあるんだし”との理由で室内に留まっていた。

「風が出てきたな……」

さすがに曇り空の下、海に入るのは躊躇ためらわれたので、5人でビーチボールをして遊んでいたのだが、段々風が出てきて、ボールが流されるようになってきた。

「そうだね……そろそろ戻る？」

ちひろがボールをキャッチして峻佑たちに聞いてみた。と、そのとき。

「ちよつと待った。あれは……？」

峻佑が海を見つめて、波間を指差して聞いた。

「大変、あの人が溺れてる！ 助けなきゃ！」

ちひろがボールを投げ捨てて海に飛び込む。それを見てみちると峻佑も後を追いついて、一条と耕太郎は別荘へ知らせに行った。

3人とも、泳ぎは下手ではない。すぐに溺れてる人のところへたどり着き、峻佑が支えた。だが、さすがに泳ぎが上手い峻佑でも、人を抱きかかえていると泳ぎにくいため、帰りはちひろとみちるが密かに魔法で腕力や脚力を強化して、峻佑と青年を引っ張り出した。と、そのとき。背後から大波が4人を襲った。

「みちる！」

「うん！ 行くよ、しっかり捕まってるね！」

波が4人を押しつぶしかけたその瞬間、間一髪テレポートで脱出し、波打ち際に倒れ込んだ。

「みんな、大丈夫！？」

ちようどそこに一条と彼が呼んできたさとみたちがやってきた。

「うん、あたしたちは大丈夫。けど、この人は溺れて気を失ってるみたい。ちゃんと心臓は動いてるし、水もそんなに飲んでないはずだからたぶん問題はないと思うけど……」

ちひろは峻佑が抱えている青年の心配はなさそうだ、と話した、

そのとき。

「坊ちやま！」

海辺の道路から一気に坂を駆け下りて、執事風の老人が一行のところに向かってきた。

「この人の保護者ですか？」

さとみが老人にたずねると、

「はい。あ、すみません。申し遅れました。私、そちらの輝坊ちやまの執事を務めさせていただいてる、北海きたうみ道雄みちおと申します。先ほどから坊ちやまの姿が見えなくて探していたところだったのです。助けていただいたみたいで、なんとお礼を申し上げてよいやら……」

執事風の老人は、自らを北海、青年を輝と紹介し、助けてくれたことに礼を繰り返した。

「いえ、海に飛び込んで輝くんを助けたのはこっちの3人です。それに、お礼なんかよりも、早く輝くんを休ませてあげたほうがよろしいのでは？」

さとみは恐縮しきりだったが、ハツとしたように、北海に輝を休ませるように言った。それを受けて、輝を抱えていた峻佑が北海に輝を受け渡す。

「では、後日改めてお礼に伺わせていただきます」

北海は輝を抱きかかえて車に戻ると、急いで走り去り、峻佑たちもそのまま別荘に戻っていった。

「輝坊ちやま、もういいですよ」

海辺から離れ、移動中の車内で北海が呼びかけると、何事もなかったように青年が目を覚ました。

「ふう、溺れたふりするのも楽じゃないな」

青年——輝は笑いながら言った。

「お疲れさまでした。それで、誰が“チカラを持つ者”なのかわかりましたか？」

北海は輝をねぎらい、そのついでに聞いてみた。

「ああ、偶然にも最後に大波が押し寄せてくれたおかげでわかったよ。やっぱり、あの双子の姉妹がそうだった。さて、じい。彼らの通う高校に編入する手続きを取ってくれないか？」

輝は嬉しそうにそう話した。

「かしこまりました、輝坊ちゃま」

北海は頷き、車は彼らの屋敷に到着した。

「フフ、ちひろにみちる、か……ボクに服従させてあげるよ。フッフッフ……」

屋敷に入りながら輝は不気味な独り言をしゃべり、

『ハックシヨン！ あれ、風邪でも引いたかしら……？』

噂されてるとは知らず、ちひろとみちる、2人同時にクシャミをするのだった。

## VOL・47：怪しい男（後書き）

終始謎の行動と発言ばかりだったこの輝という男、何者なのか。

峻佑たちはまだ知らない、この男が後々自分たちに大きく関わってくることを――

こんな思わせぶりなことを書いておきながら、次回は夏休み終了間際の、いつものドタバタ劇。

――姉妹の想いが、はちきれたとき、市原家は戦場と化す。

次回、VOL・48：想いの暴走（仮） 7 / 3 0 0 時更新予定です。

熱海から帰ってきて2週間。峻佑たちはダラダラとした毎日をごしていた。そんなある日のこと――

「ねえ、峻佑くん」

珍しく今日は3人ともアルバイトが休み。この日の食事当番のみちるがひとりで買い物に出かけてしまったので、峻佑とちひろはゴロゴロとのんびりしていたが、不意にちひろが何かを思い出したように峻佑を呼んだ。

「ん、どうかした？」

峻佑は雑誌をめくる手を止め、お茶を口に含みながらちひろにたずねた。

「結構前の話だけど、あたしとみちるが峻佑くんのことが好きだって告白したの、覚えてるよね？ あの時の答え、聞いてなかったな！ って思ってた」

ちひろが用件を話した途端、峻佑は飲んでいたお茶を盛大に吹き出し、読んでいた雑誌が濡れてしまった。

「ゲホッ、ゴホッ！ い、いきなりなんなんだよ。びっくりするじゃないか」

峻佑はハデにむせかえり、目に涙を浮かべながら言った。

「あはは、ゴメンゴメン。でも、いくら待って言っても、いつまでも先延ばしにされるのはちよつとイヤだから、覚えてるか確認しただけ。まさか、忘れてたなんて言わないわよね？」

ちひろは、軽く謝りつつも、あまり悪びれてはいないようだった。そして、峻佑がぼんやりしてるので、少し怒って詰め寄った。

「大丈夫、ちゃんと覚えてるよ。あんなインパクトの強い出来事を簡単に忘れやしないって。でも、まだ答えを出すのは待ってくれ。

2人ともさすがによく似てるし、どっちも可愛いから選ぶのが大変なんだよ」

峻佑は迫り来るちひろの肩を押して一定の距離を保つと、そんな言い訳にも聞こえるような説明をした。

「うん……わかったわ」

ちひろは笑顔を見せていたが、がっかりしているのは峻佑の目にも明らかだった。

（こりゃ早いと結論出した方がいいな。でも、安易に決めて後悔したり、2人を悲しませるようなマネはしたくないし、どうしたものかな……）

峻佑はトイレに行きながら、そんなことを考え、悩んでいた。

（やっぱり峻佑くんニブいからなあ……ここはフェアじゃないかもしれないけど、既成事実のひとつも作っちゃおうかしら）

一方のちひろも、なにやら考え込んでいた。

「ごちそうさまでした。ところで、食事中2人ともずっと黙々と食べてたけど、どうかしたの？」

夕飯を食べ終わるなり、みちるが2人にたずねた。

「いや、なんでもないよ。ちょっと考え事をしていただけ」

「あたしも大したことじゃないわ。もう少しで夏休みも終わりだし、そろそろ生活リズムを元に戻していかないと、って思っていたのよ」

峻佑は素直に考え事をしていたと話し、ちひろは本当に考えていたことは隠し、堂々とウソの理由を並べ立てた。

「なんでもないならいいんだけど、あんまり無言だと、美味しくなかったのかな、とか思っちゃったからさ。ほら、今日のおかずは初めて挑戦したものもあったし」

みちるはあはは、と笑いながら話した。

「それは心配いらないよ。十分美味しかった。無駄な心配かけたみたいで、悪かった。ゴメンな、みちる」

峻佑は料理が美味しかったと話し、せっかくの食事中に考え事を

していたことを素直に詫びた。

「ううん、いいの。気になってたこともスッキリしたしね。それじゃ、片付けて私はお風呂に入ろうかな」

みちるはそう言っただけで立ち上がると、食器を手際よく洗っていき、終わるとそのままお風呂に消えていった。

「明日もみんな休みか。忙しい時期なのに連休なんて、いいのかな」  
寝る前に、明日の予定を確認してみると、明日も3人揃って休みだった。峻佑は最近の忙しさから、少し不安になって姉妹に聞いた。  
「そういうシフトなんだし、いいに決まってるでしょ。一応、あたしたちはまだ高校生だし、きつといういろいろと制約があるのよ。それじゃ、あたしたちも寝ましょ。おやすみ、峻佑くん」

ちひろは何を言っているのと言わんばかりに峻佑の不安を一蹴し、みちるとともに部屋に入ってしまった。

「それもそうか。それじゃ、2人とも、おやすみ」

峻佑は苦笑いすると、階段の電気を消して自らも部屋に入り、さっさと眠りについた。

それから30分ほどして――

「うふふ、みちるはよく眠ってるわね。眠りかけたところに追い討ちで眠りの魔法をかけたし、朝までグッスリね。峻佑くんも寝てるかしら……」

ちひろは2段ベッドの上段から身を乗り出して下段のみちるの様子を伺って、ちゃんと眠っていることを確認すると、静かにベッドから降り、ソツと部屋を後にした。

「夜のうちに峻佑くんが既成事実を作ってしまったえば、峻佑くんはあたしを選ばざるを得ないわ。あら？ カギがかかっている……んもう、峻佑くんってば、夜のうちにエッチな本を処分されないための自衛

策かしら。今夜の目的はともかく、あたしたちには力ギなんて無意味なのに……えい」

ソツと峻佑の部屋に忍び寄り、ドアを開けようとしたちひろだが、峻佑の部屋には力ギがかかっていた。ちひろはボヤきながら、魔法を使って錠錠すると、その身を部屋の中へ滑り込ませた。

「姉さん……私に魔法をかけてまで眠らそうとするなんて、どういうつもりかしら？ 私は耐性が強いからまず効かないことくらい、姉さんはわかってるはずなのに……」とつさに寝たフリしたけど、もしかして姉さん、何か企んでるの……？」

ちひろに眠らされたはずのみちるは、起きていた。さすがに同じ魔法使いで、ちひろにとっては双子の妹。魔法への耐性は並ではなかったらしい。みちるはそつとベッドの上で体を起こすと、ちひろの気配を探ってみた。

「峻佑くんの部屋……？ 姉さん、何やって……まさか！」  
みちるはちひろのいる場所からひとつの推測を導き出すと、素早く立ち上がった部屋を飛び出した。

その頃、ちひろは峻佑の寝ているベッドにもぐり込み、まさに既成事実を作らんとしているところだった。ちなみに、峻佑はまだ起きない。グッスリと眠っている。

と、そのとき。念のため力ギをかけておいた入り口の扉が、轟音とともに吹き飛び、砕け散った。

「な、なんだあ！？ 何が起こった……って、ちひろ！ 何やってんのさ！？」

あまりの轟音に峻佑も飛び起き、振り向いた先にちひろがいたので、入り口を見るより先にそつちを問いただした。

「何って、既成事実を作りにきたの。峻佑くん、優柔不断だし、どうせ安易に選んで悲しませたくないとか思ってたんでしょ。それじゃあラチがあかないから、こうして夜這いをかけにきたの」

ちひろは立ち上がりながら峻佑にそう話した。

「あれ、じゃあ、いまドアを破壊したのは……」

そこでようやく峻佑が部屋の入り口を見やると、暗い部屋と電気をつけて明るくした廊下の明るさの差で逆光状態になったところに修羅と化したみちるが立っていた。

「み、みちる……なんで？ 邪魔が入らないように眠らせたはずなのに」

ちひろがバカなと言うような表情でみちるを見る。

「姉さん……何寝ぼけたこと言ってるの？ 私は姉さんとは双子の魔法使いなのよ？ 魔法への耐性くらいはあるわよ。強い魔力を持つてるのは、姉さんだけじゃないってこと、忘れないでほしいわね」  
ドアを破壊するのに、得意とする氷の魔法を使ったらしく、粉々になったドアの破片は凍りついていて、みちるの右手は蒼くきらめいていた。

「あーあ、妹を甘く見過ぎたか。今夜は失敗ね。じゃ、峻佑くん、これからスキを見て忍び込むから、覚悟しといてね」

ちひろがひらひらと手を振って峻佑の部屋を出て行こうとしたが、未だ怒りの収まらないみちるがその肩を捕まえた。

「姉さん……堂々と抜け駆けを宣言するなんて、どういっつもり？」  
みちるがちひろを睨みつけながら訊く。

「あら、言葉のとおりよ。あたしはもう待つのに疲れたの。だって、子供の頃から、もう10年以上想ってきたのに、気づいてくれない。あんただってそうでしょう？ 気づいてくれないなら、行動を起こすしかないじゃない。それに不満があるんだったら、みちるだってやればいいじゃない。どっちが先に峻佑くんをものにできるか、競争したって構わないわよ」

ちひろが想いをぶちまけ、みちるに宣戦布告した。

「あー、ちよつといいか？」

と、そこに峻佑が頭を抱えながら口を挟んできた。

「なに？ 峻佑くん。これはあたしたち姉妹の問題よ」

ちひろが聞き返しつつも、暗に部外者は関わるなど言っているようだった。

「2人の争いに口を挟むつもりはなかったけど、一応、オレは賞品<sup>モ</sup>じゃないんだからな？ それに、オレはこんなことで2人に争って欲しくな——」

「なによ！ 元はと言えば峻佑くんが優柔不断なのが原因じゃない！」

激昂しているみちるは、峻佑の言葉を遮って叫んだ。まだ落ち着く様子はないようだ。

「そんなに吼えるなよ……夜中に近所迷惑だろ？ ああもう、仕方ない！」

峻佑はなんとか2人を落ち着かせようとしたが、2人とも話を聞く素振りを全く見せないで、峻佑も静かに怒った。姉妹の言い争いに乗じて、こっそりみちるの背後に迫ると、不意について首筋に手刀を一発お見舞いした。

「あつ……」

完全に不意を突かれて背後への注意が行き渡っていなかったみちるは一声漏らすと、そのまま床に倒れ伏した。

「し、峻佑くん……」

自分もやられると思ったのか、ちひろは身構えながら峻佑の一挙手一投足に注意を払っていた。だが……

「あー、やっと静かになったな。ちひろ、みちるを頼むな。オレは寝る。あと、明日でいいからこのドア直してくれよ？」

峻佑は身構えて警戒しているちひろの横を素通りして部屋の入り口に立つと、ちひろにそう頼んでベッドにもぐり込んでいき、肩すかしを食らった格好のちひろは、「う、うん」と頷くことしかできなかった。

翌日、落ち着きを取り戻した姉妹の魔法で壊れた扉は元通りになったが、夏休みも終わる間際になって、この三角関係はより微妙な

ほうへ転がり始めたことは言うまでもない。

**VOL・48：暴走特急、その名は…（後書き）**

夏休みも終わる頃、火種が急に発火して微妙な局面を迎えた三角関係の行方は？

次回、ついに最終章開幕。転校生は嵐を呼ぶのはもはやお約束なのか？

**VOL・49：新学期の出会い（仮）**

お楽しみに！。

## VOL・49：嵐を呼ぶ転校生

9月1日、今日から2学期が始まる。

先に起きたちひろとみちるが朝食の支度をし、その後でまだ寝ている峻佑を起こしに行った。起こすだけならどちらか1人で良さそうなものだが、先日の一件以来、姉妹の仲は峻佑がらみになると険悪とまでは言えないものの、微妙な状況になってしまっているので、お互いが妙なことをしないように、2人で起こしに行くことにしたのだ。

「峻佑くん、朝だよ。起きて」

「今日から学校だよ。早く起きないと遅刻しちゃうよ」

峻佑の部屋に入って、姉妹が口々に峻佑に声をかけるが、

「うゝ、あと5分……」

峻佑はねぼすけの定番とも言えるようなことを言って布団を頭から被って潜り込んでしまった。

「峻佑くん？ これで起きなかったらどうなるか、わからないわけじゃないよね？」

ちひろが顔を引きつらせながら、峻佑に最後通告を行った。しかし……

「……………」

布団に潜り込んだまま、峻佑はピクリとも動く様子がなかったの  
で、様子を見ていたみちるともども、ちひろがキレた。

「言っておくけど、あたしは何度も起こしたからね！ 文句は聞かないわよ！」

ちひろがそう叫んでから、指をパチンと鳴らすと、峻佑の布団が吹っ飛んだ。寒いダジャレではなく、布団がひっぺがされて、くるまっていた峻佑は床に落とされた。それで目を覚ませばまだ良かったのだろうが、今朝の峻佑はいつも以上のねぼすけで、床に落とされてもまだ寝ていた。

「ふーん、そんなに寝間着でいたいのか？ なら、ずっとそのままで

いれば!？」

続けてみちるも怒鳴って指をパチンと鳴らすと、はだけていた峻佑の寝間着がきちんと着せられ、さらにギュツと締め付け始めた。全身を圧迫されてピチピチの服を着ているような状態の峻佑は、男の生理現象から、下半身が盛り上がっていた。

「キャツ! なんてもんの見せるのよっ! ってか、さっさと起きなさい!」

ちひろはこないだ既成事実を作ろうとして侵入したにもかかわらずそんな恥じらいを見せると、雷球をぶっ放した。

「ぎゃああ! これはオレのせいなのかああ!？」

これほどの連続攻撃コンボを受けてようやく峻佑は起きたのだった。

その後、すっかり冷めた朝食を温め直して食べ終わる頃には、遅刻が免れない時間になっていた。

「マズいな……チャイムまであと5分しかない。さすがに寝坊しすぎたな」

峻佑は自分が起きなかつたせいでこんなことになっていることを理解していて、済まなそうにつぶやいた。

「峻佑くん、ちゃんと反省してよね。まあ、学校へは間に合うから大丈夫よ」

ちひろは峻佑に反省を促すと、玄関の鍵を内側からかけ、みちると協力して、峻佑を連れて学校までテレポートした。

「転校生? しかも、うちのクラスに?」

始業式を終えて、ホームルームにて、脇野から転校生が来ていることを知らされた。

「ああ、入ってきなさい」

脇野の声に、教室の扉を開けて転校生が入ってきた。

「それじゃ、自己紹介をしてくれ」

「はい。初めまして、熱田<sup>あつた</sup> 輝<sup>ひかる</sup>と言います。皆さん、よろしく願いますね」

入ってきた転校生の男は、自己紹介をすると、軽く会釈した。

「あつ、あなた！ 熱海の海で溺れてた……！」

すると、ちひろが輝を指差して叫んだ。

「なんだ、真野、知り合いか？ 熱田君は家庭の事情で静岡の熱海から引越してきたそうだ。席は……そうだな、ちょうど真野と酒井の間が空いてるな。そこにしよう。じゃ、熱田君、あそこの席に」  
脇野が席を指差すと、輝は頷いて席についた。

「ねえねえ、熱田君が前に暮らしていたところってどんなところだったの？」

ホームルーム終了後、輝の周りは女子の人ばかりができていて、輝を質問責めに使っていた。

峻佑とちひろは、それを遠巻きに見ながら、帰り支度をしていた。  
「すごい人気だな、転校生。つか、まさかあのときのヤツがわざわざ転校してくるなんて、なんかありそうだな」

峻佑がちひろにそう話しかけると、

「そうね。でも、見た目かっこいいし、仕方ないんじゃない？ あたしには関係ないけどね。それに、家庭の事情なんだから、勘繰りすぎるのもどうかと思うわよ」

ちひろがあははと笑いながら話していると、

「えっと、真野さん……だっけ？」

突然後ろから話しかけられた。

「えっ？」

ちひろが驚いて振り向くと、いつの間にか女子の人だかりどころか、教室内には峻佑、ちひろ、輝の3人しかいなくなっていた。

「あら、もう覚えてくれたの？ それで、熱田君はどうしたの？」

ちひろが輝にたずねると、

「真野さん、キミ、魔法使いだろう？」

輝はなんの前置きもなしにちひろにそう聞いてきた。しかも、すでに確信を持っているような聞き方だった。

「はあ？ いきなりなんなのよ？ しかも魔法使いって、高校生にもなって実在すると思っっているの？」

ちひろはドキリとしたが、それでも動揺を悟られないように、上手くごまかそうとした。

「ああ、いるさ。だって、ボク自身がそうなのだから」

輝はそう言っていると、ふわりと宙に浮かんで見せた。

「……っ！ この魔力、本物みたいだけど、あたしたちとはまた違う感じね。ええ、もう否定しても仕方ないわね。あたしと妹のみちるは魔法使いよ。それで、あなたの目的はなんなの？」

ちひろは輝が本物であることを知って、開き直るように認めることにし、その上で目的をたずねた。

「ここでは話にくいな。迎えを呼んであるから、ボクの家で話さないか？ 校門のところで待っているから、妹さんと一緒に来てほしい」

輝はそう言っていると、カバンを手に教室を出て行った。

「なんなんだ、アイツ……本当に魔法使いなのか、ちひろ？」

峻佑がちひろにたずねると、

「ええ、彼が浮いたときに感じたのは、たしかに魔力だった。ただ、どこかあたしたちのそれとは違う感じがなのが気になるところだけ。まあ、何にせよ、それほど強い魔力は持ってないみたい。何を企んでるかわからないけど、とりあえずみちるを連れて、アイツの誘いに乗ってみましょう」

ちひろは頷いてそう話し、2人でみちるを呼びに行った。

「よく来てくれたね。さあ、車に乗って。ん？ 市原くんも来るのかい？ なに、付き添い？ まあ、いいか」

輝は迎えに来ていたリムジンの後部座席のドアを開けると、ちひろとみちるに乘るように促した。峻佑がいるのが少し気になったようだが、それ以上は何も言わず、輝を含めて4人を乗せた車は走り出した。

「ようこそ、ボクの家へ」

走ること、およそ15分ほどで車は止まり、輝が先に降りてちひろやみちるがいる方のドアを開けると、そう言った。

「それで、あなたの目的は一体なんなの？ わざわざあたしたちに自分が魔法使いだと明かしたからには、それなりの訳があると見ていいのよね？」

車から降りながら、ちひろは改めて輝にたずねた。

「そうだね。ボクの目的、それはキミたち姉妹をボクが所属している組織の仲間に加え、世界を支配すること、そう言えばわかりやすいかな？」

輝は、こともなげにちひろとみちるに自分の目的を話した。

「世界を支配い？ あんた、頭大丈夫？ マンガとかに毒されすぎてるんじゃないの？」

ちひろは、あまりに突飛な話に顔を歪めて輝をバカにした。

「いたってボクは正気さ。組織はまだ小さいが、その力は本物だ。なにせ、ボクを魔法使いにしてくれたのも組織の人だからね。そこに、生粋の魔法使いのキミたち姉妹が加われば、組織の夢は実現に大きく近づくのさ」

輝は少し怒りながら、組織のすごさを説明した。

「ふーん、どんな手段を使ったか知らないけど、ただの人間に人工的に魔力を与えたところで、そこまで使いこなせるはずないわ。ま、そんなことはあたしたちには関係ないわね。熱田君、悪いけどその話は断るわ。そんなバカバカしい話につきあつてられるほどあたしらはヒマじゃないの。みちる、峻佑くん、帰りましょ」

ちひろは輝の話を全く取り合わず、帰るために踵を返した。

「残念だけど、話を聞いた以上、帰すわけにはいかないよ。できれば手荒なマネはしたくなかったけど、仕方ないね」

輝がそう言うなり、帰ろうとしていた3人の足元に巨大な落とし穴が開いた。

「うわっ！」

「きゃあっ！」

（くっ……みんな一緒には行けない……っ！ それなら、あたし1人だけテレポートして逃げるよりは、2人を……！ このまま捕まるのはゴメンだわ……っ！）

突然開いた落とし穴に為す術なく落ちた3人。穴の底では、落ちたものを拾うためと思われる、ロボットアームがギリリと金属の鈍い光を放ちながら待ち構えていた。しかし、ちひろの両手が光り、その光は峻佑とみちるを包んだ。

「えっ！？」

「姉さん！？」

光に包まれた峻佑とみちるはその場から姿を消し、穴にはちひろだけが残り、ロボットアームに掴まれていた。ちひろはなんとか脱出を試みるが、

「脱出は不可能だよ。そのアームには、幻の金属といわれるオリハルコンを使ってるからね。世界最高とも言われる堅さを持つ上に、組織の調べでは魔力を吸収する性質をも持ってるからね。しかし、とっさにほかの2人をテレポートさせるとは、なかなかやるね」

と、いつの間にか穴の淵に輝が立っていて、アームの解説をするとともに、ちひろの行動にパチパチと拍手していた。

その頃、峻佑たちは――

「ちひろ……どうしてだ？」

峻佑が自室のドアを拳で叩いて悔しさを露わにしていた。

「峻佑くん……私は突然すぎてテレポートする余裕はなかったし、

姉さんも全員をテレポートさせることはできなくて、自分1人が、私たち2人の二者択一だったと思うの。それで姉さんは私たちをテレポートさせたんだと思うわ」

みちるがちひろの想いを汲んで、理由をそう推測した。

「たえそうだとしても、オレは悔しいんだよ。確かにオレは何のチカラもないただの人間でしかないけど、好きな女の子1人守れないで、何が男だ！ とうにかしてちひろを助けないと！ こんな事態になってようやくわかった、オレはちひろが好きなんだ！」

峻佑はもう一度拳でドアを叩いて、悔しい思いを叫びに変えて、思いのたけを吼えた。

「うん……なんとなくだけど、ここ最近の峻佑くんの様子を見てたらそうじゃないか、とは思ってた。でも、私は姉さんを恨んだりしないよ、それが約束だから。さっきの言葉、姉さんを連れて帰ってきて、改めて聞かせてあげなよ。絶対に喜ぶからさ。さあ、作戦を考えましょ」

みちるの10年にも及ぶ初恋が終わった瞬間だった。しかしみちるは涙を見せずに、ちひろ救出作戦を峻佑と考え始めるのだった。

## VOL・49：嵐を呼ぶ転校生（後書き）

最終章開幕早々、妙な事態に巻き込まれた峻佑たち。

果たして峻佑たちは無事にちひろを救出することができるのか？

救出作戦を考える彼らの元に、ちひろがいない今、最強とも言える助っ人が現れるのだった。

次回、VOL・50：いざ、救出へ（仮）

「ここは——あの街に帰ってきたのか。しかし、なんじゃこの妙な雰囲気は……？ 旅立ったときはこんなものは感じなかったのじゃがな……。ふむ、彼らに聞けば何かわかるやもしれぬ。行ってみるか」

ホコリにまみれた灰色のローブを羽織ったフラールは、そうつぶやくと、ゆっくりと市原家に向かって歩き出した。

「ちひろを1秒でも早くあのバカヤロウの手から助けてやりたい。熱田には協力しないと言い切ったちひろのことだし、オレたちを逃がした後、可能ならすぐにレポートしてくるはず。だけどそうしないってことは、何らかの理由で魔法が使えないと見るしかないな。さて——」

峻佑が早くちひろを助け出さなくてうずうずしながら話していると、不意に玄関のチャイムが鳴った。

「はい？」

話を中断して、峻佑がドアを開けると、

「久しぶりじゃな、シュンスケ。世界をひととおり見てきて、気づいたらこの街に帰ってきていた。それで、少し聞きたいことがあるのじゃが、よいか？」

玄関にはフラールが立っていて、峻佑にそうたずねた。

「ええ、どうぞあがってください。みちるー、フラールさんが帰ってきたぞー」

フラールを家に上げ、峻佑はとりあえずみちるを呼んだ。

「わー、フラールさん久しぶりですね。お帰りなさい！」

みちるは居間でフラールのために紅茶を出し、そう話しかけた。

「うむ、すまぬな、ミチル。ところで、チヒロはどうしたのじゃ？  
姿が見えぬようじゃが……」

フラールは出された紅茶を飲みながら、2人に訊いた。

「それが……」

途端にみちるはしょんぼりして俯いてしまい、峻佑もちよつと困った表情になったが、事情を説明した。

「なんじゃと？ あのジェンの末裔たるおぬしらを不意打ちとはいえ敗走させるとはな……で、チヒロは2人を逃がすために自分だけ残って捕らわれの身になったわけじゃな？」

フラールは事情を聞いて、驚きの表情を浮かべ、

「む？　ところで、そのチヒロを捕らえた転校生は何かの組織にいますっておったんじゃな？　もしやすると、その組織の名は【ノアの箱船】という名ではなかったか？」

フラールが何かに気づいたらしく、峻佑にそう訊ねてきた。

「いや、組織の名前までは聞いてないです。協力する気なんてさらさないわけですし、なあ？」

峻佑は組織の名前は知らないと言い、みちるに同意を求めた。

「う、うん。それで、フラールさん。その、【ノアの箱船】？　とかいう組織は一体なんなんですか？」

みちるはこくこくと頷き、フラールが言った組織についてたずねた。

「うむ、【ノアの箱船】は、世界を旅していた途中で出会った組織なのじゃが、道を踏み外した魔法使いたちが、世界を支配することを目的に活動している裏組織らしいのじゃ。魔法を使って、要人の暗殺、誘拐、果ては内戦への干渉をも行う、魔法使いの風上にもおけぬ連中じゃ。組織では、一般人に魔力を付与して、世界征服への尖兵に使うとする動きもあると言っておったな。今の話から、それがバックにいると踏んだのじゃが……」

フラールは謎の組織【ノアの箱船】について説明した。

「旅の途中で出会ったってことは、フラールさんもスカウトという

かそんなようなことをされたわけですか？」

峻佑がふと気づいたことを聞いてみると、

「うむ、あれはアフリカの内戦が勃発してる地域でのことじゃったな。我は魔法で民衆の身を守りながら、ケガ人の治療を手伝ってた。そんな中で、連中は我に世界征服のために協力してほしいと接触してきたのじゃ。むろん、我は世界平和を望んでいたジェンの一番弟子を自認する魔法使い、それに、後ろには守るべき弱者たる民衆。考える必要すらなかった。すぐさま断り、二度と姿を見せるな」と怒鳴りつけてやったのじゃ」

フラールは苦笑しながらもアフリカでの出来事を話した。

「それと、組織が一般人に魔力を与えてるって話は熱田君の言ったことと同じだわ。じゃあ……やっぱり組織ってのは【ノアの箱船】ってのなのかしら……？」

みちるが組織と輝の言葉の一致に気づいて、そうつぶやいた。

「うむ、だとするとちとやかいかもしれぬな……それほど強いチカラを持つものはおらぬじやろうが、何せ組織の全貌が見えてこぬし、世界各地の組織の支部のうち、ここの支部にどれだけの戦力がいるのかわからぬ……」

フラールが顔をしかめて呻いた。

「まあ、腹が減っては戦は出来ぬと言うし、ひとまず夕飯にしますか」

峻佑はそう言うと、夕飯の支度をするために立ち上がった。

峻佑・みちる・フラールのいつもとは違う3人で夕食を済ませたあと、峻佑が口を開いた。

「さて、どうやってちひろをヤツらから取り戻すかだよな……仮に熱田のバックにいる組織がその【ノアの箱船】とかいう連中だったとして、ちひろが協力することはまずありえないよな。だけど、オレにはちひろがいない生活なんて考えられない。もちろん、みちる

も必要だけど、ちひろはそれ以上に大事な人だ。オレはすぐにでもちひろを助け、熱田を殴り飛ばしたいくらいだ」

峻佑がアツく語ると、

「うん。私も同じだよ。私だって、姉さんとは双子として生まれてからずっと一緒だったんだから、いない生活なんて考えられないわ行きましよう、峻佑くん」

みちるも拳を握りしめ、やる気満々だった。

「シユンスケ、ミチル。我にも協力させてくれないか？ チヒロにはまだ恩を返せてないのにな……」

フラールも立ち上がった、峻佑たちにそう尋ねた。

「もちろん！ ちひろがいない以上、魔法使いがみちるだけだと多勢に無勢だし、フラールさんがいてくれれば心強いです。まあ、正直な話、オレは魔法使いじゃないから、役には立てないことくらいわかってる。でも、ちひろを想う気持ちは誰にも負けねえんだ！」

峻佑は力強く頷いた。だが、自分が戦力にならないこともわかっていて、自嘲するような笑みを見せた。

「峻佑くん……」

「シユンスケ…… そうだ、よし！ 少し待っておれ！」

そんな峻佑の表情に、みちるはどう言ってもいいかわからないような複雑な表情になり、フラールは突然何かを思いついたらしく、レポートでどこかへと姿を消した。

30分ほどして戻ってきたフラールの手には、銅像のようなものが抱えられていた。

「そ、その銅像は……？」

どこか見覚えのある銅像だが、思い出せない峻佑はポカンとしている。

「それってもしかして、ご先祖様の銅像……ですか？」

みちるがそうたずねると、

「うむ、そうじゃ。以前旅立つ時に、困ったことがあったらいつでも来いと言っていたことを思い出してな。ちよつと相談しに行っていたわけじゃ。そうしたら、こうなったと言うわけじゃ」

フラールが事情を話し終わると、銅像に宿っていたジェンの幽体が姿を見せた。

《久しぶりだな、少年。それと、我が末裔、みちるよ。俺の願い、世界平和を壊そうとする連中にちひろが捕まっているらしいな。少年、俺も行くぞ。俺の末裔を悪事に使おうなんて事はさせるわけにや行かねえからな。だが、俺は幽体でこのままだとロクに生前の魔力も発揮できねえ。そして少年はちひろを助け出すためのチカラが欲しい。どうよ――》

ジェンは相変わらずの軽い口調で話していたが、  
「要は、オレの体にジェンさんが入って、ともに行こうと言うことですね？」

峻佑はその先の言葉を予測し、ジェンの言葉を遮るように言った。  
《おつ、話が早いじゃねえか。その通りだ。で、どうだい？》

ジェンはニヤリと笑うと、峻佑の答えを待った。

「答えは、もちろんイエスです。だけど、お願いがあります。オレの体を貸すのは構いません。しかし、以前のように、取り憑いてる間、オレ自身の意識がないのは今回ばかりは困るので、意識の優先権はオレ自身に残してもらいたいのです。それって、できますか？」

峻佑は迷わず頷いたが、条件を付け加えた。

《おつ、もちろん可能だ。俺をバカにするなよ。だが、ピンチだと感じたら、すぐさま交代させるからな。それでいいな？》

ジェンも頷き、条件を出した。

「ええ、よろしく願います、ジェンさん」

峻佑は力強く頷くと、ジェンの幽体を取り憑かせた。

「さーで、そんじゃま、夜が明ける前に済ませちまおうぜ。善は急

げ、ってヤツだ」

ジェンの能力の使い方チカラを簡単に確認し終えた峻佑は、ニヤリと口元だけで笑うと、みちるやフールとともに熱田邸の近くへテレポ  
ートしたのだった。

（いま行くからな、待ってるよ、ちひろ……！）

VOL・50：いざ、救出へ！助っ人、参上！（後書き）

フラール、それとジェンの幽体を味方につけ、峻佑たちはちひろの救出に向かった。

戦闘も辞さない3人の行く先に待ち受けるものは？

次回、VOL・51：戦闘開始 in 熱田邸

「ところで確認したいのじゃが、ここはだいぶ広いようじゃ。チヒ口の居場所はわかっておるのか？」

熱田邸付近にテレポートしてきて、様子を伺っていた峻佑（+ジエン）、フラール、みちるの3人だが、不意にフラールが2人に問いかけた。

「そういえば……」

「……知らないな。侵入後のことを何にも考えてなかったぜ」

2人はハツとしたように顔を見合わせ、ため息をついた。

「まあ、ちひろを助けるついでに、組織を壊滅させる目標もできてるし、とりあえず突き進めばいいんじゃないか？」

峻佑が楽観的な見方をすると、

「それはそれでいいのじゃが……ここまで広いとなると、もしか今はここが本部なのか？」

フラールはそうつぶやいていた。

「え？ 連中の本部がどこなのか、わからないんですか？ それに、今は、ってどういう意味ですか？」

そのつぶやきが聞こえた峻佑が驚いてたずねた。

「うむ、連中はたまに本部機能に移転させてるところまではわかっているのじゃが、現在どこに真の本部があるのかまでは知らぬのじゃ。わかつてるのは、本部になったところは改装されて異常なほど広い敷地になること。それと、組織のトップ、総帥は日本人、しかも魔法使いじゃなく、ただの人間だと言うことだけなのじゃ」

フラールが首を振ってそう話すと、

「ちよつと済まんが話させてくれ」

唐突にジエンが表に出てきた。

「どうしたんですか、ご先祖様？」

みちるが突然のことに驚きつつも、聞いた。

「ああ、【ノアの箱船】のことだ。アレは俺が生きていた時代にはすでに存在していた。創設者こそ俺と同じフランス人だが、俺が洋館の地下に安置されてる間に独自に調べた結果、現在の総帥は27代目、初めて日本人、しかも魔力を持たない普通の人間が座っている。そいつの名は――」

一方その頃、輝とちひろは――

「どうだい？ そろそろ、ボクたちの組織、【ノアの箱船】に協力してくれる気になったかい？」

輝がロープで縛られ、壁に磔<sup>はりつけ</sup>状態にされているちひろにたずねた。

「だ、誰が……そんなアホな連中に協力なんか……するんですか……っ！」

当然ながら、このロープも魔力を封じ込める性質を持たせた、組織特製のロープである。それに縛り上げられ、抵抗できないまま、ちひろは拷問とも言える仕打ちを受けていた。だが、それでもちひろの瞳から希望の灯は消え失せてはいない。むしろ強く輝き、燃えていた。

「仕方ないね、キミもなかなか強情だ。これだけの電流を流される拷問を受けてなお、組織に従わないどころか、希望を失ってないのだから、驚きだ」

輝はククツと口元を歪ませて笑うと、ちひろを縛っているロープに高圧電流を流した。

「きゃあああああ!？」

いくらちひろが電気や雷の魔法が得意で多少優れた防御耐性があつても、さすがに何度も高圧電流には耐えきることができず、悲鳴をあげた。

「これでもまだ意識があるか……さすがだね」

もうこれでちひろが高圧電流を流されるのは5回目。並の人間なら普通1回で死に至るような電流を5回受けても意識を保ってるの

はひとえにちひろの耐性が強いからとしか言いようがなかった。

「ぜ、絶対……すぐに……峻佑くんや……みちるが……助けに来て、くれるはず……そしたら……あんたや……こんな組織なんて、あつという間に……ぶっ潰してくれるわ……」

ちひろは未だに希望の灯を失わずに両の瞳で輝を睨みつけていたが、途切れ途切れにそう言つと、ついに力尽きて気を失つた。

「——現在、組織を率いているのは、27代目総帥、熱田光輝<sup>あしたひかり</sup>。およそ10年前から総帥の座につき、熱海を拠点に活動していたが、2週間ほど前にこの街に拠点を移したようだな。で、10年前に総帥になった時にはすでに一般人に魔力を与える研究は実用化されていたみてえだな」

峻佑に取り憑いたジェンが表に出てきた状態でいろいろと話した。  
「熱田、光輝……ってことは、輝君の父親だよ、きつと」

みちるはジェンから聞かされた組織のトップの名を反芻<sup>はんすう</sup>し、そうつぶやいた。

「だろうな。まず、十中八九間違いないな」

ジェンは峻佑の記憶から情報を引き出すと、大きく頷いた。

「さて、ここでゴチャゴチャ話してもラチがあかねえし、そろそろ突撃と行こうじゃねえか。んじゃ、俺は約束だから引つ込むな。少年、後は任せませ」

ジェンはそう言つと再び内側へ引つ込み、主人格が峻佑に戻つた。

「よし、行くか！ ちひろ、いま行くぞっ！」

峻佑はジェンが出ている間の話の内容をちゃんと理解していたらしく、すぐさまみちるたちにそう言つて、屋敷の入り口へと駆けていった。

「侵入者だ！ 排除しろ！」

門をぶち破り、突入した3人の前に、組織の末端に位置してそう  
なチンピラが立ちふさがった。

「我らの目的はチヒロの救出、貴様ら雑魚には用はない！ 退け！」  
フラールが先頭に立って、威嚇用の光弾をチンピラの足元や当た  
らないような場所に放ち、退くように叫んだ。だが、

「誰が雑魚だと？ なめてんじゃねーぞ！」

チンピラは逆上し、手に光るものを生成した。

「生粋の魔法使いでもないのに、付け焼き刃で魔力を持っても、扱  
えるわけないのよ！ フラールさん、避けて！」

普段穏やかなみちるもちひろが捕らわれていることと、行く手を阻  
む連中の存在に完全に怒りで我を忘れ、怒鳴り散らすと、容赦も何  
もなく、その両手から氷の塊をいくつも作り出し、まるで雹のよう  
にチンピラたちに降らせた。

「ぐあああつ！」

チンピラたちは、せつかく生成した光弾を放つことなく、その場  
に倒れた。

「つたく、次から次へと雑魚ばかり出てきやがって……ちひろはど  
こにいるんだ？」

広い敷地内を進む度、それほど強くないチンピラなどの元・一般  
人と遭遇し、蹴散らしていたが、一向にちひろの居場所はつかめず、  
だんだん焦りが募ってきた。

「こんなとき、さとみ姉さんがいれば……って、峻佑くん。いまの  
峻佑くんにはご先祖様が憑いてるんだから、探索もできるんじゃない  
いの？」

みちるが探索系を得意とするさとみのことを思い浮かべ、ハツと  
したように、峻佑に言った。

「そういえばそうだ。さっきまでの雑魚はみんなフラールさんとみ  
ちるで蹴散らしてたから半分忘れてたよ」

峻佑は笑いながら言うと、集中して、ちひろの気配を探した。

「……見つけた！ あそこにそびえ立つて塔の最上階にいて、ロ  
ープで縛られてる。かなりこっぴどくやられて意識を失ってるみた  
いだ。早く行ってやらなきゃな」

少しして、ちひろの気配を掴んだ峻佑はそう叫び、状況をみちる  
たちにも伝えた。

「うん、行きましょう！」

3人は頷くと、この敷地内で一番の高さがある、塔へと走った。

しかし、峻佑たちは塔に突入することができなかった。塔を目前  
にして、これまでのチンピラとは明らかに違う人物が出てきたのだ。  
「おやおや、あなたがたは確か熱海の海岸でお会いしましたな」

塔の入り口に立ちふさがるように待ちかまえていた老人は、峻佑  
とみちるを見てそう話しかけてきた。

「あんたは……熱田の保護者代わりの執事……北道だっけか？」

峻佑もピンときて老人に問いかけたが、

「ほっほっほ、確かに私は坊ちやまのお世話をさせていただいてる  
執事ですがね、名前は北海ですよ。北海 道雄と申します。で、あ  
なたがたはこのような夜更けにどういったご用件ですか？」

老人——北海は、名前を訂正して笑うと、峻佑たちに用件をたず  
ねた。

「ま、あんたの名前なんてこっちにとっちゃどうだっていいんだ。  
どうやら、あんたんとこにうちのちひろがお世話になってるようで  
な、迎えに来たんだよ。あんたの後ろにある塔にいるってことはわ  
かってるんだ。ケガしたくなければ、おとなしく道を開けてくれ」

峻佑は首を振って名前に興味がないことを示すと、北海に道を開  
けるよう要求した。

「ふむ、それはできませんね。私は熱田家に仕える執事。それはつ  
まり、旦那様の率いるこの【ノアの箱船】にも所属しているんです  
からな。坊ちやまや旦那様からは、この塔を守り抜くように命じら  
れている以上、そこへ侵入しようとするあなたを全力で排除し

ます」

北海は、峻佑たちの要求を突っぱねると、羽織っていた執事服の上着を脱ぎ捨て、戦う意思を明確に示した。

「この人、只者じゃないわね。かといって、元から魔法使いだったわけでもないだろうけど、今までの雑魚とはレベルが違うから、気をつけましよう！」

みちるが北海のチカラを感じ取り、2人に注意を促した。

「わかった！」

峻佑とフラルも一旦後方に下がって、距離を取ると、戦闘体勢を整えた。

「——熱田家執事、北海道雄、参る！」

北海はわざわざそう宣うと、のたま地を蹴ったのだった。

VOL・51：戦闘開始 in 熱田邸（後書き）

雑魚を蹴散らしながら突き進み、ちひろの居場所をつかんだ一行だったが、その前に強敵が立ちふさがる。

ちひろ救出作戦の行方は？

次回、VOL・52：キズナ

北海との戦いは、わずか10分で決着がついた。

最初の北海の一撃を、防御障壁を張って防いだみちるは、北海の実力が並ではないことに気づき、峻佑に囁いた。

「私たちは輝くんを倒して姉さんを助けなくちゃならない。だからこんなところで無駄な時間食ってはいられないわ。だから、5分だけ私とフラールさんでオジサンの攻撃を引きつける。その間に、峻佑くんは、召喚でもなんでもいいから、とにかく強力な一撃を放てるよう準備して。いい、行くよっ！」

みちるは障壁で北海の攻撃を防ぎ続けながら、早口で作戦を伝え、障壁を解除してフラールとともに北海に向かっていった。

（なんでもいいから強力な一撃を、って言われても、な……ジエンさん、どうすればいい？）

峻佑は考えても答えは出そうにないので、意識の奥深くに眠るジエンの幽体呼び出した。

そうだな、あのジイサン、魔力を肉体強化に特化させての肉弾戦派みてえだしな……“大剣バーサーカーを持った戦鬼”で肉弾戦対決させるか、

“炎を吐く竜”で何の慈悲もなく焼き尽くすか。ああ、やらねえとは思うが、バナナはダメだ。今の俺では制御できねえからな。あと以前のちひろは気持ち悪いとスルーしたようだが、もうひとつ、俺には召喚できるやつがある。その名は“骨ボーンズ・ナイトの騎士”。まさに読んで字のごとく、かつて貴族とかに仕えていた騎士の骸骨を喚び出す魔法だ。どれでも好きなものを選びな。ああ、俺が憑もいてる少年ならその3つのうちならどれを使っても全く問題ない

ジエンは峻佑の頭の中にそう話しかけ、選択を迫った。

（それなら、その“骨ボーンズ・ナイトの騎士”で一気に片付けましょう。どうやればいいですか？）

峻佑は“骨ボーンズ・ナイトの騎士”を選び、ジエンに召喚の方法を聞いた。

おし、わかった。いいか、俺の言う文を繰り返すんだ。いいな？  
いくぞ——来たれ、異界の者よ。その力を持って我が敵を滅さん。  
偉大なる魔法使い、ジェン＝マノールの名においていまここに汝を  
呼ぶ。来いっ、骨の騎士！  
ボーンズ・ナイト

ジェンは峻佑に繰り返すよう要求し、魔法の詠唱を始める。

「来たれ、異界の者よ。その力を持って我が敵を滅さん。偉大なる  
魔法使い、ジェン＝マノールの名においていまここに汝を呼ぶ。来  
いっ、骨の騎士！」  
ボーンズ・ナイト

峻佑の頭の中で行われた詠唱を、峻佑が繰り返し、形にしていく。  
最後まで唱え終わった瞬間、草が茂る地面に魔法陣が浮かび上がつ  
たと思うと、完全に風化して今にも崩れそうな状態の骸骨が地面か  
ら這い出し、剣を下げた状態で中世の騎士のごとく、自らを召喚し  
た主の命を待っていた。

「みちる、フラルルさん、待たせた。下がって！ 騎士よ、あとは  
任せた！ 行けっ！」

峻佑は2人に下がるように叫ぶと、喚びだした騎士に攻撃命令を  
出した。

「うおおおっ！？ げふうっ……」

クカカカ、という異質な笑い声とともに、騎士は北海に居合い抜  
きの要領で強烈な一太刀を食らわせ、北海は魔力による肉体強化も  
実らず、一撃で地に伏した。

「ちょっとやりすぎた感が無くもないが、あのジイサン生きてるよ  
な？」

北海を倒したことで塔への道を遮るものはなくなり、3人は塔の  
階段を駆けあがっていた。

「大丈夫よ。一応、癒しの魔法と、結界で包んだから、死ぬことは  
ないし、動けるようになって、私たちを追ってはこれないわ」

螺旋階段を走りながら、みちるが峻佑の不安を打ち消す。

「大丈夫ならいいんだけどな。なんせここへきて初めて戦いに参加したわけだし、魔法を使うなんて経験、ただの人間のオレにあるわけないからさ、あの騎士の一撃がどの程度の威力なのかさっぱりなんだよ」

峻佑がなお心配していると、一旦螺旋階段がとぎれ、広い部屋に出た。

「お、最上階に着いたのか？　ちひろはどこだ、っと……」

峻佑が周囲を見回すと、ちひろの姿はなく、広い部屋の中央に、壮年の男が1人立っているだけだった。

「残念ながらここはまだ最上階ではない。貴様らが探すちひろという魔法使いの少女は、確かにこの建物の上のほうに我が息子、輝とともにいる。だが、そこへ行かせるわけにはいかぬ。この階は、第27代【ノアの箱船】総帥、熱田光輝が守護する！　貴様らにこの私が倒せゴファツ！」

「なんだまだ最上階じゃねえのか。そんならどいたどいた。総帥だかなんだか知らねえが、オッサンの出る幕じゃねえし、用はないんだっての」

立ちはだかっていた男、光輝を完全に無視し、峻佑は名乗りを上げている最中の彼を無情にも蹴り飛ばした。

さらにみちるやフールも追撃に参加して、光輝は完全に気絶し、沈黙した。

「もう少して最上階……ちひろ、無事でいてくれ……」

峻佑は階段へ歩きながらポツリとつぶやき、再び階段を駆け上がっていった。

そこからさらに階段を駆け上がっていくと、また広い部屋に出た。ついにここまで来てしまったんだね」

3人が階段を上りきるなり聞こえたその声に峻佑が顔を向けると、輝がいた。――気を失っているちひろを抱えて。

「ちひろっ！ 熱田、てめえ……」

怒りに任せて突撃しそうな峻佑を止めながら、  
「もうあなたの救援は来ないわ。姉さんを返して。あなたが抵抗しないなら、私たちももう何もしないわ」

みちるが凜とした声で輝に投降を促した。

「あはははは！」

と、いきなり輝が笑い出した。

「どうした、追いつめられておかしくなったか？」

突然の笑い声に驚いたものの、峻佑が冷静に問いかける。

「誰が、追いつめられた、って？ あいにくボクはまだ秘策を残してる。来いっ、ボクの忠実な下僕たちよっ！」

輝はニヤリと笑うと、後方にある扉に向かって呼びかけた。そこに現れたのは――

「コータロー、サル、種村、川原まで……なんでお前らが……」

現れた同級生たちに動揺を隠せない峻佑たちに対し、

「彼らにはボクの術で操り人形になってもらった。さあ、その3人を叩き潰せ！ キミらに級友が殴れるかな？」

輝は耕太郎たちにそう命じると、自らはちひろを抱えてさらに上の階へと去っていった。

「熱田のヤロー、卑怯なマネをしやがって……」

襲いかかる耕太郎たちの攻撃を紙一重でかわしながら、峻佑が悪態をつく。

「シユンスケ、おぬしはミチルといっしょに先に行け。この場は我に任せてもらおう。なに、安心するがいい、我には彼らを正気に戻すための秘策があるからな」

すると、フラールが峻佑にそう告げた。

「いや、だけど……」

フラールからの提案に困惑し、難色を示す峻佑に対し、

「よいか、シユンスケ。我らは一応ここでは魔法使いというのは秘密じゃ。だから、夜が明ければあまり派手な戦いはできなくなる。」

もうそろそろ夜が明け始めるじゃろうから、こんなところで足止めを食らうわけにはいかんのじゃ。それに、奴の言うことを肯定するのはシャクだが、級友として過ごしてきたおぬしらに彼らは殴れまい？　じゃから、我がこの場に残る。シユンスケたちは早く上階<sup>うへ</sup>へ行つてヤツの手からチヒ口を取り戻すのじゃ！　大丈夫じゃ、我を信じる。ジェンとの絆にかけて、おぬしらと友情という名の絆で結ばれた彼らを必ず正気に戻してみせる！」

フラールの熱弁に、峻佑は一部首を傾げたい部分もあったが、細かいことは気にしてる時間はないと覚悟を決めた。

「わかりました。フラールさん、この場は任せました。みちる、行こう！」

峻佑はフラールにそう告げると、みちるとともに階段へ走り出した。当然、3人の足止めを命じられた耕太郎たちが立ちふさがろうとしたが、

「お前たちの相手はこっちじゃ！」

フラールは2人を魔法で加速させて攻撃を回避させると同時に、注意をこちらに向かせるため、耕太郎たちに向けて威嚇用の風の弾丸を放った。

「さあ、行くぞ！」

フラールの言葉を引き金に、耕太郎たちが一斉に飛びかかった。

（ここでわざわざ肉弾戦に付き合うのは愚の骨頂。さっさと彼らを正気に戻してやらねば。あの魔法で――）

フラールは戦法を決めると、障壁を張って4人の攻撃を防ぎつつ、4人まとめて正気に戻すための魔法を準備しはじめた。そして――

「正気に戻れ！　魔法効果解除<sup>エフェクト・リリース</sup>」！

フラールが床に手をつき、魔法を唱えると、障壁に弾かれながらも攻撃を続けていた4人の足元に魔法陣が出現し、全身を覆う光の柱へと変化した。やがて光が弾けるように消えると、4人もそのまま床に倒れたのだった。

## VOL・52：キズナ（後書き）

峻佑と耕太郎たちとのキズナのため、フラールは1人残って耕太郎たちを足止めし、その間に峻佑たちは上階を目指す。フラールの魔法は耕太郎たちを正気に戻すことはできたのか？

次回、VOL・53～54：屋上の決戦（前・後編）

VOL・53：屋上の決戦（前編）

「うおおおおお！」

階下で輝に操られた耕太郎たちをフールに任せた峻佑とみちるは、猛然と階段を駆け上がった。

「峻佑くん、前！」

後ろからついてくるみちるが、峻佑の前方で階段が終わり、扉があるのに気づいて指し示した。

「ああ！ うおりやあああああ！」

峻佑は力強く頷くと、気合い一閃、扉を思いきり蹴り開けて屋上に飛び出した。

「――！！！」

屋上の端にちひろを横たえていた輝は、扉が蹴られる轟音にハッとしたように振り向くと、ゆっくりと立ち上がった。

「熱田あ！ そこまでだ！ ちひろを返してもらおう！」

峻佑がビシッと指を突きつけ輝に告げた。

「ついにここまで来てしまったか。だが、なるほど。やはりキミたちは優しすぎて級友は殴れないようだね。唯一級友ではない魔法使いに彼らを任せたというわけか。まあいい、時は満ちた。仲間、いやもつと言えば家族どうして戦ってもらおうじゃないか」

輝がククククと笑いながら言うと同時に、後ろで横たえられていたはずのちひろがゆらりと起き上がった。だが、その目からはいつものちひろらしい力強い眼差しは感じられなかった。

「ちひろ……！？ 熱田、てめえまさか……！」

峻佑はすぐさまちひろの異変に気づき、輝を睨みつける。

「そう、そのまさかさ。素直に組織に協力してくれば危害は加えないのに、どれだけ拷問を受けても頑なに拒否し続けたんだ。だから、気絶したあと、暗示をかけたんだよ。“市原峻佑と真野みちるは敵。幼なじみの少年や双子の妹なんかないんだ”ってね。あー

っはっはっは！」

輝は峻佑がどうか嘘であってほしいと思ったことを、至極あっさり肯定し、高笑いをしていた。

「そんな！ 姉さんが簡単に催眠術なんかにかかるはずないわ！」

みちるが必死に首を振りながら叫ぶが、

「簡単に効かないのはきちんと意識があるときに限ってだろうよ。

むしろ意識を失った魔法使いは一般人より脆いもんだ。今の彼女はボクの命令を忠実にこなす、最強の下僕さ」  
（しもべ）

輝は冷静にみちるの言葉を否定し、その言葉を聞いたみちるは、実の姉とは戦えない、と戦意を喪失してしまっただけ、その場へたり込んだ。

「みちる……！ くっ、よりによってちひろと戦わねばならねえとは……」

峻佑はへたり込んだみちるの身を案じつつ、輝の隣に立って、いつでも戦える状態だと目が言っているちひろを交互に見つめた。

「さあ、存分に戦うといい。騒ぎになって警察が来ようが、彼女がいる限り何人たりとも怖くはないのだから！ それに、組織の構成員たちは雑魚でも一般人に負けるようなヤワな連中ではないからね。最強の手駒を手に入れた今なら、ボクたち【ノアの箱船】が最終目標とする世界征服の夢も実現できるだろう」

輝はまるつきり悪に染まりきった表情で高笑いしながら言うと、ちひろに攻撃命令を出した。それに対し、ちひろは無言で頷くと、峻佑たちに指先を向け、いつもの光弾を速射性の高い光線状にアレンジして、バチュンという鋭い音を立てながら放った。

「くっ、ちひろ……」

峻佑は戦意を失ってしまったっているみちるを守らねばならぬと、とっさに手を突き出して障壁を形成したが、いくらジェンが憑いてるとはいってもしょせんは急造魔法使い。本物、しかも生前のジェンに負けず劣らず魔力の高いちひろの攻撃には耐えきれず、一撃で障壁は破壊され、なおも衝撃が峻佑とみちるを襲い、2人は背後にあ

る今さつき開けて出てきた扉まで飛ばされ、激突した。

「ぐう……」

峻佑は背中を強打し、呻いた。

「あははは、手も足も出ないって感じだね。そっちの妹のほうや、市原君に取り憑いてる魔法使いの幽霊もこっちに渡してくれたらこれ以上無駄な戦いをすることなく楽になれるよ？」

ちひろの「一撃」を見た輝が笑いながら峻佑たちに事実上の降伏勧告を出してきた。

「はん、寝言は寝て言え。目の前にいる“家族”を取り戻すためにオレはここまで来たんだ。大事な“家族”を置いて逃げるなんてゴメンだね。ちひろは絶対に正気に戻してみせる！」

峻佑は背中の中の痛みに耐えて立ち上がると、輝に悪態をつきつつ、高々と決意を叫ぶ。と、そのとき。

「済まぬ、遅くなった！ シュンスケ、ミチル！ 無事か！？」

峻佑たちの後ろにある屋上の扉が勢いよく開き、階下で戦っていたフーラーが合流した。

「どうやら級友たちはやられてしまったようだね。まあいい、たとえ仲間が揃ったところで、ボクの最強の手駒には勝ち目なんかないんだから、早く降参した方がケガしなくて済むよ」

輝は階下に残っていたフーラーが来たことで耕太郎たちの敗北を悟ったが、ちひろがいる限り負けはないと絶対の自信を持っていた。「むう、チヒロが敵に回つてると言うのはかなり厳しい状況じゃな。じゃが、コウタロウたちシュンスケの級友は皆正気に戻した。しばらくすれば目を覚ますじやろう。チヒロに効くかわからぬが、今からコウタロウたちに使ったのと同じ魔法を使ってみる。1分でいい、時間をくれ」

フーラーは峻佑に小声で囁くと、峻佑の後ろに下がって術式を準備しはじめる。

「何を企もうと、無駄だよ。今の彼女は全てを撃ち抜く。やるんだ」訝しげな視線を向けてきた輝だが、ニヤリと笑うと、ちひろに再

び攻撃命令を出した。それに合わせてちひろの光弾が鋭く放たれる。  
「オレじゃ防御しきれねえ……」

半ば諦めつつも、少しでも衝撃を軽減するために障壁を張る峻佑と、直後に障壁がもうひとつ張られた。峻佑が振り向くと、みちるが立ち上がって両手を突きだしていた。

「ゴメン、峻佑くん。姉さんが敵に回ったショックで自分を見失ってたわ。フラールさんが来てようやく気づいたの。操られて敵に回ったなら、ひっぱたいてでも正気に戻せばいいってね！」

みちるが峻佑に謝った直後、ちひろの光弾が2人の障壁に激突した。光弾と障壁は威力を相殺しあい、光弾が弾かれることも衝撃が峻佑たちに伝わることもなく、互いに消滅した。せつかく速射性に優れたスタイルにアレンジしたのだから、そのまま連射すればあっという間に決着はついていただろうが、輝は威力を相殺されたことにわななき、ちひろは現状は命令がないと攻撃する気はないようで、ただその場に立ち尽くしていた。

「待たせたな！ チヒロよ、正気に戻れ！ “魔法効果解除”！」  
エフェクト・リリース

そこでようやくフラールの準備が整い、床面に手について呪文を唱えた。すると、立ち尽くしているままのちひろの足元に魔法陣が出現し、光の柱として彼女を包んだ。ここまでは先ほどの耕太郎たちと同じだったが、光が弾けて消える直前に、光の柱にピシッとヒビが入り、やがてヒビは光の柱全体に広がると、パリンという音とともに砕け散った。

「くっ……失敗か。やはり我の魔力ではチヒロにはかなわぬか……」  
フラールは悔しそうにその場に膝をつき、床を叩いた。と、そこにちひろが初めて輝の命令なしで動いた。予備動作なしで放たれた光弾はフラールを一瞬にして貫いた。

「かふっ……」

腹部を貫かれたフラールは声にならない声をあげ、その場に倒れた。と、倒れたフラールの体が妙な光に包まれ、固まってしまった。  
「フラールさん!？」

慌てて駆け寄る峻佑たちに対し、操られた状態では初めてちひろが口を開いた。

「今の光弾は今までのとは違う、特殊弾。撃ち抜かれれば、ロウでコーティングされて一撃で戦闘不能になる。いまあたしが撃ち抜いた人は、意外に危険だと判断したから、しばらく眠っててもらうことにしたわ」

その説明に改めて峻佑たちがフラールの身体を見ると、確かにフラールの身体を固めているのは、ロウのような物質だった。

「なんてこった、ちひろのやつ、この魔法まで習得してたのか」

急にジェンが表面に出てきて、つぶやいた。

「ご先祖様はいま姉さんが使った魔法を実際に使ったことはあるんですか？」

みちるが静かにジェンに訊いた。

「ああ、数えるほどしかないがな。まだ俺が若かったころ、戦争に参加していたところに、な。まあ、当時はロウ固めよりもさらに過激で、撃ち抜いたやつを石化させてたけどな。さすがに戦争協力を止めてからは、んな危なっかしい魔法は自ら封印したし、後世に遺したあの書に記す時にも、術式を変えてロウにしたしな。もつとも、それでさえ俺以外には歴史上今のちひろしか使えたやつはいねえな」

ジェンは過去を振り返ってそう語った。

「そうですか……どうやって姉さんを止めたらいいの？ 私やご先祖様の憑いてる峻佑くんの障壁じゃ姉さんの攻撃は一撃しか防げないし、たぶんこつちから攻撃しても、確実に防がれるわ……」

みちるが今度こそ希望は潰えたとはかりに膝から崩れ落ちた。

「諦めてたまるかよ……せつかく自分の想いと向き合って気持ちを自覚したのに、オレはちひろを失うわけには行かない！ みちる、頼みがある」

峻佑はジェンの意識を押しつけて主導権を取り戻すと、みちるに何やら耳打ちしたのだった。

**VOL・53：屋上の決戦（前編）（後書き）**

今週は前後編同時更新。

このまま後編へゴーです！

## VOL・54：屋上の決戦（後編）

「みちる、頼みがある。こうしてほしいんだけど、できるか？」

峻佑は半ば無理やりジェンから主導権を取り戻すと、みちるに何やら耳打ちした。

「え？ うん、できるけど……本気でやるの？ 危くない？」

峻佑の頼みを聞いて、みちるは驚いて確認した。

「ああ、いたってオレは本気だ。結構口に出すのは恥ずかしいが、フラールさんの魔法がダメだった以上、おそらく魔法ではなんともならない。それなら、もう《愛》の力しかないだろ。だから、頼むオレにかけられるだけの魔法障壁を重ねがけてくれ。その効果が続くうちに、オレはちひろを制圧する。失敗したらお陀仏か、口ウ固めのどつちかだ」

峻佑は改めて作戦を話したが、《愛》と言った部分で赤面した。

「……わかったわ。私ははつきり言って、姉さんより魔力は劣るから、姉さんが本気で撃てば一撃で障壁2枚は抜かれると思って。一応、10枚まで障壁は重ねがけできるけど、1発の直撃で2枚抜かれると考えると、防げるのはせいぜい4、5発が限界よ。だから、それまでに決着<sup>ケリ</sup>をつけてね」

みちるはしぶしぶ頷くと、峻佑に10回分の障壁をかけた。

2人の作戦タイムにちひろは一切攻撃しようとしなかったし、輝もどうせ何を企てても無駄だと思っているのか、攻撃命令を出そうとはしなかった。

「サンキュー、みちる。あとはとりあえずオレに任せて、自分の身を守っていてくれ。じゃ、行くぜ！」

峻佑はみちるに礼を言くと、ちひろめがけて床を蹴った。

「うおおおお！」

鬼気迫る峻佑の表情に、最後の賭けに出たと見た輝が迎撃命令を出すまでもなく、ちひろは光弾を連射していた。一度わざと当たる

ことで、どれほど障壁が削られるか試した結果、ちひろの光弾一撃でみちるの障壁は2枚消滅した。

（やっぱ直撃だと2枚削られるか。だとすると、あと直撃は4回までか……）

峻佑も無防備で特攻したわけではなく、一応用意していた木刀を魔力で強化してから突っ込んでいたが、どうにかちひろの光弾の軌道を逸らすのが精一杯だった。しかも、すでに3発木刀で受けたが、木刀にヒビが入り始めている。

（この調子じゃ木刀はあと2発くらいが限界だな。だけど、なんとかなるか？）

木刀で4発目を弾いて逸らした時には、もう峻佑はちひろの目前まで迫っていた。

さらに、ちひろの眼前、ほぼゼロ距離で放たれた光弾を木刀で弾いた瞬間、木刀は粉々に砕け散った。その破片の飛散で一瞬身体が強張ったちひろに、峻佑は最初で最後のチャンスと思い、強張ったちひろの身体を抱きしめた。

「ん——！！」

正気のちひろなら喜んでいるだろう。事実、後方で見ているみちるがうらやましそうな表情をしていた。だが、今は輝の催眠のせいと峻佑を敵と認識しているため、彼を拒絶し、なんとか抜け出そうとしている。彼女の両手は峻佑が抱きしめるついでに押さえ込んで下を向いているため、ちひろは峻佑を攻撃することもできず、脱出しようと身悶えていた。

「ちひろ……頼むから正気に戻ってくれよ……」

そんなちひろを見て、峻佑は泣きたくなった。だが、グツと涙をこらえると、抱きしめるだけじゃダメという結論に達し、覚悟を決めた。

「ちひろ……」

峻佑は続けざまに名を呼ぶと、ゆっくりとちひろの唇にキスをした。——まるで眠り姫を起こす王子のように。

いったいどれほどの時間、キスをしていたのだろう。もしかしたら、全然時間が経っていなかったかもしれないし、数分くらいあったのかもしれない。峻佑にとっては永遠と呼べるような時間が流れ、彼はゆっくりと唇を離した。

この作戦が失敗すれば、もう後がないため、峻佑はいったん用心のためにちひろから離れて距離を置いた。当のちひろは、いつの間にか意識を失っていて、峻佑が離れたと同時に、その場に倒れこんだ。

「ちひろっ！」

峻佑は倒れこんだちひろを見るや否や、再びちひろに駆け寄り、その身体を抱き上げた。

「……………」

輝はそんなバカな、といった表情でその場に固まっていた。

「ん……………」

そして、ちひろが身体をもぞもぞと動かして、目を覚ました。

「おはよう、ちひろ。気分はどうだ？」

峻佑は一瞬だけ警戒したが、完全に開いたちひろの目を見て、いつものちひろだと確信し、笑顔で話しかけた。

「峻佑くん…………ええええ！？　な、なんであたしこんなことになっているの！？」

ちひろは気を失っていた時間が長かったせいで、最初、目の前にある顔が誰なのかわからなかった。少しして、ようやく自分をお姫様抱っこしている人物を認知して名前を呼んだが、その瞬間ボンツという音が聞こえそうなくらい顔が真っ赤になり、大慌てで手足をばたつかせた。

「お、おい、落ち着けて」

峻佑は暴れるちひろに、さっきまでとはまた別の意味で焦ってい

た。これ以上暴れると落としてしまうので、落とす前に優しく下ろしてやると、

「峻佑くん……助けに来てくれたんだね、ありがとう……」

ちひろはあたりを見渡して状況を確認すると、やっと落ち着きを取り戻したのか、目尻に涙を見せて峻佑に礼を言った。

「さて、無事にちひろも取り戻したことだし、帰るか」

峻佑はそんなちひろを背負って帰ろうとしたが、恥ずかしいと拒否されたので、彼女に肩を貸してやりながら、塔の階段を下りようと扉に手をかけた。

「峻佑くん、お疲れ様！ さ、帰りましょ」

「うむ、魔法だけでは解決できない争いもあるのだということ、しかとこの目に刻み込んだぞ」

みちるや、フラールも口々にそう言っ、峻佑の後に続こうとした。

「って、フラールさん！？ あなたいつの間に復活したんですかぁ！？」

峻佑が驚いてフラールにたずねると、

「ん、おそらくチヒロが正気に戻ったときじゃろうな。目を覚ましたらシユンスケがチヒロを抱きかかえておったしな」

フラールはこともなげに答え、一行は屋上を後にしようとしたのだが――

「ちよーつと待ったあ！」

ちひろが正気に戻ってからずっとだんまりを決め込んでいた輝が、突如として大声で4人を呼び止めた。

「なんだよ、まだ用があるのか？ お前の言う、“最強の手駒”はもうこっち側に戻った。お前にもう味方はいねえぞ」

峻佑はせっかくの大団円な雰囲気や邪魔されて、不機嫌そうな表情を隠そうともせず、輝に吐き捨てる。

「うぐう……なら、ボク自身が戦うまでだ！」

輝はちひろを取り戻されたことに対し悔しげな表情をすると、懐

から何かの薬を取り出して飲もうとした。と、そのとき。屋上の扉が内側からバタンという音を立てて勢い良く開いた。

「うらあああああ！ 熱田はここか——っ！」

屋上の扉を開けて出てきたのは、階下で輝に操られ、下僕扱いされていた耕太郎たち4人だった。4人は屋上へ飛び出した勢いそのままに、輝に飛び掛かり、4対1と集団暴行しながらに輝を殴り、蹴っていた。その際、輝が飲もうとしていた薬は、輝の手を離れ、塔の下へと落下していった。

「耕太郎、サル、種村、川原……お前ら、目を覚ましたのか」

その様子を見ていた峻佑がポツリとつぶやくと、思う存分輝を殴った4人が、ゆっくりと振り向いた。

「峻佑、それに、ちひろさんやみちるさんまで……いったいこれはどういうことなんだ？ 放課後、急に熱田に話しかけられたと思ったら、その先のことがまったく思い出せず、気がついてらよくわかんねえ建物の中でこいつらと一緒に寝転がってるしよ。しかも時間はもう夜明け前って、この半日くらいの間に何があったのか、説明してくれないか」

耕太郎は峻佑たちの姿を見つけると、単刀直入に事情を聞いてきた。種村や川原も同様にお互いに顔を見合わせ、首をひねるばかり。一方、4人の中で唯一姉妹が魔法使いだと知っている猿義だけは、これが魔法がらみであると確信しているようだったが、それでも何が起こったかは気になるようだった。

「もう、こうなっちゃったら隠し通すことなんてできないよね。沢田くんたちはあたしたちのせいで巻き込まれたようなものだし。ゴメンね、みんな。それと、何を聞いても驚かないでほしいの」

ちひろは神妙な面持ちで4人に頭を下げると、自分たちの正体も含めて、事情をすべて話した。

「魔法、使い……ちひろさんたちが……？」

驚いて言葉も途切れがちな耕太郎に、ちひろは証拠として、先ほどまでの激しい戦いで発生した、瓦礫をその手の上で浮かして見せ

た。

「そつか……要するに、今俺たちがボツコボコにした熱田も魔法とやらが使え、その魔法がらみの組織がちひろさんたちを仲間に加えようとしてひと暴れし、その過程で俺たちが巻き込まれたってことか……」

耕太郎は全ての事情を知って、複雑な表情になっていた。おそらくは、操られていたとはいえ、親友の峻佑や、好意を寄せるみちるに襲い掛かったことを自己嫌悪しているのだろう。

「……まあ、いいか。たとえ魔法使いだろうがなんだろうが、ちひろさんはちひろさんだし、みちるさんもみちるさんだ。今までと何にも変わらない。もちろん、そのことを知って黙っていた峻佑を責めることなんてしない。俺たちは今までどおり親友だ」

しばらくいろいろ考え、百面相みたいになっていた耕太郎の顔が急に明るくなると、峻佑たちに笑いかけた。

種村や川原も、事実を知っても特に露骨な反応を見せることなく、8人に増えた一行は今度こそ、【ノアの箱船】の本部兼熱田邸を後にし、耕太郎たちをそれぞれの家までテレポートで送っていき、帰路についた。もうつつすらと東の空が白み始めていた――

「ちひろ、話があるんだけど、いい？」

峻佑は帰ってくるなり寝てしまい、起きたころにはもう日が暮れかかっていた。ひとまず居間に降りていくと、みちるは買い物に行っていて外出中、ちひろが疲れた身体を癒すためにソファで横になっていたので、あの話をしようと、正座して話しかけた。ちひろいわく、寝たには寝たが、どうも疲れが取れないらしい。

「うん、どうしたの？ 急に改まって」

峻佑の雰囲気、何かを感じ取ったちひろは、身体を起こしてソファを降りると、峻佑に倣って床に正座した。

「あのさ、あの話なんだけど、オレ、答えを出したよ」

**VOL・54：屋上の決戦（後編）（後書き）**

ちひろを正気に戻し、輝も叩きのめし、一件落着。  
峻佑はちひろに想いを伝える――

次回、本編の最終話。

VOL・55：想いの決着

そして、耕太郎・委員長こと晴香のエピソードをまとめて掲載して  
完結となります。

9/10午前0時更新予定です。

## VOL・55：峻佑の想い

「あのさ、あの話なんだけど、オレ、ようやく答えを出せたんだ」  
峻佑が少し照れながらも、ちひろを真っ直ぐに見つめてそう切り出すと、

「えっ……それって……」

ちひろはみちるがいない状況でそんな話を切り出されたことで一瞬期待したように表情が明るくなったが、すぐに思い直したように首を振ると、

「あたしがいない間に答えを見つけたんだ。それはつまり、みちるを選んだ、ってことをあたしにも伝えたかったんだよね？ うん、わかってたわ」

ちひろは峻佑が話し出すのを遮って、勝手にひとりで納得していた。

「ちよつと待った。ちひろ、オレの話を聞いてくれ」

峻佑はそんなちひろの肩に手を置いて黙らせると、改めて話し始めた。

「オレさ……春に2人と再会してからずっと一緒にいたから、それが当たり前みたいになっちゃって、どっちかを選ぶことができないでいたんだ。だけど、今回の件で、いなくなっただけで初めて気づいたんだ。もちろん、みちるも大切だけど、それ以上にちひろ、キミが大切なんだ、って。だから……」

峻佑は言葉を選びながら、ゆっくりとちひろへの想いを紡いでいくと、

「そこから先は言わないでいいよ。照れて言いづらいでしょ？ もう、顔が真っ赤だよ……」

ちひろが峻佑の口を軽く押さえて首を振った。その目は涙で滲んでいた。

「やっぱ言い慣れないこと言うって照れちまってダメだな。ここはい

「つちよシンプルに済みますか。ちひろ、改めてよろしくな」

峻佑は照れ笑いを浮かべながら言って、ちひろに右手を差し出した。

「うん！ これからもよろしくね、峻佑くん！ ……ところでさ、ちよつとだけ気になったんだけど、今の話をみちるは知ってるんだよね？」

ちひろは涙を拭くと、右手どころか、身体ごと峻佑に飛びついたと、その状態で峻佑にたずねると、

「もちろん、知ってるよ」

答えはちひろの後ろから聞こえてきた。

「みちる……いつの間に帰ってたの？」

振り向いて、居間の入口にみちるが買い物袋を持って立っているのに気づいたちひろが、顔を真っ赤にして慌てて峻佑から離れながらたずねると、

「たった今だよ。帰ってきたらいい雰囲気だったから、邪魔できないと思って、タイミングを伺ってたのよ」

みちるは買ってきたものを冷蔵庫にしまいながら話した。

「まあ、それはいいとして、みちるはいつ峻佑くんからその話をされたの？ やっぱりあたしが捕まってる間に……？」

ちひろが話を切り換えて、みちるにたずねると、

「うん。姉さんが捕まってる間のことだよ。あの言葉は選ばれなかったほうとしてはヤキモチ妬いちゃうね」

みちるは楽しげな声でそんなことを言い、そのときのことを思い出した峻佑は、自らが言った恥ずかしいセリフに蹲うすくまってしまった。

「えっ、峻佑くんはそのときなんて言ったの？ みちる、教えてよ」

ちひろは気になってみちるに教えてとせがむが、

「これは本人の口から聞いた方が絶対いいよ。だから、私からは言わない、というより妬いちゃうから言えないわ」

みちるはひっかき回すだけして、肝心の部分は口を割らなかった

ので、ちひろはすぐにターゲットを変えて、恥ずかしさで蹲っている峻佑に近づいていった。

「峻佑くん、なんて言ったの？ 当事者のあたしが知らないなんて、そんなの不公平よ。応えないつもり？ それなら、こっちにも考えがあるわよ……」

蹲ったまま、ちひろの問いかけをスルーしようとしている峻佑だったが、

「のわぁっ！ わかった、言う、言うから魔法でくすぐるのやめてー！ ひぎゃー！」

ピクリとも動かない峻佑に対し、業を煮やしたちひろは、魔法で峻佑の身体をまとめてくすぐるという拷問に打って出た。効果はてきめんで、峻佑は10秒と保たずに陥落した。

「それじゃ、どうぞ」

ちひろはニツコリと笑うと、すぐさまくすぐり攻撃を止め、話を促した。

「あ、ああ……あれはちひろがオレとみちるを逃がしたあとすぐのことなんだけど、ちひろが自分を犠牲にしたことが悔しくて、『好きな女の子1人守れないで、何が男だ！ どうかしてちひろを助けないと！ こんな事態になってようやくわかった、オレはちひろが好きなんだ！』って叫んだ。いま思うとなんて恥ずかしいこと言ってるんだと思うけどな」

峻佑は赤面しながらも、話さないとまたちひろに拷問されるので、素直に話した。

「峻佑くん……ありがとう……！」

ちひろはその言葉にまた涙を流して峻佑に抱きついた。峻佑は赤面したまま彼女を優しく抱きとめ、みちるは台所からそんな2人の様子を見つめていたのだった。

「あー、こないだ転入したばかりの熱田だが、家庭の事情で学校を辞めなければならなくなったそうだ。みんなに別れを言うヒマもなかったが、よろしく言っておいて、とのことだ」

週明け、月曜のホームルームで、脇田は輝の自主退学を伝えた。

「熱田のやつ、またどこかで組織と一緒になって悪だくみでもしてやがんのかね……」

峻佑はボソツとつぶやき、新学期から隣の席になっていたちひろが苦笑していた。

「なにい！？ 峻佑とちひろさんが付き合うことになったただとお！？」

昼休み、峻佑たちは耕太郎に2人の交際開始を伝えたのだが、当然のように耕太郎は驚き、大声をあげた。

「バカ、声がでけえよ！ 隠すつもりもないけど、でもあまり大っぴらにもしたくなかったのに……」

峻佑は慌てて耕太郎の口を押さえたが、もう遅い。その話を聞きつけた4組のMMメンバーが、他クラスに応援を呼びにいき、すぐに1年の全クラスぶんのMMメンバーが集結した。

「市原、てめえ……我々のアイドルたるちひろさんと堂々と交際宣言するたあ、いい度胸してんじゃねえか……」

現リーダー・川原がゆっくりと峻佑に近づいてくる。

「げっ、てめえら集まるの早すぎだろ！」

峻佑はこのままではどう考えても数の面で不利なので、脱兎のごとく教室を抜け出した。すぐに川原たちもそれを追って走り出す。

「市原を捕まえろー！ 今こそヤツに制裁をー！」

峻佑は階段を上にと逃げ回るが、途中で振り向くと、追ってくる人数が最初の倍以上になっていた。どうやら理由も知らずに、ただ面白そうだというだけでこの捕り物に参加してる生徒もいるようだ。どこことなくデジャブを感じながらもまた走り出した峻佑に、

内側から声が響いた。

よう、少年。困ってるみたいだな。またあの時の戦いみたいに俺のチカラを使うか？

話しかけてきたのは、ジエンだった。あの日以降、ジエンは峻佑に取り憑いた状態が落ち着いたらしく、ずっと憑きっぱなしだった。そのおかげで、峻佑も魔法の恩恵を受けられるようになったのだが、日常では使う必要はないと、ただ内側に共存しているだけの状態でこの数日を過ごしていた。

「一般人のあいっすら相手に攻撃魔法で粉砕するわけにはいかないし、使いたくはなかったんだけどな……」

峻佑は迷いつつも、覚悟を決めた。再び階段に差し掛かり、追ってくる川原たちから死角に入った瞬間にレポートで逃げ出したのだ。

「あれ、いねえ！？ あんにやる、どこへ消えやがった……」

峻佑を見失った川原たちは、しばらくあたりを探していたが、見つからないので諦めてそれぞれの教室に戻ろうとした。と、そんな彼らの前に、ちひろとみちるが現れた。

「ねえ、峻佑くんは見つかった？」

ちひろが切り出すと、

「いえ、途中で見失いました。それで、どうしたんです？」

川原は峻佑を見失ったことを話すと、ちひろもみちるもホッと一息ついて、

「あのさ、みんなにお願いなんだけど、今みんなが峻佑くんを追いかけてるのって、あたしと峻佑くんが付き合うことになって、峻佑くんが憎いからなんだよね？ でも、峻佑くんに告白したのはあかしからだから、峻佑くんは悪くないんだよ。だから、あんまり騒ぎ立てないでほしいのよ。あと、そういうわけだから、できればあたしたち姉妹のファンクラブなんてものも解散して放っておいてくれるとありがたいな」

ちひろが苦笑いを浮かべながら、川原たちMMMに頼み込むと、

「ちひろさんがそうおっしゃるのでしたら、わかりました。今後一切、我々MMMは市原峻佑に手は出しません。というより、いまこの時を持って真野さんファンクラブ・MMMは解散します。みんな、それでいいな？」

川原は少し考えてから、頷き、MMMの解散宣言を出した。ちひろ直々の頼みということで、異論も出ずにすんなり解散されたのだった。

「やべっ！　ちひろ、みちる、起きろっ！　遅刻するぞっ！」

それから数日後。3人は揃って寝坊し、先に起きた峻佑が姉妹の部屋のドアを開けると――

例によつて2人は着替え中だった。

「きやあああああああ！」

2人の悲鳴とともに、峻佑めがけて2人ぶんの攻撃魔法が走り、さらに姉妹の部屋の扉に仕掛けられたトラップも発動し、高圧電流とタライも峻佑に襲いかかった。

「うおっ、すまん！　またやつちまった！」

峻佑は慌てて謝ったが、放たれた魔法は峻佑めがけて一直線に向かつてくる。峻佑はやむを得ずジェンの魔力を発動させて障壁を展開し、高圧電流と2人ぶんの攻撃魔法までは防げた。どうやら本気で撃つてこなかったのが幸いらしい。だが、最後の最後、タライを防ぐ直前に障壁が消滅してしまい、カコーンという小気味よい音とともに峻佑の顔面に直撃した。

市原家は賑やかながらも今日も平和な1日が始まる――

## VOL・55：峻佑の想い（後書き）

これで、「本編」は完結。

あと、エピソードとして、本編よりあとの一部キャラを書いたものをつけておきます。

よかったら、合わせてどうぞ。

EPI・01: Epilogue / 耕太郎（前書き）

峻佑がちひろと交際を始めたあと、耕太郎は――

## EPI・01: Epilogue / 耕太郎

峻佑とちひろが交際を始めてから数ヶ月が過ぎ、街はすっかりクリスマス一色。もちろん、正式に交際を宣言した峻佑たちも、多分にもれず、来たるクリスマスに向けて、放課後のホームルームが終わったあと、2人で予定を立てていた。

「はあ……今年も結局俺はひとりか。去年までと違って、峻佑やクルスの男子連中とバカ騒ぎとかも無理そうだしな。しゃーねえ、今年はひとり寂しく過ごすとするかね……」

そんな甘々な雰囲気を教室中にまき散らしている峻佑たちを横目に、耕太郎はため息をついた。周りのクラスメートたちは、もはやこの2人に何を言っても無駄だと言わんばかりに、呆れた表情<sup>かお</sup>で「へっ、ごちそうさまでした」などと言いながら、そそくさと教室を出て行った。

「さて、俺も帰るかな。幸せな2人を見ていても俺に幸せが来るわけじゃねーし」

耕太郎もカバンに荷物を詰め込み、峻佑たちに「じゃ、また明日な」と声をかけて教室を後にした。

耕太郎が自転車に乗って校門を出た、そのとき。

「おい、沢田く〜ん！ 待って〜！」

耕太郎は後ろから呼び止められ、自転車を止めて振り返った。すると、そこには――

「良かった、気づいてくれた！ ねえ、沢田くんもいま帰るところでしょ？ 途中まで一緒に帰らない？」

耕太郎を呼び止めて走ってきたのは、なんとみちるだった。

「あれ、みちるさん。どうしたんです？ いつもなら峻佑やちひろさんを待ってるんじゃない？」

耕太郎はびっくりして、みちるにたずねた。

「う、うん。いつもはそうなんだけどね、時々は2人つきりにしてあげるようにしてるの。で、私1人だと、なんとなく寂しくて、今日は誰を誘おうかなって思ってたところに沢田くんが見えたから、追いかけてきちゃった」

みちるは、走ってきたせいで少し乱れている息を整えながら、耕太郎に理由を話した。

「そうなんですか？ 俺はてっきりいつも3人一緒だと思ってました」

耕太郎は意外だという顔でみちるに告げた。

「そっか、沢田くんはいつも私たちより早く学校を出るものね。2人が付き合い始めるまでは、ほとんどいつも3人一緒だったけど、この数ヶ月は大体週に1回か2回くらいは、2人つきりにしてあげるようにしたの。もちろん、2人には適当に理由をつけて、本当のことは言ってないけど、気づいていると思うわ。さ、立ち話しててもしょうがないし、行きましょっ」

みちるはそういうと、自転車を押して歩く耕太郎とともに歩き出した。

「そういえば、途中までって言ってましたけど、みちるさんも峻佑の家に暮らしているから、完璧に同じ方向ですよね？」

耕太郎の家は、峻佑の家と同じ方向だが、峻佑の家より少し遠いので、自転車通学をしている。同じ方向にも関わらず、わざわざみちるが“途中まで”とつける理由がわからなかった。

「あ、うん。今日は私が食事当番だから、一度駅前のスーパーに寄って、買い物をしていかないといけないのよ。だから、駅前との分かれ道まで、一緒に帰る人がいてほしかったの」

みちるはひとつ頷くと、耕太郎に理由を告げた。

「そういうことでしたか。納得しました」

耕太郎がなるほどと納得したところに、携帯が鳴った。どうやら母親からのメールらしい。

「ん？ おっちょこちよいだな……母さんは。っと、途中でじゃ

なくて、俺も一緒にスーパーに行くハメになりましたわ。母さんが  
買い物し忘れたものがあるとかで、買ってくるように頼まれたので」

耕太郎は苦笑しながら、みちるに自身も一緒にスーパーに向かう  
ことを話した。

「そっか、それじゃ、一緒に行きましょう！ あ、そうだ。ずっと  
気になってたことを聞いてもいいかな？」

みちるは嬉しそうに言うと、急にマジメな顔になって耕太郎にた  
ずねた。

「なんですか？ 俺に答えられることなら、答えますよ」

耕太郎は急に改まったみちるを不思議そうな顔で見ながら、頷い  
た。

「うん、ズバリ聞くけど、沢田くん、私や姉さんに対してだけ敬語  
になるけど、なんで？ 私たち、同級生なんだから、あまり敬語使  
つてると他人行儀で変だと思うな」

みちるはずっと思っていたのだろう疑問をついに耕太郎にぶつけ  
た。

「ああ、この口調ですか。たしかに、普段の俺からは想像つかない  
ですよ。でも、やっぱり俺にとってちひろさんにしろ、みちるさ  
んにしろ、憧れの対象、学年のアイドルなんですよ。そんなアイド  
ルに、普通の口調で話しかけるなんて俺には無理です」

耕太郎は、照れているのか、半分顔を背けながら理由を話した。

「そんな理由だったんだ……でも、私たちは別にそんなアイドルみ  
たいな存在じゃないから、もつと普通に接して欲しいと思ってるん  
だよ。以前は、MMがアツたから、抜け駆け禁止条約とかもアツ  
たんだろうし、なかなかできなかったかもしれないけど、もう解散  
した今なら、どんな呼び方しても、誰に咎められることも無いわ。  
だから、普通に峻佑くんとかと話すような感じで話して欲しいのと、  
あとできれば、さん付けじゃなくて、みちるちゃんとかって呼んで  
ほしいかな」

みちるは耕太郎の話した理由を聞いて、呆れたような顔をして、

やめるように頼んだ。

「わかりまし——あ……わかった。努力するよ。みちるちゃん」

耕太郎はついクセで敬語が出そうになったが、ハツと気づいて言い直した。

「うん、やっぱりみちるさんって呼ばれるよりは、みちるちゃんのほうがいいわ。これからもよろしくね、耕太郎くん」

みちるはうんうんと頷きながら、笑顔で耕太郎を初めてファーストネームで呼んだ。

「あれ、いまみちるちゃん、俺のことを下の名前で……ま、いつか耕太郎はちよつと気にはなったが、いつの間にか駅前のスーパーに到着していて、みちるが先に入って行ってしまったので、自転車を止めて後を追いかけていった。

「それじゃ、またね、耕太郎くん」

それぞれの買い物を終え、市原家の前でみちると別れるときに、みちるはやはり耕太郎をファーストネームで呼んだが、耕太郎がそれを指摘する間もなく、みちるは鼻歌を唄いながら家の中に消えていった。

それからまた数日が過ぎ、気がつけば日付は12月17日。クリスマスまであと1週間と迫っていた。

数日前の一件から、みちるはよく耕太郎に絡んでくるようになった。端から見れば、まるで2人が付き合っているように誤解されても仕方ないほど一緒に居たが、1回だけ指摘されたとき、耕太郎が「そんなことあるわけない」と全力で否定し、周囲を黙らせていた。だが、そのとき耕太郎は気づかなかった。教室の外でそれを偶然聞いていて、寂しそうな顔をしたみちるに――

12月22日。終業式のこの日、耕太郎は再びみちると一緒に帰っていた。一応、12月に入ってよく一緒に帰るようになった耕太郎はみちるが彼をファーストネームで呼ぶようになった理由を聞いていた。――単に、そう呼びたくなっただけ、それに、耕太郎には自分をファーストネームでのちゃん付けを要求しているのに、自分だけ他人行儀な呼び方するのはダメだとも思っただから、とみちるは耕太郎に話していた。

「耕太郎くん、成績どうだった？」

いつものように耕太郎は自転車を押し、みちると並んで歩いている。そんな中、みちるが耕太郎にたずねた。

「1学期とほとんど同じ。良くも無く、悪くも無く。体育だけは相変わらずよかったけど。そういうみちるちゃんは？」

耕太郎は通知表をみちるに見せ、苦笑しながら話した。

「うーん、私も今回少し上がったとはいえ、そんなに良いほうじゃないんだよね。いくら魔法使いでも、学業でズルをするようなことだけは絶対しないって決めてるから。ズルをしていい成績とってもなんにも嬉しくないしね」

みちるもまた苦笑して、自分の通知表を耕太郎に見せた。

「……これでどこがあまり良くないって言うんだか。十分いい成績じゃん。ズル無しでこれだけ取れば、誰も文句は無いと思うんだけどなあ」

耕太郎は渡された通知表を見て、一瞬絶句した。そこには、10段階評価のうち、7、9ばかりが躍っていたのだ。

「それでも、姉さんに負けてるのが悔しいの。だって姉さん、1学期の通知表、8より下がなかったのよ。今回、私も頑張って成績上げたけど、姉さんのことだから今回オール10とかたたき出してきたそうなのよね。まったく、双子の姉妹なのにこうも違つと、比べられる出来の悪い妹はツライわ」

みちるが頬を膨らまして少し拗ねたような声で話した。と、そのとき。2人の行く先に数人の男が立ちふさがった。

「何かご用ですか？ 私たち、あなたがたとは面識はないはずですが」

進路をふさがれてやむなく立ち止まったみちるが、丁寧ながらもトゲのある言葉で男たちに問いかける。

「キミ、かわいいよね？ どう、俺たちとお茶しない？」

「そうそう、その野郎はいらねえから、とっとと彼女置いてどっか行っちまいな」

などと、好き勝手言いながら男たちがみちるの腕を掴もうとする。だが、その手を耕太郎が遮って振り払った。

「わりいが、俺たちのアイドルにあんたらみてえなのは釣りあわねえな。お引取り願おうか」

耕太郎はみちるを自分の身体の後ろにかばうように立ち、男たちをにらみつけながら言った。

「あん？ なんだてめえ……ヤローには用はねえって言うてんだろうが！」

男たちの1人があつさり激昂して耕太郎に殴りかかり、耕太郎は顔を殴られその場に膝をついた。

「へっ、要求が通らないとすぐ殴る、そんなサル以下のアホについていくほど彼女はアホじゃねえ、さっさとどっか行っただろうが身のためだぜ」

耕太郎はゆらりと立ち上がると、なおも男たちをにらみつけて強がってみせた。

「ってか、てめえはその子の彼氏か？ だとしたら、てめえも釣り合ってるとは思えねえぜ」

男たちのリーダー格で、いま耕太郎を殴った男が逆に耕太郎に尋ねた。

「お前らの目は節穴みたいだな。俺は別にみちるちゃんとはつきあってなんかいいえ、ただの友達だ。俺が彼女と釣り合わないことくれえ、とっくの昔に理解してんだよ！」

耕太郎は静かに話していたが、最後の部分を思いきり叫ぶと、勢

いをつけて目の前にいた男を殴り飛ばした。不意をつかれた男はそのまま後ろに吹っ飛び、他の男たちをも巻き込んで倒れた。

「こ、この……クソガキ……！」

殴られた男はふらつきながらも立ち上がると、ポケットからバタフライナイフを取り出し、刃を出して耕太郎に向けた。

「お、おい。さすがにそれはマズくないか？」

完全にキれている男を、比較的冷静な別の男が止めようとしたが、  
「うるせえ！」

ナイフを持った男は止めに入った男を振り払い、そのまま耕太郎に突撃した。

（くっ、避けるのは簡単だけど、ここで俺が避けたら、間違いなくみちるちゃん危険になる）

一瞬の判断の後、耕太郎はみちるをかばうため、自らナイフ男にタックルを仕掛けていった。

「耕太郎くん！」

危険を察知して悲痛な叫び声をあげるみちる。それをかき消すように、ナイフ男の怒声が響く。

2人の姿が交錯した直後、それまでの喧騒がウソのように辺りは静まり返っていた。耕太郎と男は、すれ違うように交錯したあと、数メートルの距離を置いて互いに背を向けて立っていた。

「耕太郎くん！ 大丈夫！？」

みちるが慌てて耕太郎に駆け寄る。その時に、ナイフ男の手元が気になって見ると、その手に持っていたはずのナイフはなく、男は何が起こったか理解し切れていないのか、放心状態だった。

「ああ、大丈夫。心配いらないよ。交錯したときに軽く切られたけど、傷は浅く、ナイフは蹴り飛ばしたから」

耕太郎は足を少し切られたようで、わずかに血のにじんだ足を指して言ったが、何事もなかったように振る舞っていた。と、そのとき、耕太郎が蹴り飛ばしたナイフが刃を下にしてアスファルトの路面に落ち、刃が碎け散った。

「それじゃ、帰ろうか。一応、送ってくよ。ああ、そのあんたら、そこで放心してるやつをちゃんと連れて帰ってやれよ」

耕太郎はみちるにそう言って歩き出したが、ふと気づいて振り返ると、男たちに忠告して、その場を後にした。

12月24日、クリスマスイブ。耕太郎は特に予定もないので、自宅でゴロゴロしていた。と、知らないアドレスからメールが届いた。首を傾げながら、耕太郎がメールを開くと、

『峻佑くんからアドレスを聞いてメールしました。みちるです。もし、今夜ヒマだったらいいんだけど、うちでクリスマスパーティーをするから、来てください。一応、返事をくれるとうれしいな』

メールはみちるからで、クリスマスパーティーへのお誘いだった。「マジかよ……！ どうせ予定なんか最初はなっからないし、行くつきやないだろ。おっと、返信しておかないとな。『メールありがとうぜひ、行かせてもらうよ』……よし、これでOKだな」

耕太郎は返信を済ませると、手土産くらい持つてくかと思いつき、駅前までケーキを買いに出かけていった。

そして夕方、耕太郎はそれなりにしっかりした服を着て、市原家に赴いた。

「おう、コートロー。ま、とりあえず上がれよ」

どうやらみちるは峻佑にもちゃんと話していたようで、峻佑は何も言わずに居間へ通した。

「あ、いらっしやい、耕太郎くん」

パーティーの準備をしていたみちるが、居間に入ってきた耕太郎に気づいて笑顔で言った。

「あ、わざわざ呼んでくれてありがとな。これ、土産だ。あとで食べようぜ」

耕太郎はそんなみちるの笑顔が眩しく感じ、少し目をそらして持ってきたケーキの箱を手渡した。

「あ、ありがとう。でも、気を使わないでも良かったのに」

みちるは箱を受け取って、冷蔵庫にしまいながら話した。

「せっかくのクリスマスで、わざわざ呼んでもらったのに手ぶらはないと思ったからな。あまり深く考えないでくれよ」

真正面から礼を言われて、耕太郎はさらに照れて顔を赤くするのだった。

「メリークリスマス！」

4人の声が重なり、パーティーは始まった。

「あ、これおいしいな」

料理に手を付けた耕太郎が一口食べて、感想を漏らす。

「ホント!? あまりこういうのは作ったことがなかったから、ちょつと不安だったんだ」

みちるが笑顔で喜んだ。

「な〜んか、最近みちると沢田くん、急接近って感じがひら〜?」

そんな中、急にちひろが口を開いた。だが、いつものちひろとはどこか口調が違っていた。峻佑が妙に思ってたちひろの手元を見ると、いつの間にかシャンパンのビンをひとりです本も空けてしまっていた。

「ちひろ、まさかシャンパンで酔っぱらったか？」

峻佑が確認するように訊ねると、

「だーれが酔っぱらってるって〜? あたひはぜーんぜん酔っぱらってなんかいまひえんよ〜だ」

ちひろはトロンとした目で峻佑を見つめ返して答えた。

「はあ……明らかに酔ってやがる。ちひろ、もうそれ以上飲むな」

峻佑はため息をつくとき、なおもシャンパンを注ごうとしてるちひろの腕を掴んで止め、シャンパンも取り上げた。

「なにすんのよぉ、あたひのシャンパン、返ひてよ」

ちひろはすでに呂律の回ってない状態で、峻佑からグラスを取り返そうとした。しかし、とっさにみちるがちひろの足を引っかけ、転ばせた。

「全く、姉さんの酔いやすさは変わらないみたいね。小学生のころ、同じようにシャンパンを飲んで酔っぱらって、魔法を暴走させたことがあったのよ。しかも次の日には全く覚えてなかったし。これじゃあ、パーティーは早くもお開きね。峻佑くん、姉さんは任せたわよ。部屋に連れ帰って寝かせてあげて。私は耕太郎くんを送ってくるわ」

みちるは思い出話をしたあと、峻佑にちひろの面倒を託し、自分は耕太郎を送ると言って、支度を始めた。

「みちるちゃん、俺なら別に送ってもらわなくても、大丈夫だよ。それに、逆にこないだみたいいなチンピラに狙われないとも限らないしさ」

耕太郎は帰り支度をしながら、みちるの申し出を丁重に断った。

「大丈夫、もしかたあんな人たちが出てきたら、魔法で撃退するから。ホントはこないだもやろうと思ってたんだよ。それに、せっかく来てもらったのに、姉さんのせいでパーティーがメチャクチャになっちゃったんだし、送らせてよ」

みちるはサラッと物騒なことを言っただけ、頑として譲らなかった。

「わかったよ。じゃあ、行こうか」

結果的に耕太郎が根負けし、2人で市原家を出た。

「ところで、そんな格好で寒くないの？」

自転車を押しながら、耕太郎は横を歩くみちるにたずねた。みちるは、さっきまで暖かい室内にいたのと大差ない、かなりの薄着で出てきていて、見るからに寒そうだった。

「大丈夫、たいしたこと無いよ。……くちゅんっ！」

みちるは強がってみたが、ごまかしきれずくしゃみが出てしまった。

「やっぱり寒そうだな。これ、着なよ。わざわざ送ってもらって、風邪を引かせでもしたら申し訳ないし、あとで峻佑やちひろちゃんになんて言われるかわかったもんじゃないからな」

耕太郎はさつと自分のコートを脱ぐと、みちるにかけてあげた。

「あ、ありがと……あったかい」

みちるは素直に受け取ると、暖かさに笑顔がはじけた。

それからしばし2人とも無言のまま歩いていき、もう少しで耕太郎の家に着こうかというとき。

「あのさ……」

「ねっ、ねえ！」

突然、2人同時に互いに話しかけた。

「あ、いや、みちるちゃん、先にいいよ」

「ううん、耕太郎くんこそ、先に話してよ」

全く同じタイミングで話し出そうとしたことで、2人ともどこか照れてしまい、互いに譲り合っていた。

「まあ、ここで譲り合ってもしょうがないか。じゃあ、俺から言うよ。あのさ、俺、前々からちひろちゃんもみちるちゃんも両方かわいいと思ってたけど、本当はみちるちゃんしか見てなかったんだ。こんな日だから言えるけど、俺、みちるちゃんのが好きだ。正直、俺なんかじゃみちるちゃんとはつりあわないかもしれないけど、俺と付き合ってくれないか」

耕太郎は顔を真っ赤にしながら人生初めての告白をした。

「耕太郎くん……ありがとう。私からの話、する必要がなくなっちゃったじゃない……」

みちるは、目尻に涙を浮かべて耕太郎に抱きついた。

「え、それって、OKってことなのか？」

耕太郎は自転車を手放してみちるを抱きとめ、遅まきながらたずねた。

「もちろんだよ。私もこの数ヶ月で耕太郎くんのが好きになっちゃったんだから……！」

みちるは耕太郎に抱きついたまま答える。

「俺じゃ釣り合わないかもしれないけど、ホントにいいの？」

耕太郎はまだ不安なのか、なおもたずねる。

「もう！ しつこいよ、耕太郎くん！ 恋なんて、釣り合うとか釣り合わないとかそんなの関係ないんだよ。他の誰でもない、私自身が選んだ男なんだから、自信持つてよ！」

みちるは少し怒ったのか、頬を膨らまして拗ねたように、耕太郎の胸を指でつついた。

「そっか、これは夢じゃないんだな。改めてよろしくな、みちるちゃん、いや、みちる、って呼んだほうがいいかな」

耕太郎はようやくホッとしたように、みちるを抱きしめた。と、そのとき。

「あ、耕太郎くん、見て……」

耕太郎に抱きしめられたまま、みちるが上空を指差す。——雪が、降り始めていた。

「すごいな、ホワイトクリスマスか。でも、今日降るなんて言ってたっけ？ もしかして……みちる、魔法使った？」

耕太郎はおお、と驚きながらも、ふと思ったのか、みちるに「ムー」でも何も無い質問をした。

「……耕太郎くん、いくらなんでも、それはないんじゃない？ 怒るよ？」

みちるは耕太郎から離れて、引きつった笑顔で言う。

「じよ、冗談だよ！ ロマンチックでいい夜だねー」

耕太郎は慌てて手を振って冗談だと言ったが、みちるの冷ややかな視線に目をそらして後ずさりしはじめた。

「あつ、こら、待ちなさい！」

ついにはみちるの無言のプレッシャーに負けて背を向けて走り出した耕太郎を追うようにみちるも走り出す。

小雪舞う中、できたてホヤホヤカップルの追いかけては、いつまでも続くのだった――

## EPI・02: Epilogue / 晴香 (前書き)

体育祭以降、目立った活躍どころか、登場すらしてないのではないかと  
思われる委員長こと晴香。  
彼女が輝く舞台は、すぐそこに――

## EPI・02: Epilogue / 晴香

——秋。秋と言えば、文化祭をやる高校は多い。ここ、竹崎高校もその例に漏れず、1ヶ月後に迫った文化祭に向けて、各クラスとも準備を始めていた。——ただ1クラス、1年4組を除いては。

「あー、決まらない……時間が無いのに……」

一向に決まらないクラスの出し物に、委員長の晴香が教卓で唸っていた。

このクラスには34人の生徒がいるのだが、出し物をお化け屋敷にするか小物売る模擬店にするかできれいにまっぴたつに割れてしまい、折り合いがつかない状況だった。普通なら、こういう場合は担任が一声かけるべきなのだろうが、4組の担任、脇野はまだ教師2年目で初担任のため、それができずにつるたえただけだった。

「仕方ないわ。それぞれ代表者を立てて公平にじゃんけんで決めましょう。もう、それしかないわ。みんな、いいよね？」

しばらく話し合いに任せていたが、無駄にヒートアップするだけで、埒があかないので、晴香はそう提案した。

「そうだな、さすがにもう疲れてきたから決めちまいたい」

晴香の提案に、疲れきった声で峻佑が応じ、それを皮切りに、次々とみんなが頷いた。

「じゃあ、模擬店の代表は私が出るわ。お化け屋敷は誰が出るの？」  
晴香は自ら代表として名乗り出ると、お化け屋敷チームに呼びかけた。

「じゃあ、オレが出る。恨みつこなしだぜ、酒井さん」

峻佑が立ち上がってそう言つと、晴香とじゃんけんした。

結果として、1年4組はお化け屋敷をやることに決まった。

「じゃあ、明日からもう少し詰めた話をしていくことにしましょう。」

じゃあ、今日は解散」

晴香は負けた悔しさを見せることなく、気持ちを切り替えてお化け屋敷を全力でやる方針を固め、長引いていたLHRを解散した。  
と、そこへ――

「ちよつと失礼するわね」

それまでの張り詰めた空気を一瞬で打ち砕く声とともに、ドアが開いた。

「あれ、なつき先輩？」

峻佑が意外そうな声をあげた。

「やほー、市原君、真野さん。いっちゃん今日は生徒会の用じゃなくて、3年7組の一員として全クラスを回ってるのよ。と、言うわけで、このチラシをよく読んでおくよーに。そんじゃねー」

なつきは峻佑やちひろに手を振ると、教卓のところにいた晴香に1枚のチラシを渡して風のように去っていった。

「しっかし、なつき先輩、あの呼び方なんとかならんものかな」

峻佑が苦笑しながら呟く。峻佑たちが生徒会に加入してから、なつきだけは峻佑をいっちゃん、ちひろをちーちゃん、みちるをみーちゃんと呼んでいるのだ。恥ずかしいからやめてくれと何度も頼んだのだが、直る気配は微塵もなかった。

「もう、諦めるしかないんじゃない？ それより晴香、先輩が置いていったチラシってなんなの？」

ちひろはすっかり諦めを悟ったように峻佑に言うと、晴香にチラシの内容をたずねた。

「あ、えつと……文化祭の開会式でミニイベントみたいなのが毎年あって、今年は3年7組がそれを担当するんだって。それで、ミスコンを開催するらしいわ。このチラシは、その告知と参加者募集よ」

晴香は、そこで初めてチラシの内容に目を落とすと、ざっと読んで、説明した。

「あ、一番下に小さい字で“クラス対抗にするので、必ず各クラス

1人は選出すること。優勝クラスには生徒会から豪華景品あり。ただし、拒否した場合、生徒会権限でのお置ききよ”だって。どうする？”

晴香がチラシの下部に記された小さな文字に気づいて、苦笑しつつみんなにたずねた。

「めんどくせえけど、なつき先輩はやると思ったら本気でやるからな……ウチのクラスの自慢の女子、ねえ……」

峻佑がブツブツと呟き、ハツとしてちひろを見た。

「……なに？」

クラスの一員で、しかも自分が訊いたにも関わらず、我関せずな態度で話を聞き流していたちひろに、全員の視線が集中し、

『ウチのクラスにはミスコンに最適な人材がいるじゃないか！』  
声をそろえて叫んだ。

「えっ、えっ？　ちよつと、何の話？」

ちひろは話を聞いていなかったで、慌てて聞き返した。

「要するに、文化祭の開会式で行われるミスコンにちひろに出てもらおうってこと」

峻佑が代表してちひろに説明すると、

「イヤよ。景品欲しさにあたし1人を生贄にしようなんて、絶対イヤだからね」

ちひろはツンとそっぽを向いて、拒否する姿勢を全力で示していた。

「じゃあ、他に誰かが一緒に出れば出てくれるのか？」

彼氏としてちひろの説得を一任された峻佑が妥協案を提示すると、  
「それなら……うん、いいわ。でも、出てくれるって決まったあと、逃げたのがわかったら、そのときはあたしもトンズラするからね」

ちひろは少し迷ってから頷いたが、逃げるな、と条件つきでの了承だった。

「……と、言うわけだ。残りの女子の中で最低1人以上、ちひろと一緒にミスコン出てくれる子はいないか？　推薦でもいいけど」

峻佑は説得が成功して少し笑みを見せると、他の女子たちに呼びかけた。

「……………」

しかし、女子たちの顔は曇ったまま、誰も手を挙げようとしないと、

「推薦なら、あたしからいい？」

ちひろがそう言っただち上がった。

「おう、誰を推すんだ？」

峻佑が訊ねると、

「晴香。一緒に出てくれない？」

ちひろは委員長たる晴香を指差して指名した。

「わ、私！？ 無理無理、無理だよー！」

晴香は急に指名されたのもあって、焦りからものすごい速さで手を左右に振って、指名を拒否しようとした。

「大丈夫よ、たかが校内のミスコンじゃない。優勝すれば儲けもの、勝てなくても誰も文句言ったりしない、いえ、あたしが言わせないわ。もともと、言える権利もないでしょうけどね」

ちひろは言外に自分じゃ出ようとしなかったんだから、という意味をにおわせることでクラスメートを牽制し、晴香を安心させようとした。

「でもでも、複数エントリーは各自の得た得点の平均値がクラス得点になるって書いてあるから、私じゃちひろの足を引っ張るだけよ……………」

晴香はなおもチラシに書いてあるルールを盾に逃げようとする。

「晴香は十分可愛いと思うわ。あたしやみちるばかりもてはやされてるけど、あたしとかから見たら、晴香のほうがイケてると思うのよね。きつと、普段から目立たないように過ごしてきたから、晴香の魅力に気づかない人が多いだけよ。今度のイベントに出て、みんなにそれを知らしめましょうよ」

ちひろは少し強引とも取れる論で晴香をオトシにかかった。

「でも、私あんまり目立つのは……」

それでも晴香は渋っていたが、決意は揺らぎかけているのか、目が泳いでいた。それに気づいたちひろは、トドメの一言を放った。

「晴香。あたしたちはもう高校生なんだよ？ 中学までの自分は捨て去って、変わらなきゃ。人は自分から変わろうとしなきゃ何も変わらないのよ！」

最後、興奮したのかちひろの語気が強まり、晴香はビクツとしたが、ついに、

「……………わかった。出るわ」

首を小さく縦に振ると同時に、消え入りそうな声で出ることを承諾した。

——そして、あつという間に時間は過ぎ、文化祭当日。

出し物を決定するのが学校一遅かった割には、きちんとしたお化け屋敷ができていた。

開会式があるので、全校生徒は体育館に集まっていた。もちろん、イベントのことはみんな知っているので、どんな美少女が出てくるのか、一部の男子生徒を中心に、否が応でも期待は高まっていた。

「それではっ、ただいまより、第32回竹崎祭の開会式を始めます！ 毎度おなじみの挨拶とかはもうめんどいから全部カットで、みんなお待ちかねの、3年7組主催による、竹高ミスコンテストを開催いたしますっ！」

司会の開会宣言に、生徒たちは歓声をあげ、対する長話担当の校長とかは、見た目でわかるくらい落ち込んでいた。

「まずは、参加者、入場っ！」

司会の声に、ちひろや晴香を含む10人弱の女子生徒が出てきた。だが、3学年×8クラスで、少なくとも24人はいるはずなのに、どうみても足りない。

あれ、どうなってるんだ、とあちこちから声が上がる中で、なつきがマイクを握った。

「あたし、ちゃんとチラシで説明しといたわよね……拒否したり、直前逃亡したら、って。逃げたクラスはそれをわかった上でやってるんでしょうね？」

こめかみに青筋を浮かべて全校生徒に問いかけるなつき。すると、拒否したと思われる一部のクラスから声が上がった。

「そもそも、ミスコンって出たいヤツだけ出るものだろ。強制参加のヤツがいるのはどうかと思うぞ。いまそこにいるだけでも十分な人数いるんだから、さっさと始めちまえよ」

そんな声に、なつきは時計を見ると、それほど余裕があるわけじゃないかったようで、

「ちっ、仕方ないわね。ホントはひとりずつ何かやってもらおうと思っていたけど、予定変更。クラスと名前を言って、あとは純粹に人気投票ね。クラス対抗の話もなしにして個人戦で。これじゃあクラス対抗なんて無理。でも、優勝者に与えられる生徒会からの景品はあるから安心して」

なつきは舌打ちしながらも頭を切り替えると、司会にマイクを返して、あれこれ指示を出し、ようやく進み始めた。

エントリー者の紹介が終わり、あらかじめ渡されていた紙で投票が行われていった。

「では、発表します。投票総数、895票、無効が残念ながら5票ありました。第3位、2年3組、高柳聡子さん、獲得票数は95票。第2位、1年4組、真野ちひろさん、獲得票数は138票」

ちひろが2位だと発表されると、体育館は大きくざわめいた。大本命と見られていたちひろの敗北に、一体誰が、という戸惑いが多く見られた。

「そして、栄光の第1位は……！ い、1年4組、酒井晴香さん！

獲得票数は290票！ ダントツのトップでした！」

「疲れた……」

文化祭初日を終え、屋上で晴香はつぶやいた。あのあと、どこへ行ってもミスコン優勝者だと言われ、新聞部にはあの学校のアイドル、真野姉妹の姉を負かした気分は、などと訊かれて追い回され、祭を楽しむどころではなかった。

「お疲れ様、晴香。優勝おめでとう」

そこに屋上の扉が開き、ちひろが出てきた。

「ちひろ……なんで私勝てたんだろう？ 絶対あの参加者のなかからちひろが優勝だと思っていたのに……」

晴香は心から祝福してくれるちひろに訊いてみた。

「もう、あんだだけダントツの支持を集めたのにまだ信じられないの？ 晴香だって、かなりの美少女の部類に入るのよ。今までは目立たないようにしてたから気づけなかっただけ。あたしたち姉妹がアイドルとか言われたのは、双子でそれなりの容姿だったからだよ。それに、あたしの支持が落ちた理由はたぶん、峻佑さんと正式に付き合い始めたってのもあるでしょうね」

ちひろは笑いながら話した。

「そっか。でも、それなら私が勝てたのは市原君のおかげかな。まあ、別にミスコンで優勝したからといって、すぐに変わる訳じゃないだろうけど、これからは少し変わる努力をしてみようかな」

晴香は夕暮れ迫る空を見上げてつぶやいた。

「……って、あれ？ ちひろ？」

なんにも反応がないので辺りを見回した晴香は、いつの間にかちひろがいなくなっているのに気づいた。

「いきなり出てきたと思ったら、いつの間にかいなくなって、友達

になって結構経つけど、まだよくわからないなあ……」  
晴香の困惑したような表情は、夕暮れの空に消えていった。

## EPI・02: Epilogue / 晴香（後書き）

これで、休載期間3ヶ月を含め1年3ヶ月にわたった物語も終わります。

長い間、お付き合いいただいて、本当にありがとうございました。

最後になりますが、次回作は現在鋭意執筆中です。

正式な投稿開始日は決まったらブログにてお知らせします。

では、改めて、ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1550c/>

---

幼なじみは 魔法使い！？

2011年3月19日20時10分発行